

# 研 究 紀 要 3

——考古学から見た房総文化——

## 3 弥 生 時 代

昭 和 53 年 3 月

千葉県文化財センター

## 序 文

円高不況と言われる昨今においても、首都圏に位置する本県の開発は急であり、埋蔵文化財の保護は緊急かつ重要な課題であります。

財団法人千葉県文化財センターは、こうした状況に対応し、県内における埋蔵文化財の調査・研究及び県民の文化財保護思想の涵養と普及を図るとともに、地域文化の充実に寄与することを目的として昭和49年11月に設立されたのでありますが、発足以来3年余、その活躍は全国から注目されているところであります。

このたび、従来の考古資料に最新の知見を加え、本県における弥生文化を総合的な視点からとらえた研究紀要の第3冊「考古学から見た房総文化 3 弥生時代」が刊行されますことは、まことによろこばしいことであります。財団法人千葉県文化財センターの特色の一つに、発掘調査を担当する調査部と並んで研究部が設置されていることがあげられますが、研究部の目的は埋蔵文化財の調査研究の企画、遺跡の調査方法及び出土遺物の保存処理、情報資料の収集・整理・文化財保護思想の普及などであります。本書はこの研究部事業の一端を披瀝したものでありますが、学術資料として、高く評価し得るものと確信しております。

終りに、本紀要の刊行を慶祝するとともに忙しい現場調査のかたわら、研究に専念された調査研究員及び関係者各位に厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月

千葉県教育委員会

教育長 今井 正

# 目 次

## 房総における弥生文化の摂取とその波及について

齋 木 勝  
深 沢 克 友

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	研究史 〔文献〕	2
第Ⅲ章	弥生文化の概要と変遷	15
第1節	弥生中期文化	15
	遺跡分布状態	15
	文化様相	15
	主要遺跡とその出土遺物	22
第2節	弥生後期文化	54
	遺跡分布状態	54
	文化様相	68
	主要遺跡とその出土遺物	74
第Ⅳ章	東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器	115
第1節	遺跡立地	115
第2節	集落構成	118
第3節	土器の組成	124
第4節	まとめ	135

第V章 房総地方弥生後期文化の一様相	
— 印旛・手賀沼系式土器文化の発生と展開について —	139
第1節 研究史からみた印旛・手賀沼系式土器文化の特殊性と編年的位置づけ	139
第2節 印旛・手賀沼系期の提示	140
第3節 印旛・手賀沼系期の土器様相	141
第4節 発生と展開に関する一試論	151
あ と が き	157

## 挿 図 目 次

第1図	房総弥生中期遺跡分布図 (1/800,000) .....	16
第2図	房総弥生時代の文化様相 (縮尺不統一) .....	20, 21
第3図	須和田遺跡 (1~3)・法蓮寺山遺跡 (4) 出土土器 (1/4・1/6) .....	23
第4図	天神前遺跡出土土器 (1), (1/4) .....	25
第5図	天神前遺跡出土土器 (2), (1/4) .....	26
第6図	天神前遺跡出土土器 (3), (1/4) .....	27
第7図	天神前遺跡出土土器 (4), (1/4) .....	28
第8図	天神前遺跡出土土器 (5), (1/4) .....	30
第9図	天神前遺跡出土土器 (6), (1/4) .....	31
第10図	新田山遺跡 (1・2), 市原市惣社出土弥生式土器 (3), (1/4) .....	33
第11図	星久喜遺跡出土土器 (1), (1/4) .....	35
第12図	星久喜遺跡出土土器 (2), (1/4) .....	36
第13図	中野台遺跡出土土器 (1/6) .....	37
第14図	大森第2遺跡出土土器 (1), (1/4) .....	39
第15図	大森第2遺跡出土土器 (2), (1/4) .....	40
第16図	平蔵台遺跡 (1), 若宮 (2~5) 出土土器 (不同) .....	41
第17図	菊間遺跡出土の壺形土器 (1), (1/4) .....	44
第18図	菊間遺跡出土の壺形土器 (2), (1/4) .....	45
第19図	菊間遺跡出土の深鉢形土器 (1), (1/4) .....	47
第20図	菊間遺跡出土の深鉢形土器 (2), (1/4) .....	48
第21図	船子遺跡出土土器 (1/4) .....	51
第22図	船子遺跡 (3), 君津市八重原 (4) 出土土器 (1/4) .....	52
第23図	房総弥生後期遺跡分布図 (1/800,000) .....	55
第24図	久ヶ原期遺跡分布図 (1/800,000) .....	61
第25図	弥生町期遺跡分布図 (1/800,000) .....	62
第26図	前野町期遺跡分布図 (1/800,000) .....	64
第27図	房総弥生後期印旛・手賀沼系期遺跡分布図 (1/800,000) .....	66
第28図	房総弥生後期埋葬遺跡分布図 (1/800,000) .....	67
第29図	市川市域内遺跡出土土器 (1), (1/6) .....	75
第30図	市川市域内遺跡出土土器 (2), (1/6) .....	78
第31図	三ツ堀遺跡出土土器 (1/6) .....	80
第32図	石神第I地点遺構配置図 (1/100) .....	83
第33図	石神・渡戸遺跡出土土器 (1), (1/4) .....	84
第34図	石神・渡戸遺跡出土土器 (2), (1/4) .....	86

第35図	江原台遺跡出土土器 (1/4) .....	89
第36図	江原台第1遺跡出土土器 (1/4) .....	91
第37図	生谷境堀遺跡弥生時代遺構配置図 (1/100) .....	92
第38図	飯重新畑・生谷境堀遺跡出土土器 (1/4) .....	93
第39図	阿玉台北遺跡遺構配置図 (1/1,000) .....	95
第40図	阿玉台北遺跡B-010・011号土壙墓 (1/20) .....	96
第41図	阿玉台北遺跡A-056号土壙墓 (1/30) .....	96
第42図	阿玉台北遺跡出土土器 (1), (1/4) .....	97
第43図	阿玉台北遺跡出土土器 (2), (1/4) .....	99
第44図	阿玉台北遺跡出土土器 (3), (1/4) .....	100
第45図	阿玉台北遺跡出土土器 (4), (1/4) .....	101
第46図	阿玉台北遺跡出土土器 (5), (1/4) .....	102
第47図	佐野原遺跡出土土器 (1/4) .....	104
第48図	大厩・菊間・南向原遺跡出土甕形土器分類 (1/8) .....	106
第49図	請西遺跡出土土器 (1/4) .....	109
第50図	田子台遺跡出土土器 (1/4) .....	112
第51図	参考資料の土器 (1/4) .....	114
第52図	南関東の弥生中期遺跡分布図 (1/1,000,000) .....	116
第53図	東京湾の潮流 (上げ潮流最強時) .....	117
第54図	菊間遺跡の遺構関連図 (1/600) .....	119
第55図	大厩遺跡の弥生時代遺構関連図 (1/1,000) .....	120
第56図	城の腰遺跡の弥生時代遺構関連図 (1/800) .....	122
第57図	菊間遺跡住居変遷 (1/80) .....	123
第58図	宮ノ台式土器の文様模式図 (1/4) .....	130
第59図	菊間遺跡土器組成 (1/2) .....	131
第60図	大厩遺跡土器組成 (1/2) .....	133
第61図	宮ノ台式土器の文様構成 (1/3) .....	134
第62図	印旛・手賀沼系式土器形態分類 (1/2) .....	142
第63図	印旛・手賀沼系式土器文様 (1), (1/2) .....	143
第64図	印旛・手賀沼系式土器文様 (2), (1/2) .....	144
第65図	印旛・手賀沼周辺遺跡住居形態 (1/240) .....	145
第66図	土壙墓出土土器 (1/6) .....	146
第67図	井頭遺跡出土土器 (1/4) .....	148
第68図	朝光寺原式土器文様 (1/2) .....	152
第69図	房総地方後期弥生式土器の波及経路 .....	153

## 表 目 次

第1表	弥生中期遺跡表	17
第2表	弥生後期遺跡表	56
第3表	甕形土器一覧表	107
第4表	南関東地方弥生中期土器研究史年表	129

### 凡 例

- 挿図は報告書から転載しているが、加筆修正したものもある。
- 土器の縮尺は $\frac{1}{4}$ を原則としているが、縮尺不同もある。
- 掲載した土器実測図は、統一を計る意味で、断面には墨入れを施した。
- 本文中の敬称は省かせていただいた。





## 第I章 はじめに

千葉県文化財センターの研究部の活動も3年目を迎え、過去の紀要刊行という単独業務のほかに、本年は業務内容も拡充され、人員の増加をみている。

紀要刊行関係では、前々年の先土器時代、前年の縄文時代にひき続き、本年は弥生時代を研究対象としている。

折しも今年も、弥生時代に関する特別展が県内3ヶ所の博物館、郷土館で開催された。ひとつは、8月14日から10月9日まで千葉市郷土館において『77特別展 千葉市内で発掘された埋蔵文化財展』が催された。弥生時代では、星久喜遺跡、大森第2遺跡出土の弥生時代中期後半該当の土器が展示された。次に10月18日から11月27日まで、県立安房博物館において『邪馬台国と古代房総』が催された。同展は黒潮を介しての西日本の文化と、房総の文化の交流を示したもので、弥生時代では総論的な一般展示に加えて、県内各地より出土の弥生式土器の展示公開も行なわれていた。特に1953年6月、対馬郁夫氏が明鐘崎洞窟を調査した際、出土しのち国指定の重要文化財になった壺形土器の展示は、大変貴重なものであった。

日時的には、安房博物館の特別展とほぼ重なってしまったが、10月22日より11月27日まで、市立市川博物館で『開館5周年記念特別展 弥生 その土器の美しさ』が催された。須和田式土器から前野町式土器に至る土器の系譜、宮ノ台式土器のセット、久ヶ原式土器のセット、弥生町式土器のセット、弥生式土器の終焉と土師器の出現など、弥生式土器のみをとりあげた展示で、近年、県内で発掘調査されたものの成果が十分示されていた。

その他、管見にふれたものとしては、静岡市立登呂博物館で、4月1日より5月29日まで、『特別展 古代のうつわ 生活の中の道具』が、また、10月1日より11月20日まで京都国立博物館で、『特別展覧会 日本の黎明 考古資料にみる日本文化の東と西』が開催された。千葉県下の弥生時代の遺跡では、大厩遺跡、阿玉台北遺跡出土の土器が展示されていた。

以上のような動向の中にあって、房総の弥生時代研究も一つの転機を迎えつつあると思う。

本年の紀要執筆に関して2名が担当した。その内容については、第II章、第III章を総論とし第II章で県内を対象とする弥生時代の文献を網羅して研究史を綴り、第III章では房総弥生文化を概観した。第IV章、第V章は各論とし、特に問題点とされるところ所を抽出し論じた。

## 第Ⅱ章 研究史

研究史を概観するまえに、房総地域における、現在までの弥生時代関係の文献を確認してみると、216篇を数える。その発刊年代をみてみると、明治期1篇 大正期0 昭和初期24篇、昭和20年代14篇、同30年代27篇、同40年代79篇、同50年代71篇で、特に、昭和47年(1972)7篇、48年(1973)17篇、49年(1974)29篇、50年(1975)27篇、51年(1976)29篇、52年(1977)15篇と40年代後半から50年代にかけてかなりの文献が公にされている。しかしそれも、例えば50年では27篇の文献が挙げられるが、その内訳は調査報告23篇、研究2篇、その他2篇、51年度は調査報告22篇、研究4篇、その他3篇である。すなわち、傾向では近年の発掘調査報告書の刊行数の増加に比例するのである。過去には、須和田遺跡、菅生遺跡、宮ノ台遺跡、田子台遺跡に代表された千葉県下の弥生時代遺跡も、広範なものになり、より明確な文化事象が示されてきた感がある。

県内の遺跡を対象とした報告・論文を参考にしながら、弥生時代研究の軌跡を辿ってみたい。

1884年(明治17)に東京の本郷弥生町で、口縁部の欠けた壺形土器が発見された<sup>1)</sup>。それは、これまでによく知られていた縄文土器とは異なった形状、文様をもった土器で、10数年後、縄文土器などと区別するため、地名をとって「弥生式土器」と呼称されるようになった。その後、いろいろな名称を付されたが、大正時代にはいつから、弥生式土器の名称は一般的に使われるようになった。

昭和期に入り、出土土器の分類から編年への研究系譜を引くことになる。まず、須和田遺跡の最初の報告がなされる(文献3)。また、のちに南関東の弥生中期の標式遺跡となる宮ノ台遺跡の報告がなされた(文献8)。この遺跡が注意されたのは、石器を伴わない久ヶ原遺跡出土弥生土器に対して、各種石器を伴うという視点からであった。出土した弥生土器は2類に分類される。第一類に分類された土器は、いわゆる宮ノ台式の深鉢形土器で、口縁部上端に指頭により押捺を施し、波状を呈するもの、器面の刷毛目整形痕も留意されている。第二類に分類された土器は、宮ノ台式の壺形土器であり、一部久ヶ原式を含む。

須和田遺跡で汎東京湾的な性格を持つ久ヶ原式、弥生町式土器とはやや異質な土器である「北関東系土器」の発見が注意されている(文献11)。

1937年(昭和13)から翌年にかけては、菅生遺跡の報告が数篇なされた(文献13~21)。

1939年(昭和14)は、弥生式土器研究では一つの基点となる事象がある。それは、森本六爾・小林行雄による『弥生式土器聚成図録』が発刊されたことである。この発刊により弥生式土器の研究指向を規定することになった。弥生式土器も単なる土器分類から、総合的編年への移行をみせていたが、図録ではひとつの様式をとらえる独自の手法を用い、まとまった遺跡の資料を掲げることで成果を取めた。

1942年(昭和17)、宮ノ台遺跡の補遺篇が発表された(文献23)。ここでは文献8で報告した第一類・第二類土器を宮ノ台式としている。また、その後の増加資料を加えて、宮ノ台式土器論を展開している。南関東を中心とする弥生式及びその系統の土器の研究として、須和田式土器、宮ノ台式土器、久ヶ原式土器、弥生町式土器、前野町式土器と編年を呈示している。

1943年(昭和18)、再葬墓遺跡の新田山遺跡が報告された。出土土器は須和田式土器であり、その系列を篋描縄文系列としている。これに対して、宮ノ台式土器などは櫛目文の使用が盛んなので、櫛目縄文系列と称している。

戦後に至り、数篇の菅生遺跡の報告がある<sup>2</sup>。注目される報告では田子台遺跡の報告(文献37)である。戦後房総地方で初めて久ヶ原期の住居址が2軒調査された遺跡で、いずれも胴張り隅丸方形を呈し、このうちの1軒から、床面に接して径3mm前後のガラス製小玉117個が発見されている。報文中で菊池義次は「南関東弥生式土器編年への一私見」と題して、久ヶ原遺跡出土土器と田子台遺跡出土土器とを対比させて、「久ヶ原式」ないし「弥生町式」の概念規定に対する疑問を述べるとともに、これらの土器のうち、甕形土器と壺形土器を例にあげて、文様構成による土器形式論を展開している。さらに、これとは別に、現在でも見落されている点であるが、当該遺跡の地理的特殊性を考慮するためには、東京湾沿岸地域の海上交通の利用の重要性を含むべきであると、提示していることである。

1957年(昭和32)、茨城県東茨城郡茨城町の長岡中学校の運動場の発掘調査をした際に、隅丸長方形の住居址から一括の7個体の土器が出土し、これらの一括出土土器に対して井上義安が長岡式土器と呼称し、標式遺跡として知見されるようになった<sup>3</sup>。そして当該形式が属する時期を十王台式直前にあてはめ、北関東東部における弥生式土器の編年の序列を、野沢Ⅰ式—Ⅱ式—足洗式(八重崎式)—?—長岡式—十王台式とした。

1960年(昭和35)、この年、杉原荘介は弥生文化を14に地方区分し、弥生時代の暦年代は、前期初めを紀元前300年、後期末を紀元後300年としている<sup>4</sup>。

昭和30年代後半から40年代にかけて、千葉県内、とりわけ印旛・手賀沼周辺地域で、複合口縁を呈し、頸部無文帯、胴部に文様が施される甕形土器、あるいは頸部に櫛描沈線を持つ甕形土器等の発見例が著しく増し、前述した長岡式土器に類似することから、これらの土器の一部を長岡式土器にあてはめようとする傾向が強かった。

1961年(昭和36)、印旛、手賀沼周辺の埋蔵文化財に関する報告書が出された(文献52)。ここでは、久ヶ原式、弥生町式土器を伴う後期文化の分布圏が、旧相模、武蔵、上総、安房と分布し、とりわけ三浦半島及び房総半島の汎東京湾地域内諸遺跡の調査の結果をもとに、両者間の類似性を指摘した。しかしながら、これとは別に印旛・手賀沼周辺地域に発見される北関東系土器と呼称される一群の土器の存在に注目し、これら一群の土器と房総半島に見られる汎東京湾的性格を持つ文化圏—久ヶ原式土器文化圏—とを対比して、いずれが主体的であり、客体的であるのか、あるいは混合地域であるのか、などについての問題を投げかけた。さらに、以

上の観点に立って、印旛、手賀沼周辺地域で発見された土器に関して、A群（南関東系弥生式土器群）・B群（北関東系弥生式土器群）・C群（南・北両者の混交せるもの）などに分類してその編年的位置づけを行った。また、これとは別に合口甕棺あるいは、合口壺棺の発見例の中で、南・北両系統の土器の共存している例から、北関東弥生文化編年の細分化への足がかりを南関東弥生文化編年との対比によって求められ得る可能性を論じた。

1967年（昭和42）、杉原荘介は須和田遺跡出土土器を報告するとともに、東京湾西岸また、駿河地方で報告されている、弥生中期弥生式土器の編年系譜を論述している（文献74）。そして、須和田式土器を南関東を中心とする地域における最古の弥生式土器とし、その系統を大洞A'式土器あるいは荒海式土器使用社会などに求めている。その論拠は施文原体2段左撚りとし、晩期縄文式土器終末の踏襲としている。

1968年（昭和43）、『弥生式土器集成』が出された（文献77）。以前刊行された『弥生式土器聚成図録』を踏襲し、新資料を加えている。南関東地方は、第Ⅰ様式から第Ⅴ様式まで分類している。第Ⅰ様式は須和田式土器であり、その形成は、東海地方などからの影響によるものではなく、在地の縄文式土器を基盤としたとしている。第Ⅱ様式は、A・Bに分けられ、Aは小田原式土器とされている。これは従来の小田原式土器前期の土器と須和田式土器の一部をあわせたものである。Bは宮ノ台式土器である。第Ⅲ様式は、いわゆる久ヶ原式土器であり、近年、北関東系と称されている土器を第Ⅲ様式に伴う特殊な土器とし、関東地方東北部の土器の移入品と理解している。第Ⅳ様式は、弥生町式土器、第Ⅴ様式は前野町式土器である。

昭和40年代後半から現在に至るまでの道程は、その遺跡調査件数の増加及び調査面積の広域化に伴い、出土遺構及び遺物資料の増加をもたらした。それはまったくの新知見であったりして、房総半島への弥生文化の東漸に目を見はるものがあった。

方形周溝墓に関しては、多くの研究者が種々の考察を加えた。金井塚良一もその一人であるが、氏の発表した一覧表によると（文献92）、県下の弥生期に該当するのは、戸張遺跡（文献34）のみである。しかし、同年に市原市南総中遺跡で宮ノ台期の方形周溝墓が報告されている（文献97）。

千葉県都市公社文化財調査事務所が調査した、大森第2遺跡、星久喜遺跡、大麩遺跡、菊間遺跡は、それぞれに弥生期の遺構を確認し、また、種々の問題点を呈示した。

大森第2遺跡は弥生時代中期後半期の住居址を11軒検出している（文献101）。星久喜遺跡は、同じく中期後半期の住居址2軒、土壙3基、方形周溝遺構1基を検出している。標高もあまりない緩斜面に位置しており、低地遺跡とも考えられ、木材集積遺構も確認されている（文献100）。大麩遺跡は、弥生期住居址64軒、土壙3基、特殊遺構3基、V字溝などが検出された（文献117）。特筆に価するのは環濠であるV字溝を確認したことである。占地された台地の端部と、それより若干、内側に入った地点に2本検出されたことは、弥生時代の集落構成をみるうえで貴重な資料を呈示した。菊間遺跡は、弥生期住居址49軒、方形周溝墓3基を検出している（文献118）。

大厩遺跡に比べ、方形周溝墓が設けられているということは、菊間遺跡がよりマジカル的存在という点が指摘される。

これらの遺跡の調査が報告されると、熊野正也は弥生時代に関して、その疑問とする点を次々に呈示していった。まず弥生期住居形態の一つであるベット状遺構については、その初源を弥生時代中期後半とし、集落内に関する祭祀について、ベット状遺構をもつ住居に求めたと推察した(文献 122)。そして、この住居に居住する者が集落において、司祭者的性格をもつ者であろうとした。葬制に関しては、方形周溝墓をとり入れた地域と、その地方の伝統的壺(甕)棺墓を継承した地域の文化の相違を葬制の違いでとらえた(文献 159)。前述した大厩、菊間遺跡の石器様相に関しても、論述している(文献 167)。ただその前段階として、各々の遺跡の集落構成について若干ふれているが、中期後半の様相を大厩遺跡では3段階にわたって営まれたと考えることができると記し、また、菊間遺跡では、3段階に細分される可能性をもっているなどとしているが、それを裏付ける具体的な資料の指摘はなされていない。石器に関して、菊間、大厩遺跡の扁平片刃石斧、のみ形石斧の占める割合が大きいに注目している。そして、各々の遺跡の石器に対する必要性に深いかかわりがあったのではないだろうかと推論し、木器をつくるため、伐採→製材→加工までの工程をそれぞれが分担し、小地域における共同作業が行なわれていたものとしている。

大厩遺跡、菊間遺跡に関しては、直接に大厩遺跡を調査した、三森俊彦と古内 茂がそれぞれの論考を発表している。これらに関しては、第Ⅳ章と大いに関連をもつので、そちらで論及したいと思う。

弥生時代の後期に目を向けてみると、飯重新畑遺跡、生谷境掘遺跡(文献 125)、渡戸遺跡石神遺跡(文献 150)などの発掘調査により、従来北関東系土器と呼称されていた一群の土器の発見例が著しくなり、これら一群の土器の地域の特徴が徐々に理解されはじめてきている。とりわけ、熊野正也、柿沼修平により、編年論が展開されたことは大きな成果と言える。熊野正也は、従来言われてきた北関東系土器という定義に疑問を投げかけ、むしろ杉原荘介が弥生式土器集成の中で用いられている南関東地方第Ⅲ様式(久ヶ原期)に伴う特殊な土器という見方を取り、臼井南遺跡出土の土器については、南関東地方の編年上で扱うべきであり、久ヶ原式土器の範疇に含まれる特殊な土器であると主張(文献 150)した。さらに臼井南遺跡出土土器と現在茨城県地方で形式設定されている長岡式土器、東中根式土器、十王台式土器とを比較して両者の相違を指摘して編年的位置づけを推し進めた(文献 136)。

一方、柿沼修平は、印旛沼周辺地域の北関東系土器と称される後期弥生式土器の編年操作を試み、古-久ヶ原期、中-弥生町期、新-前野町期の三期に分類し、これにあてはめる土器形式をA・B・C・Dの4群に類別した(文献 127)。このうちA群は久ヶ原式土器との伴出例から久ヶ原期に近いものとし、B・C群は文様構成から十王台期に近い特徴とした。また、D群はA群に近い器形を持つことから、A群とほぼ同時期に属するものと考えた。以上の結果から

北関東系土器の編年的位置づけを、一部は前野町式土器と共伴することは認めながらも、概ね久ヶ原期から弥生町期に併行するものと結論づけた。

現在では、北関東系土器と称される一群の土器が、南関東の編年でいう久ヶ原期に位置づけられることは、ほぼ定説となりつつある。古内 茂もこの問題をとらえ、ほぼ同様な見解を発表している(文献134)が、さらに北関東系土器の初源について言及しているは、ことさら評価されるべきである。

北関東系土器と呼ばれる一群の土器に関し、研究の端緒はさほど時を遡らない時期であり、未だ全貌を理解することは不可能である。編年的位置づけも確固たるものは築かれていないのが現状である。あるいはまた、弥生町期から前野町期、前野町期から古墳時代にかけての研究もほとんどなされていないのが実状のようであり、後期弥生文化研究の立ち遅れが指摘される。

註

- 1 坪井正五郎「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」『東洋学芸雑誌』第6巻第91号 1889
- 2 文献25～27、29、30など
- 3 井上義安「茨城県長岡遺跡の弥生式土器」『史想』第7号 1957
- 4 杉原莊介「農業の発生と文化の変革」『世界考古学大系』第2巻 弥生時代 1960

〔 文 献 〕

文献  
番号

- 1 1911 柴田常恵「下総国海上郡足洗村発見の奇行石器」人類学雑誌第27巻第5号
- 2 1932 「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告」神社協会雑誌32—1・4
- 3 ♪ 杉原荘介「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」武蔵野第18巻第4  
・6号
- 4 1933 小金井良精「安房神社洞窟人骨」史前学雑誌第5巻第1号
- 5 ♪ 大場磐雄「安房神社洞窟発掘調査概報」史前学雑誌第5巻第1号
- 6 1934 八幡一郎「下総国須和田の弥生式土器」人類学雑誌第49巻第9号
- 7 ♪ 森本六爾「下総須和田の土器について」人類学雑誌第49巻第10号
- 8 1935 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学第6巻第7号
- 9 1936 ♪ 「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義について」考古学第7巻第  
1・2号
- 10 ♪ 杉原荘介「安房に於ける弥生式遺跡について」考古学第7巻第7号
- 11 1937 稲生典太郎「須和田発見の縄文を有する弥生式土器」先史考古学1—1
- 12 ♪ 杉原荘介「須和田遺跡に於いて行ひたる竪穴式住居址の発掘方法」考古学第8  
巻第2号
- 13 1938 大場磐雄「千葉県君津郡清川村菅生遺跡の調査」考古学雑誌第28巻第3号
- 14 ♪ ♪ 「地底の宝庫清川遺跡を発掘して」科学画報27—5
- 15 ♪ ♪ 「上総菅生遺跡の再調査」国学院大学学友会誌10
- 16 ♪ ♪ 「上総菅生遺跡」考古学第9巻第3・10号
- 17 ♪ ♪ 「上総菅生遺跡調査の経過」考古学雑誌第28巻第10号
- 18 ♪ ♪ 「上総清川村菅生遺跡発掘目録」上代文化第16輯
- 19 ♪ 宮本寿吉「上総菅生遺跡調査の経過」房総郷土研究5—9
- 20 1939 大場磐雄「上総菅生遺跡の一考察（1）」考古学雑誌第29巻第1号
- 21 ♪ ♪ 「 ♪ ♪ （2）」 ♪ 第29巻第3号
- 22 ♪ 酒詰仲男「千葉県印旛郡地方遺跡概況」人類学雑誌第54巻第8号
- 23 1942 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報—補遺—」古代文化第13巻第7号
- 24 1943 ♪ 「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌第58巻第7号
- 25 1948 河田 陽「菅生遺跡をめぐって」房総展望2—5
- 26 ♪ 村崎 勇「菅生遺跡について」房総展望2—5
- 27 ♪ 大場磐雄「千葉県木更津市菅生遺跡の研究」上代文化第18輯
- 28 1951 清水潤三「千葉県検見川遺跡」日本考古学年報1

- 29 1951 大場磐雄「千葉県菅生遺跡の再調査」日本考古学年報 1
- 30 ♪ 大場磐雄「菅生遺跡回顧」房総展望 5-4
- 31 ♪ 高野忠興「検見川遺跡のハスの実発掘について」房総展望 5-7
- 32 1952 『田子台遺跡関係文書綴』勝山町史蹟研究会
- 33 ♪ 平野元三郎「勝山の古代遺跡」房総展望 6-8
- 34 ♪ 古宮隆信『文京区立柏学園付近戸張遺跡調査概報』
- 35 1953 平野元三郎・滝口 宏『千葉県郷土史読本』寧楽書房
- 36 ♪ 千葉県立安房第一高等学校郷土研究会「千葉県安房郡丸村栗野台竪穴住居址発掘略報」郷土研究第 5 号
- 37 1954 早稲田大学考古学研究室『安房勝山田子台遺跡』
- 38 ♪ 菊池義次「南関東弥生式土器編年への一私見」『安房勝山田子台遺跡』
- 39 1955 曾野寿彦「安房勝山田子台遺跡」考古学雑誌第 40 卷第 4 号
- 40 ♪ 亀井正道「東日本弥生式文化に於ける墓制に就いて」国学院雑誌第 56 卷第 2 号
- 41 ♪ 神沢勇一「墳墓—東日本—」『日本考古学講座 4 弥生文化』
- 42 1956 滝口 宏「千葉県安房郡田子台遺跡」日本考古学年報 5
- 43 ♪ 川戸 彰「東金市発見の弥生式土器」国学院大学考古学会会報第 43 号
- 44 1957 奈加奈「田子台の遺跡」旭光 12-6
- 45 ♪ 下津谷達男・横川好富『野田市三ッ堀遺跡』野田市文化財調査報告第一冊
- 46 1958 『考古資料解説目録』成田山靈光館
- 47 1959 亀井正道「東日本弥生式文化の墓制」歴史教育第 7 卷第 3 号
- 48 1960 岩崎卓也「千葉県松戸市内における弥生土師遺跡」史潮第 71 号
- 49 ♪ 菊池義次「東日本弥生文化における葬制の問題」歴史教育第 8 卷第 3 号
- 50 1961 「中野台出土の弥生式土器」『千葉市の文化財』千葉市教育委員会
- 51 ♪ 君塚好一「千葉県市川市須和田遺跡」日本考古学年報 9
- 52 ♪ 菊池義次「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査 本編』千葉県教育委員会
- 53 ♪ 関 俊彦「松戸市和名ヶ谷出土の弥生式土器」立正考古第 17 号
- 54 ♪ 杉原荘介「千葉県千葉市坂月町新田山遺跡の土器」弥生式土器集成 2
- 55 ♪ 対馬郁夫「明鐘崎の海蝕洞窟」『海』創刊号 富津海洋資料館海の会
- 56 1963 坂詰秀一「東日本弥生時代墓制把握への一視角」古代文化第 10 卷
- 57 ♪ 坂詰秀一・関 俊彦「南関東弥生時代壺《甕》棺墓小考」立正大学文学部論叢第 17 号
- 58 ♪ 関 俊彦「千葉県八日市場市吉田出土の弥生式土器」立正考古第 22 号
- 59 ♪ 坂詰秀一・関 俊彦「中和倉寒風遺跡」松戸市文化財調査報告第 1 集



- 60 1963 木下正史「上本郷長者屋敷遺跡」松戸市文化財調査報告第1集
- 61 ♪ 佐藤 昇「千葉県野田市木野崎新町遺跡」若木考古66
- 62 ♪ 菊池義次「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」古代第41号
- 63 ♪ 江沢中葉「夷隅町引田峯越台遺蹟概報」総南文化第1号
- 64 1964 竹内俊文「千葉縣市川市菅野町五丁目出土の弥生式土器」考古学集刊第2巻第3号
- 65 ♪ 杉原荘介・大塚初重「千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓址」日本考古学協会第30回総会研究発表要旨
- 66 1965 下津谷達男「野田市提台遺跡」上代文化第35輯
- 67 ♪ 熊野正也「須和田遺跡出土の一弥生式土器について」考古学集刊第3巻第2号
- 68 1966 神沢勇一「弥生文化の発展と地域性—関東—」『日本の考古学Ⅲ』
- 69 ♪ 芝崎 孝・三上嘉徳「千葉県海老内台遺跡群の調査報告」下総考古学2
- 70 1967 杉原荘介「千葉県宮ノ台出土の石器」『案山子』日本考古学協会農業部会
- 71 ♪ 岩崎卓也・木下正史「千葉県松戸市長者屋敷遺跡」日本考古学年報15
- 72 ♪ 坂詰秀一「千葉県松戸市寒風遺跡」日本考古学年報15
- 73 ♪ 市毛 勲・滝山昌彦『市原市周辺地域の調査—若宮遺跡（C地区）—』市原市教育委員会
- 74 ♪ 杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号
- 75 ♪ 川崎純徳「須和田遺跡出土の北関東系弥生式土器」考古学集刊第3巻第4号
- 76 1968 杉原荘介・大塚初重「千葉県佐倉市天神前遺跡」日本考古学年報16
- 77 ♪ 杉原荘介「南関東地方」『弥生式土器集成 本編』
- 78 ♪ 松村 侑・平田美智子「千葉県印旛印西町出土の土器」下総考古学3
- 79 1969 関 俊彦『東日本弥生時代遺跡地名表—関東地方—』
- 80 ♪ 大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」駿台史学第24号
- 81 ♪ 杉原荘介「千葉県佐倉市岩名天神前遺跡」日本考古学年報17
- 82 1970 馬目順一「弥生時代の遺構・遺物」『大谷口』松戸市教育委員会
- 83 ♪ 『千葉県記念物所在地図』千葉県教育委員会
- 84 ♪ 渡辺正吾「大多喜町船子遺跡の新事例について」総南文化第12号
- 85 ♪ 「夷隅町引田と茂原市宮の台弥生遺跡」総南文化第12号
- 86 1971 栗本佳弘「佐倉市大篠塚遺跡」『埋蔵文化財調査報告』
- 87 ♪ 西野 元他『三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査』千葉県北総公社
- 88 ♪ 平野元三郎他『名主山遺跡』名主山遺跡調査団
- 89 ♪ 丸子 亘「東金平蔵台遺跡発掘調査概報」千葉県教育委員会
- 90 ♪ 杉原荘介・大塚初重「原始農耕文化—弥生時代—」『市川市史 第1巻』

- 91 1972 野口博芳「江子田南総中遺跡方形周溝墓と甕棺について」市原地方史研究 8
- 92 ♪ 金井塚良一「関東地方の方形周溝墓」考古学研究第18巻第4号
- 93 ♪ 伊藤 敢「成田市遠山地区の弥生遺跡」成田史談18
- 94 ♪ 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」千葉大学教養部研究報告A-5
- 95 ♪ 岡崎文喜他『夏見大塚遺跡—夏見台地における弥生時代集落址の調査—』船橋市教育委員会
- 96 ♪ 斉藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」先史第8号
- 97 ♪ 桑原 護「千葉県南総中遺跡の方形周溝墓」日本考古学協会昭和47年度大会研究発表要旨
- 98 1973 宮入和博「〔付節〕ピット列遺構・弥生式土器包含層の調査」『小金線』千葉県都市公社
- 99 ♪ 真下高幸「車坂遺跡」『京葉』千葉県都市公社
- 100 ♪ 柿沼修平「星久喜遺跡」『京葉』千葉県都市公社
- 101 ♪ 栗本佳弘他「大森第2遺跡」『京葉』千葉県都市公社
- 102 ♪ 玉口時雄・阪田正一他『宮脇』
- 103 ♪ 坂井利明他『北柏遺跡—発掘調査概報—』
- 104 ♪ 栗本佳弘「大森第二遺跡」日本考古学年報24
- 105 ♪ 栗本佳弘「車坂遺跡」日本考古学年報24
- 106 ♪ 宮入和博他『成田市文化財分布調査報告書』成田市教育委員会
- 107 ♪ 『松戸市史』松戸市教育委員会
- 108 ♪ 下津谷達男・古宮隆信『中馬場遺跡・妻子原遺跡』東葛上代文化研究会
- 109 ♪ 中山吉秀『柏の文化財』柏市教育委員会
- 110 ♪ 市毛 勲『千葉県印旛郡印西町下総鶴塚古墳の調査概報』
- 111 ♪ 石岡憲雄他『上総菅生遺跡』菅生遺跡調査団
- 112 ♪ 白石竹雄他『平台先遺跡』平台先遺跡発掘調査団
- 113 ♪ 『流山市大畔台・下花輪第二遺跡調査概報』下花輪第二遺跡調査団
- 114 ♪ 山田友治他『佐倉江原台遺跡発掘調査概報 昭和48年度』千葉県教育庁文化課
- 115 1974 古内 茂・矢戸三男『柏市鴻ノ巣遺跡』千葉県都市公社
- 116 ♪ 『千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報』銚子市教育委員会
- 117 ♪ 三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』千葉県都市公社
- 118 ♪ 斎木 勝・種田齊吾他『市原市菊間遺跡』千葉県都市公社
- 119 ♪ 倉田芳郎『千葉上ノ台遺跡第Ⅰ次調査概報』
- 120 ♪ 武田宗久・宍倉昭一郎『千葉市史第1巻』

- 121 1974 種田齊吾・菊池真太郎『木更津市請西遺跡群』千葉県都市公社
- 122 ♪ 熊野正也「弥生時代集落構造の一考察ーベツト状遺構をもつ住居址を中心としてー」史館第2号
- 123 ♪ 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部考古学研究室
- 124 ♪ 関根孝夫『諏訪原遺跡』松戸市文化財調査報告第5集
- 125 ♪ 桑原 護他『飯重』佐倉市教育委員会
- 126 ♪ 柿沼修平「佐倉市畔田川崎遺跡の弥生式土器」史館第3号
- 127 ♪ 柿沼修平「印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡」なわ第13号
- 128 ♪ 矢吹俊男「千葉県佐倉市下根出土の古式土師式土器」なわ第13号
- 129 ♪ 田川 良「八千代市佐山遺跡出土の弥生式土器」なわ第13号
- 130 ♪ 柿沼修平・内田儀久「佐倉市の弥生時代遺跡」なわ第13号
- 131 ♪ 柿沼修平・高橋健一「酒々井町下岩橋連蔵遺跡の弥生式土器」なわ第13号
- 132 ♪ 小川和博「成田市の弥生時代遺跡の分布について」なわ第13号
- 133 ♪ 古内 茂「印旛地区の弥生時代遺跡」なわ第13号
- 134 ♪ 古内 茂「房総における北関東系土器の出現と展開」ふさ第5・6合併号
- 135 ♪ 千葉健造「印西町下宿遺跡出土の土器」ふさ第5・6合併号
- 136 ♪ 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究(1)ー佐倉市臼井南遺跡出土の土器ー」史館第4号
- 137 ♪ 藤下昌信・宮入和博『成田市の文化財』5号
- 138 ♪ 佐藤武雄「薬園台発見の弥生式土器」資料館だより第3号 船橋市郷土資料館
- 139 ♪ 樋口清之・金子皓彦・青木 豊「千葉県西国吉遺跡の発掘調査」考古学ジャーナル№96
- 140 ♪ 坂井利明『成田新幹線関係遺跡分布調査報告書』千葉県都市公社
- 141 ♪ 中川成夫『千葉県夷隅川流域分布調査報告書(埋蔵及び石造文化財資料編)』
- 142 ♪ 野口義磨「重文壺形土器」月刊文化財5月号
- 143 1975 倉田芳郎『千葉上ノ台遺跡第Ⅱ次調査概報』
- 144 ♪ 天野 努他『八千代市村上遺跡群』千葉県都市公社
- 145 ♪ 『おおびた遺跡ー八千代市少年自然の家建設地内遺跡ー』おおびた遺跡発掘調査団 八千代市教育委員会
- 146 ♪ 米内邦男『大崎台遺跡』
- 147 ♪ 熊野正也『殿台遺跡』市川市文化財調査報告第2集
- 148 ♪ 小川和博・工藤英行『埋蔵文化財調査報告書2』成田市教育委員会
- 149 ♪ 玉口時雄『千葉県安房郡千倉町健田遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会

- 150 1975 伊礼正雄・熊野正也『臼井南』
- 151 ♪ 中川成夫『新田野貝塚—千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚—』立教大学考古学研究会調査報告2 立教大学考古学研究会
- 152 ♪ 『千葉県館山市糸里遺構調査報告書』館山市糸里遺跡調査会
- 153 ♪ 稻山林継『木更津市請西遺跡—昭和49年度発掘調査概報—』
- 154 ♪ 新田栄治「有角石斧の再検討」考古学雑誌第60巻第4号
- 155 ♪ 倉田芳郎・上篠朝宏『千葉千潟桜井遺跡調査概要』
- 156 ♪ 海野道義・柿沼修平『円能遺跡発掘調査概報』佐倉市教育委員会
- 157 ♪ 八幡一郎他『夏見大塚遺跡—夏見台地における弥生時代・奈良・平安時代集落址の調査—』
- 158 ♪ 松井義郎「墳丘下の遺構」『板附古墳群—千葉県山武郡成東町板附古墳群発掘調査報告—』山武考古学研究会
- 159 ♪ 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究（2）—特に房総半島における葬制について—」史館第5号
- 160 ♪ 山田友治「江原台遺跡」日本考古学年報26
- 161 ♪ 下津谷達男「宝蓮坊遺跡」日本考古学年報26
- 162 ♪ 榊原松司「夏見大塚遺跡（第3次）」日本考古学年報26
- 163 ♪ 滝口 宏他『遺跡日吉倉』日吉倉遺跡調査団
- 164 ♪ 矢戸三男・菊池真太郎他『阿玉台北遺跡』千葉県都市公社
- 165 ♪ 小山 勲「史料館蔵の弥生式土器」かみしき14
- 166 ♪ 杉山晋作・安藤鴻基『清水谷遺跡』
- 167 1976 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究（3）—特に大厩・菊間両遺跡出土の石器を中心として—」史館第6号
- 168 ♪ 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和49・50年—』千葉県教育庁文化課
- 169 ♪ 中山吉秀「清戸遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V』千葉県文化財センター
- 170 ♪ 古内 茂「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V』千葉県文化財センター
- 117 ♪ 田中新史「南向原遺跡」『南向原—古墳・方形周溝墓・住居址の調査—』
- 172 ♪ 星田享二「東日本弥生時代初頭の土器と墓制—再葬墓の研究—」史館第7号
- 173 ♪ 熊野正也・佐々木和博「杉ノ木台遺跡出土の弥生式土器について」史館第7号
- 174 ♪ 菊地義次・対馬郁夫他「千葉県君津郡袖ヶ浦町大竹遺跡」遺跡確認・大竹第12号古墳調査報告書
- 175 ♪ 『夏見台第3次—弥生時代・古墳時代集落址の調査』夏見台遺跡第3次発掘調

査団

- 176 1976 海野道義他『江原台第1遺跡確認調査』佐倉市文化財報告
- 177 ♪ 古宮隆信他『中馬場遺跡第3次発掘調査報告書』
- 178 ♪ 対馬郁夫「加茂遺跡C地点の調査」上総国分寺台発掘調査概要Ⅲ
- 179 ♪ 半田堅三「台遺跡B地点の調査」上総国分寺台発掘調査概要Ⅲ
- 180 ♪ 滝口 宏編『千葉県市原市加茂C地点発掘調査報告書』上総国分寺台遺跡調査団
- 181 ♪ 大塚初重『千葉県君津市道祖神裏古墳調査概報』
- 182 ♪ 関根孝夫「網目様捺糸文のある後期弥生土器について」MUSEUMちば—千葉県博物館協会研究紀要—第7号
- 183 ♪ 須田 勉他『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団 市原市教育委員会
- 184 ♪ 『夏見台(第2次)—弥生時代及び古墳時代の集落址の調査』船橋市教育委員会
- 185 ♪ 『上総国分寺台発掘調査概要』上総国分寺台発掘調査団、市原市教育委員会
- 186 ♪ 『木更津市請西遺跡—昭和50年度—』木更津市教育委員会
- 187 ♪ 熊野正也「宮ノ台式土器に関する覚え書き」房総の郷土史第4号
- 188 ♪ 熊野正也他『臼井南—石神第Ⅲ地点発掘調査報告書—』
- 189 ♪ 熊野正也「杉ノ木台遺跡第1次調査」昭和50年度市川博物館年報
- 190 ♪ 伊東重敏「山王辺田遺跡030号住居址」ひだみちNo.4 常陸考古学研究所報
- 191 ♪ 熊野正也『須和田遺跡のはなし』市立市川博物館友の会
- 192 ♪ 森 尚登『遺構確認調査報告書—国立歴史民俗博物館(仮称)—』千葉県文化財センター
- 193 ♪ 米内邦雄『佐倉市埋蔵文化財報告(2)—志津西ノ台遺跡—』志津西ノ台遺跡調査団
- 194 ♪ 三浦和信他『吉高家老地遺跡—弥生土師集落址の調査—』吉高家老地遺跡調査会
- 195 ♪ 柿沼修平他『多古台遺跡群調査概報』日本文化財研究所
- 196 1977 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和47・48年—』千葉県教育庁文化課
- 197 ♪ 田村言行他『江原台第1遺跡発掘調査報告2』佐倉市文化財調査報告
- 198 ♪ 高田 博他『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ—第1次・第2次調査—』千葉県文化財センター
- 199 ♪ 桑原 護『間野台・古屋敷』佐倉市臼井中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告
- 200 ♪ 三森俊彦「市原市大厩遺跡の弥生文化」MUSEUMちば—千葉県博物館協会

研究紀要一第8号

- 201 1977 古内 茂「宮ノ台式土器の変遷について—最近の調査例を中心として—」船橋考古第7号
- 202 ♫ 倉田芳郎『千葉・上ノ台遺跡第Ⅲ次調査概報』上ノ台遺跡調査団 千葉市教育委員会
- 203 ♫ 沼沢 豊・深沢克友『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター
- 204 ♫ 鷹野光行「遺構とその出土遺物」『西広貝塚—上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ—』上総国分寺台遺跡調査団
- 205 ♫ 深沢克友「東寺山石神遺跡出土弥生式土器の編年的位置づけについて」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター
- 206 ♫ 沼沢 豊「千葉県東寺山石神遺跡の調査」考古学ジャーナルNo.133
- 207 ♫ 熊野正也「入門講座・弥生土器—南関東1—」考古学ジャーナルNo.135
- 208 ♫ 熊野正也「入門講座・弥生土器—南関東2—」考古学ジャーナルNo.138
- 209 ♫ 熊野正也「入門講座・弥生土器—南関東3—」考古学ジャーナルNo.139
- 210 1978 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和51年—』千葉県教育庁文化課 刊行予定

追 補

- 211 1934 八幡一郎「関東地方の弥生式磨石斧」人類学雑誌第49巻4号
- 212 1974 田中新史「国分寺台の遺跡分布調査概要」『東関部多古墳群』
- 213 1975 中村恵次・山田友治『千葉県長生郡睦沢村浅間山1号墳発掘調査報告書』浅間山1号墳発掘調査団
- 214 1971 滝口 宏・市毛 勲『大日山古墳』千葉県教育委員会
- 215 1975 『袖ヶ浦町文化財分布調査報告書—埋蔵文化財—』袖ヶ浦町教育委員会
- 216 1977 野中 徹『木更津市埋蔵文化財分布調査報告書—矢那川流域周辺遺跡詳細分布調査—』木更津市教育委員会

(斎木・深沢編 1978, 3, 15)

### 第三章 弥生文化の概要と変遷

#### 第1節 弥生中期文化

##### 遺跡分布状態 (第1図)

県下における弥生中期に該当する遺跡は、現在のところ48ヶ所確認されている。○印は須和田式土器の出土遺跡であり、●印は中期後半期の宮ノ台式土器の出土遺跡及び、それより若干古い様相を有する土器の出土遺跡である。前者は、現在までのところ8ヶ所あり、海岸部あるいは山間部にも散在している。後者は、42ヶ所確認されており、調査地の粗密はあるにしても、千葉、市原付近に集中している。

総体的にみると、比較的河川の発達していることが、ある点において一つの条件になっているように看取される。千葉、市原周辺は、都川、村田川、養老川、内陸部においては、印旛沼に注ぐ、鹿島川、また、外洋に注ぐ夷隅川地域がそれにあたるのではなかろうか。

##### 文化様相 (第2図)<sup>1</sup>

次に、房総における弥生時代中期の文化様相を概観してみたい。掲げた項目は、住居形態、埋葬、土器、金属器、木器で、これ以外のものはその他として一括した。

弥生中期後半の宮ノ台期の住居形態は、まず平面形でみると、楕円形となるもの、隅丸長方形となるもの、隅丸方形となるもの、不整形円形となるものの4種類に分類される<sup>2</sup>。大きさは、短辺5m 長辺6m前後のものが一般的である。ただ、菊間遺跡の第25号、38号、40号住居<sup>3</sup>、また、大庭遺跡のY-38号、Y-44号址のように大形住居址も確認される<sup>4</sup>。三殿台遺跡では、この大形住居を単位として営まれた集団をとらえ集落構成を4つの小期に設定した論が発表されている<sup>5</sup>。

内部の施設として、周溝は多くが設けられている。柱穴は、各コーナーに偏して、対角線上に4本穿たれるのを基本とする。また、炉に対する2本の柱穴間に1本設けられる場合もある。掘り込みはしっかりしており、深さは60cm前後を測るものが多い。大形住居でも主柱穴の設備数はほぼ同じである。しかし、例えば、大庭遺跡Y-44号址の柱穴は、深さ1.2～1.3mを測り、その掘り込みは長径3.1～2.7m 短径1.75～1.3mも測る長楕円形であり、住居の規模に比例して、かなり大規模なものであったことが推察される<sup>6</sup>。

炉は、中央部よりやや北側に偏在するのを一般とする。また、土器が埋設される場合、四隅に付帯小ピットを伴う場合もある<sup>7</sup>。

貯蔵ピットは、南壁寄りに設けられる場合が多い。

弥生中期の埋葬として、再葬墓と方形周溝墓がある。前者に該当する遺跡としては、天神前遺跡<sup>8</sup>、新田山遺跡<sup>9</sup>、中野台遺跡<sup>10</sup>、船子遺跡<sup>11</sup>、ふじ塚遺跡<sup>12</sup>が挙げられる。これらの遺跡では、掘





第1表 弥生中期遺跡表

遺跡No.	遺跡名	所在地	文獻
1	大谷口	松戸市大字大谷口	須, 宮 82
2	須和田	市川市須和田2丁目	須, 宮 3,74,90,191
3	法蓮寺山	船橋市藤原町1-225-4 他	宮 98
4	佐山谷	八千代市佐山谷	宮 126
5	石田	成田市土室字石田	須 106,142
6	六合	印旛郡印旛村六合	宮 52
7	天神前	佐倉市岩名396	須, (土壙墓) 65,76,81,123
8	生谷新畑	◇ 飯重字新畑	—
9	畔田川崎	◇ 畔田	宮 126
10	山梨向井	印旛郡四街道町	宮 52
11	中野	◇ ◇ 中野地先	宮 168
12	川戸殿台	◇ 四街道町	宮 52
13	新田山	千葉市坂月町字山王小字新田山	須, (土壙墓) 24,54,120
14	城の腰	◇ 大宮町城の腰	宮 —
15	星久喜	◇ 星久喜町271-1	中期 100,120
16	中野台	◇ 千葉寺町字中野台	須 120
17	大森第2	◇ 大森町222他	中期 101,104,120
18	七廻塚古墳	◇ 生実町峠の台	— 120
19	平蔵台	東金市松之郷字金谷	宮 89
20	菊間	市原市菊間字北野	宮 118,167,187,201
21	菊間手長台貝塚	◇ ◇	宮 196
22	大厩	◇ 大厩	宮 117,167,187,200,201
23	若宮	◇ 山木地内若宮	宮 73
24	向原台	◇ 国分寺台郡本	宮 212
25	代	◇ ◇ 根田	宮 212
26	台遺跡B地点	◇ 根田字松山425他	宮 168,179
27	村上東山	◇ 村上東山	宮 —
28	東向原	◇ 国分寺台藤井字東向原	宮 —
29	—	◇ 皿木	須 (車崎正彦氏教示) —
30	蔵波砦跡	君津郡袖ヶ浦町蔵波	宮 168
31	宮ノ台	茂原市綱島	宮 8,23,70,85
32	南総中	市原市牛久町	宮 91,96,97,196
33	菅生	木更津市菅生字睦喜鶴岡	宮 111
34	清水谷	◇ ◇ 字清水谷1063~7	中期 166,168
35	請西	◇ 請西字山伏作1902~3 他	宮 153,168
36	八重原	君津市八重原	中期 —
37	道祖神裏古墳(下)	◇	宮 181
38	浅間山1号墳(下)	長生郡睦沢村下之郷字根崎	宮 213
39	No.244	夷隅郡大原町根	宮 141
40	No.273	◇ 大原5986	宮 141
41	No.333	◇ 夷隅町引田嶺台	宮 141
42	No.349	◇ ◇ 峰谷	宮? 天王山併行 141
43	No.405	◇ 大多喜町小土呂255-1	宮 141
44	船子	◇ ◇ 大多喜女子高	須, 野沢 84,141
45	—	安房郡千倉町瀬戸	宮 (小畑清氏所蔵資料) —
46	ふじ塚	館山市藤原浜田ふじ塚	(土壙墓?) 94
47	—	◇ 犬石	宮 (対馬郁夫氏所蔵資料) —
48	粟野台	安房郡丸山町石堂粟野台	宮 36

り窪めた凹地に須和田式土器が埋置されていた。規模を、掲図する天神前第1号墓壙、第2号墓壙で示すと、まず、第1号墓壙は、長径84cm、短径75cmの楕円形状を示し、掘り込み深さ約20cm、表土から墓壙底面まで65cmを測り、壺形土器3個体が埋置されていた。第2号墓壙は、長径110cm 短径106cmの不整円形を示し、表土から墓壙底面まで52cmを測り、壺形土器7個体、鉢形に近い甕形土器1個体が埋置されていた。<sup>13</sup>

方形周溝墓を確認した遺跡としては、星久喜遺跡<sup>14</sup> 菊間遺跡<sup>15</sup> 南総中遺跡<sup>16</sup> が挙げられる。南総中遺跡K-21号方形周溝墓は、北東溝8.3m、南東溝8.4m、幅1.2～1.8m、深さ0.6mを測り、各四隅が切れる。その内側は、東西10mで中央部に長径2m 短径1mの楕円形の土壌が検出される。この期の方形周溝墓は、いわゆる各コーナー部分が切れる形態で、方台部に土壌が確認される場合とされない場合がある。規模は前述の南総中遺跡K-21号方形周溝墓に近似する。

以上、埋葬に関しては再葬墓と方形周溝墓をみてきた。ここで問題となるのは、壺及び甕形土器を納骨器として利用する再葬墓である。つまり、この方法は遺骨を一度洗骨してから、骨だけを土器内に収納したものである。従って、洗骨する以前の遺体をどのようにしたかが疑問として残る。ここで推論するのは、洗骨以前の仮埋葬地の存在であろう。腐敗を一応の目的とした場合、まず考えられるのは、土壌状の施設への埋葬ではなかろうか。現状では、再葬墓施設のみ確認であるが、より広域的な調査を進めれば、この一段階前の埋葬施設をとらえることが可能と思われる。

県内弥生時代の葬制は、前代よりの再葬墓が、中期後半までみられる。それが壺（甕）棺墓として後期に継承される。一方、中期後半の初頭に、西日本より方形周溝墓という葬制が伝播するのであるが、この葬制をいち早く取り入れる地域と、以前として旧代の葬制を継承する地域とがでてくる。

土器は、須和田式土器、宮ノ台式土器、また、この間にいわゆる小田原式土器を設ける場合もある。

須和田式土器は、市川市須和田遺跡出土土器を標式としたものである。<sup>17</sup> 器形は、壺、広口壺、甕、鉢の4種あるが、主体は壺及び甕である。

壺形土器は、大形のもが多く、長頸を呈するものが多い。最大径を胴中位か、上部にもち、肩部が張る場合もある。口縁部は多くの場合、外反する。施文は地文に縄文を用い、口縁から胴上半部に施され、各文様帯は横位の沈線で区画される。区画された各部位には、沈線で、重三角文、菱形文、変形工字文、重弧文が配され、その内側をヘラ状工具にて刺突文を充填している。

甕形土器は、いわゆる半精製土器としてとらえられる。口縁部は平縁で外反する器形が多い。肩部はもつものとなないものがある。胴部は球形を呈する場合や、一段の稜を有する場合もある。文様は、口縁部から胴部にかけて縄文を施文し、平行沈線文、波状沈線文を加える。胴下

半部には壺形土器と同様、擦痕を残すものも多い。

宮ノ台式土器は、茂原市綱島、宮ノ台遺跡出土土器を標式としたものである<sup>18</sup>。器形は、壺、広口壺、深鉢、浅鉢などがある。

壺形土器は、前代に比べかなり小形化する。口縁部は外反し、曲線を描いて頸部に移行する。頸部は、長頸や筒状を呈することなく、胴部へと移行する。底部は一般に安定感をもつ。胴部は球状を呈して、最大径を胴中央部にもつものと、下脹れで最大径を胴下半部にもつものがある。施文は、地文として刷毛目調整を施してあるのがほとんどである。文様区画は多くが肩部・胴部にみられ、楕状工具による、平行沈線文、擬流水文、<sup>19</sup>重弧文、また、縄文を沈線で区画した、結紐文、舌状文など、その施文構成は多い。

深鉢形土器は、口縁部が外反し、胴部があまり張らずに底部に移行する。器面はそのほとんどが刷毛目調整を施す。その上面に羽状条痕を施文するものもある。口縁部上端は指頭もしくはヘラ状工具にて、押捺圧痕を施している。

弥生中期後半に伴出する石器群は、大形蛤刃石斧・抉入石斧・扁平片刃石斧・鑿形石器・有角石器などがあり、個々の形状などより、機能分化があったと推察される<sup>20</sup>。

この期の石器として、一括出土した、大厩遺跡Y-47号址を取り挙げたい<sup>21</sup>。この住居址は、住居址3軒と重複関係にあり、長径7m 短径5.5mを測る隅丸方形を呈す。出土土器より宮ノ台期とされている。石器は、抉入石斧4点 扁平片刃石斧3点 鑿形石斧2点 両刃石斧1点 砥石2点である。

抉入石斧で最大のものは、長さ20.2cm、最小のもので、長さ9.2cmを測り、4点のうち3点は砂岩製、他は安山岩製である。形状等は全く同じであるが、最小のものは頭部が丸味を帯びる。

扁平片刃石斧は、刃部が長四角形状を示すものと、山形を示すものがある。

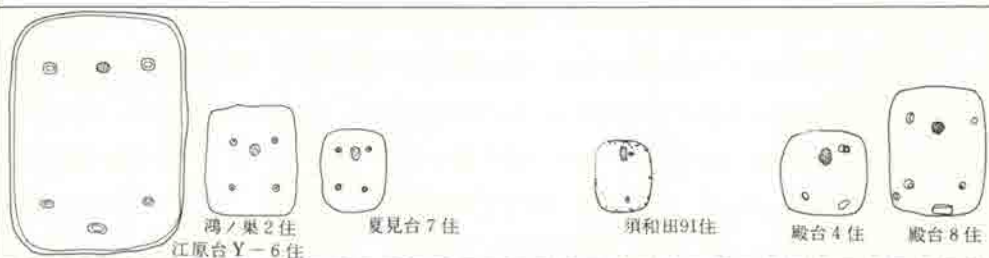
鑿形石斧は、一つが断面方柱形を呈し、刃部は稜をもたせず、ゆるやかな曲線で示されている。もう一つは、長さ9.3cmを測り、若干大形となる。断面台形を示し、正面と刃部との間に稜がつくられている。

両刃石斧とするものは、報告書では鑿形石斧とされている<sup>22</sup>。しかし、鑿という機能上の規定をするならば、必然的に片刃でなければならない。本址の石器群では、太形蛤刃石斧を欠いているが、あるいは、この両刃石斧は機能上太形蛤刃石斧に近いものであったのではなかろうか。また、握り部には、2ヶ所にわたって赤彩が施されている。石器にこのようなものを施す自体、呪術的なものを感じさせる。

ここで注目すべきは、住居址の南壁寄りの貯蔵穴内より、抉入石斧2点と両刃石斧が一括出土したことである。通常は、壺形土器などの出土をみるが、生産用具である石器を収納していたことは、特異である。両刃石斧が赤彩されていることから何か、特別の意味があったのかとも思われる。

時期区分 様相	AD 1 中	100 期
住居形態		
埋葬		
土器		
石器		
金属器	鉄 斧 (菅生)	
木器		
その他		

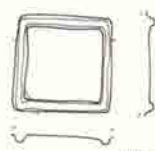
第 2 図 房総弥生時代の文化様相 (縮尺不統一)



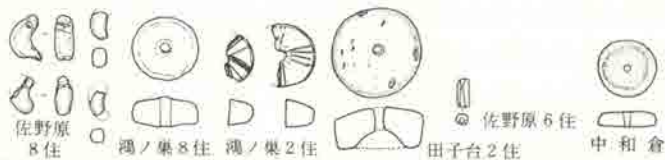
南向原1周



阿玉台北B-011



渡戸A



金属器に関しては、木更津市菅生遺跡で弥生中期後半期に、短冊状の鉄斧の伴うことが確認されている<sup>23</sup>。

木器について、弥生中期に伴うものは、千葉市星久喜遺跡の木材集積遺構内より出土した「ちまき」がある<sup>24</sup>。2点出土しており、1点は、長さ76.4cm 幅6.6cm 厚さ2.8cmで断面がやや丸味を帯びた四角形状を示す。左右両端のいわゆる受け部は、長さ約12cmほどが、径2cmを測る断面円形状に削られている。また、左右に抉り部をもつ。もう1点は、片方の受け部を欠損しているが、長さ75cm(推定)、幅7.2cm 厚さ2.9cmを測り、形状などまったく同じである。

現在のところ、調査は台地上もしくは微高地に求められ、集落址が調査対象にあげられているため、生産地である、水田、低地などに目を向けられない。事実、星久喜遺跡出土遺物のように低湿地などよりの出土もあるので、集落址の後背湿地や水田面の調査も重要と考えられる。

その他の遺物として、骨角器では、ト占の行なわれた痕跡として、焦痕を有する肩胛骨、また、骨鏃が出土している<sup>25</sup>。前者は、対岸の三浦半島の間口洞窟、毘沙門C洞窟などより、久ヶ原式土器に伴って出土している。

土製品では、紡錘車、ガラス製品として、ガラス玉などが出土している。

石器を除いた石製品では、管玉、また、出土状態に関して再考すべきであるが石製勾玉などが出土している<sup>26</sup>。

## 主要遺跡とその出土遺物

### 須和田遺跡 (第3図1～3)

市川市須和田2丁目に在る。

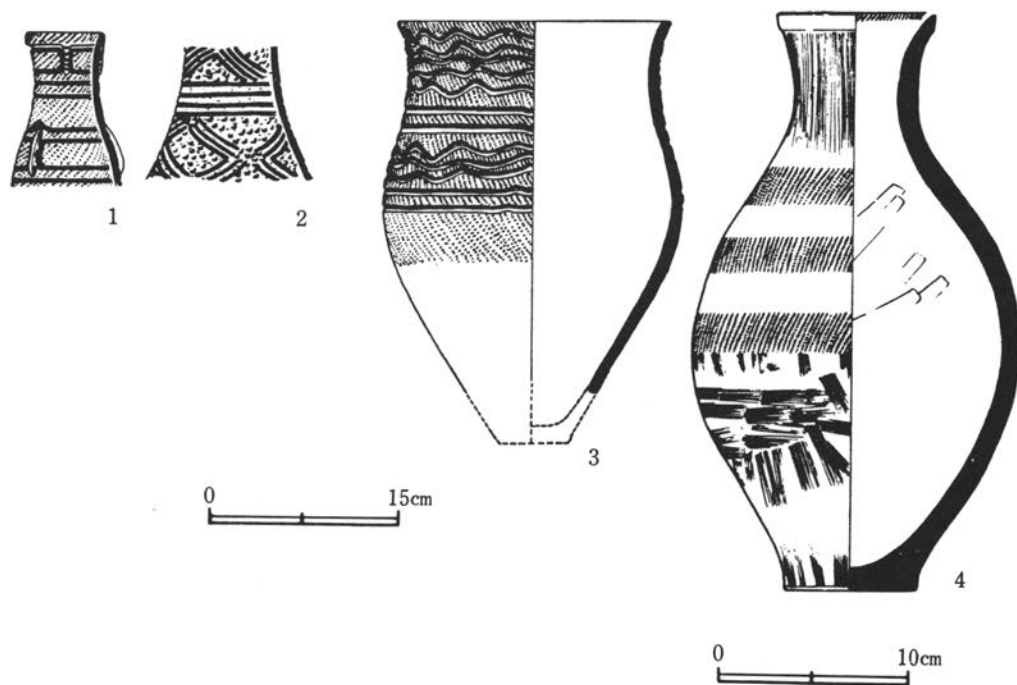
遺跡は、東側を国分谷、西側を江戸川によって分断された国分台台地の先端部に立地する。標高5m前後の沖積段丘上に営まれており、台地基部には、千葉第1段丘、第2段丘を確認する。遺跡の南方には沖積平野が広がり、また、現在、鉄道を敷いている付近は、幅約500mの市川砂州が形成されている。

遺跡は弥生時代中期から、平安時代までの各々の遺構を含む複合遺跡であり、その主体は古墳時代以降の集落遺構である。報告された須和田式土器は、その伴出遺構はとらえられず、遺物包含層中とされている。

1は壺形土器で、底部を欠損する。口径約10cmを測る小形土器で、口縁がわずかに開き、頸部ではあまりすばまらず、胴部に移行している。地文は、一様に縄文を施文し、横位の沈線を周回している。また、縦位の隆帯を付し、刻みを施している部分もある。

2は、壺型土器の頸部から肩部に移行する部分である。頸部で4単位の横位沈線を周回させている。他の部分には、重三角文や連繫菱形文を沈線で施文している。また、その区画内をヘラ状工具により刺突を加えている。

3は甕形土器であり、推定器高33cm、口径21cm、胴径23.8cmを測る。器形は、口縁がわ



第3図 須和田遺跡(1～3)・法蓮寺山遺跡(4)出土土器(¼・½) (杉原・1971) (宮入他・1973)

ずかに開き、最大径を胴部の上位に有し、すぼまりながら底部に移行している。地文は、縄文を口唇端より胴部まで一様に施文している。その上面に横位に、頸部と胴部に太描きの沈線を周回させ、また、口縁部と肩部には、不規則に波状を呈しながら、沈線を施文している。

#### 法蓮寺山遺跡 (第3図4)

船橋市藤原町1-225-4外に在る。

大局的にみて、大きく開析している大柏谷に面する一支谷の南面に位置している。対岸の北方約400mに姥山貝塚が在り、こちらは台地そのものが、急斜面であるのに対し、法蓮寺山遺跡の立地する左岸は緩斜面である。標高は16mを測り、北方との水田面との比高は7m前後である。

遺跡の調査は、台地東側の肩部と低地面の調査であり、縄文前期黒浜期の住居址2軒、諸磯期の住居址1軒と、古墳時代和泉期の住居址2軒、歴史時代の住居址1軒、先土器時代包含層などが確認された。

弥生時代の遺構は全く認められなかったが、壺形土器1点と数点の破片が包含層より検出さ

れた。

4は、器高30cm、口径8.4cm、胴径17.2cm、底径6.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、外面に稜を有す。胴は長胴で肩部の張りはない。地文は刷毛目調整であり、頸部は縦位、胴下半部は横位と縦位に施されている。肩部及び胴部には、施文原体L・Rを用いた縄文帯を3段にわたって施文している。また、口縁部内面にも同じ原体の施文を行なっている。

#### 天神前遺跡（第4図～第9図）

佐倉市岩名396に在る。

遺跡は、印旛沼の南方の台地上にあり、北東を印旛沼に開析する支谷があり、西側は、鹿島川の沖積地が広がる。標高は約30mを測り、水田面との比高は、25m前後を示す。

発見された遺構は、7ヶ所の再葬墓であり、出土した土器は、壺形土器17点と甕形土器3点の合計20点である。

1は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高48cm、頸径8cm、胴径26.6cm、底径5.8cmを測る。筒状の頸部を有し、肩部は張らず、最大径を胴上部に有す。頸部への施文は、横位の沈線を数条周回させ、各文様帯を区画している。肩部から胴部にかけては、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を横方向より施文している。その上面に沈線で頸部・肩部・胴部と区画する如く、沈線を周回させ、また、胴部には、菱形連繫文と円形文を配している。胴下半部には擦痕が認められる。

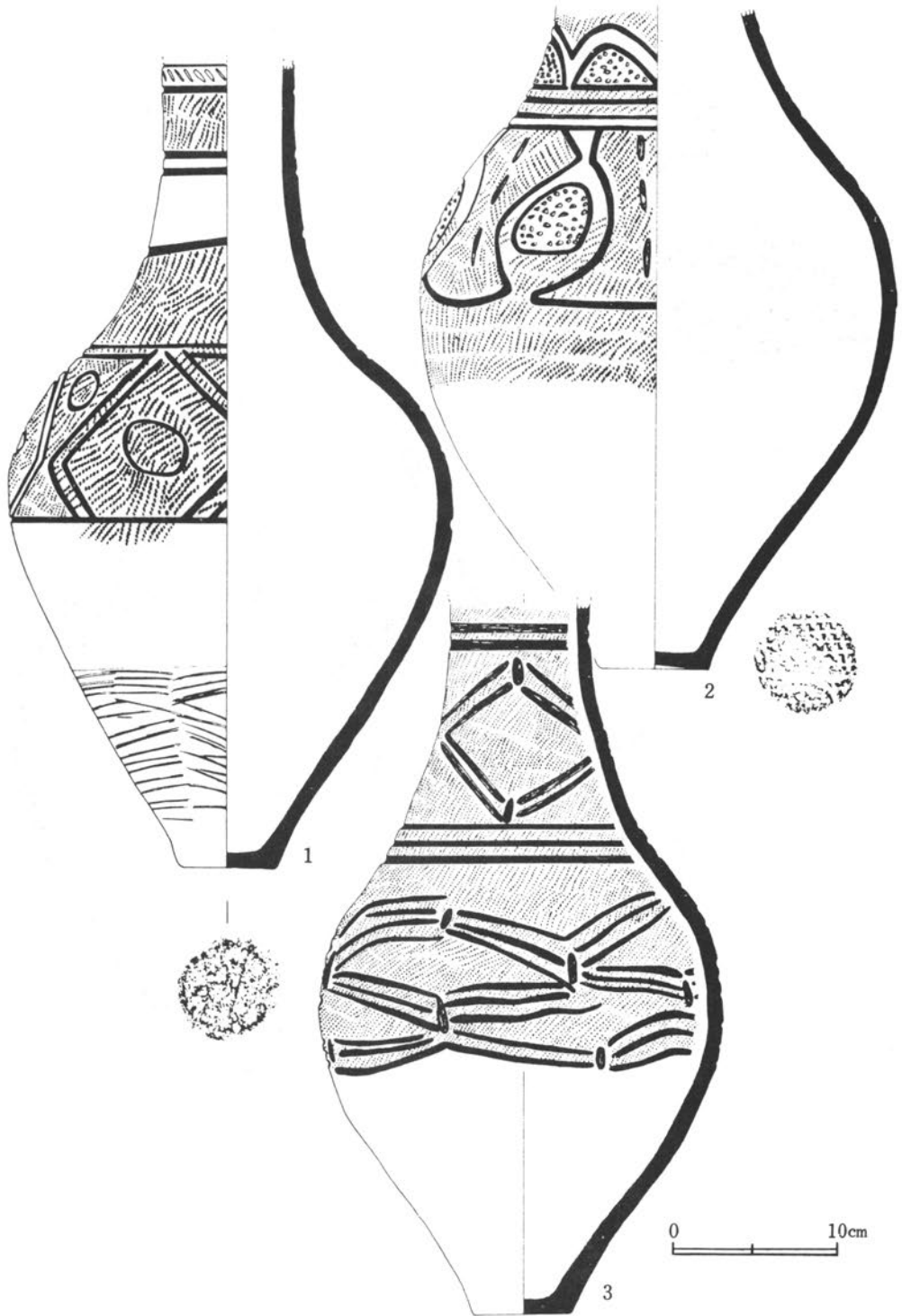
2は同じく口縁部を欠損する壺形土器。現器高39cm、胴径28.6cm、底径6.5cmを測る。球状に脹らむ胴部を有し、最大径は胴部のほぼ中位にある。地文は施文原体L・Rを用いた縄文を、1単位ずつ横方向より施文、肩部で4条の沈線を周回させ、頸部文様帯と胴部文様帯と分離させている。各文様帯は、太描きの沈線により、半弧状文、円形文を施し、その区画内を、ヘラ状工具による刺突文を充填している。また、胴部文様帯には、列点状に縦長の沈線を垂下施文している。底部は網代痕を残している。

3は、筒状の頸部と弧状の胴部を有する壺形土器。頸径8.4cm、胴径24.2cm、底径5.8cmを測る。地文は2と同じく施文原体L・Rを用いた縄文が施され、その上面に、連繫菱形沈線文を施文している。なお、胴部に施文された文様は、やや退化したような特徴が窺われる。

4は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高43cm、頸径8cm、胴径29.6cm、底径5.8cmを測る。器形は、細い頸部に比べ、胴部が球状に張る。施文は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、頸部下半部に4条の沈線を周回させ、各文様帯を区画している。太描きの沈線文は、連繫した菱形文の退化形態で、1本目と4本目の沈線を接続し、各接合部には円形沈線文を配す。底部は網代底である。

5は、胴下部に補修孔をもつ壺形土器。現器高44cm、頸径7.6cm、胴径28.7cm、底径6

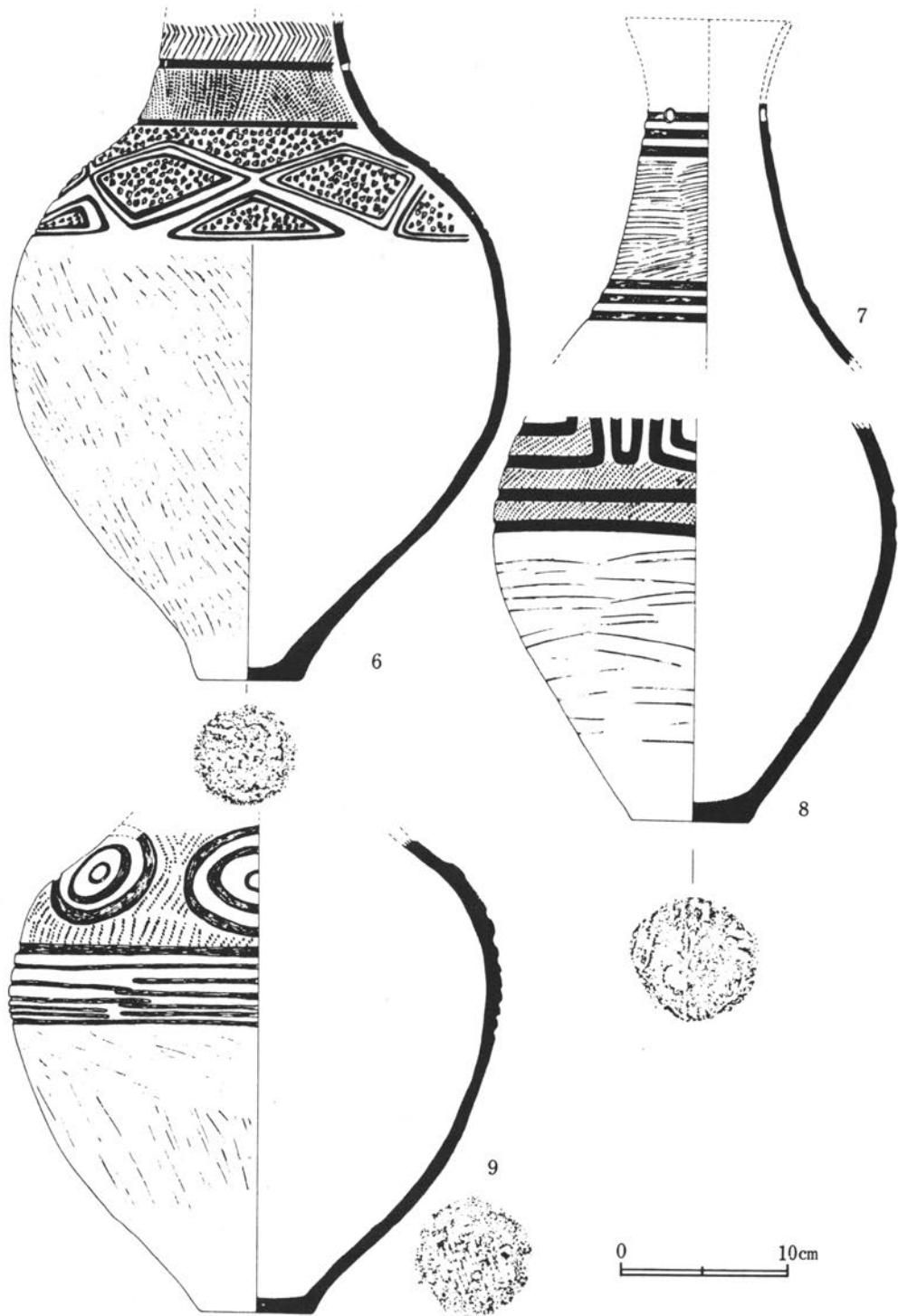




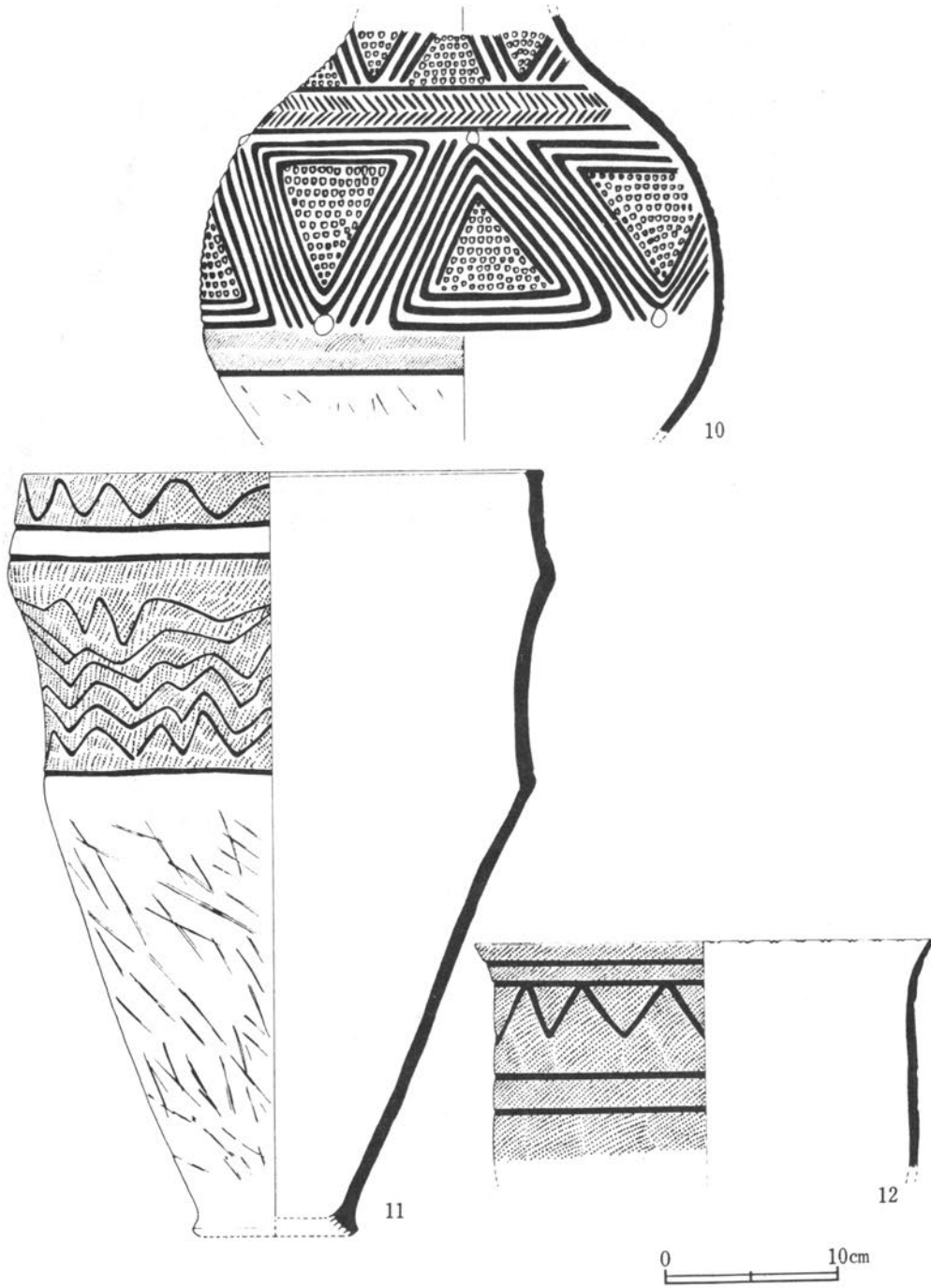
第4図 天神前遺跡出土土器(1)・(1/4) (杉原・1974)



第5図 天神前遺跡出土土器(2)・(1/4) (杉原・1974)



第6図 天神前遺跡出土土器(3)・(1/4) (杉原・1974)



第7図 天神前遺跡出土土器(4)・(1/4) (杉原・1974)

cmを測る。胴部は球状を呈し、最大径が胴上部にある。文様帯は頸部、肩部、胴部とに分かれている。頸部は、縄文施文部と擦痕部とが、沈線で区画されている。肩部は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施文し、その上面に半月状の沈線を施し、その文様帯間に矢羽根状の沈線文様帯を配している。胴部は擦痕が認められる。底部は網代底である。

6は、胴部が球状を呈する壺形土器。現器高39.4cm、頸径10.8cm、胴径29.8cm、底径6cmを測る。文様帯は頸部と肩部で、胴部には擦痕を認める。肩部への施文は、沈線による菱形文、重三角文を施し、内面はヘラ状工具による刺突を加えている。

7は、頸部だけの遺存である。器形は口縁部に移行するに従い、すぼまる。口縁部と肩部への移行部には、横位の沈線を周回させ区画している。頸部には擦痕を認める。

8は、胴部以下を遺存する壺形土器。胴径24cm、底径7cmを測る。施文は胴部に認められるが、全形を窺うことはできない。地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、その上面にきわめて太い沈線による意匠文を認める。胴下半部には擦痕を認める。

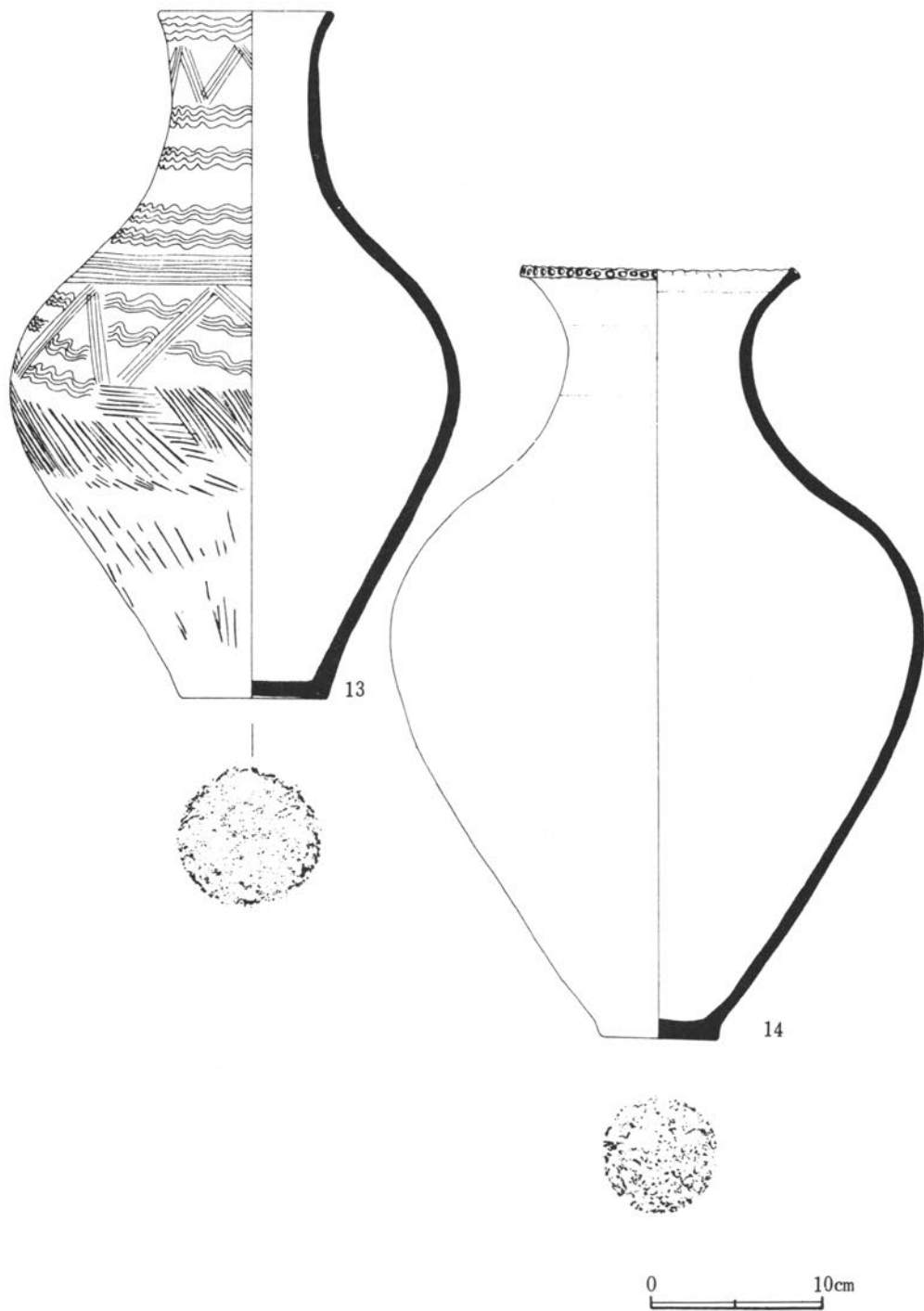
9は、胴部が球状を呈する壺形土器。胴径29.2cm、底径6.5cmを測る。肩部には、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、その上面に三重円形沈線文を配す。胴部には、横位に数条の沈線を施し、下半部には擦痕を認める。底部は網代底である。

10は、口縁と底部を欠損する壺形土器。胴径30cmを測る。器形は球状を示す。肩部文様帯と胴部文様帯を沈線で分けており、各々重三角沈線文を配し、その区画内を刺突文で充填している。また、重三角沈線文の各項部には、突起帯を付している。胴下半部には斜行細縄文を施し、下端を沈線で区画する。

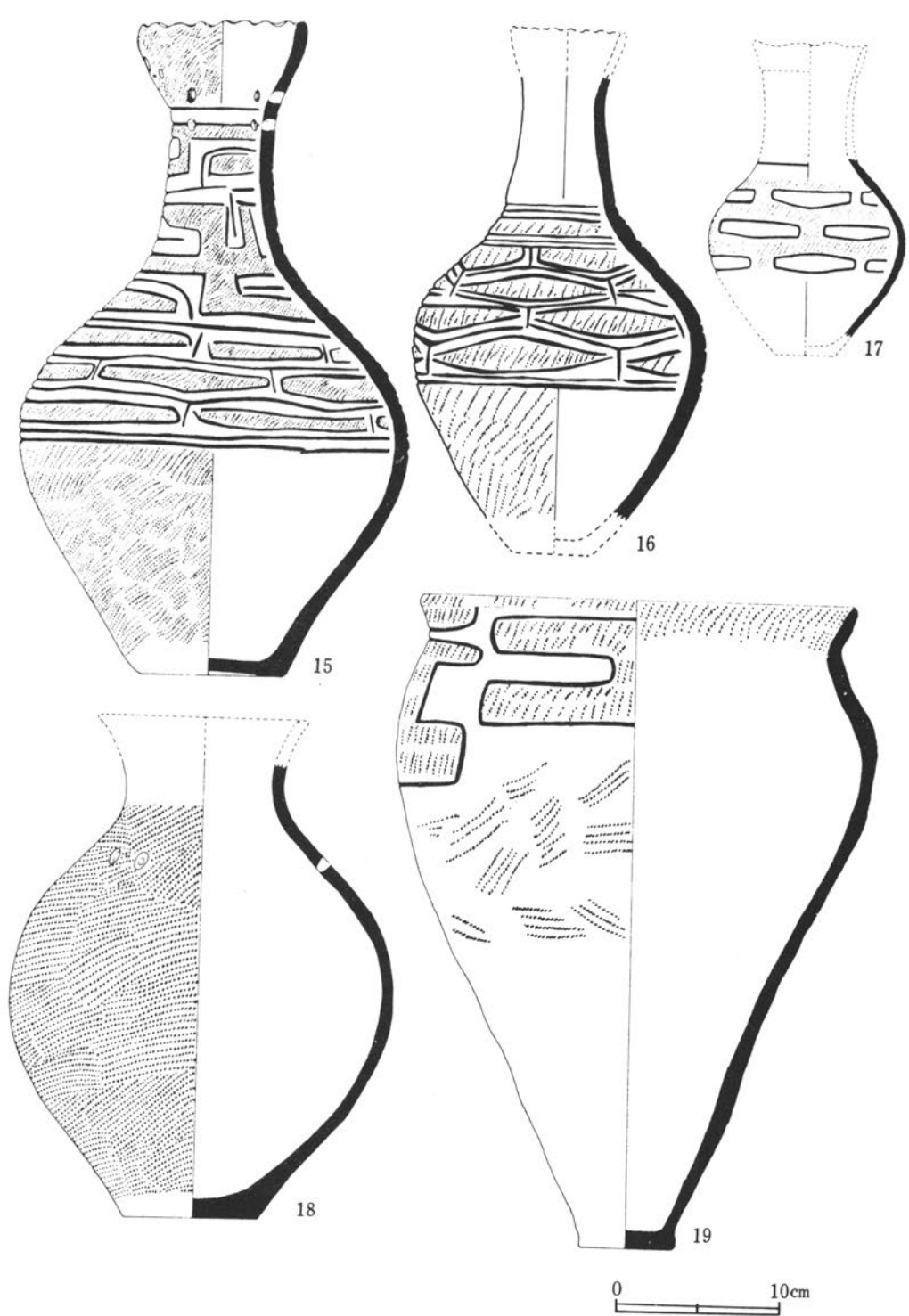
11は、ほぼ完形に近い甕形土器。器高44cm、口径30cm、胴径28.4cm、底径9.6cmを測る。器形は、広口で頸部と胴部で「く」の字形に屈曲し、直線的に底部に移行する。口唇上は平坦で、断面四角形である。文様構成は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を、口縁部より胴部上半まで施文し、胴下半部には擦痕を認める。縄文を地文とする器面は、各文様帯を沈線で区画し、その一部を磨消している。意匠文として、波状沈線文を施している。

12は、口縁部のみを遺存する甕形土器。口径26.4cm、胴径24.4cmを測る。口縁部は若干外反し、頸部から胴部にかけてほぼ直立している。器面には一様に施文原体L・Rを用いた縄文を施文し、横位の沈線で文様帯を区画している。頸部文様帯には、鋸歯状沈線文を施文する。

13は、完形の壺形土器。器高40cm、口径10cm、胴径26.3cm、底径8.4cmを測る。器形は口縁がわずかに外反し、頸部から裾を広げる様に、肩部へ移行する。最大径は胴部のやや上位にある。口縁は平縁であり、器面には4本単位の櫛状工具により、波状沈線文及び山形状沈線文を付す。まず、口縁部に1段の波状沈線文、ついで各単位が独立する山形状沈線文、肩部にかけて4段の波状沈線文、肩部と胴部の文様帯区画に2段の平行沈線文、そして胴部には、3段の波状沈線文を施した上に、山形状沈線文を配している。胴下半部には



第8図 天神前遺跡出土土器(5)・(1/4) (杉原・1974)



第9図 天神前遺跡出土土器(6)・(1/4) (杉原・1974)

擦痕を認める。底部は布目痕を残す。

14は、無文の壺形土器。器高44cm、口径15.8cm、胴径31cm、底径6.8cmを測る。器形は、口縁部が大きく外反し、最大径を胴上半部にもつ。口縁部外面には稜を有し、その部分には押捺による列点が配されている。

15は、ほぼ完形の壺形土器で、器高40cm、口径10cm、胴径23.6cm、底径8.5cmを測る。口縁部が波状口縁で若干内湾ぎみに開き、頸部との間に2個一対の穿孔を有する。頸部は長く、胴部にかけてゆるやかに移行する。胴部は球状を呈し、底部は比較的大きい。地文は、報告書によると、4段左捻りの施文原体によるとされている。この縄文を器面一様に施し、その上に、変形工字文を数段重ね（胴部は3段）その部分の区画内を磨消す。

16は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。現器高27cm、頸径5cm、胴径18cmを測る。器形は、15を若干小形化したものに近い。文様構成は縄文地文上に、変形工字文を4段重ね、その部分の区画内を磨消している。また、残った縄文地文内は、赤彩されている。

17は、胴径12cmを測る小形壺形土器である。施文は、肩部下半から胴部にかけてあり、簡素化された工字文を認め、沈線による区画内は磨消されている。

18は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高28cm、頸径9.5cm、胴径23.2cm、底径8.1cmを測る。胴部は球状を呈し、安定した底部をもつ。器面には一様に縄文が施文される。

19は、ほぼ完形の甕形土器。現器高39.5cm、口径26cm、胴径29.2cm、底径5.8cmを測る。口縁部は一度屈曲してから外反し、胴部は逆円錐状に底部に至る。底部は器高に比べかなり小さい。地文は縄文で、壺形土器と同じような施文原体を用いている。施文は、口唇上と口縁内面、また胴部に施され、沈線による工字文の外側を磨消されている。

以上紹介した土器のうち、第1号墓塚からは、1と13が、第2号墓塚から、2～4、11、15～18が、第3号墓塚から、5、12、14、第4号墓塚から、19、第5号墓塚から、6、7、第6号墓塚から、8、第7号墓塚から、9、10が出土している。

### 新田山遺跡（第10図）

千葉市坂月町字山王小字新田山に在る。

東京湾に流下する都川の右岸台地上に立地する。標高は約20mで、南方の都川沖積地の水田面との比高は10m前後である。立地状態は、都川によって開析された支谷を、直接望む台地上で、急峻な斜面を有する。発見当時に、遺物の出土状態の特異性が指摘されていたが、これはのちに、いわゆる再葬墓ととらえられた。

掲図する1、2は、昭和18年の杉原莊介の報告に紹介されているが、ここに再測した。

1は、口縁部を欠損する大形壺形土器。頸径9.2cm、胴径31.2cm、底径7.1cm、器厚0.7cmを測る。文様構成は、太い沈線による施文と単節縄文による。沈線による施文は、頸部と胴上部に認め、頸部では横位に、その上面は波状に、また、胴上部には横位と重三角文





第10図 新田山遺跡(1、2)・惣社(3)出土土器(1/4)

状に施す。縄文は、施文原体L・Rを用いたものを、肩部の重三角文沈線区画内を充填するように施文する。頸部と胴下半部の無文帯には、横位のナデ調整を認める。施文順は、まず器面一様にナデ調整→沈線周回及び区画→縄文充填である。底面は網代底である。胎土内には砂粒を含み、器面の剝脱は顕著、焼成はやや不良である。

2も口縁部を欠損する壺形土器である。頸径7.1cm、胴径16.9cm、底径6.2cm、器高0.8cmを測る。器形は、頸れ部が2ヶ所あり、胴部は球状を呈する。一部残る口縁部の破片によると、口縁はわずかに外反しながら、高さを有する。施文は胴部と同様に、円形沈線と波状沈線による文様構成と思われる。地文は、施文原体L・Rを用いた縄文を横方向より施文し、ナデ調整を施したのち、頸れ部は、数条(下部の頸れ部は8条)の横位の沈線が周回、胴部には、波状に沈線を施し、その増幅部には円形の沈線を加え、接点には、縦長に列点状の沈線を施す。以上のように施文順は、縄文→ナデ調整→沈線である。底部には木葉痕を認める。色調は淡褐色、胎土には小礫、砂粒を含む。1、2とも須和田式土器の特徴を有する。

#### 星久喜遺跡 (第11・12図)

千葉市星久喜町271-2に在る。

遺跡は、東京湾に流下する都川によって形成され、都川沖積地より分離した仁戸名支谷に突きでた台地の西端に位置しており、標高7mから12mを測る緩斜面上に立地している。

発見された遺構は、弥生期の遺構で住居址2軒、方形周溝墓1基、土壇1基、木材集積遺構1ヶ所があり、古墳時代の集落と重複している。

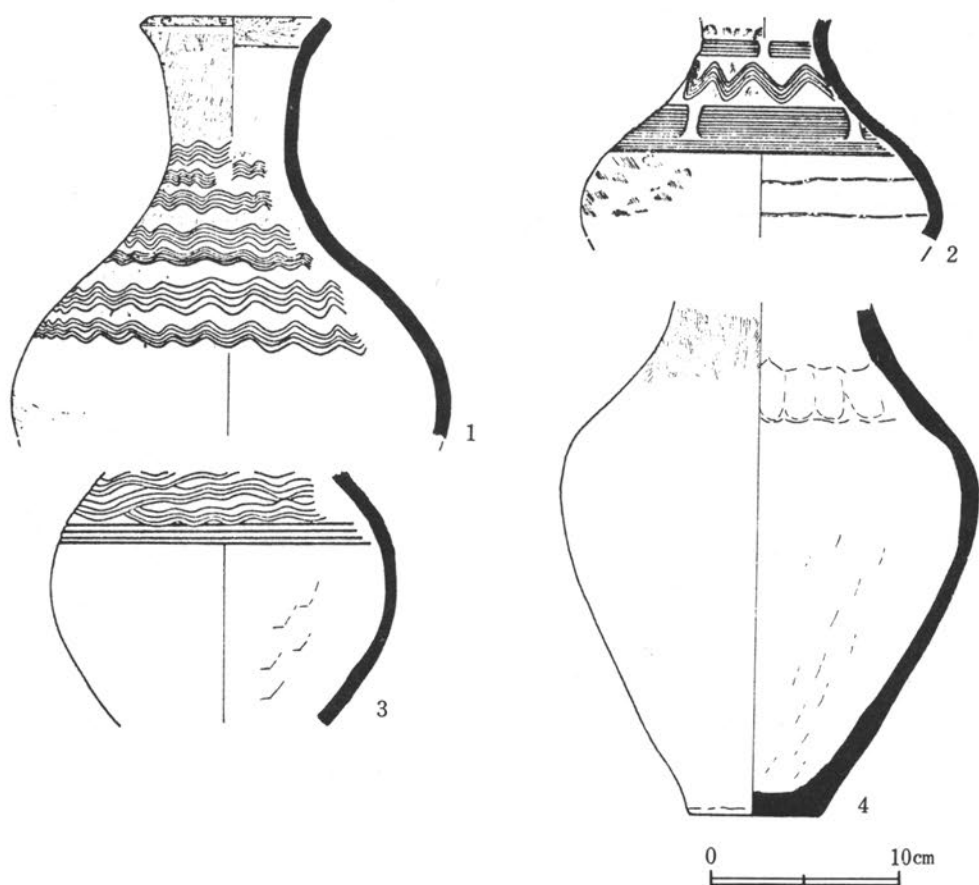
1は、胴下半部を欠損する壺形土器。口径9.2cm、頸径6.6cm、胴径23.2cmを測る。器形は、口縁が内側に折り返され、稜をもつ。胴部の最大径は、若干上位に位置するものと思われる。器面には、一様に刷毛目調整を施しており、また、口縁部内面も横位に行なわれている。頸部から肩部にかけては、5本単位の波状沈線文が施文されている。

2は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径6.6cm、胴径18.1cmを測る。頸部から胴部にかけて、かなり広がる器形である。施文は、内外器面とも刷毛目調整を認め、外面はその上に櫛状工具により、擬流水文、波状沈線文を施している。上位より、擬流水文、波状沈線文、擬流水文、平行沈線文を配す。

3は、胴部のみ遺存する壺形土器。胴径18.3cmを測る。器形は球形を呈す。施文は肩部に認められ、4本単位の櫛状工具により、波状沈線文、また、胴部文様帯との区画に平行沈線文を周回させている。他の器面はヘラ整形を認める。

4は、口縁部を欠損する壺形土器。胴径22.1cm、底径6.8cmを測る。器形は、肩部がかなり張る形態で、最大径を胴上半部に有す。器面は、頸部に刷毛目痕、胴部にはヘラ状工具による整形痕を認める。

5は、深鉢形を示す。口径27cm、胴径26cmを測る。形態は復元されているが、外反する



第11図 星久喜遺跡出土土器(1)・(¼) (柿沼・1973)

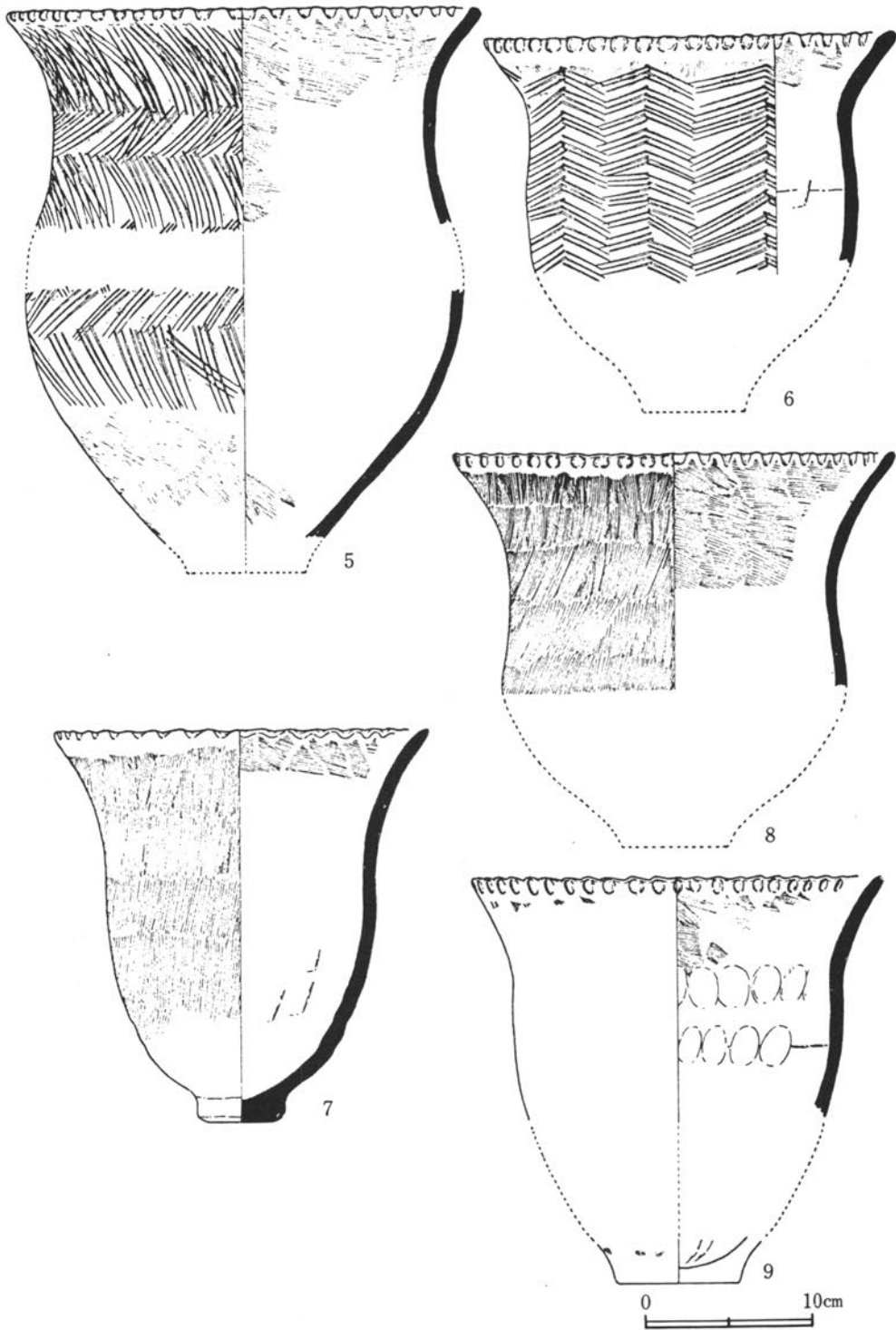
口縁部と、ほぼ球状の胴部をもつ。口唇部は、押捺を施し、波状を呈す。内外器面とも刷毛目調整を施してのち、口縁部から胴部にかけて、3本単位の櫛状施文具により、7段(推定を含めて)の羽状条痕が施文されている。

6は、底部を欠損する深鉢形土器。口径24cm、胴径19.5cmを測る。口縁部は外反し、口唇近くで若干肥厚する。胴部は直立に近い。口唇部は指頭により押捺圧痕を施し、器面一様に刷毛目調整を行なっている。器面には、3本単位の櫛状施文具により羽状条痕文が縦走して施文されている。

7は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高23cm、口径22cm、底径5cmを測る。器形は、ゆるく外反する口縁部とわずかに脹らむ胴部を有する。口唇上は押捺されており、その直下に無文部を残し、他の器面には、刷毛目調整が一様に施されている。

8は、口径26cmを測る深鉢形土器。口唇部は指頭により交互に押捺されている。器面には刷毛目調整を施している。

9は、口径24cmを測る深鉢形土器。口唇上は指頭により交互に押捺されているので、若



第12図 星久喜遺跡出土土器(2)・(1/4) (柿沼・1973)

干波状を呈する。器面には、刷毛目調整の痕跡を部分的に認める。内器面にも横位の刷毛目調整を認め、また、その下面には指頭による圧痕が確認される。

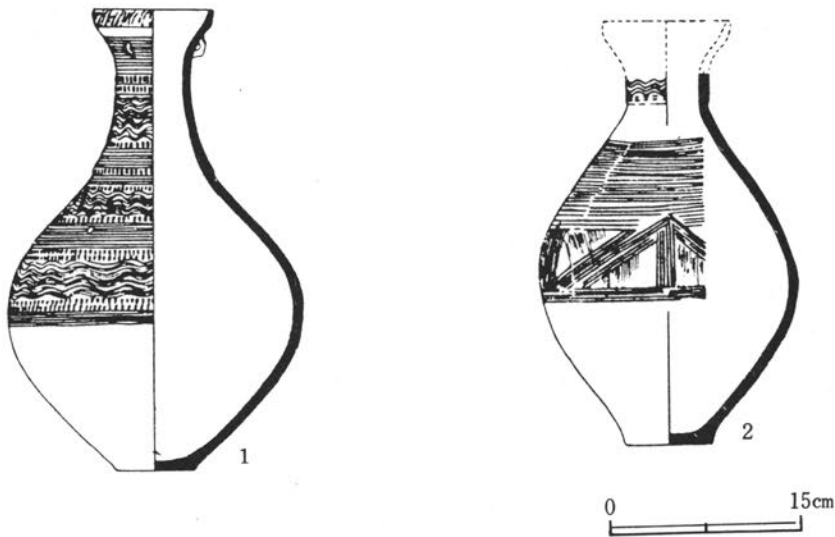
### 中野台遺跡（第13図）

千葉市千葉寺町字中野台に在る。

この地域は、海岸線にほぼ平行して、旧汀線の海蝕面が直線状に延びている。遺跡はこの地点より、約350 m奥まった所に位置する。標高22 mを測り、樹枝状に開析された小支谷が湾入しており、西方下の水田面との比高は12 mである。台地は、東方より突き出て舌状を呈し、その基部で頸れているため、遺跡は東西150 m、南北230 mの範囲である。昭和36年発掘され、その際、壺形土器2個体が出土した。遺構らしきものは確認されなかったが、その出土状態より、弥生時代の再葬墓と思われる。

1は、長頸の壺形土器。器高38.6cm、口径10cm、頸径6.3 cm、胴径24.7cm、底径6.5 cmを測る。器形は、口縁部がやや内湾しながら広がり、外面に小さな耳状突起が付されている。頸部から肩部にかけて裾が広がる様に移行している。胴部は球状を呈し、最大径が胴中央部に位置する。施文は、平行沈線文とヘラ状工具による刺突文、波状沈線文を交互に配している。

2は、長胴の形態をもつ壺形土器。現器高28.8cm、頸径6.5cm、胴径20cm、底径6.8cmを測る。頸部はほぼ垂直にたちあがり、肩部から胴部に移行する。頸部は若干肥厚し、波状沈線文を施している。肩部には平行沈線文を周回させ、胴部には山形状沈線を施文している。



第13図 中野台遺跡出土土器（ $\frac{1}{6}$ ）（杉原他・1968）

## 大森第2遺跡（第14・15図）

千葉市大森町222他に在る。

海岸部から湾入する支谷は、大巖寺町と赤井町に挟まれた地点で三方向に開析する。一つは北東方向の花輪町に、また、一つは北方の仁戸名町方向に、もう一つは北西方向の大森町に向かって支谷が発達している。遺跡はこの北西方向に向かう支谷の北側の台地に位置する。標高は約20mを測る。

調査では、90軒を数える住居址群と、用途不明の土壙、貝ブロックなどが確認された。弥生時代の遺構は、住居址11軒を数える。

1は、壺形土器で、器高31.6cm、口径6.4cm、胴径22.1cm、底径7cmを測る。口縁部はわずかに外反し、頸部は短く、裾が広がるように、長い肩部を有する。胴部中位で、「く」の字形に近い状態で張る。口唇上に縄文が付され、頸部に一条の沈線を周回させ、その下部に2条の波状沈線文を施す。肩部から胴部にかけて、沈線による擬流水文を施文し、横方向に5単位、縦方向に9単位を配す。

2は、壺形土器で、器高32cm、口径9cm、胴径21.8cm、底径7cmを測る。口縁部は若干外反し、胴部は球状を呈す。施文は器面一様に短い単位の刷毛目調整を施しており、口縁部内面には、縄文帯が施文されている。

3は、胴部のみ遺存する壺形土器。胴径24.9cmを測る。文様は、波状沈線文と羽状縄文を認める。羽状縄文帯は沈線にて区画されている。

4は、胴中央部がやや張る形態の壺形土器。胴径29.2cm、底径7.6cmを測る。器面には、刷毛目調整を施している。

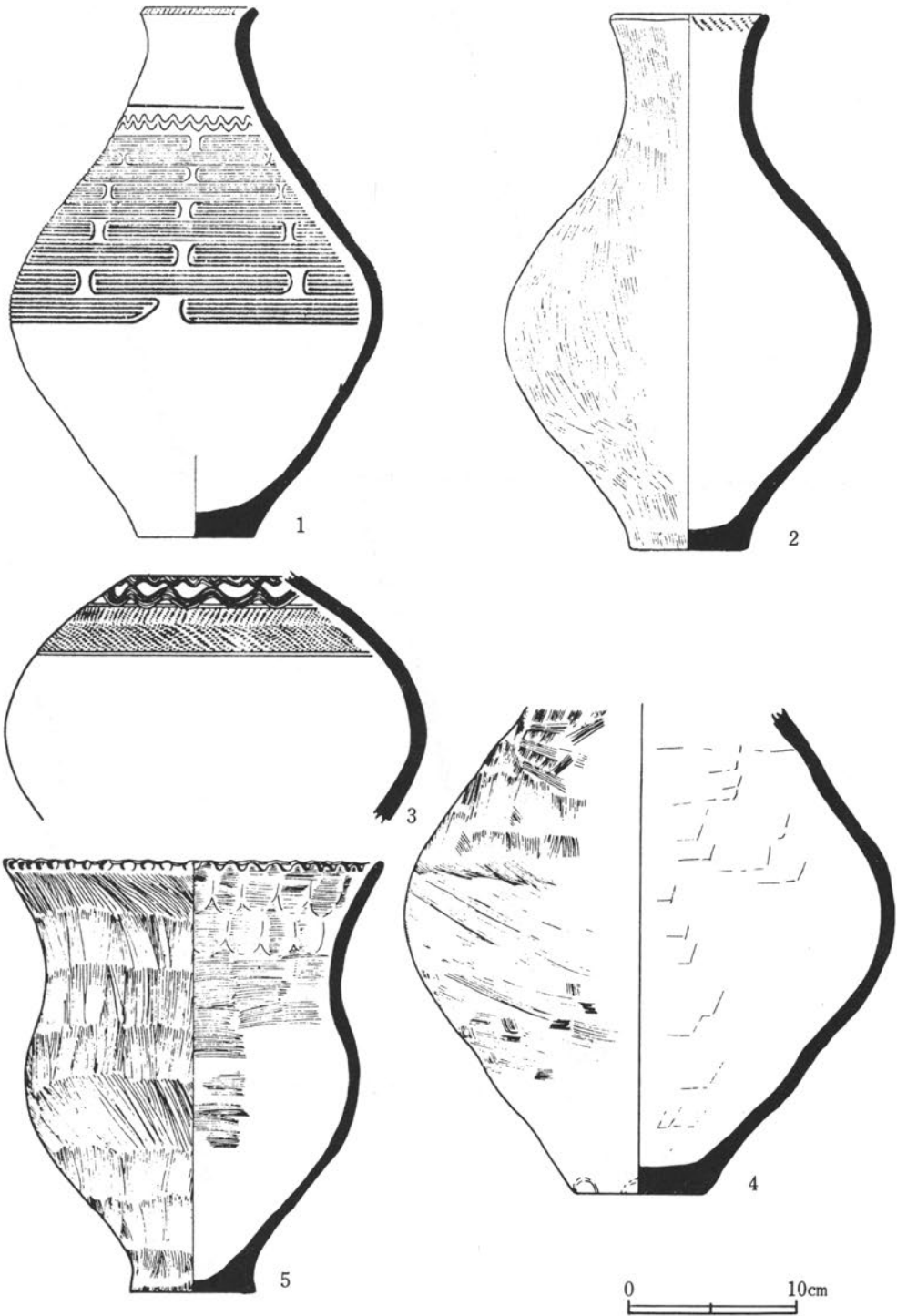
5は、器高25.8cm、口径22cm、胴径20cm、底径7.2cmを測る深鉢形土器。口縁部は外反し、頸部で頸れてから、胴部は球状を示す。底部の端部は、垂直に立ち上る状態である。口唇部には、交互に指頭による押捺圧痕文を施し、器面は刷毛目調整が数段にわたり施文されている。なお、内器面は横位に施す。

6は、器高28cm、口径28.2cm、底径6.4cmを測る深鉢形土器。口縁部は、折り返され、若干肥厚する。器形は、逆円錐状に近く、胴下半部で丸味を持ちながら底部に至る。器面はわずかに刷毛目痕を認めるが、ほとんど調整されている。

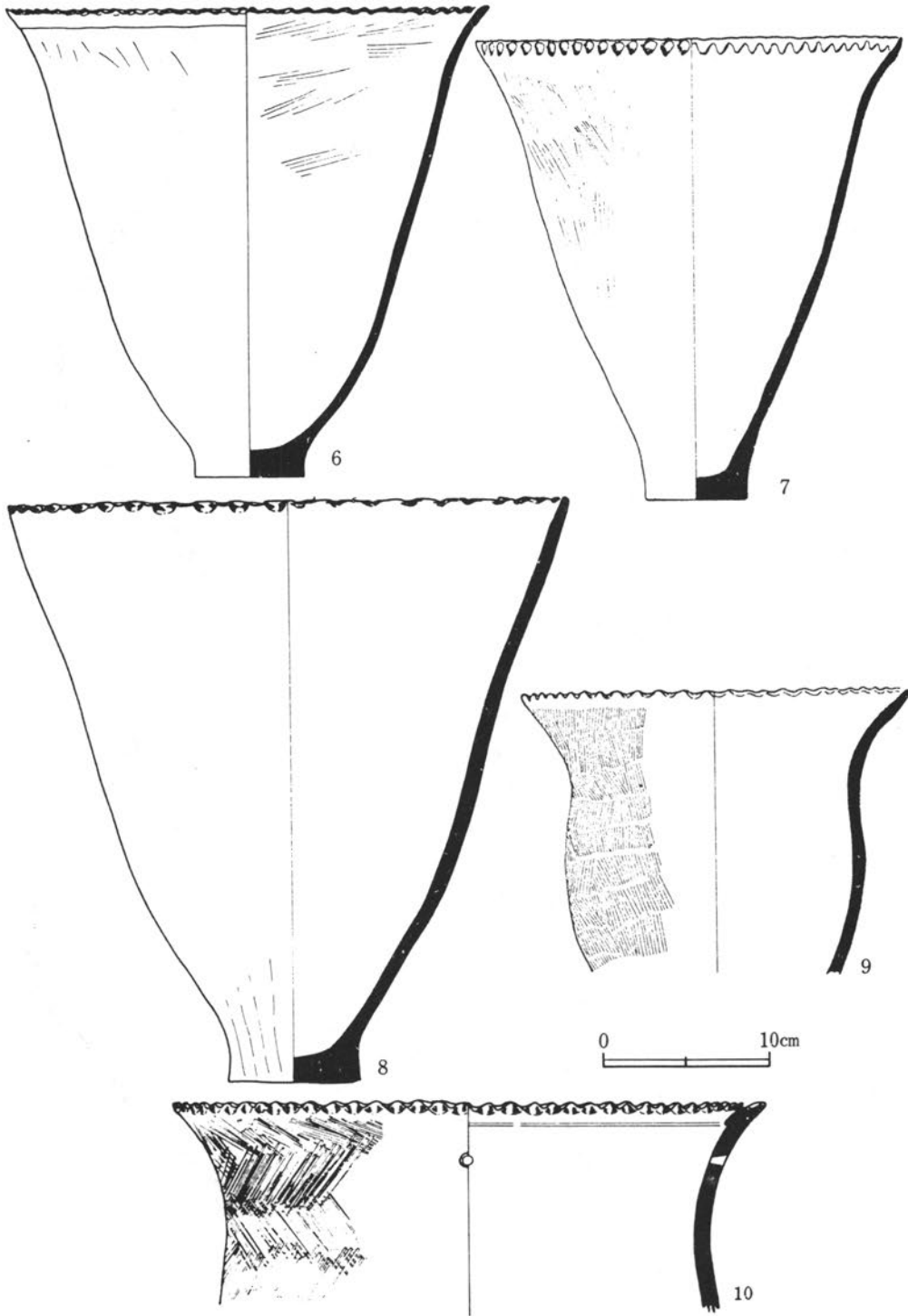
7は、器高27.4cm、口径25.2cm、底径6cmを測る。口縁部は若干外反し、口唇部は尖る。胴部は脹らみをもたずに底部に移行する。口縁部は指頭により押捺されている。器面はヘラ状工具により調整されている。

8は、器高34.7cm、口径33cm、底径7.8cmを測る深鉢形土器。胴下半部に若干脹らみをもつほか、ほぼ直線的に外反する。口縁部に押捺圧痕を認めるほかは、無文である。

9は、口径22.6cmを測る深鉢形土器。頸部で一度頸れ、口縁部はかなり外反する器形である。口縁部上端に指頭により押捺圧痕を施している。器面には刷毛目痕を認める。



第14図 大森第2遺跡出土土器(1)・(1/4) (栗本他・1973)



第15図 大森第2遺跡出土土器(2)・(1/4) (栗本他・1973)



10は、口径35cmを測る深鉢形土器。口縁部は内側に折り返され、肥厚して稜をもつ。口縁部上端は圧痕が施され、波状を示す。器面には横走羽状条痕文が施されている。

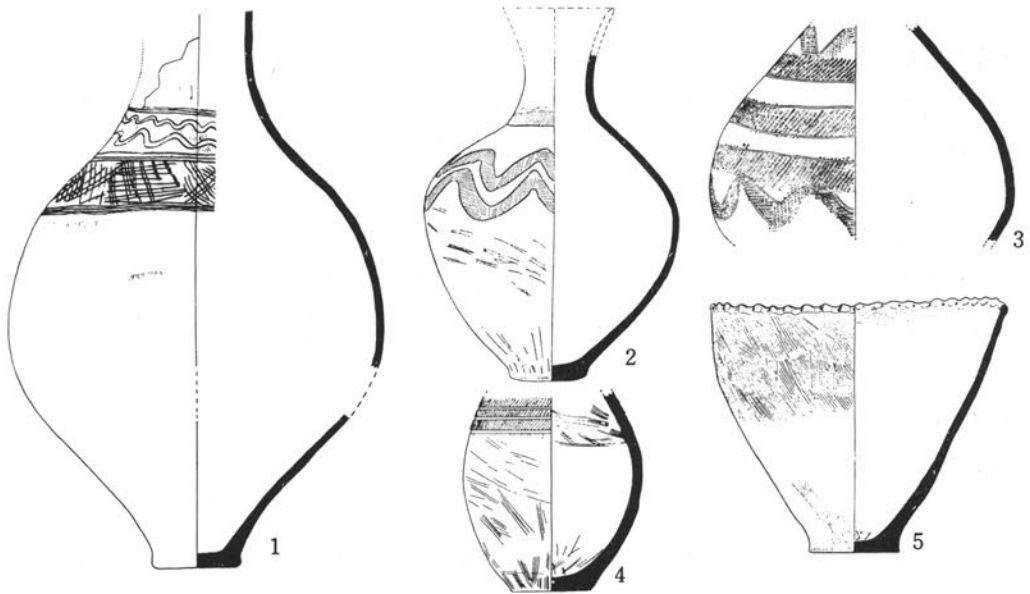
### 平蔵台遺跡 (第16図1)

遺跡は、東金市松之郷字金谷に在る。

付近の地形は、旧汀線の高海面が直線状に北上しており、いわゆる下総台地と九十九里沖積地を明瞭に分割している。その比高差は40~50mあり、急峻な崖面を形成している。遺跡はその高海面に接した台地上に位置する。

調査により、弥生期の住居址4軒、古墳期の住居址2軒を検出している。

1は、大形の壺形土器。肩部が張り、最大径を胴下半部に有する。施文は肩部に認められ、櫛状工具により、平行沈線文、波状沈線文、斜行沈線文が施文されている。



第16図 平蔵台遺跡(1)・若宮(2~5)出土土器(不同) (丸子・1971, 市毛他・1967)

### 若宮遺跡 (第16図)

市原市山木若宮に在る。

遺跡は、東京湾に面した台地上に位置し、標高25m、西方の沖積地との比高は18m前後を測る。占地する台地は、幅150m、長さ約200mの規模で舌状に突き出ており、その平坦面上を遺跡範囲とする。調査は部分的なものなので全体をとらえられないが、弥生時代宮ノ台期住居址2軒、久ヶ原期住居址1軒、古墳~歴史時代の住居址16軒を確認した。

2は、S-7号住居址出土の壺形土器。最大径を胴上部にもち、肩部が若干張る形状で

ある。部分的に刷毛目痕を認めるところから、器面一様に刷毛目調整が施されていたものと思われる。頸部下半に縄文帯を施し、沈線で区画する。胴上半部には、2段にわたり羽状に縄文帯を設け、沈線で区画している。

3は、E-18号住居址出土の壺形土器。胴下半部に最大径を有する下脹れの器形をもつ。施文原体L・Rを用いた縄文帯を肩部に施文する。文様構成は、上から山形縄文帯、3段の斜行縄文帯、そして波状縄文帯とし、各々沈線にて区画している。

4は、E-16号住居址出土の壺形土器。小形であり、胴部は緩やかな脹らみを持つ。器面は刷毛目調整を認め、肩部には、施文原体L・Rを用いた縄文が施文され、沈線で区画されている。

5は、E-16号住居址出土の浅鉢形土器。いわゆる煮沸形態の深鉢形土器を小形化した器形である。器面には刷毛目調整を施し、口縁部上端は、指頭による押捺圧痕を認める。

#### 市原市惣社出土遺物（第10図3）

器高35.5cm、口径11.6cm、頸径7.3cm、胴径22.8cm、底径8.3cm、器厚0.9cmを測る。器形は、球状の胴部と、外反する口縁部に注目される。外面は、頸部下より胴部にかけて、施文原体L・Rを用いた縄文を横位に押捺し、沈線により区画している。なお、区画による縄文帯は、横位に5単位である。施文順をとらえると、整形→全面刷毛目調整→肩部及び口唇部縄文施文→縄文帯沈線区画である。口縁部内面には刷毛目調整ののち、ヘラ磨きを施している。色調は明褐色で、胎土内には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

#### 菊間遺跡（第17図～第20図）

遺跡は、市原市菊間字北野に在る。

占地する台地は、北方を村田川、南方を養老川によって分断された、南北幅6.5kmの市原台地である。遺跡はその北方端に位置する。標高は20m 北方の村田川沖積地面との比高は約15mである。

検出された遺構は、弥生期住居址49軒、古墳期住居址6軒、弥生期方形周溝墓3基、円形周溝2基、溝状遺構7基（このうち1基はV字溝）を数える。

出土土器のうち、主なものを掲げた。

1は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径5.6cm、胴径22.8cm、器厚0.9cmを測る。器形は、細い頸部から裾を広げるように胴部に移行する。最大径は胴部のほぼ中央である。地文として、肩部上位と胴部に施文原体Lの無節の縄文を横方向に施文している。頸部には平行沈線とヘラ状工具による刺突文を配する。肩部及び胴部へは、3本を1単位とする沈線文を施す。なお、上段は小波状を、下段は直線を呈す。さらに、各文様帯を区画するように、横位の刺突文を加えている。胴下半部を除き、全面赤彩されている。

2は、口縁部を欠く壺形土器。胴径19.3cm、底径7cmを測る。器形は、最大径を胴上部にもち、肩部が張る。器面には、刷毛目調整を認め、肩部に2本単位、2段の波状沈線を周回させている。

3は、口縁部を欠く壺形土器。胴径17cm、底径4.4cmを測る。器形は下脹れである。地文としては、刷毛目調整を施しており、その上面を一様にヘラナデしている。肩部へ羽状縄文と、「ハ」の字の縄文帯を2段配し、沈線で区画している。

4は、口縁部と底部を欠く壺形土器。最大径を胴下半部に有し、18.7cmを測る。器形は、頸部が裾を広げるように胴部へと移行し、下脹れとなる。器面には地文として、刷毛目調整を施し、肩部に2段にわたり縄文帯を施文する。その上面に3段にわたり波状沈線を配している。

5は、胴部が球状を呈する壺形土器。頸径7cm、胴径24.1cmを測る。最大径を胴中央部にもち、安定した器形である。施文は肩部に認められ、施文原体R・Lを用いた縄文を、上半部に1条、下半部に2条施文している。また、「ハ」の字形の沈線間を充填するように、右上と真下方向に施文している。

6は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径6cm、胴径23.8cmを測る。器形は、細頸で、最大径を胴下半にもつ下脹れの土器である。施文は、刷毛目調整を施した上にヘラ磨きが認められる。肩部に羽状縄文と「ハ」の字縄文帯を施文、各文様帯を沈線で区画してから、頸部を縦位にヘラ磨きする。また、文様帯以外の無文部は赤彩されている。

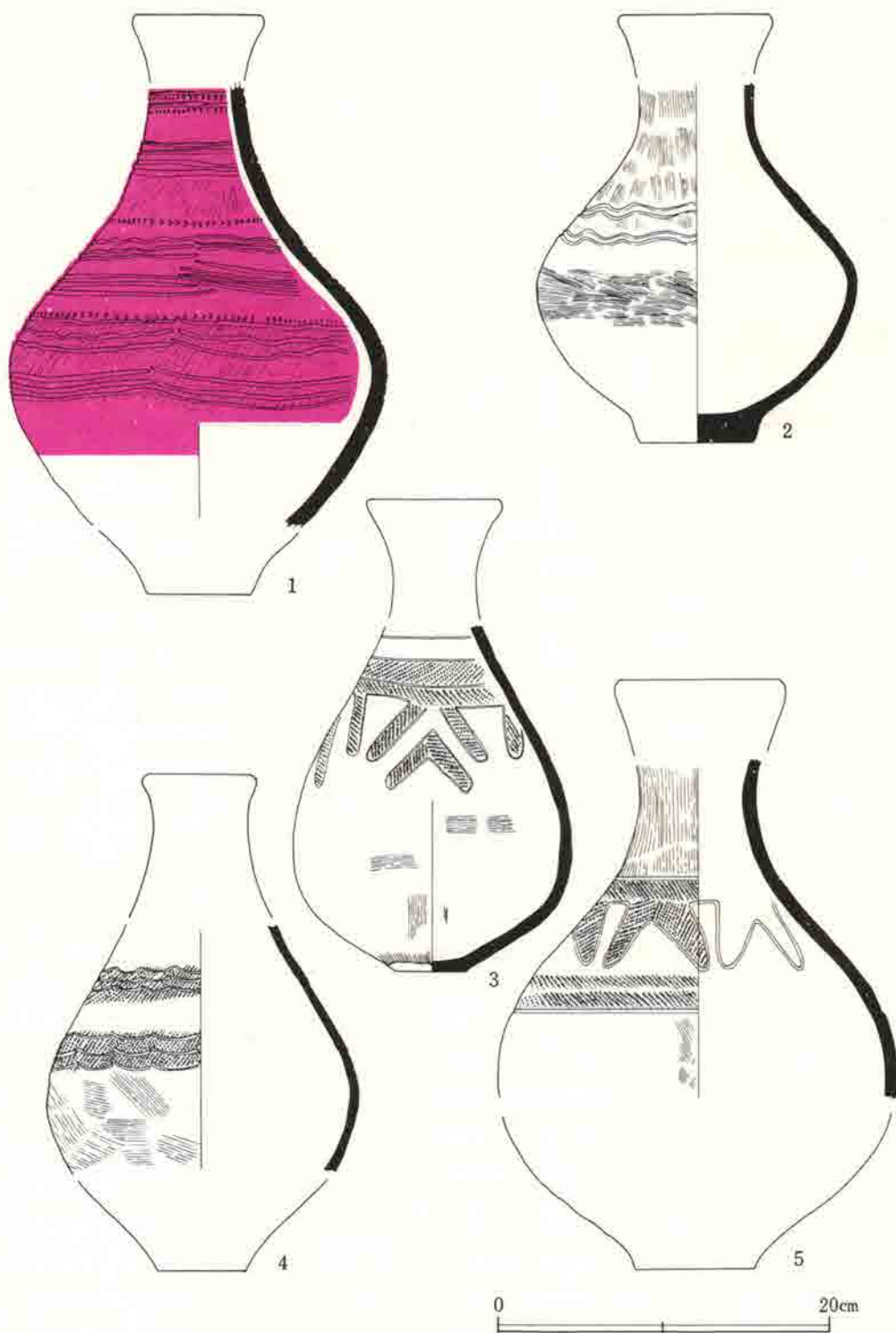
7は、口縁部を欠損する壺形土器。胴径20.3cmを測る。最大径を胴部中央か、やや上部にもつ器形である。器面は一様に刷毛目調整を施してのち、ヘラ磨きを行った模様。肩部に3段にわたり、施文原体L・Rを用いた縄文を横方向より施文されている。

8は、わずかに口縁部を欠損する壺形土器。頸径5.7cm、胴径19.9cm、底径5.1cmを測る。器形は、最大径を胴中央部にもち、全体的に菱形を示す。器面全体に刷毛目調整を施してのち、頸部に、施文原体L・Rを用いた縄文帯を周回し、頸部及び胴下半部にヘラナデを行なっている。

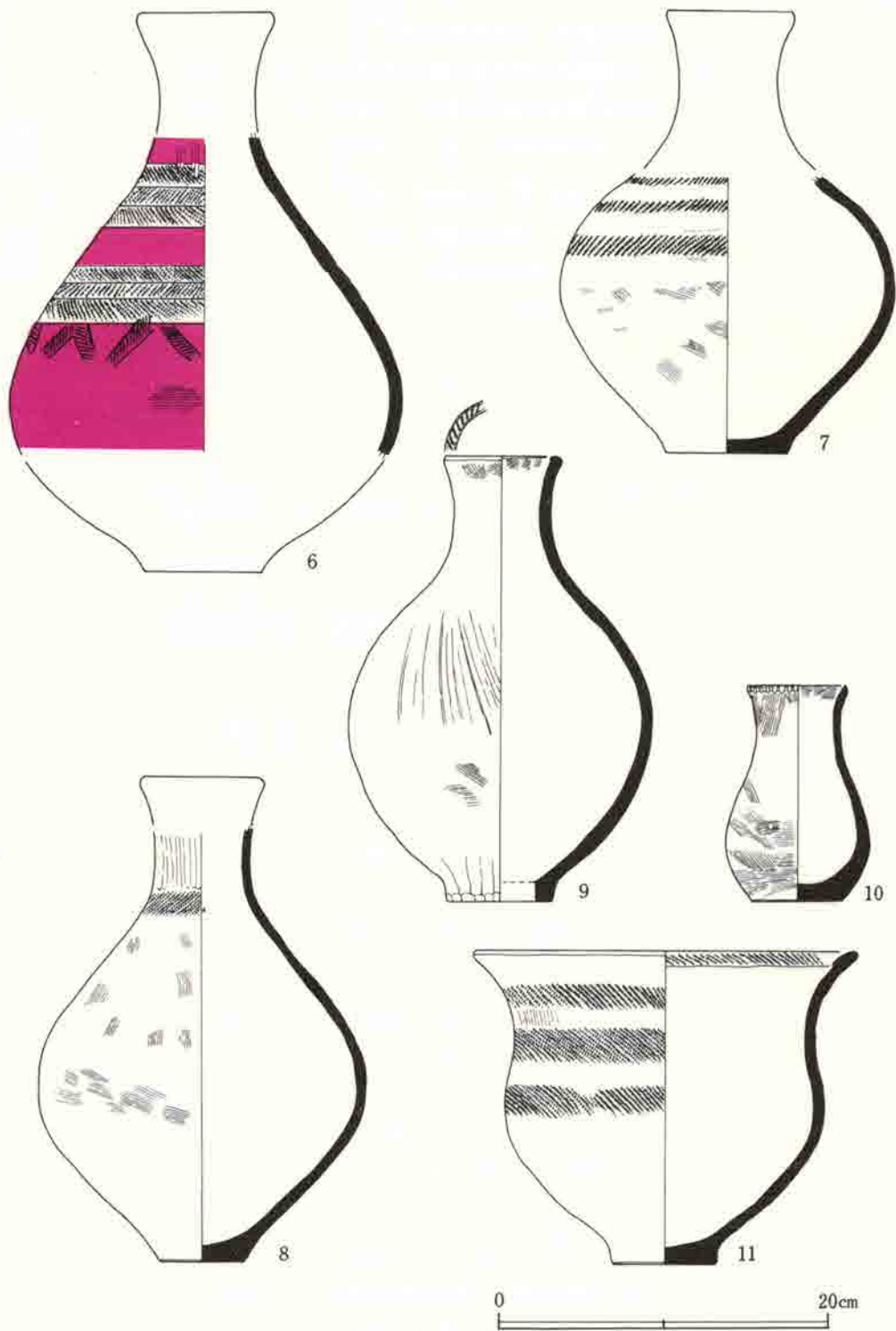
9は、ほぼ完形を示す壺形土器。器高27cm、口径7cm、頸径6cm、胴径18.3cm、底径6.4cmを測る。胴部は球形で、頸部は直立する。口縁部はわずかに外反し口唇上面が平坦にされて内側に稜をもつ。器面には刷毛目調整ののちナデを施し、胴上半部にはヘラ磨きを認める。口唇上には、施文原体R・Lを用いた縄文を施文している。

10は、小形壺形土器。器高13cm、口径6.2cm、胴径8.8cm、底径5.6cmを測る。全面に刷毛目調整を施し、口唇部に刻み目を付している。

11は、器高19.2cm、口径23cm、底径6.4cmを測る鉢形土器。口縁部は折り返し口縁で内側に稜をもつ。かなり外反する器形であるが、頸部から胴部への移行はスムーズである。頸部及び胴部、口縁内面には、施文原体R・Lを用いた縄文帯を施文している。



第17図 菊間遺跡出土の壺形土器(1)・(1/4)



第18図 菊間遺跡出土の壺形土器(2)・(1/4)

12は、底部を欠損する深鉢形土器。推定器高30cm、口径27.5cm、胴径20.5cmを測る。器形は、口縁部が直線状に外反し、頸部は直立して胴部へ移行する。口唇外面には、櫛状工具による刻目文を施している。器面には、一様に刷毛目調整を行ない、その上面に櫛状工具により羽状条痕を施文している。口唇内面には、平行鎖線文を認める。

13は、約 $\frac{1}{3}$ を欠損する深鉢形土器。口径20.6cmを測る。口縁部は外反し、胴部は直立に近い。口唇は指頭による押捺圧痕を施す。内外両器面とも刷毛目調整を施し、外器面には、3段にわたり羽状条痕を施文している。

14は、口径19cmを測る深鉢形土器。胴部は弧状に脹らみ、最大径が口径に近い。口唇は指頭により押捺圧痕を施し、波状を呈す。器面は、刷毛目調整を一様に施している。内面には横位に認める。

15は、底部を欠く深鉢形土器。口径18.4cmを測る。胴部は球状に脹らみ、口縁は外反する。器壁には、ヘラを用いたナデ及び磨きを施してのち、3段にわたり羽状条痕を施文する。

16は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高16.8cm、口径19cm、底径5.7cmを測る。器面への施文は、胴部への斜行刷毛目調整、縦位の刷毛目調整、口唇及び胴部への横位の刷毛目調整、口唇への弱い圧痕文の順で施文している。

17は、完形の深鉢形土器。器高18.1cm、口径21.4cmを測る。器壁は、胴部がわずかに脹らむが全体的に外反する。口唇上には、指頭による押捺圧痕を施し、波状を示す。器面には、粗い刷毛目調整を施している。

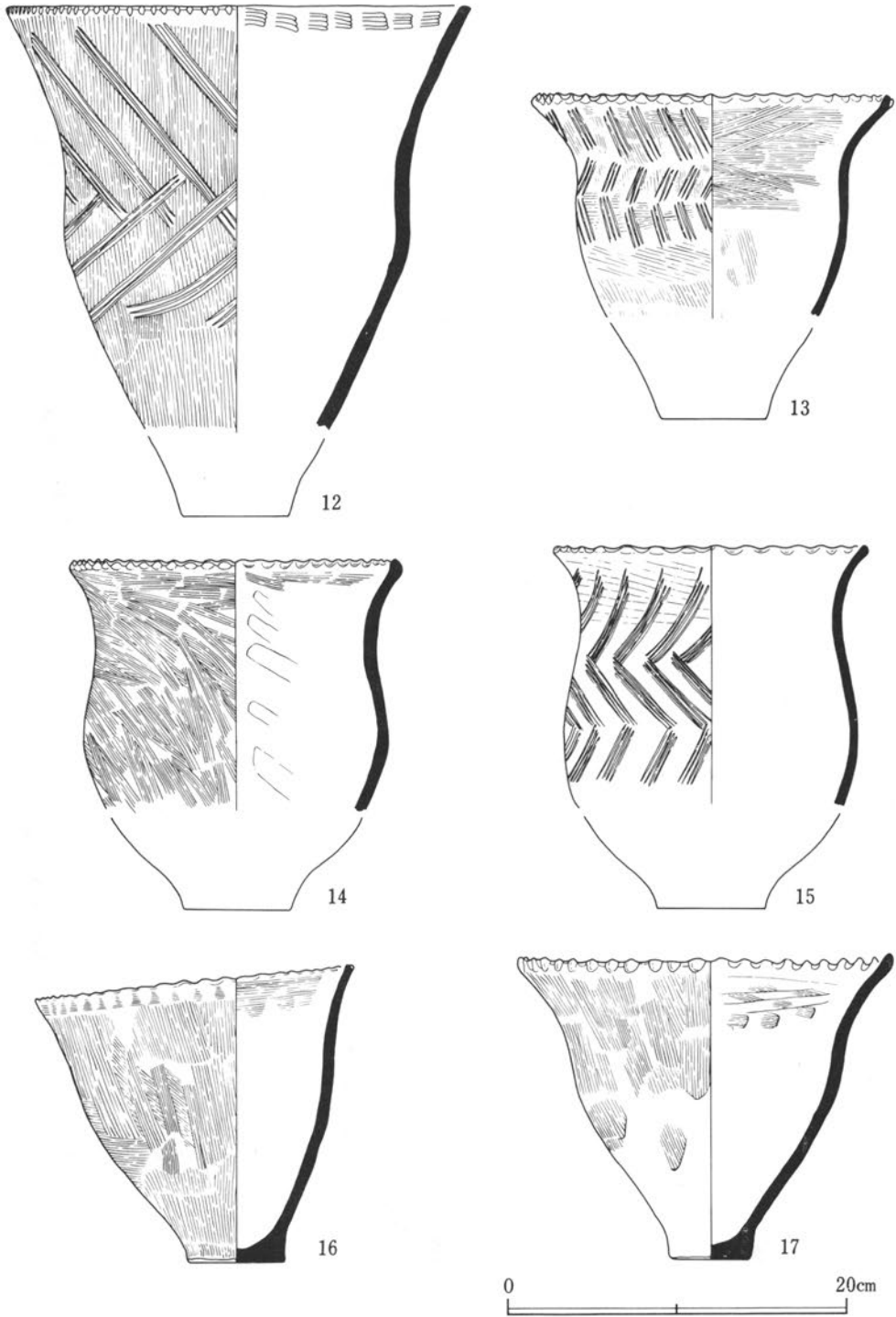
18は、底部を欠損する深鉢形土器。口径33cm、胴径29.2cmを測る。口縁部は短く外反し、頸部から胴部にかけては直立に近い。口唇上には、交互に指頭圧痕文を施し、波状を示している。器面には、6本単位と思われる施文器具を用い、刷毛目調整を行なっている。

19は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高20.7cm、口径18.4cm、胴径16cm、底径6cmを測る。最大径を胴上部に有し、口縁は外反する。口唇外面には櫛状工具による刻み目を付し、器面には、ほぼ縦位に刷毛目調整を施している。また、口縁部内面には横位に認める。底部は、中央が凹み、高台状を示す。

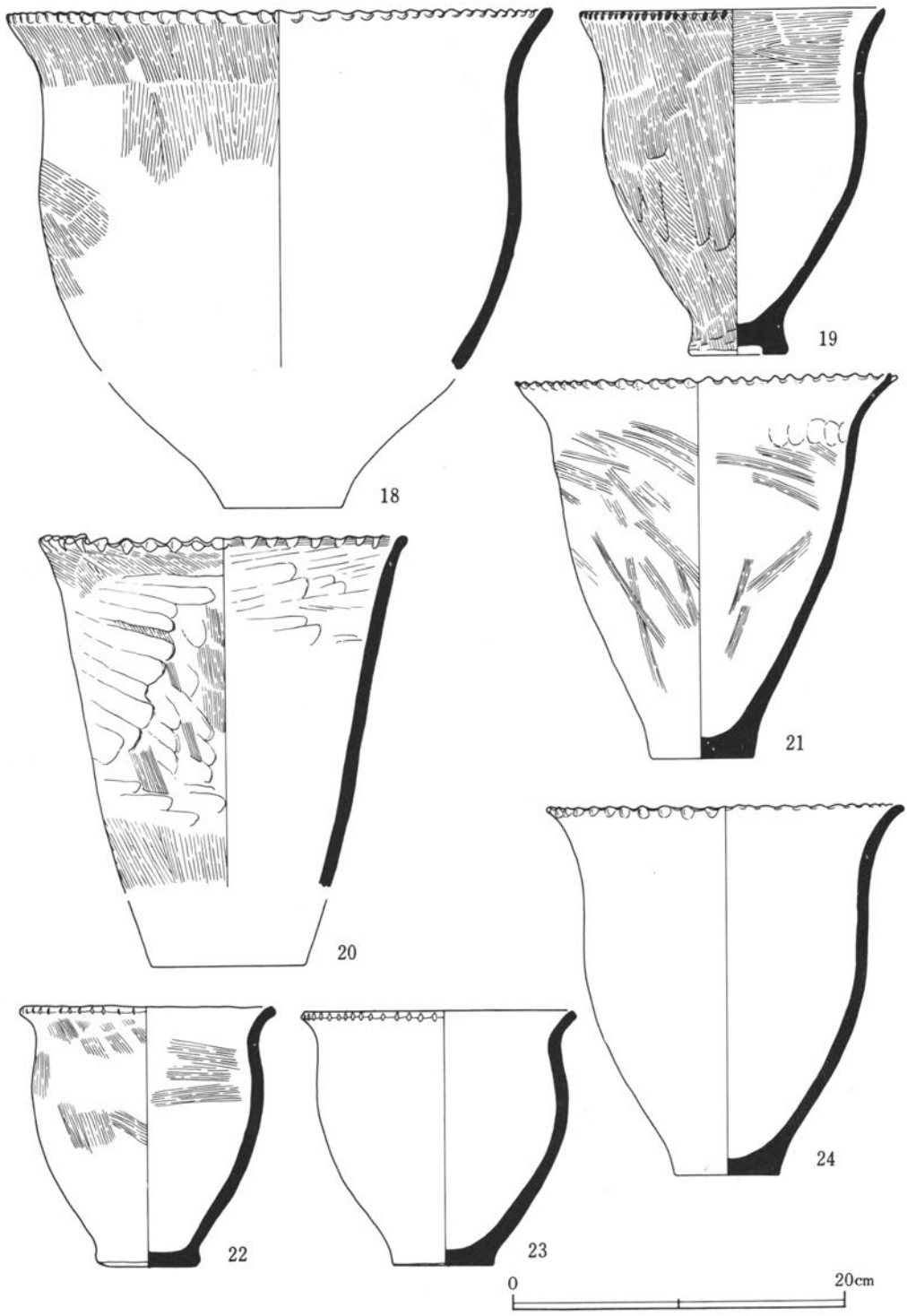
20は、口径21cmを測る深鉢形土器。器形は、口唇がわずかに外反するほかは、直線状に胴下半部に移行する。口唇部はかなり強く指頭による押捺圧痕を施している。器面には、刷毛目調整を施してのち、ヘラで粗いナデ（一部はケズリ状を示す）を行なっている。

21は、完形に近い深鉢形土器。器高22.8cm、口径23cm、底径6.2cmを測る。器壁は薄く、口縁部は「く」の字形に外反し、胴部は直線状に移行する。口唇上は指頭による押捺圧痕を施している。器面は、刷毛目調整を部分的に認める。頸部内面には、指頭による圧痕を確認する。

22は、完形の深鉢形土器。器高15.8cm、口径15.5cm、底径6.3cmを測る。口縁部は短く



第19図 菊間遺跡出土の深鉢形土器(1)・(1/4)



第20図 菊間遺跡出土の深鉢形土器(2)・(1/4)



外反し、頸部から胴部にかけてわずかに脹らみながら移行する。口唇部にはヘラによる刻み目、器面には刷毛目調整を認める。

23は、深鉢形土器。器高15.5cm、口径16cm、底径6cmを測る。頸部で「く」の字形に屈曲し、口唇断面は四角形状である。口縁は平縁で、ヘラによる刻み目を施す。器面は、ヘラによるナデ調整を施している。

24は、上半部約 $\frac{2}{3}$ が欠損する深鉢形土器。器高22.3cm、口径21.4cm（推定）、底径6.3cmを測る。口縁部は外反し、頸部は円筒状を示す。口唇上には、指頭による押捺圧痕文を施し、器面は平滑にヘラナデされている。

### 大厩遺跡

市原市大厩に在る。

遺跡は、村田川とその支流である神崎川の合流地点の西側台地上に位置する。標高は約30mで、村田川沖積地面との比高は20m前後である。立地する台地は、市原台地より延びたもので、神崎川とまたそれに開析された一支谷により囲まれた、南北約430m、東西500mの平坦面上である。

遺構は縄文時代からあるが、弥生時代では、住居址65軒、土壇6基、V字溝2基を確認した。調査範囲は、限られているため、まだ多くの遺構の存在が予測されるが、弥生時代の遺構では、中期後半から後期後半まで比定され、とくに宮ノ台期の遺構が多い。また、後期の遺構群は、宮ノ台期に比定される遺構の集中する地点より、西側の地点に移行する傾向があるという。

出土遺物は多岐にわたるが、住居址より多くの土器が出土している。宮ノ台式土器は壺形土器、広口壺形土器、深鉢形土器が出土している。特に、深鉢形土器の底部に穿孔を施し、甌形土器と用いているものが注意される。また、貯蔵形態の壺形土器と、煮沸形態の深鉢形土器では、個体数において、1対2の比率を示す<sup>27</sup>。

石器は、扁平片刃石斧・鑿形石斧・抉入石斧の出土が多い。

### 宮ノ台遺跡

茂原市綱島に在る。

南関東弥生中期土器の宮ノ台式土器の標式遺跡である。

遺跡は、第三紀凝灰岩質の丘陵が浸蝕を受け、このため形成された独立丘状の台地の西面に位置している。標高は約20mを測り、緩斜面を経て、一ノ宮川の沖積地面に達する。地下水位が高いため、遺物包含層は泥炭層化している。なおこの付近の地形で特徴的なのは丘陵の南面が開析を受けず直線的であるのに対し北面は樹枝状に細かく開析されていることである。

出土遺物は、土器と石器が見受けられ、土器は、宮ノ台式と久ヶ原式土器が、石器では、太形蛤刃石斧・抉入石斧が確認される。

## 船子遺跡 (第21・22図)

本遺跡は、夷隅郡大多喜町大字船子、県立大多喜女子高等学校内に在る。

遺跡は大多喜町の東に位置し、東西を水田に囲まれた、北方に突きでる舌状台地で、その規模は幅220m、長さ850mを測る。なお、標高は約40m、水田面との比高は、約15mを示す。夷隅川は、遺跡の立地する台地を西方から、北また東方にかけて流下する。特に台地北方端は、夷隅川に接し、浸蝕されている模様である。南方は、標高80m前後を測る丘陵が連なっている。

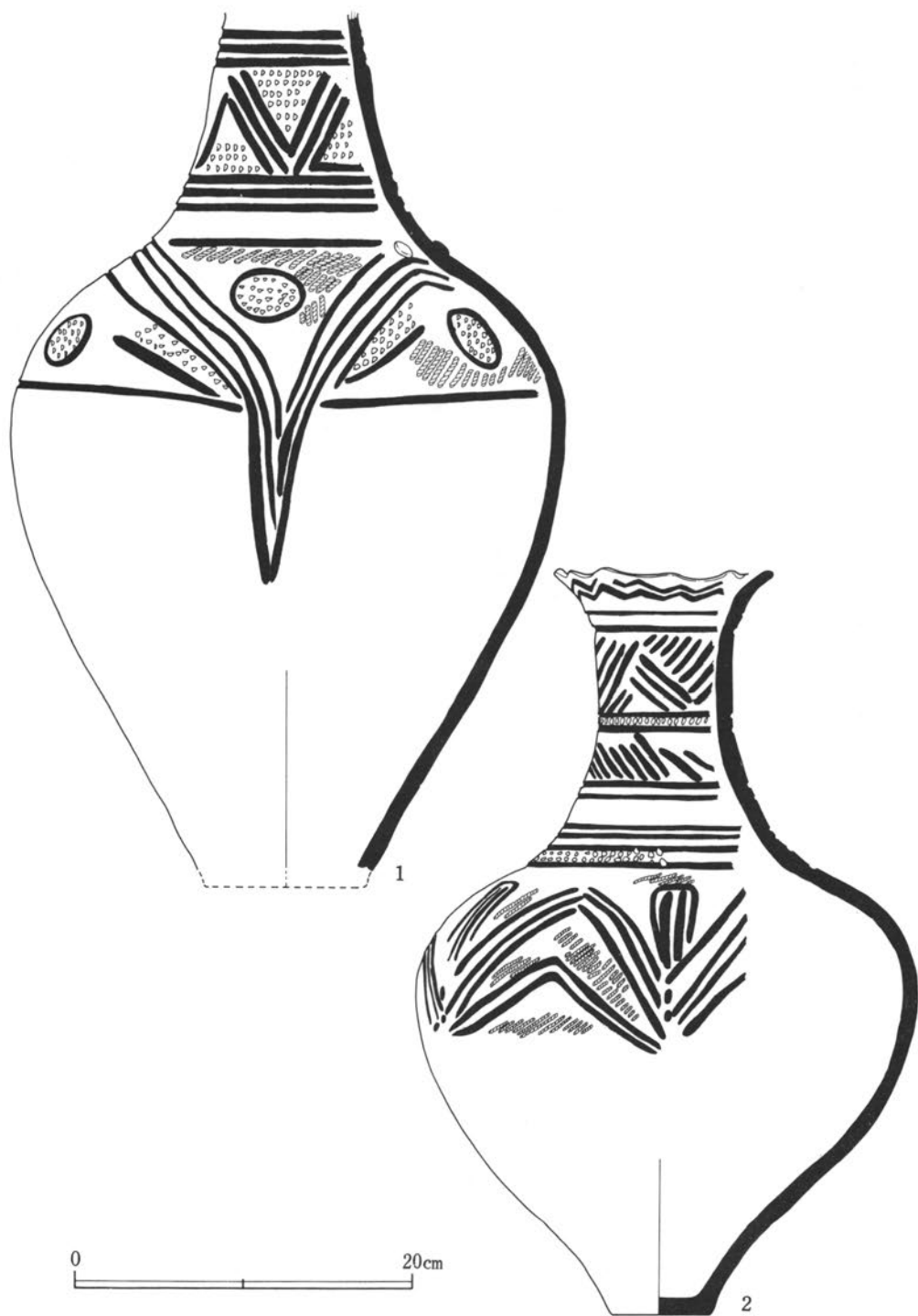
1968年7月、大多喜女子高等学校の清明寮前の土取り作業中に、深さ30cmから、弥生式土器が4個体発見された。その出土状態は、約5mの範囲に石が散在しており、その上面に、若干横臥した状態だったという。また、土器のまわりを石で囲んでいたということである。

1は、口縁部と底部を欠損する大形壺形土器で、現器高51cm、頸径9cm、胴径32.6cm、器厚0.8cmを測る。器形は肩部が脹らみ、最大径を胴上部に有する。頸部はかなり細くなる。文様構成は、縄文と沈線文、刺突文による。文様は肩部より頸部に認め、各文様帯を沈線文により区画している。頸部は上下3本の沈線を周回し、重三角形文を配し、その内側はヘラによる刺突を加えている。肩部の地文は、施文原体R・Lを用いた縄文と思われ、縦方向に施文されている。その上面には、太描きの円形沈線、肩部から胴部に斜めに垂下する4条の沈線を配し、円形沈線の内側及び条線の一部に、ヘラによる刺突による充填文を施している。胴下部は磨耗していて不明瞭であるが、一部擦痕を認める。胎土は長石、砂粒を多量に含み、色調は淡褐色である。焼成は普通である。

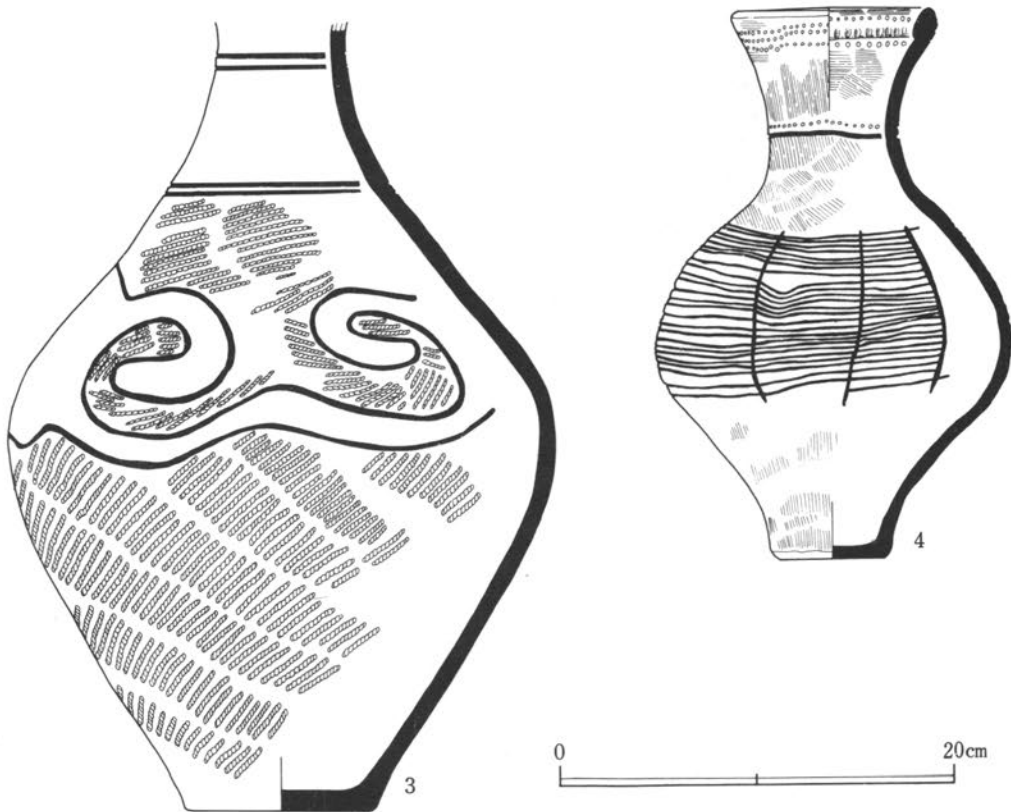
2は、完形の大形壺形土器である。器高44cm、口径12.3cm、胴径29.8cm、底径5.8cm、器厚0.8cmを測る。口縁が10単位(推定)の小波状を呈し、ラップ状に開口し、頸部の横位の沈線部で屈曲する。胴部は、上位部が脹らみ、球状のまま底部に移行する。口縁から頸部下半まで沈線と刺突文による文様構成をもつ。上から波状沈線2条、横位沈線2条、斜行沈線数単位、横位沈線2条、その間の稜部に刺突文、斜行沈線数単位、横位沈線2条、横位沈線4条、下部に刺突文が施されている。肩部から胴部にかけて、節は不明瞭であるが、地文として縄文と思われるものが施され、また、山形に配する太描き沈線を加え、各文様単位間は、列点状の沈線を施している。胎土は砂粒を若干含み、焼成は不良、色調は黒褐色を呈する。

3は、口縁を欠損する壺形土器で、現高39.8cm、頸径6.5cm、胴径27.6cm、底径9.3cm、器厚0.8cmを測る。器壁は大きく「く」の字形を呈す。頸部には、2単位に2条の沈線が周回している。肩部から底部にかけては、一様に施文原体Rと思われる無節の縄文を横位に施文している。2本の沈線による渦文を配し、その内側を磨消している。胎土には砂粒を含み、色調は褐色、焼成は普通である。

1、2は須和田式土器の範疇に入り、3は野沢Ⅱ式土器に類すると思われる。



第21図 船子遺跡出土土器(4)



第22図 船子遺跡(3)・八重原(4)出土土器 (1/4)

#### 君津市八重原出土遺物 (第22図4)

遺跡は君津市八重原に在る。

立地する地域は 下総台地に比べ、かなりの標高をもつ丘陵が連なる。遺跡の標高は30～35 mを測り、背景に標高100 m以上の丘陵をひかえ、一方、南には、標高10～15 mを測る小糸川沖積地を望む。付近の地形は、小糸川の影響をかなり強く受けており、旧河川の河跡が微地形となって残っている。

各計測値は、器高27.5cm、口径9.5 cm、胴径18cm、底径6.2 cm、器厚0.7 cmを示す。口縁部は、複合口縁であり、胴部が張り出し、その直下ですぼまり、突き出た底部を形作る。外器面は、一様に刷毛目調整が施され、口縁部は横位に、他の部位はほぼ縦位に行なわれている。口縁部と頸部には、それぞれ3条の円形刺突、1条の円形刺突と横位沈線が施文されている。口縁部内面は、複合口縁の稜部があり、器面一様に刷毛目調整を施している。その上面に、列点状に円形刺突、また、ヘラ状工具による刻み目文を施文している。胴部には、径5 cm前後の竹管を半截した施文具を用いて、数条の横位の沈線を周回施文してい

る。なお、沈線をほぼ等間隔に、縦方向に8単位垂下施文している。胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。

註

- 1 ここで表示した西暦年は、佐原、真、金関 恕「米と金属の世紀」『稲作の始まり 弥生時代1』古代史発掘4 1975 を参考とし、弥生時代を前200年から300年までの500年間とした。
- 2 三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』千葉県都市公社 1974
- 3 斎木 勝・種田齊吾他『市原市菊間遺跡』千葉県都市公社 1974
- 4 註2に同じ
- 5 田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」考古学研究第22巻第3号 1976
- 6 須和田期の住居址は伊豆諸島利島で確認されている（大塚初重「利島ケッケイ山遺跡の調査」伊豆諸島文化財総合調査報告（第2分冊）1959）。  
形状は隅丸方形で東西5.2m 南北5mを測る。壁は傾斜しており、内部施設として、中央部より南に偏在する炉、4本の円形垂直な柱穴がある。
- 7 菊間遺跡第35号住居址など。
- 8 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部考古学研究室 1974
- 9 杉原荘介「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌第58巻第7号 1943
- 10 「中野台出土の弥生式土器」『千葉市の文化財』千葉市教育委員会 1961
- 11 渡辺正吾「大多喜町船子遺跡の新事例について」総南文化第12号 1970
- 12 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」千葉大学教養部研究報告A-5 1972
- 13 註8に同じ。
- 14 柿沼修平「星久喜遺跡」『京葉』千葉県都市公社 1973
- 15 註3に同じ。
- 16 斎藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」先史第8号 1972
- 17 杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号 1967
- 18 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学第6巻第7号 1935 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報一補遺一」古代文化第13巻第7号 1942
- 19 擬似流水文と表記するのを見受けるが、学史的にみるならば、擬流水文という記述である。
- 20 弥生時代の磨製石斧では、このように太形蛤刃石斧など5種類ある。石器などの生産性のある道具は、使用に際し、人間の動作や労働行為に対して、自分の法則にもとづく、合則的な行動様式に従うことをかならず要求する。すなわち、人間の動作のパターン化である。こうした動作のパターン化は、道具の機能上の合則範囲を一方の極とし、他方では、生産性を一つの極とする。この二つの極のなかで、一つの機能を有する石器の類型が許容されるのである。
- 21 註2に同じ。
- 22 註2に同じ。
- 23 石岡憲雄他『上総菅生遺跡』菅生遺跡調査団 1973
- 24 註14に同じ。
- 25 註3に同じ。
- 26 栗本佳弘他「大森第2遺跡」『京葉』千葉県都市公社 1973
- 27 同じ水系で、下流域にある菊間遺跡では、壺形土器と深鉢形土器の個体数の比率は、1対1である。この差は、ある程度の生産様式の差ではないだろうか。

## 第2節 弥生後期文化

すでに前節で言及されているように、青銅器・鉄器を伴う農耕文化の波が、中期後半に至って房総地方の内陸部に浸透し、さまざまな形で受容されたことが指摘されている。一般的には、関東地方においては中期後半に生じた弥生文化の地方化が一段と発展し、南関東・北関東西部・北関東東部・相模湾北西部の4地域に個性的な小文化圏が成立すると言われ<sup>1</sup>、これら小文化圏が古墳文化に包括されるまでを後期としている。とりわけ、このなかでも南関東は、前葉・中葉・後葉の3期に大まかに分けられ、それぞれ標式遺跡をとって久ヶ原期・弥生町期・前野町期に区分されている。

これまでの房総地方における後期文化は、東京湾沿岸という広範囲な地域を包括した南関東の文化圏の中に位置づけられ、南関東の編年に対比させるような形で推し進められてきた。従って、北関東西部・東部地方との関連性についても、南関東系土器文化圏に対する北関東系土器文化圏という使い方がなされてきた。

本節では、現在までに知見した後期遺跡を集成して各期の遺跡分布状況、文化様相などについて、主要な遺跡をもとに触れ、大まかには久ヶ原期から前野町期に至る文化を受容しながらも、必ずしも北関東系土器文化圏に含まれるとは言い切れない文化圏の存在を指摘するとともに、これらの各時期の文化がどのような形で受容され、統合されて行くかについて言及したい。なおここでは、印旛・手賀沼周辺地域に中心をおく文化圏を設定し、便宜上印旛・手賀沼系土器文化圏（印旛・手賀沼系期）と呼称していることを明記する。

### 遺跡分布状態

第23図は、これまでに知見した後期遺跡で、総数181遺跡を数える。この図によれば、下総地方から上総地方にかけて最も多く遺跡が集中し、特に、東京湾に面する地域から印旛・手賀沼周辺地域にかけて顕著に目立つ。これらの地域には、印旛・手賀沼をはじめとして、利根川、江戸川・養老川・小櫃川などの大河川の他に、村田川、都川、鹿島川などの中小河川が位置し、樹枝状に複雑な小支谷を形成して洪積台地と沖積低地を形づくっている。恵まれた水系と好条件の土壤に培われたこれらの地域の後期遺跡は、ほとんどが標高20～25m前後の、沖積面を見下す台地上に占地している。小櫃川付近を境にして、東京湾沿岸地域から太平洋側にかけては調査例も少なく、不明瞭な部分も多いが、内陸部にはほとんど及んでいない。このような分布は、一概には言い切れないが、田子台遺跡のように、あたかも南関東地方の弥生文化が東京湾を渡って伝播されてきたようなありかたを示すことを考えると、下総台地の伝播経路とは別な、海を媒介とする文化の波が推察されようである。夷隅川流域では比較的上流域にまで分布しているが、夷隅川以北の太平洋沿岸地域にかけては、ほとんど遺跡例は認められない。調査例が少ないことの他にも、他の地域に比較すると遺跡数は総じて少ないようである。



第2表 弥生後期遺跡表

遺跡No	遺跡名	所在地	文獻
1	日出学園	市川市菅野2	前 90
2	須和田	〃 須和田2	久、弥、前、印 3、6、7、9 11、12、74
3	宮久保	〃 曾谷3	前、印 90
4	殿台	〃 大野町4	前 90
5	国府台	〃 国府台	弥、印(合口棺) 57
6	小塚山	〃 中国分町2523	弥、前 90
7	三町目	松戸市松戸	久 107
8	諏訪原	〃 和名ヶ谷字諏訪原	久、弥、前、印 124
9	上本郷北台	〃 上本郷	印 107
10	中和倉寒風	〃 中和倉寒風	前 59
11	上本郷長者屋敷	〃 上本郷七畝割	久、弥、印 60
12	二ツ木向台	〃 二ツ木向台	前 107、136
13	大谷口	〃 大谷口	久、印 82
14	中金杉道六神	〃 中金杉	前 107
15	下花輪第2	流山市桐ヶ谷	? 113
16	法蓮坊	野田市岩名字法蓮坊967	印 196
17	三ツ堀	〃 三ツ堀	前(弥?) 45
18	鴻ノ巣	柏市鴻ノ巣西高野、花野井	印 115
19	高野台	〃 高野台	? 109
20	中馬場	〃 中馬場	印 177
21	山田台	〃 山田台	? 109
22	戸張	〃 戸張	弥、印(合口棺) 57
23	宮根	〃 宮根	? 79
24	夏見大塚	船橋市夏見町	久、印 95
25	夏見台	〃 夏見町	久、印 175
26	飯山満	〃 飯山満町2	印 210
27	薬園台	〃 薬園台	? 138
28	幸田原	東葛郡沼南町幸田原	弥 52
29	北作(古墳下)	東葛郡沼南町片山字北作	印 52
30	海老内台	印旛郡白井町平塚	印 69
31	真木ノ内	〃 〃 平塚	印 136
32	清戸	〃 〃 清戸堀込370	印 169
33	羽中	〃 印西町浦部	久、印(合口棺) 52
34	下宿	〃 〃 下宿	印 112、135
35	石神台	〃 〃 大森	印 52
36	古新田	〃 〃 大森	印(十王台) 78
37	大台山	〃 〃 古新田	前、印(十王台) 52
38	平台	〃 〃 竹袋	前 112
39	船尾白幡	〃 〃 船尾	弥、印 170
40	鶴塚(古墳下)	〃 〃 小林	弥、印(合口棺) 110
41	茗作中村	〃 印旛村茗作中村	久 52
42	茗作十字路	〃 〃 茗作十字路	久 52
43	吉高家老地	〃 〃 吉高家老地	印 194
44	仲井	〃 〃 山田	印 52
45	平賀	〃 〃 平賀	印 52
46	戸の内(貝塚)	〃 〃 師戸	印 52
47	桜株	〃 〃 師戸	印 52
48	代官山	〃 〃 師戸	印 52



遺跡No	遺跡名	所在地	文獻
49	佐山	八千代市佐山	印 52
50	神野	〃 神野	印 144
51	萱田	〃 萱田	久、弥、印 —
52	村上	〃 村上	印 144
53	主山	〃 〃 2054-1	印 144
54	大塚	〃 〃 2054-1	印 144
55	おおびた	〃 保品おおびた	印 145
56	先崎	佐倉市先崎	印 159
57	西ノ台	〃 小竹字西ノ台	印 193
58	萱橋	〃 上座字萱橋	印 (方形周溝墓) 193
59	畔田	〃 畔田	印 159
60	飯合作	〃 下志津字飯合作	久、印 —
61	石神 (第I・第II)	〃 臼井忍	久、前、印 150
62	渡戸 (A・B)	〃 臼井忍	久、弥、前 (方形周溝墓) 150
63	八幡台	〃 〃 八幡台	印 193
64	間野台	〃 〃 間野台	久、印 199
65	古屋敷	〃 〃 間野台	久、印 199
66	江原台	〃 〃 田字江原台	久、弥、印 114、198
67	江原台第1	〃 〃 田字江原台	久、印 114、176、197
68	飯重新畑	〃 飯重字新畑	印 125
69	生谷境堀	〃 生谷境堀	印 125
70	佐倉城跡	〃 城内町	印 192
71	大崎台	〃 大崎台字前原1457	弥? (方形周溝墓) 146
72	大篠塚	〃 大篠塚	印 86
73	向井	印旛郡四街道町山梨向井寺台	弥 52
74	中野	〃 〃 中野	? 196
75	藤株園	〃 八街町	印 (十王台) 52
76	御園山	〃 富里村七栄字新橋台上御園	印 (十王台) 52
77	鳥山	〃 〃 七栄字新橋台上御園	印 163
78	北辺田	〃 栄町北辺田	印 (十王台) 52
79	北大台	成田市北須賀	印 (十王台) 52
80	公津下方	〃 公津下方	久 52
81	下福田 (貝塚)	〃 下福田字ユウガイ	印 (十王台) 52
82	八生浅間下	〃 八生浅間下	印 (十王台) 52
83	東和田 (古墳下)	〃 東和田	印 83
84	土室	〃 土屋	? 137
85	和田	〃 和田関之台	印 (十王台) 106
86	浅間台	〃 浅間台	弥、前、印 (十王台) 148
87	舟久保	〃 長田	印 (十王台) 106
88	和田戸 (第I)	〃 取香字和田戸	印 (十王台) 106
89	取香低地	〃 取香字和田戸	弥?、印 148
90	古込	〃 古込	? 87
91	菱田 (古墳群下)	山武郡芝山町菱田	? 148
92	大日山 (古墳下)	香取郡下総町字高	印 (十王台) 214
93	阿玉台北	〃 小見川町五郷地	久、弥、前、印 (十王台合口棺) 164
94	干潟桜井	〃 干潟町桜井寺釜山台915	? 155
95	佐野原	銚子市三崎町	弥?、印 (十王台) 139
96	上ノ台	千葉市幕張町2	前 119
97	宮脇	〃 畑町2042	前 102

遺跡No	遺 跡 名	所 在 地		文 献
98	東 寺 山 石 神	千葉市東寺山町	久、弥、前、印	203
99	車 坂	〃 貝塚町1521-2	印	99
100	千 葉 大 学 構 内	〃 亥鼻	久	52
101	弁 天 台	〃 葛城町弁天台	前	52
102	大 久 保	〃 千葉寺町大久保	前	52
103	城 の 腰	〃 大宮町字城の腰	久、印	52
104	椎 名 谷	〃 誉田町野田字椎名谷	久	52
105	菊 間	市原市菊間字北野	久、印？	118
106	手長台(貝塚)	〃 菊間手長2、137	久	210
107	大 廐	〃 大廐	久、弥、前	117
108	向 原 野	〃 郡本字向原野	久	212
109	南 向 原	〃 郡本字南向原1324-1	久(方形周溝墓)	171
110	坊 作	〃 根田540~548	久	212
111	稻 荷 台	〃 山田橋字稻荷台	？	212
112	台 (B地点)	〃 加茂字台	久	179
113	御 林 跡	〃 〃 字御林跡	久	212
114	加 茂(C地点)	〃 〃 字中島510-1	久、弥(方形周溝墓)	180
115	中 台(A地点)	〃 惣社字中台	久(方形周溝墓)	212
116	南 中 台	〃 〃 1064	久	212
117	天 神 台	〃 〃 1176-2	久、弥	212
118	蛇 谷	〃 西広369	久、弥	171
119	西 広(貝塚)	〃 〃 字上ノ原	久	171
120	武 士 宇	〃 福増字向台34-8	久(方形周溝墓)	183
121	土 宇	〃 土宇字堀ノ内	久、弥(方形周溝墓)	—
122	西 国 吉	〃 南総町西国吉字吉野993-1	？	139
123	南 総 中	〃 牛久町	久	96
124	山 王 辺 田	君津郡袖ヶ浦町大曾根字山王辺田	久、弥	190
125	菅 生 里	木更津市菅生字睦喜、鶴岡	久、弥	111
126	相 里	〃 太田相里218、253	弥	210
127	請 西	〃 請西	久、弥、前(方形周溝墓)	121
128	貞 元 新 御 堂	君津市貞元字四筋723	久	168
129	明 鐘 崎	富津市金谷字御代袋	弥	55
130	田 子 台	安房郡鋸南町山田田子台長村寺台	久	37
131	江 田(条里制)	館山市江田字四反町580	？	—
132	健 田	安房郡千倉町瀬戸字堀ノ内273	久	149
133	—	〃 〃 〃 字堀ノ内	久	—
134	—	勝浦市芳賀	久、印(十王台)	141、151
135	—	夷隅郡大原町小沢根	久	〃
136	—	〃 〃 新田仲川	久	〃
137	—	〃 〃 高谷台	久	〃
138	—	〃 〃 高谷台	久	〃
139	—	〃 〃 高谷殿台	久、弥	〃
140	—	〃 岬町三門1381	久、弥	〃
141	—	〃 〃 鴨根953	久、弥、印(十王台)	〃
142	—	〃 押日2190-2	弥	〃
143	—	〃 〃 和泉清付台	久	〃
144	—	〃 夷隅町松丸北中鎮守台	久、弥、前	〃
145	—	〃 〃 〃 向台	弥	〃
146	引 田	〃 〃 引田嶺台	弥、前	〃

遺跡No	遺跡名	所在地		文献
147	—	夷隅郡大多喜町下大多喜寺ノ台	久、弥	141、151
148	—	〃 〃 〃 字台	久、弥	〃
149	—	〃 〃 紺屋打岡台	久	〃
150	二ツ塚	野田市二ツ塚	前	79
151	中根八幡前	〃 中根八幡前	前	〃
152	谷原	長生郡陸沢村村上之郷字谷原	前	〃
153	下町	〃 〃 村下之郷字下町	前	〃
154	城山	柏市戸張町城山	?	〃
155	竹内	安房郡富山町竹内字鈴木畑	久	38、79
156	吉田	八日市場市吉田字城	前	58、79
157	発作	印旛郡木下町発作	久、印 (合口棺)	57
158	若宮	市原市山木	久	73
159	円能	佐倉市大字臼井字遠原877	印	156
160	高台	成田市野毛平字高台	弥	137
161	手古塚(古墳下)	木更津市小浜	弥、前?	—
162	八重門田(B2)	君津郡袖ヶ浦町久保田八重門田	久	215
163	大窪	〃 〃 藏波大久保	?	〃
164	美生	〃 〃 久保田美生	久、弥	〃
165	堂庭山(A2)	〃 〃 久保田堂庭山	久、弥	〃
166	伊丹山	〃 〃 飯富伊丹山	?	〃
167	山崎	〃 〃 藏波山崎	?	〃
168	堂庭山B	〃 〃 久保田堂庭山	久、弥	〃
169	原	〃 〃 下新田原他	久	〃
170	下野田	〃 〃 藏波下野田	久	〃
171	山谷	〃 〃 大曾根山谷	久、弥	〃
172	大塚台	〃 〃 大曾根大塚台	弥	〃
173	西原	〃 〃 永地西原	前	〃
174	上泉	〃 〃 上泉十二天	前	〃
175	西岩立作	〃 〃 古野田西岩立作	久	〃
176	冲谷台	〃 〃 大竹冲谷台	久	〃
177	本郷A	木更津市請西本郷	久	216
178	高部台	〃 〃 高部台	久	〃
179	北ノ崎	〃 〃 北ノ崎	久	〃
180	安房国分寺址	館山市国分天冲前	弥	—
181	辺田	千葉市辺田町25-1他 (追補)	弥	—
	石神(第Ⅲ)			
	杉ノ木台	館山市沼大和田		
	大和田	館山市犬石小字大道1766-1		
	犬石大道	館山市犬石小字大道1766-1		
	小竹	佐倉市大字小竹1463		

次に、各遺跡を時期別に分類した遺跡分布図をもとに、各期の遺跡分布状況を地域別にとらえて述べる。

久ヶ原期に属する遺跡は67例挙げられる。これらの多くは、下総台地から市原台地の東京湾沿岸地域に集中するが、村田川を境にして、養老川、小櫃川、小糸川などの沿岸地域と、印旛、手賀沼周辺地域とではやや異なった文化様相を持ち、とりわけ土器形態や埋葬形態に顕著に現われる。東京湾東岸にそそぐ江戸川に面した市川市国分台周辺では、須和田遺跡、宮久保遺跡、やや東側の夏見台付近に夏見大塚遺跡、夏見台遺跡などがあり、江戸川を遡った奥部に諏訪原遺跡がある。このうち久ヶ原期から弥生町期を経て前野町期に至るまでの継続した集落が営まれるのは須和田遺跡と諏訪原遺跡だけである。印旛・手賀沼周辺地域では、羽中遺跡、発作遺跡、飯合作遺跡、間野台遺跡、古屋敷遺跡、石神・渡戸（白井南）遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡などがある。

これらの遺跡は、後述する印旛・手賀沼系土器文化圏に包含される地域にあり、言い換えれば、久ヶ原期の文化様相に類似した遺跡と考えられる。とりわけ出土土器に顕著に現れ、久ヶ原式土器は印旛・手賀沼系式土器を出土する竪穴住居址内からは出土するものの量的に非常に少なく、完形もしくはそれに近い形状に復元され得るものはほとんどない。いわば、当地域においては、久ヶ原式土器は主体的な位置を持たず、むしろ客体的な形で反映されると言える。しかしながら、後述するように久ヶ原式土器を伴う文化が、印旛・手賀沼周辺地域を中心とする文化圏に及ぼす影響は大きなものであり、ある意味においてはその発展期の母体を形成していると言っても過言ではない。そしてこれらによって融合されたのが、久ヶ原式土器類似の土器を出土する小判形ないしは胴張り隅丸長方形を呈する住居形態の遺跡群であろう。

村田川以南の市原台地では、印旛・手賀沼系式土器は全く伴わず、むしろ従来の南関東の編年で捉えられる久ヶ原式土器文化圏の中心地域に位置づけられるのではないかと思われる。それは、遺跡数が多いこと他に、文化様相にも顕著に窺われる。厳密には村田川左岸の菊間遺跡でも印旛・手賀沼系式土器に属する土器が出土しているが<sup>2</sup>、中期、後期のいずれにも決めがたいものであり、都川支流域に位置する東寺山石神遺跡でも出土しているが、いずれにしても、この地域が両文化圏の接触地帯であることはまちがいないであろう。

村田川流域では、代表的な遺跡としては中期宮ノ台期に大集落が営まれる菊間遺跡、大庭遺跡が挙げられる。菊間遺跡では、久ヶ原期の竪穴住居址は明瞭には確認されず、宮ノ台期より後出の溝状遺構を確認しただけであるが、大庭遺跡では竪穴住居址12軒が検出されている。村田川流域から養老川に挟まれた上総国分寺台周辺地域にかけては、最近の調査例により、良好な資料を伴う久ヶ原期の遺跡例が増加している。代表的な遺跡としては、南向原遺跡、坊作遺跡、台（B地点）遺跡、中台（A地点）遺跡、南中台遺跡、天神台遺跡、蛇谷遺跡、西広（貝塚）遺跡などがある。南向原遺跡では、南向原古墳群墳丘下から6×5m前後の隅丸方形ないしは隅丸方形を呈する竪穴住居址3軒と、方形周溝墓2基が検出されている。小櫃川流域から





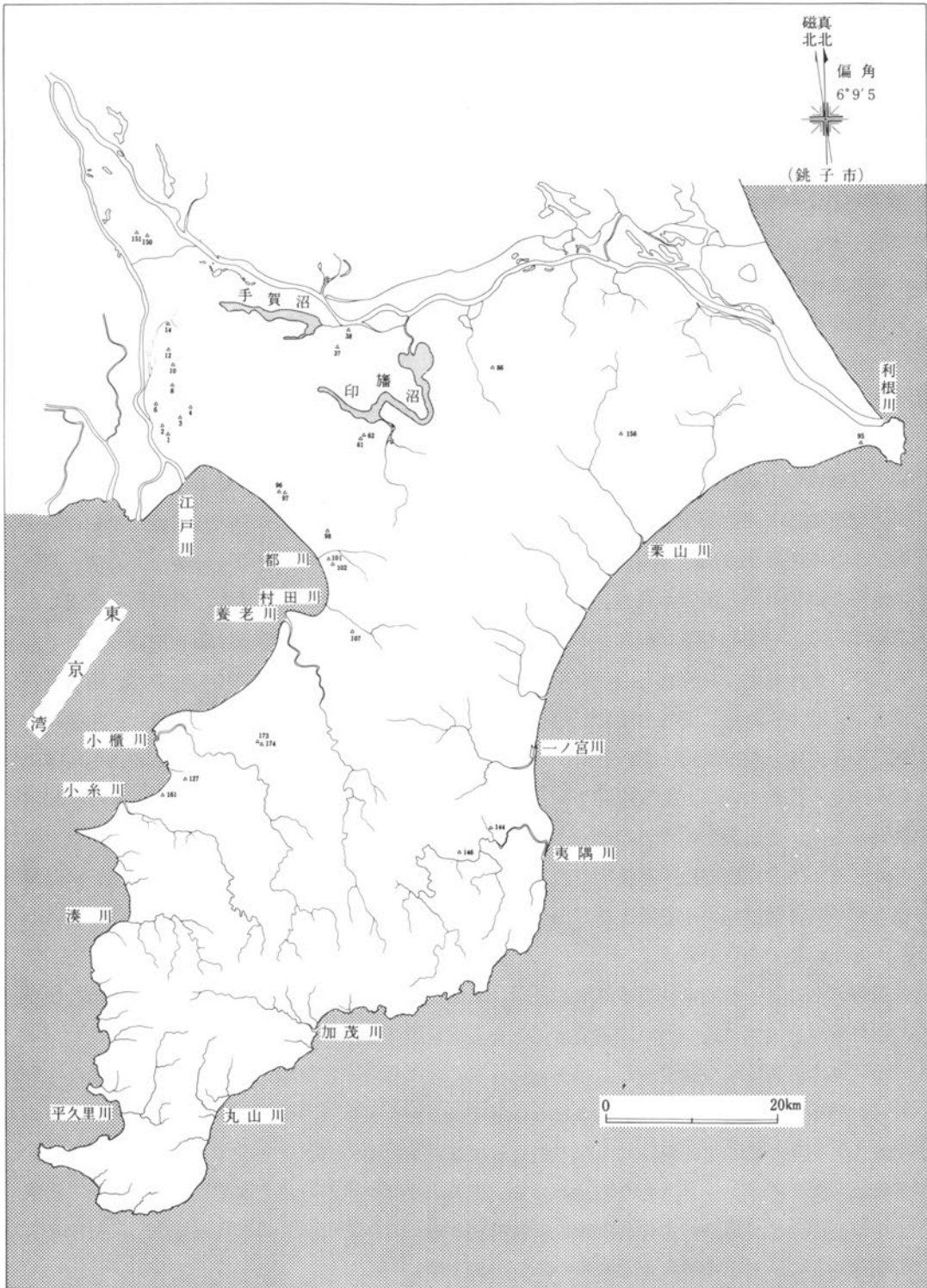
以南にかけては、菅生遺跡、請西遺跡、田子台遺跡などがあり、夷隅川流域に健田遺跡がある。その他、これらの地域から表採資料ではあるが、2、3久ヶ原式土器が発見されている<sup>3</sup>。

弥生町期に移行すると、分布状況は久ヶ原期と同様な遺跡の広がりを持つが、下総台地ではやや内陸部に浸透してくる。下総台地以外の地域との比較では、両地域とも久ヶ原期に比べて遺跡数が顕著に現われず、集落を構成する住居数も非常に少ないことが言える。久ヶ原期の遺跡説明の中でも述べたが、弥生町期に至っても、印旛・手賀沼周辺地域とそれ以外の地域とでは、やや異なった様相を見せ、やはり先進地域となるのは上総国分寺台周辺地域に求められる。しかしながら、弥生町期がさほど時間を経ずして前野町期に移行すると仮定すれば<sup>4</sup>、印旛・手賀沼周辺地域に見られる弥生町式土器は客体的に共伴しつつも、短期間に主体的な位置を占めていく姿が看取されそうである。

下総台地の東京湾沿岸地域では、須和田遺跡、国府台遺跡、諏訪原遺跡などがある。印旛・手賀沼周辺地域では、戸張遺跡、幸田原遺跡、船尾白幡遺跡、鶴塚（古墳下）遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡、渡戸（A・B地点）遺跡などがあり、その他やや離れて三ツ堀遺跡、阿玉台北遺跡などが位置する。いずれも印旛・手賀沼系土器を出土する竪穴住居址に少量の弥生町式土器が共伴する例が多く<sup>5</sup>、この地域で弥生町期に属する竪穴住居址で確実なものは、須和田遺跡だけである。国府台遺跡、戸張遺跡、鶴塚（古墳下）遺跡は、すべて合口棺の出土した遺跡である。いずれも蓋に印旛・手賀沼系式土器が、主体部に弥生町式土器が用いられているもので、久ヶ原期に見られたものと全く同一形態を持つものである。市原台地では、大厩遺跡、加茂（C地点）遺跡、天神台遺跡、蛇谷遺跡、土宇遺跡などが養老川流域に位置し、小櫃川流域に菅生遺跡、相里遺跡、請西遺跡、手古塚（古墳下）遺跡などが位置する。このうち集落の数を知見し得たものは、大厩遺跡2軒、加茂（C地点）遺跡2軒、相里遺跡6軒である。相里遺跡からは、土器製作址と思われる竪穴住居址が1軒確認されている。又、加茂（C地点）遺跡からは、方形周溝墓が1基検出されている。これ以外の地域では、遺跡数は少なく、海蝕洞窟遺跡である明鐘崎から壺形土器が出土している他は、安房国分寺址内から墓制に伴う土器が出土しているぐらいである。

前野町期は、一般的に西日本地域より遅れて出発した弥生文化が徐々に生産力を高め、やがて西日本先進地域に追いついて古墳文化を迎えるに至る直前の過渡期に位置づけられ<sup>7</sup>、それまで関東地方の各地域に独立した文化圏を形成していたものが、地域的な伝統を根強く残しながらも汎関東とも言うべき形に包括される時期であるとも言える。しかしながら、弥生時代と古墳時代とを画することが現在に至っても未解決な部分が多い<sup>8</sup>ことを考慮すると、房総地方の前野町期を論ずる上でさまざまな問題がある。このような観点から、ここでは前野町期から古式土師器を出土する遺跡の中で、明瞭に前野町期と述べられているものだけを抽出し、対象となる問題点を提示するだけにとどめたい。

図示した遺跡は30例で、これまでの遺跡分布状況とほとんど変わらないが、東京湾沿岸地域



第26図 前野町期遺跡分布図 (1/800,000)

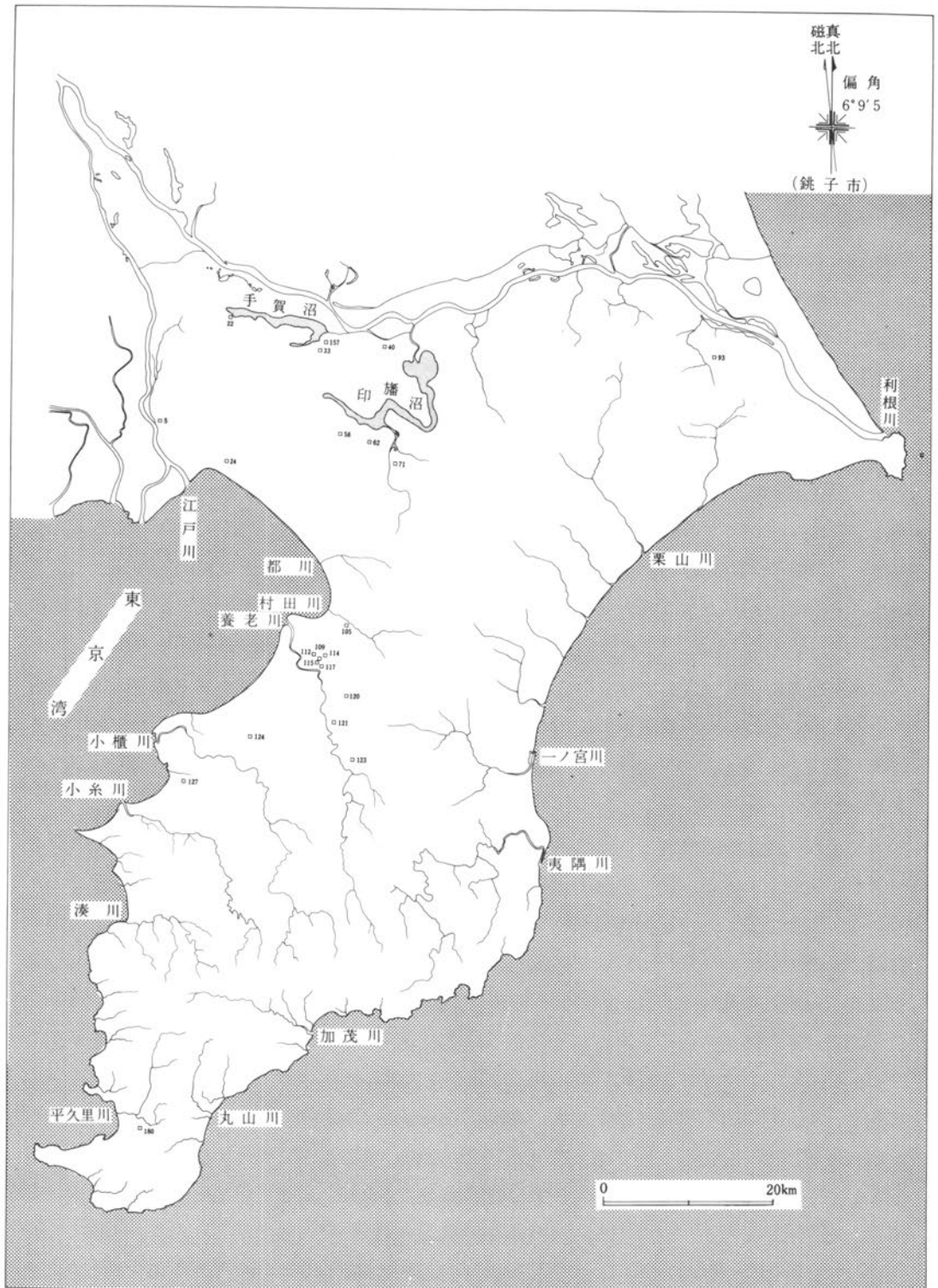


から印旛・手賀沼周辺地域にかけては、前野町式土器と印旛・手賀沼系土器との共伴関係が認められず、前野町式土器文化圏の浸透と、印旛・手賀沼系土器文化圏の消滅とは強い関連性があるのではないと思われる。主な遺跡としては、市川市国分台付近では日出学園遺跡、須和田遺跡、宮久保遺跡、殿台遺跡、小塚山遺跡、諏訪原遺跡、中和倉寒風遺跡などがあり、須和田遺跡1軒、殿台遺跡8軒、中和倉寒風遺跡5軒、諏訪原遺跡27軒（弥生時代後期～古代土師器）の竪穴住居址が検出されている。印旛・手賀沼周辺地域では、方形周溝墓3基が検出された渡戸（A・B）遺跡、石神（第Ⅱ）遺跡などがある。千葉市周辺では上ノ台遺跡、宮脇遺跡、東寺山石神遺跡、それより以南の上総国分台周辺地域では大厩遺跡、請西遺跡、手古塚（古墳下）遺跡などがあり、下総台地東端に吉田遺跡、阿玉台北遺跡がある。

印旛・手賀沼系期は、従来、印旛・手賀沼周辺地域を中心とする遺跡の中で、後期前葉頃の北関東系土器文化圏に包括されていた文化期を指すものであり<sup>9</sup>、あえて久ヶ原期とは分離した。これまでに78遺跡発見され、夷隅川流域における分布調査で若干の十王台系土器が確認されているのを除いては、下総台地中央部の印旛・手賀沼周辺地域に密集し、前にも述べたが、村田川を越えた上総・安房地方にはほとんど見られない。下総台地東端の太平洋側の地域にも2～3の遺跡が存在するが、これらの遺跡を含めた印旛沼東側の地域は、後述するように印旛・手賀沼系式土器文化圏とはやや異なる文化圏に属するのではないと思われる。印旛・手賀沼周辺地域にこれだけ多くの遺跡が集中するほどの文化が、どのような形で発生し、展開されていたかについては、第V章で詳しく述べる。

東京湾沿岸地域から江戸川流域にかけては、須和田遺跡、宮久保遺跡、国府台遺跡、諏訪原遺跡、大谷口遺跡などがあり、これらの地域よりやや東南に夏見大塚遺跡、夏見台遺跡が位置する。諏訪原遺跡では3軒、夏見台遺跡では9軒の竪穴住居址が確認されている。利根川南側から手賀沼周辺地域にかけては、鴻の巣遺跡、中馬場遺跡、北作（古墳下）遺跡などの他に、合口壺（甕）棺の出土した羽中遺跡、発作遺跡、古新田遺跡、鶴塚（古墳下）遺跡などがある。印旛沼周辺地域は、特に遺跡が集中し、中でも印旛沼南岸から鹿島川流域にかけては遺跡の数もさることながら集落址の発見される遺跡が多い。おもな遺跡としては、西ノ台遺跡、萱橋遺跡、飯合作遺跡<sup>10</sup>、石神（第Ⅰ・第Ⅱ）遺跡、渡戸（A・B）遺跡<sup>11</sup>、間野台遺跡、古屋敷遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡<sup>12</sup>、飯重新畑遺跡、生谷境堀遺跡などがあり、これらはすべて集落址が確認されている。このうち、萱橋遺跡、飯合作遺跡、渡戸遺跡、石神遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡などは、大規模な集落構成を持つ遺跡である<sup>13</sup>。印旛沼東岸地域では集落を伴う遺跡は見あたらず、当該式土器とは異なる茨城県地方に主体を持つ十王台式土器と称される土器の出土する遺跡が多い。その中では、はるか距離をへだてた太平洋沿岸地域に含まれる阿玉台北遺跡、佐野原遺跡から集落址が検出されている。千葉市周辺では都川流域に東寺山石神遺跡が集落を構成するだけで、この周辺地域が、印旛・手賀沼系式土器文化圏の外縁となるものと思われる。





第28図 房総弥生後期埋葬遺跡分布図 (1/800,000)

## 文化様相

久ヶ原期の文化様相について概観してみると、集落に関しては、上総国分寺台周辺地域に限らず、標高20m前後の沖積面を見下す台地縁辺部に立地し、中期宮ノ台期に見られたような大集落を構成しないのが特徴的である。ほとんどの集落が10軒にも満たないものであり、これを上回るものとしては、大厩遺跡、坊作遺跡、南中台遺跡などわずかである。概ね10軒を越えない住居群が1つの単位集団を構成するようであり、宮ノ台期の集落に伴う環濠も房総地方久ヶ原期では全く認められないということも大きな時代の特徴と言えるであろう。<sup>14</sup>大厩遺跡では久ヶ原期の竪穴住居址12軒が確認されているが、環濠を伴う宮ノ台期の集落が東西に伸びる台地の東端に位置し、これより台地西側に奥まって久ヶ原期の集落が構成されている。又、ここでは弥生町期、前野町期と時期が下るにつれて西側に集落が移動しているという事実があり、これら各時期の集落占地の対比が非常に興味深い。

久ヶ原期の住居形態は、宮ノ台期の伝統を受け継いだもので、小判形、胴張り隅丸長方形、隅丸方形などの他に不整円形などがある。このうち最も主体的な位置を占めるのは、胴張り隅丸長方形ないしは隅丸方形で、炉穴と主柱穴4本を具備するのが最も基本的なものである。長辺7m、短辺6m前後のものが多いが、胴張り隅丸長方形（小判形に近いが、主軸に直交する壁長と主軸の壁長との差は顕著ではない）を呈するものの中に、長辺が10m前後を測る大形の住居址が存在する。前に述べた大厩遺跡でも、長辺9.7m、短辺8.3mの住居址が認められている。数軒の集落を構成している中に、最低1軒は確実に存在しているようであり、大形住居の占める位置も何らかの意味があるようである。<sup>15</sup>これに対し、隅丸方形、不整円形を呈するものは、長辺5m、短辺4m前後で、不整円形を呈するものは炉址は具備するが、柱穴は不規則なものが多い。

久ヶ原期に伴う埋葬形態は、印旛・手賀沼周辺地域と上総地方とでは大きな相異を見せる。前者では浦部羽中遺跡<sup>16</sup>、発作遺跡出土の合口壺（甕）棺墓が挙げられる。いずれも形態が不明であり、出土土器にしか様相は窺われないが、蓋に縄文が施文された印旛・手賀沼系式土器の鉢形土器を用い、主体部に山形状に区画された沈線文間に縄文帯を持つ久ヶ原式土器特有の壺形土器が使用されている。合口壺（甕）棺墓の系譜については種々の論議がなされているが、祖源は東日本の縄文時代に求められるようであり、このような特定の時代の生活様式を示すものの中にそれぞれ文化の系譜の異なる様式（蓋と主体部に使用される土器）が混在するという事象は、久ヶ原期のもつ特殊性を如実に表現しているようである。これに対して、上総国分寺台周辺地域では、合口壺（甕）棺墓の形態を持つものは見い出されず、方形周溝墓が認められる。しかしながら、久ヶ原期に属する方形周溝墓は宮ノ台期に比べて検出例が少なく、南向原遺跡、坊作遺跡などわずかである。南向原遺跡では、3軒の竪穴住居址とは小支谷を隔てた台地縁辺に2軒確認されている。1号方形周溝墓<sup>17</sup>は、4辺がそれぞれ独立した周溝で画された方形の中に内部施設を置くもので、南北約9.9m、周溝の長さ6～4.5m、最大幅1.4mを測る。

内部施設は、東西2m、南北1.14m、深さ45cmの隅丸長方形を呈し、出土遺物は検出されない。ほぼ同様な規模を持つ2号周溝墓とあわせて、当地方久ヶ原期方形周溝墓の祖源期に属するものと言われている<sup>18</sup>。上総国分寺台周辺地域に見られるこのような方形周溝墓は、明らかに中期宮ノ台期から受け継がれたものであり、印旛・手賀沼周辺地域における埋葬形態とは全く系譜が異なる。

土器に関しては、壺形土器、鉢形土器、甕形土器、高環形土器など器種に富む(第29図6～11、第34図8～10、第35図12・13、第44図1・2、第49図1・2、第50図)。壺形土器の文様帯を持たない部分が赤彩されるなどの装飾手法、文様手法は、東京湾西岸地域と全く同様である。甕形土器も、同様に口縁部から頸部にかけて輪積痕による装飾手法を持つ土器がほとんどであるが、台付甕形土器は全般的に非常に少ない。土器以外の遺物については、中期宮ノ台期に豊富に見られた石器が急激に消滅することが指摘される。南向原1号住居址から出土した有角石斧が<sup>19</sup>特異な石器として挙げられるだけで、他に顕著な石器は見あたらない。関東地方でも、すでに弥生時代中期の段階から鉄器の存在が認められており、房総地方においても、久ヶ原期に至ってすでに鉄器が、石器にとって変わるほど普及が著しくなったということが考えられ、事実、これ以外に石器の消滅を納得する要因は見つけられないが、当地方のこの時期における鉄器の出土例は皆無である。青銅器もほとんど例はなく、古くは田子台2号住居址から不明銅製品が出土している他に、わずかに大竹遺跡から銅鏃が出土しているだけである。それに対して、紡織技術に関する道具としての紡錘車(土製)は比較的多い。その他、特殊な遺物としては、田子台2号住居址からガラス玉が117個検出されている例があり、当地方では最古の部類に入るものであろう。

弥生町期は、土器を見る限りにおいては連続性を持つが、むしろ、文化そのものは前野町期前段階の過渡的な様相を呈している。上総国分寺台周辺については、詳細が定かではないが、印旛・手賀沼周辺地域に見る限りでは、印旛・手賀沼系式土器文化の持つ独自性が薄れて行くとともに、一部に十王台式土器文化の一端が波及するなど、錯綜した動きが現われて流動的な様相を含んでいる。

集落は久ヶ原期と同様な立地条件を持つが、大厩遺跡から検出された2軒の竪穴住居址は久ヶ原期の集落の西側に位置し、前野町期の集落が営まれる地域と重複している。住居形態も大形の住居は消え、須和田遺跡91号住居址でもそうであるが、一辺が3～4m前後の隅丸方形を呈し、炉穴の他に支柱穴を完備しているものは少ないというのが特徴的である<sup>20</sup>。

埋葬形態については、印旛・手賀沼周辺地域、上総国分寺台周辺地域いずれとも久ヶ原期の葬制を踏襲している。しかしながら、印旛・手賀沼周辺地域においては、同じ合口壺(甕)棺墓でも土器にやや異なるものが用いられている。発作遺跡、国府台遺跡などのように蓋と主体部に印旛・手賀沼系式土器と弥生町式土器が用いられている<sup>21</sup>のに対し、阿玉台北遺跡では移入されたとも言うべき十王台式土器<sup>22</sup>が用いられていることである。必ずしも十王台式土器を用い

たこのような葬制が当地域で主体的な位置を持ち得なかったことは他の地域に類例が認められないことから言っても確かなようであり、この辺にも過渡的な様相が感じられる。方形周溝墓は類例が少ないが、加茂（C地点）遺跡では2軒の弥生町期の住居址南側に接して構築されている。一辺が23m前後を測り、西側周溝だけが独立しているもので、前記久ヶ原期に属するものよりもはるかに規模が大きい。このような同一地域内に住居と墓域が併存するという事は、前時代には認められなかったことである。両者は同じ弥生町期でも若干時間差を含んでいるのかもしれないが、あるいは、何らかの要因で墓制に対する意識の変化がおこったのかもしれない。

土器は、弥生町式土器と呼ばれる。久ヶ原式土器の特徴を受け継いだもので、須和田遺跡（第29図12～18、20、23）、小塚山遺跡（第29図13～15、19、21、22）、大厩Y-1号址、5号墳<sup>23</sup>、加茂（C地点）遺跡<sup>24</sup>、明鐘崎遺跡などから出土した土器はその代表的なものと言える。壺形土器はS字状結節文と羽状縄文が主体となるが、網目状撚糸文が多用されるのも特徴的である。甕形土器は、高台部を持つ甕形土器はまだ量的に少なく、久ヶ原期に見られた輪積痕による装飾技法が退化して、わずかに頸部から胴部に移行する部分にだけ稜を残すものに変化する。土器以外の遺物については、顕著な出土例は見あたらず、不明な点が多い。

前野町期に至っても、遺跡のほとんどが、水田面との比高差10m前後を測る台地上に位置し、前代と引き続き同じ占地を示す。例外として、標高約6mの市川砂州上に発見された日出学園遺跡が挙げられる。しかしながら、日出学園遺跡では集落址は検出されず、手捏土器を含む壺形土器や器台形土器が発見されていることから、直接的には農耕にかかわる遺跡ではないのではないかという見方もされている<sup>25</sup>。

集落を構成する住居数は、殿台遺跡と大厩遺跡でそれぞれ8軒検出されているのが最も多い数と言える。住居形態は、第2図に示されているように、長辺、短辺とも3～4m前後の隅丸方形を呈するものと、これよりやや大きい5～6m前後の2種に分かれ、炉穴はほとんどが具備するものの、柱穴は4個完備するものと不整ピットしかないものがある。どちらかといえば、やや大形の住居の方が支柱穴を完備しているようである。大厩Y-6号・Y-11号址では南壁寄りに貯蔵穴を持っている。小形の住居址には、隅丸方形よりも不整形を呈するものもかなり多い。大厩遺跡では、8軒の竪穴住居址が検出されているが、3～4軒を1単位とする3つのグループが弧状に構成されている。殿台遺跡では8軒が北側に開口する円弧状を構成し、中和倉寒風遺跡では5軒（2軒は未調査）が環状にめぐっている。

埋葬形態については、この時期に明確に伴う例が少ないので一概には言い切れないが、請西遺跡や渡戸（A地点）遺跡<sup>26</sup>から方形周溝墓が検出されており、この時期においては、地域を問わずに方形周溝墓が主体を占めるに至るのであろう<sup>27</sup>。

土器については、須和田遺跡2号住出土土器（第30図2・4・5・10・12・17・19・24・29・31）や殿台遺跡出土土器（第30図7・11・13～15・18・22～24・26・27・30・32～36）な

どが該当するであろう。壺形土器、鉢形土器、甕形土器、高環形土器の他に器台形土器が現われる。壺形土器はそれまでの縄文による装飾帯が消え、簡素なつくりとなる。甕形土器は、平底の他に台付甕形土器が多くなる。器面に刷毛目調整痕を持つもので、弥生町期に見られたような技法は全く残らない。このような前野町式土器については、遺跡分布状態のところでも述べたが、現在でも未解決な点が多い。諏訪原遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に至る竪穴住居址が27軒確認されているが、ここでは印旛・手賀沼系式土器をⅡ群として分離し、それ以後から五領期に至るまでをⅢ群として前野町式土器と五領式土器について言及している。それによれば、各住居址で最も普遍的に出土する甕形土器をA系（台付甕）とB系（平底甕）に分け、形態別に分類した他器種（壺・埴・埴・高環・器台）との対比を住居址相互の関係で行なってA系からB系へ移行することを導き出している。さらにこのA系とB系の先後関係を前提として、Ⅲ群土器A系の土器が弥生町的要素を多分に持ちながらも前野町期にも含み得ない新しい要素を含み、前野町式土器よりも後出する位置を与えざるを得ない土器が存在すると結論づけている。積極的ではないが、前野町式土器の中からは分離されて五領式に含まれる土器が存在すると指摘している。その他、この時期に含まれる土器として、渡戸（A地点）遺跡と、渡戸B地点遺跡第1周溝墓から出土した櫛描文の施文された2個の壺形土器の存在も注目される。当地域ではあまり類例の見られない土器で、東海地方か伊勢湾あたりからもたらされたものと言われている。直接的に西南日本から伝播された土器が方形周溝墓内から出土していることを考えると、発生期の古墳文化と何らかの関連性があるのではないかと推察される。

土器以外の遺物については、不明な点が多い。中和倉寒風4号住居址から土製紡錘車が確認されている他に、請西遺跡で検出された方形周溝墓（昭和52年調査）からガラス玉が数点出土している。しかしながら、古式土師器を出土する遺跡から銅鏃が出土している例もあり<sup>28</sup>、鉄器なども確認はされてないが、存在していたことはまちがいないであろう。

次に印旛・手賀沼系期とした時期の文化様相について概観すると、端的に言えば久ヶ原期の文化様相と共通する部分をかなり多く持っていることが指摘される。印旛・手賀沼周辺地域は、北側の利根川、西側の江戸川によって囲まれ、大小河川によって複雑に入り込んだ支谷を多数持った地理的条件のよい地帯であり、豊富な水利と可耕地が展開している。集落は、このような沖積面を見下す台地縁辺部に例外なく位置する。集落を構成する住居は、久ヶ原期でもそうであったように10軒たらずのものが多く、久ヶ原期とやや異なる点は、数軒の住居が同一台地上、あるいは地点を別にしていくつかの単位集団を構成していることである。先に挙げた石神（第Ⅰ・第Ⅱ）遺跡、渡戸（A・B）遺跡<sup>29</sup>、飯合作遺跡、萱橋遺跡などはその顕著な例である。

住居形態は、胴張り隅丸長方形（小判形に近い）、隅丸長方形、隅丸方形、円形（不整円形、不整楕円形）の4つに大きく分かれるが<sup>30</sup>、最も主体的な位置を占めるのは隅丸長方形と隅丸方形である。長辺6～7m、短辺4～5m前後が最も多い。炉穴と支柱穴4本を基本とするが、

南壁寄りに小ピットを持つものと浅い凹みを持つものがあり、数は少ないが両方備えたものもある。又、円形を除いては大形の住居が存在することも特徴的で、久ヶ原期と共通性が認められる。最も大形に属するものとして長辺が12mを越えるものもあるが<sup>31</sup>、概ね長辺10m、短辺8～9m前後で、西ノ台遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡、石神(第I)遺跡などで検出されている。このような大形住居の存在が何を意味するのかは明らかではないが、江原台第1遺跡、飯合作遺跡、萱橋遺跡などでは、大形住居の周辺にこれよりも小さい住居が作られていることを考えると、あるいは単なる住まいとしての家屋ではなくて別な役割を果たす住居の可能性も考えられる。又、生谷境堀遺跡では、6軒の住居がほぼ環状に位置しているのも注目される<sup>32</sup>。しかしながら、これとは逆に、印旛・手賀沼周辺地域より離れた阿玉台北遺跡、佐野原遺跡などでは、隅丸方形でも不整形を呈するものや、矩形に近いものが多く<sup>33</sup>、支柱穴も完備しないものが目立つ。

埋葬形態に関しては、方形周溝墓は全く検出されない。国府台遺跡、羽中遺跡、発作遺跡、鶴塚(古墳下)遺跡などから合口壺(甕)棺が検出されているように、土壌墓の形態をとるのであろう。これらに使用された土器については、主体部に使われた壺形土器の中に弥生町式土器も含まれており、葬制に関しては当該期だけにとどまらないようである。又、阿玉台北遺跡からは3基の土壌墓が検出されているが、当該式土器とは異なる文化圏の土器形態であり、当文化期の下限を知るうえでの好資料であると言える。

土器については、胴部に単節縄文ないしは付加条縄文が施文され、底部に木葉痕を残す甕形土器と、頸部に楡描沈線文が施文される甕形土器が主体となる。その他鉢形土器、高環形土器があるが、明瞭な壺形土器と言えるものは少ない。甕形土器は、口縁部が複合口縁を呈し、口縁部から頸部にかけて久ヶ原期に特有な輪積痕を持つものが多く、胴部に縄文が施文されない甕形土器も同様な輪積痕を持つ。一方、複合口縁を呈する甕形土器の中には、頸部に輪積痕を全く持たずに無文帯となるものや、無文帯の部分に楡描沈線文が施文されるものがある。楡描沈線文を出土する遺跡は当該期文化圏の外縁に近い東寺山石神遺跡からも出土しているが、住居址に共伴する良好な資料はほとんどない。阿玉台北遺跡、佐野原遺跡からも出土しているが、やや様相の異なるものである。むしろ頸部に楡描沈線文が施文される土器の多くは、手賀沼から西側地域に限定されるのではないかと思われる。この種の土器を出土する遺跡としては、鴻ノ巣遺跡、中馬場遺跡、北作(古墳下)遺跡、古新田遺跡などが挙げられる。ただ、北辺田遺跡と北大台遺跡からも同種の土器が出土しているので、楡描沈線文の土器に関しては、印旛沼東側と手賀沼西側の地域とではやや異なる様相を持っているのかもしれない。

石器については久ヶ原期同様に特徴的なものは見あたらず、佐野原遺跡、石神(第II)遺跡から片刃石斧がそれぞれ出土しているのが目立つ。その他の遺物としては、土製紡錘車がやや多く認められる他は、佐野原遺跡から琥珀製勾玉2個と碧玉製管玉1個が出土しているだけである。



註

- 1 神沢勇一「弥生文化の発展と地域性 5 関東」『日本の考古学Ⅲ』河出書房 1966
- 2 38号住居址出土の底部に木葉痕を残す土器が指摘される。
- 3 君津郡袖ヶ浦町大曾根付近の畑地から口縁部を欠損した推定器高30cm前後の大形の壺形土器が発見されている。頸部に山形状沈線で区画された縄文帯を持ち、この部分を除いて赤彩が施されたもので、明らかに久ヶ原式土器特有の文様形態を持っている。現在袖ヶ浦町立根形中学校に保管されている。又、安房郡千倉町瀬戸から、複雑な山形状沈線で区画された縄文帯を持つ土器が出土している他、夷隅郡夷隅町峯谷からも同様な土器が出土している。
- 4 遺跡数の少なさと、集落規模も久ヶ原期に比べると小さいなどの要因が考えられるが、この点に関しては第V章で詳しく述べる。
- 5 船尾白幡遺跡2号住居址では、印旛・手賀沼系式土器と口縁部、胴部を欠損した壺形土器が共伴している。
- 6 長辺3m、短辺2.6mの隅丸方形プランを持ち、炉址のほかに支柱穴はなく、南側にピット、壁柱穴らしきものがめぐっている。
- 7 『新版考古学講座』4 原史文化 P、142
- 8 前野町式土器と五領式土器の編年の位置づけに関する土器論の問題と、弥生時代と古墳時代の時代区分に関する問題などが挙げられる。
- 9 おもに長岡式土器・十王台式土器類似という用い方をされた他に、久ヶ原期～前野町期に至る幅広い時間の中で位置づけられてきた。
- 10 当千葉県文化財センターで発掘調査され、弥生時代後期から国分期に至る竪穴住居址と前方後方墳2基を含む古墳（マウンドを持たない方形周溝墓）が検出されている。印旛・手賀沼系期に属する竪穴住居址は20軒以上確認されている。
- 11 石神（第Ⅰ・第Ⅱ）遺跡、渡戸（A・B）遺跡とも同一台地上に地点を異にして位置するので、総称して白井南遺跡と呼ばれる。
- 12 遺跡地名表では江原台貝塚と称された遺跡で、江原台遺跡、江原台第1遺跡とも全く同じ台地上に位置する。
- 13 中期宮ノ台期の大集落とは内容的に異なる。
- 14 現在では宮ノ台期に属する集落の中でも環濠を伴うものと伴わないものの両者があることが指摘されている。たとえば、前者に大庭遺跡、後者に当千葉県文化財センターが調査した城の腰遺跡がある。
- 15 岡本孝之「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』 第1号 1976 ここでは住居の規模について、大・小の存在は集落内部の階層分化に結びつけることはできないという考え方に否定的であり、南関東地方における大形住居（超大形住居と大形住居を厳密に分けている）は宮ノ台期だけではなく、久ヶ原期、弥生町期にも認められるものであり、逆にこの時期の中小住居が相対的に小形化して行くという事実から、南関東地方に宮ノ台期弥生文化が成立してのち集落内において大形住居が徐々に形成されたものではなく、東海地方以西からの侵入者たちが階層分化を遂げつつ出現した結果による、と述べている。
- 16 第66図1 参照
- 17 第2図 参照
- 18 『南向原』報文中、南向原遺跡第2章Ⅵまとめに記述されている。
- 19 第2図 参照
- 20 第2図 参照
- 21 第66図2・3 参照
- 22 十王台式土器についてはその位置をどこに置くかが論議されているが、今だにはっきりしていない。何人かによって編年が提起されているが、そのいくつかを示すと、井上義安は、茨城

県東北部に限って後期初頭磐舟山式土器（Ⅰ・Ⅱ式）の直後に置き、これと対比する形で茨城県西南部に二軒屋式を置いている。又、堀 静夫は、後期初頭の磐舟山式土器をⅠ式とⅡ式（東中根・長岡式）に分け、その後には十王台式を置いている。川崎純徳は、東中根式土器と長岡式土器を久ヶ原期より弥生町期にかけて同時期に置き、十王台式土器を弥生町期より新しい時期に置いている。

23 第2図参照

24 2号住居址出土壺形土器を指す。

25 『市川市史 原始古代編』P、324によれば、農耕にかかわる祭祀遺跡との結びつきが問われている。

26 第2図参照

27 渡戸（A地点）遺跡から1基、渡戸（B地点）遺跡から2基検出されている。長辺10～16m、短辺9～15m前後で、うち1基は東側周溝南端が開口している。方形周溝墓内からは、印旛・手賀沼系式土器の共伴は認められない。このことも方形周溝墓の分布が地域を限定しない1つの理由だとも言えそうである。

28 阿玉台北遺跡から3点出土している。

29 主要遺跡と出土遺物の説明の項参照。

30 第65図参照

31 西ノ台20号住居址は、長辺が12.05m、短辺8.5mを測る。

32 第37図参照

33 鴻ノ巣遺跡も同様にあてはまる。

## 主要遺跡とその出土遺物

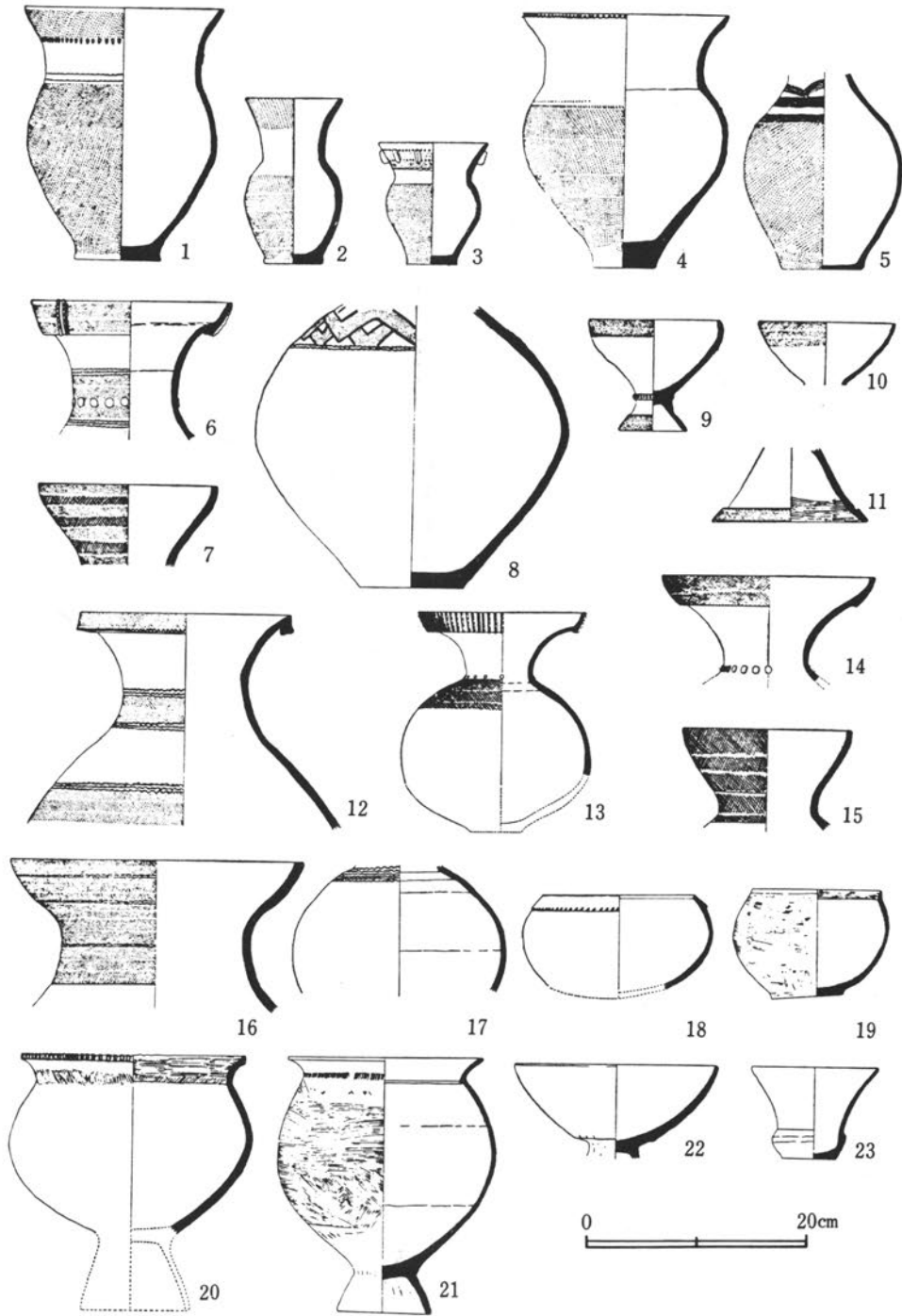
### 市川市域内遺跡

下総台地の西南端に位置し、市川、船橋、松戸、柏を中心として旧東葛飾郡に広がる東葛台地と総称される地域にある。この東葛台地は江戸川に面して、国分谷と大柏谷の二つの大きな谷によって国分台・曾谷台・柏井台を形成し、小塚山遺跡、須和田遺跡は国分台に、宮久保遺跡、殿台遺跡は曾谷台に位置する。日出学園遺跡は特殊な例で、標高6m前後の市川砂州上に形成されている。日出学園遺跡を除く他の遺跡は標高15～22m前後の台地縁端に立地し、須和田遺跡、殿台遺跡などで竪穴住居址が認められている。殿台遺跡では前野町期に属する竪穴住居址8軒が検出されている。又、須和田遺跡、宮久保遺跡からは印旛、手賀沼系式土器が出土している。

### 出土遺物（1）（第29図）

1 甕形土器 胴部径に比べてやや口径の広い土器で、口縁部から頸部に移行する部分にかけて縄文が施文され、下端に刻目を持つ。頸部無文帯より下位はS字状結節文と縄文を施文。

2 甕形土器 小形の土器で、やや丸味を帯びた胴部から強くくびれて口縁部に移行。頸部の細さと口縁部までの長さからすれば、細頸の壺形土器に近い。文様構成は頸部無文帯



1～5 印手式土器 6～11 久ヶ原式土器  
12～23 弥生町式土器

第29図 市川市域内遺跡出土土器(1) (1/6) (杉原他・1971)

をはさんで縄文が施文されるが、胴部は羽状縄文を構成することが特徴的。

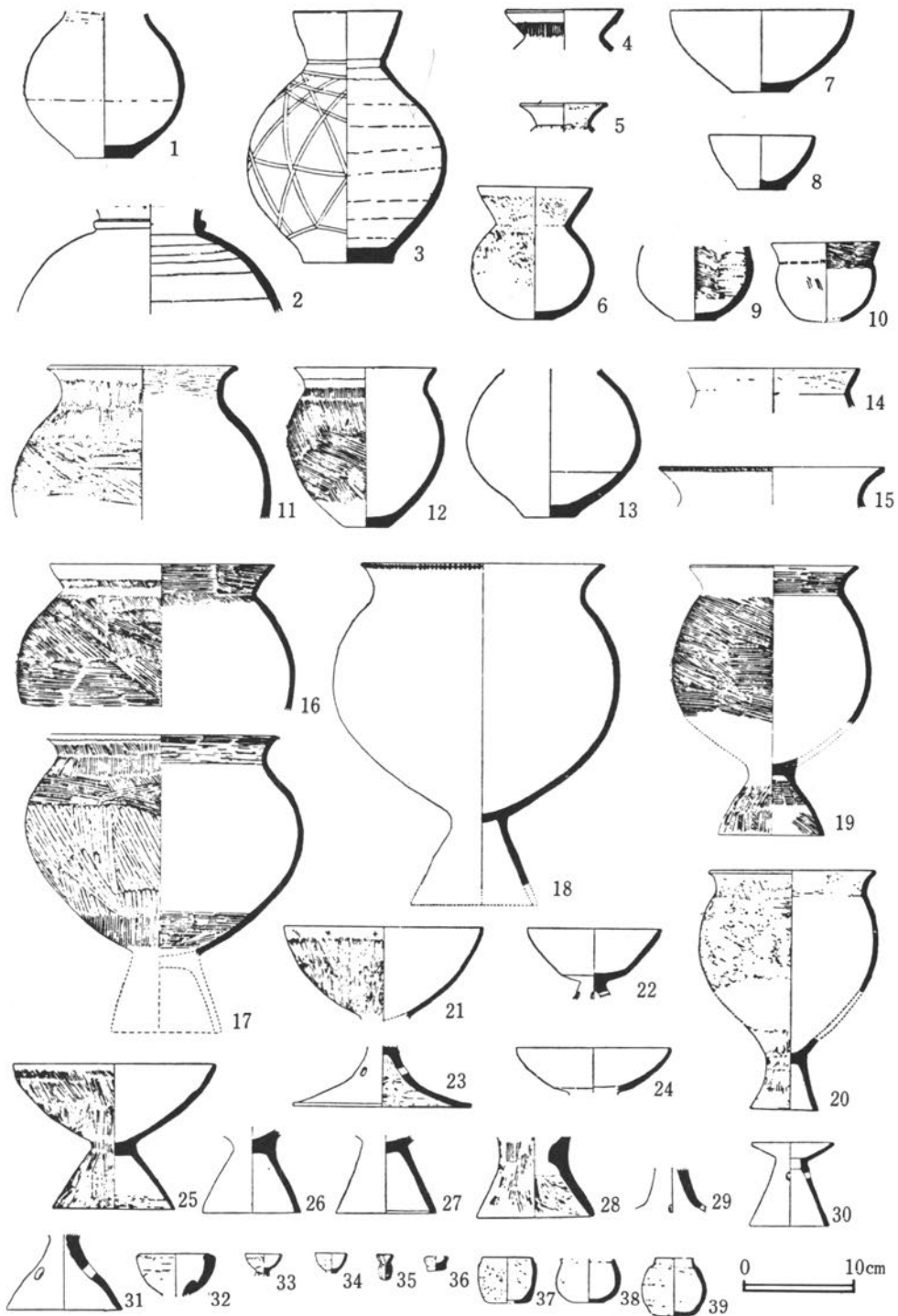
- 3 甕形土器 器高10cm前後の小形の土器。胴部文様は他の土器と変わらない。口縁部上端と、頸部から胴部に移行する部分に無文帯を構成し、この間に縄文が施文される。刺突文と縦位の細長い瘤状突起が周回するのが特徴的である。口唇部は小波状となる。
- 4 甕形土器 胴部から底部にかけてはやや直線的になるのに対し、鋭角的にくの字に外反して口縁に移行するしまりのある土器。口唇部は連続した押捺による刻目を持つ。口縁部から頸部にかけては幅の広い無文帯とし、胴部の縄文と接する部分に連続した刺突文が2段施文される。
- 5 甕形土器 口縁部欠損。胴部径に比べて底面の大きい安定した土器。胴部上半から底部に至るまで縄文が施文される。頸部は7～8条を1単位とする櫛描状波線文が波状に2段、それより上位は山形状に施文される。
- 6 壺形土器 頸部以下欠損。羽状縄文を施文した複合口縁部に刻目を持つ棒状浮文を施文。頸部は上下2段のS字状結節文で区画された中に3段の縄文により羽状縄文を構成し、中央部に円形浮文が付帯する。赤彩不明。
- 7 壺形土器 頸部以下欠損。単純口縁を呈し、口縁部はやや垂直ぎみに立ち上がる。特殊な文様手法を持つもので、口縁部から頸部にかけて、基本的には羽状縄文を構成するが、回転方向の異なる条と条の境目に網目状撚糸文が3段施文されている。
- 8 壺形土器 頸部以上欠損。口縁部が欠損して不明瞭ではあるが、おそらく最大径を胴部中央に持つものと思われる。胴上半部から頸部にかけては山形状沈線で区画された羽状縄文帯が施文される。山形状沈線は頂点が相対するように2組持つ。下端にはS字状結節文を施文。赤彩不明。
- 9 高环形土器 坏部はやや直線的に外反しながら口縁端で内傾する。口縁部は羽状縄文が施文される。坏部と脚部との境目には刻目を持つ隆帯となり、脚縁端は複合口縁状を呈して口縁部と同様な羽状縄文を施文。赤彩不明。
- 10 高环形土器 脚部欠損。口縁部に単一方向の縄文を3段施文。
- 11 高环形土器 坏部欠損。9同様脚縁端が複合口縁状を呈し、上端に押捺刻目を持ち、それより下位は縄文を施文。
- 12 壺形土器 胴下半欠損。大きく漏斗状に広がる複合口縁を呈し、この部分に羽状縄文と押捺刻目を持つ。頸部は無文帯をはさんでS字状結節文で区画した中に、円形赤彩文を付帯する羽状縄文が施文される。胴上半部も同様な文様構成をとるが、円形赤彩文は持たない。
- 13 壺形土器 胴下半部欠損。やや胴下半に稜を持ち、頸部から口縁部にかけて強く屈曲して外反する。複合口縁を呈し、刻目を持つ棒状浮文が口縁部をめぐるように貼付される。頸部から胴部に移行する肩口には円形浮文が施文され、それより下位は網目状撚糸文を

施文。赤彩不明。

- 14 壺形土器 頸部以下欠損。13と類似するが、口縁部には網目状撚糸文が施文される。赤彩不明。
- 15 壺形土器 頸部以下欠損。7同様口縁部がやや内傾する。口縁上端から頸部にかけて一様に網目状撚糸文を施文。赤彩不明。
- 16 広口壺形土器 頸部以下欠損。口径に比べて頸部がやや幅広となる。単純口縁を呈し、口縁上端から、頸部と胴部との境目に引かれた横位沈線との間に縄文が施文される。縄文は3段のS字状結節文で区画された中に2段ないしは3段施文されて羽状縄文を構成する。赤彩不明。
- 17 壺形土器 頸部以上欠損。頸部から胴部に移行する肩口の部分に数条のS字状結節文を施文。赤彩不明。
- 18 無頸壺形土器 底部欠損。口縁部はやや強く内湾した複合を呈し、下端に押捺刻目を持つ。赤彩不明。
- 19 椀形土器 やや不整形を呈し、口縁部がわずかに外反する。口縁部内面に稜を持つ。外面は刷毛目調整痕。
- 20 台付甕形土器 脚部欠損。胴部は丸味を帯び、頸部から口縁部にかけてやや強く屈曲して外反する。
- 21 台付甕形土器 やや長胴を呈し、口縁部内面に稜を持つ。胴部は刷毛目調整痕。
- 22 高環形土器 脚部欠損。環部は直線的にゆるく外反し、口唇部の器壁の厚さは極めて薄い。環部下端の外面は稜を持つ。
- 23 埴形土器 特殊な形態的特徴を持つもので、胴下半に稜を持ち、これより口縁部にかけて大きく漏斗状に外反する。

#### 出土遺物(2) (第30図)

- 1 壺形土器 頸部以上欠損。球形に近い胴部を持つが、やや胴下半に最大径を持つ。
- 2 壺形土器 口縁部、胴下半部欠損。頸部と胴部の境目に隆帯を持つ。内部に接合痕が数条認められる。
- 3 壺形土器 胴部は丸味を持つが、胴上半部から肩口にかけてはやや直線的に移行し、頸部は強くくの字に外反して口縁部にいたる。器表面の肩口から胴下半にかけて籠目状の圧痕を残す。内面には接合痕が数条認められる。
- 4・5 壺形土器 口縁部。
- 6 壺形土器 球形に近い胴部と鋭角的に外反する口縁部を持つ。器表面の口縁部から胴上半部にかけてと、内面の稜を持つ部分の上位にそれぞれ刷毛目調整痕を残す。
- 7・8 鉢形土器 いずれも胴下半から口縁部にかけてゆるく内湾ぎみに移行する。
- 9 小形甕形土器 胴上半部欠損。胴部内面に刷毛目調整痕。



第30図 市川市域内遺跡出土土器(2) (1/6) (杉原他・1971) 1~39 前野町式土器

- 10 小形甕形土器 底部欠損。胴部最大径より口径が広い。内面の頸部から口縁部にかけて横位の刷毛目調整痕。
- 11 甕形土器 胴下半部欠損。頸部から口縁部にかけてはや丸味を帯びてゆるく外反。頸部から胴部にかけての器表面に刷毛目調整痕。
- 12 甕形土器 頸部から口縁部にかけてやや直線的に外反。頸部から胴下半にいたるまでの外面に刷毛目調整痕を持つ。
- 13 壺形土器 頸部以上欠損。最大径を胴部下半に持つものと考えられる。
- 14・15 甕形土器 口縁部以下欠損。15は口唇部に押捺刻目を持つ。
- 16 甕形土器 胴下半部欠損。強く丸味を帯びた胴部とやや直線的にくの字に外反する頸部を持つ。頸部以下の外面と口縁部内面には刷毛目調整痕。
- 17 台付甕形土器 脚部欠損。最大径を胴上半部に持ち、やや肩口の張った特徴を呈する。頸部から口縁部にかけては曲線的に外反し、口縁部下端は波状を呈する。口縁部以下の外面は刷毛目調整痕。
- 18 台付甕形土器 脚縁端欠損。球形に近い胴部を持つ。口唇部に押捺による刻目を持つ。
- 19 台付甕形土器 胴下半部欠損。ほぼ胴中央部に最大径を持ち、胴部及び脚部内外面に刷毛目調整痕が施される。
- 20 台付甕形土器 胴下半部欠損。胴上半部はやや丸味を持つが、胴下半はやや直線的に移行して脚部にいたる。外面は粗い刷毛目調整痕。
- 21 高坏形土器 脚部欠損。
- 22 高坏形土器 脚部下端欠損。坏部下半に稜を持ち、脚部に穿孔を持つ。
- 23 高坏形土器脚部 脚部中央から脚縁端にかけて裾広がりを呈し、この部分に穿孔を持つ。
- 24 高坏形土器 脚部欠損。22同様坏部下端に稜を持つ。
- 25 高坏形土器 坏部下半からゆるく直線的に外反しながら口縁部でやや垂直ぎみに立ち上がる。脚部はほぼ直線的となる。
- 26・27・28 脚部 いずれも甕形土器の高台部に属すると思われる。
- 29 脚部 高坏形土器の脚部であろうか。下端に穿孔を持つ。
- 30 器台形土器 くの字に大きく外反する器受部とやや胴長の脚部とを持つ。脚部の器受部に近い部分に穿孔を持つ。
- 31 脚部 器台形土器ないしは高坏形土器の脚部であろう。ほぼ脚部中央に穿孔を持つ。
- 32・33・34・35・36・37・38・39 手捏土器 いずれも甕形土器、鉢形土器、高坏形土器などを模倣している。

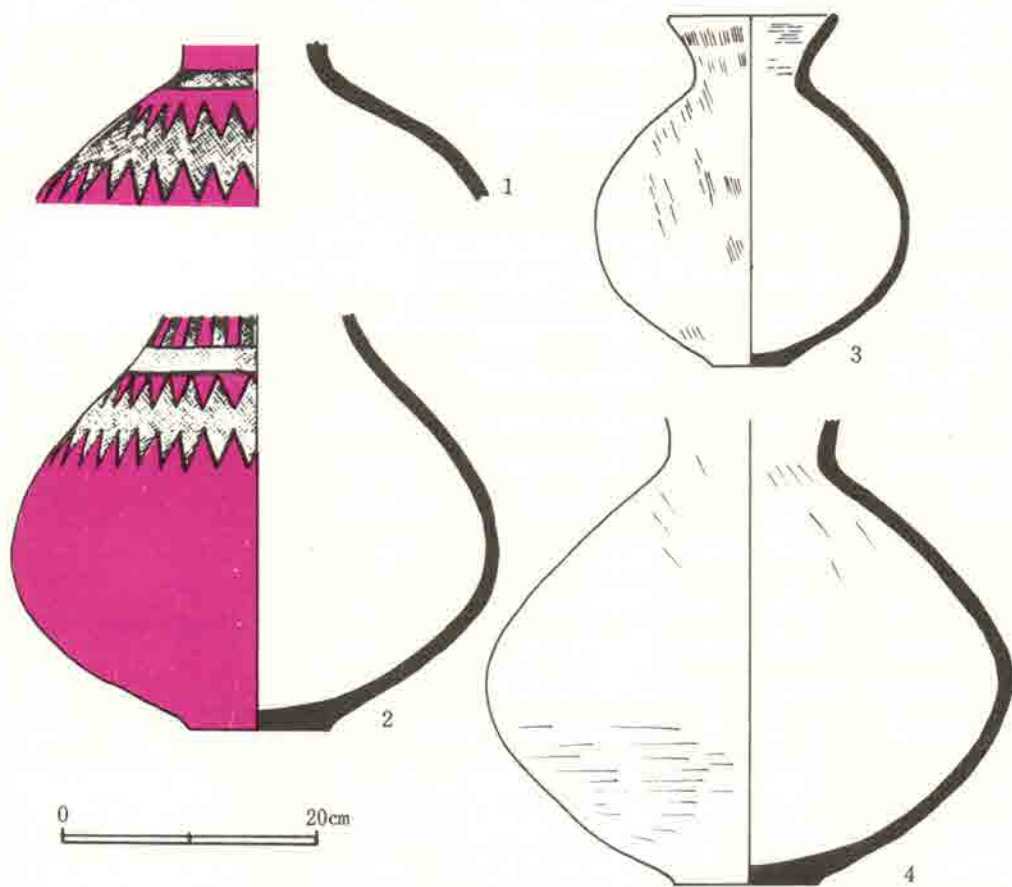
### 三ツ堀遺跡

遺跡付近は、東側の利根川、西側の江戸川にはさまれた葛飾丘陵の北端に位置し、瀬戸支谷

と呼ばれる溺谷の1つが北に大きく入り込んだ途中で北から南にのびた灰毛支丘によって東西に分岐される形をとる。本遺跡はこの灰毛支丘の西側に立地、沖積地をへだてて二ツ塚支丘と相對する。灰毛支丘の標高は15~17m前後で、水田面との標高差は7~8mを測る。付近には灰毛古墳、二ツ塚古墳等があり、水田をへだてた西北には環濠集落を伴う弥生時代末期の竪穴住居址が発見されている。発掘調査において、竪穴住居址6軒のうち弥生時代後期土器を伴う古墳時代前期から和泉期にかけての竪穴住居址4軒が調査されている。このうち注目されるのは第1号住居址で、火災を受けており、後述する4個体の弥生式土器（このうちの1個体には記述なし）が五領式土器に伴っており、当住居址が使用された当時、何らかの形で住居址の壁近くに存在したものと述べられている。このような出土状況をもとに前野町期から五領期にかけての編年を言及している。

#### 出土遺物（第31図）

1 壺形土器 頸部から胴部上半にかけての部分で、頸部にヘラ状工具による横位の2段の



第31図 三ツ塚遺跡出土土器（ $\frac{1}{6}$ ）（下津谷他・1957）



平行沈線、胴部上半には鋸歯状の2段の沈線でそれぞれ区画し、その間は網目状燃糸文がうめられる。文様帯を除く部分は赤彩。推定器高40cm前後。

- 2 壺形土器 1同様の形態的特徴を持つ。胴部はほぼ球形に近いが、胴部最大径はやや下半に位置する。文様帯は1よりもふくらみを持つ頸部に、縦方向の網目状燃糸文を伴うヘラ描沈線が縦位に周回するのを除いては1と同様で、文様帯を除く外面は一様に赤彩。
- 3 壺形土器 口径13cm、器高25cm、単純口縁を呈し、ほぼ球形に近い胴部と頸部から大きくくの字に外反する口縁部を持つ。
- 4 壺形土器 大形の土器で、胴部はやや算盤玉状に近いふくらみを持つ。頸部は3よりも屈曲しない。推定器高40cm前後。

### 鴻ノ巣遺跡

手賀沼の西側に入り込んだ支谷の南側舌状台地に位置し、標高18m、水田面との比高約8mを測る。3地点にわたって調査され、このうち沖積面をはさんだB・C地区から竪穴住居址6軒が発見されている。C地区8号住居址（長辺7.2m、短辺5.5m）を除いては長辺5～6m、短辺4m前後を測り、ほとんどが隅丸長方形というよりも矩形に近い形態を呈するのが特徴的である。炉穴と支柱穴4本を完備するが、C地区1・2号住居址を除いては南壁寄りに貯蔵穴を付帯する。

出土遺物は僅少であるが、土器に関して言えば、複合口縁部下端に刻目を持つもの、櫛描波状沈線文が施文されるもの、などだけで印旛沼周辺地域に見られるような頸部に輪積痕を持つ土器は皆無である。その他の遺物としては土製紡錘車、土製勾玉などが出土している。

**出土遺物**（第2図C-1住・8住土器）C-1住出土土器 甕形土器 胴下半部欠損。複合口縁を呈し、口唇部に縄文原体による押捺刻目、口縁部下端に棒状工具による刻目が施される。頸部は無文帯となり、それより下位は縄文を施文。

C-8住出土土器 甕形土器 口縁部欠損。底径10cm。頸部に7条を1単位とする櫛描沈線文が山形状と横位に施文され、それより下位は縄文を施文。胴部に煤の付着が認められる。底部は木葉痕を残す。

### 中馬場遺跡

手賀沼にそそぐ溺谷により形成された台地上に位置する。昭和38年の発掘調査から数次にわたる発掘調査が行われ、昭和47年の第3次調査では手賀沼に沿って伸びた台地南西端の部分が実施された。標高15～19.5mを測り後期に属する竪穴住居址8軒が検出されている。

住居形態は隅丸長方形、隅丸方形、不整形円形などと不統一であるが、長辺5m、短辺4m前後の隅丸方形が主体であり、この他に長辺が8～9m前後の胴張り隅丸長方形を呈する大形の住居が2軒存在する。炉穴と支柱穴4本を基本とし、不整形円形を呈するものは支柱穴は認めら

れない。

出土遺物は不明瞭であるが、出土土器に関しては鴻ノ巣遺跡と類似した土器で、第62図59住土器に代表される。

### 萱橋遺跡

西ノ台遺跡に連続する台地の南側約1 kmに位置する。標高26 m。水田面との比高約11 mを測る。遺構総数22のうち、前野町期の竪穴住居址18軒、弥生後期の方形周溝墓2基が確認されている。この中で後期の土器を伴出する住居址は5軒である。しかしながら、竪穴住居址の外形、及びピット、炉址等の付帯施設を比較するとこの他に同時期のものとして12軒（何ら付帯施設を持たないものを含めて）の存在が考えられる。報告書中の遺構全体図では、幅約60×60 mの範囲にわたって調査区域が及んでいるが、仮にこの部分が集落総数を表示しているとすれば非常に興味深い。

これらの竪穴住居址は若干の例外を除いてはほとんど胴張り隅丸長方形で、主軸を西北にとる。又、西ノ台遺跡でも検出された大規模な住居址が認められ、ここでは長辺が10 mを越す大形の竪穴住居址がほぼ集落の中央に占地し、この大形の住居をはさむように南北に7～9軒の住居址がほぼ東西に連繋するように占地している。あたかも南北に相對するように群を構成しているようであり、両群にはそれぞれ長辺が約8 mを測る大形の住居址がそれぞれ1軒ずつほぼ等位置に存在していることが注目され、同様な位置関係を持つ何ら付帯施設を持たない竪穴状遺構も単に性格不明、時期不明では片付けられない意味を持つものかもしれない。さらに弥生時代か古墳時代かはっきりしないが、2基の方形周溝墓の存在も検討されなければならないであろう。

出土遺物はさほど多くなく、土器が主体を占める。これらは印旛・手賀沼系式土器がほとんどであり、頸部に沈線による網目状文と円形浮文が施文される南関東系の壺形土器が1点出土しているだけである。第62図に掲載された土器はこれらの土器の一部である。櫛描沈線を伴う土器は5号住出土の高坏（鉢？）形土器1点だけで、口縁部から頸部にかけて輪積痕を持つ甕形土器が多い。その他には2号住から複合口縁を呈する鉢形土器、12号住から円形刺突文が施文される高环形土器などが出土している。

### 石神（第Ⅰ・第Ⅱ）遺跡・渡戸（A・B）遺跡（第32図）

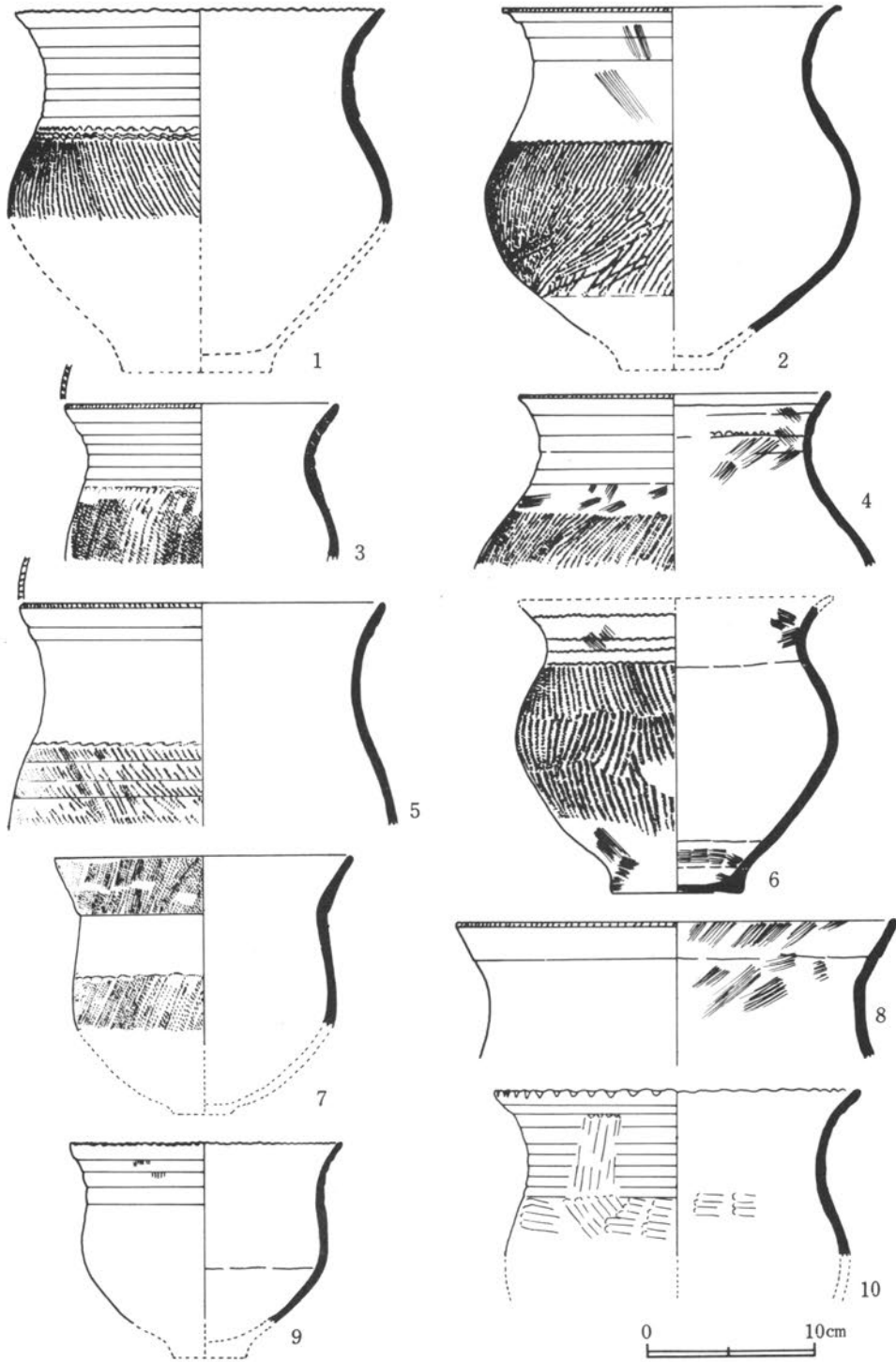
印旛沼南側の手操川、鹿島川にはさまれた成田層を基盤とする標高20 m前後の洪積台地上に位置する。北東に伸びる台地を地点別に調査し、これらを総称して臼井南遺跡としている。渡戸A・B地点、石神第Ⅰ・第Ⅱ地点から後期に属する遺構、遺物が確認されているが、このうち渡戸B地点、石神第Ⅰ・第Ⅱ地点で後期集落址が確認されたほかに弥生時代終末期に属する方形周溝墓が3基検出されている。



第32図 石神第I 地点遺構配置図 (1/100) (熊野他・1975)

出土遺物 (1) (第33図)

- 1 甕形土器 胴下半部欠損。ゆるやかに外反する口縁を持ち、押捺が加えられた口唇部は波状を呈する。口縁部から頸部にかけて7条の輪積痕を残し、頸部から胴部にかけては3本のS字状結節文と縄文が加えられる。

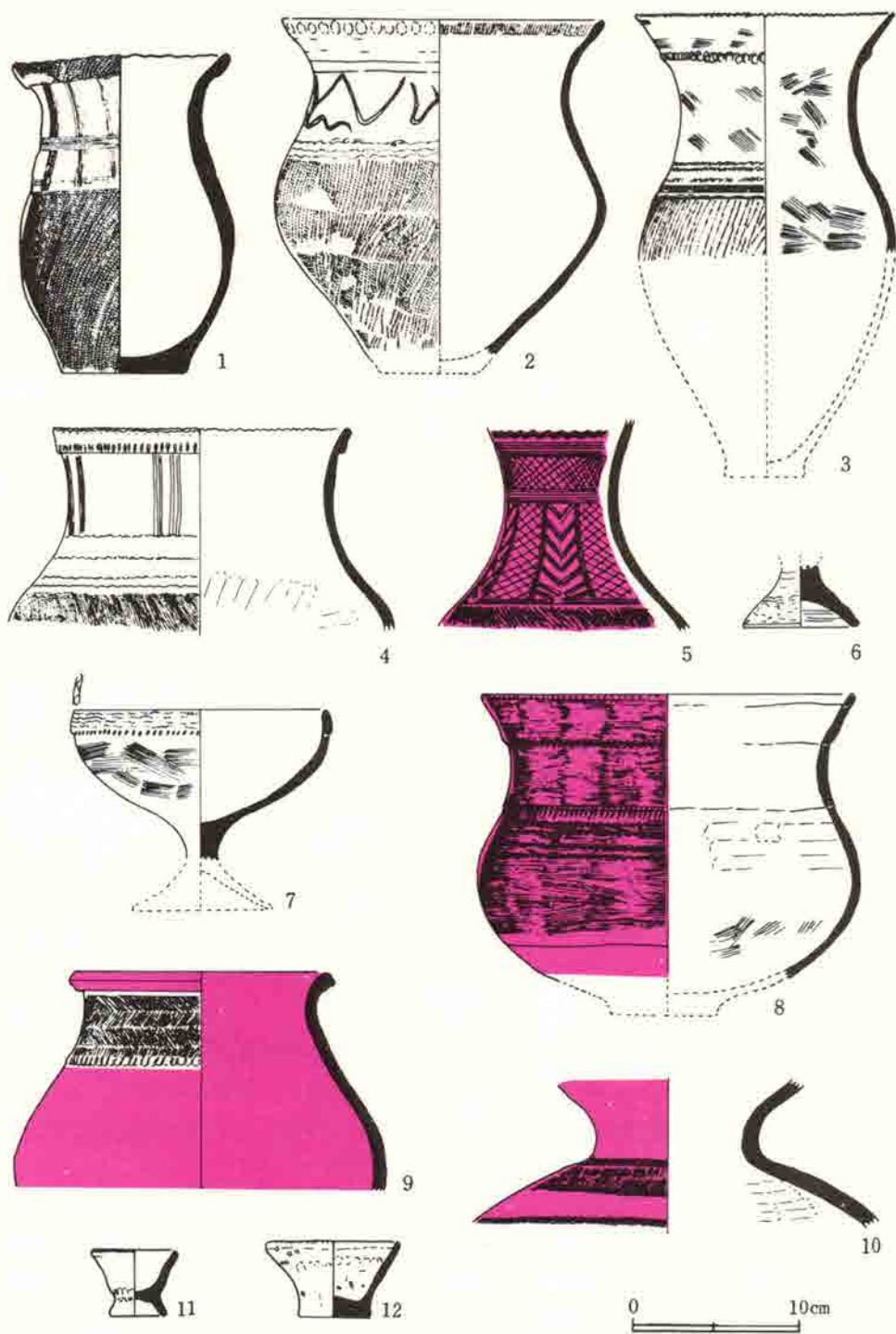


第33図 石神・渡戸遺跡出土土器(1) (1/4) (熊野他・1975)

- 2 甕形土器 底部欠損。口縁部から頸部にかけて3条の輪積痕を持ち、口唇部には刻目を残す。胴上部に1条のS字状結節文を施し、それより下位は縄文を施文。
- 3 甕形土器 口縁部から頸部にかけて6条の輪積痕を残し、胴部には結節文を有するRとLR交互の撚糸文を施文。
- 4 甕形土器 大形で口径に比べてやや巾広の胴部を持つ。口唇部に縄文。頸部に5条の輪積痕を残し、それより無文帯をはさんで縄文を施文。
- 5 甕形土器 口縁部上端に2条の輪積痕を残し、幅広の頸部無文帯の下位にS字状結節文を有するRとLR交互の撚糸文を施文。この部分にも3条の輪積痕を残しているのが特徴的。
- 6 甕形土器 口唇部欠損。最大幅をほぼ胴部中位に持つ。口縁部から胴上部にかけて3条のS字状結節文、それより下位に縄文がそれぞれ施文されている。胴下半の内外面に刷毛目調整痕。
- 7 甕形土器 やや幅広の複合口縁部と鈍角的に胴部に移る頸部を持つ。胴下半に稜を持ち、頸部無文帯の下位に撚糸文Rを施文。
- 8 甕形土器 複合口縁部から頸部にかけて何ら施文を持たない。これより下位は縄文が施文されるのであろう。口唇部は縄文。
- 9 甕形土器 底部欠損。器面は何ら施文を持たない。口唇部は外から内に向かっての押捺が加えられ、口縁部から頸部にかけては4条の輪積痕を残す。
- 10 甕形土器 何ら施文を持たず、口縁部から頸部にかけて9条の輪積痕を残すが、部分的にヘラ状工具により消失されている。口唇部は押捺により波状を呈する。

#### 出土遺物(2) (第34図)

- 1 甕形土器 口径13.1cm、底径7.2cm、器高19cm、口縁部は1cm前後の貼付隆帯で波状を呈し、LR縄文を施文。口縁部の下端から肩部にかけて3~4本単位の櫛描沈線文が縦位と横位に区画施文されている。それより下位は粗いLR縄文。底部には木葉痕が認められる。
- 2 甕形土器 底部欠損。口径19.4cm、器高は21cm前後。口縁部は粘土紐を上からすりつぶし、上端に指圧痕を残す。口縁部内面は粘土紐が付加され、LR縄文を施文。頸部にはヘラ状工具により不規則な波状沈線が施され、それより下位に3条のS字状結節文とLR縄文が施文される。
- 3 甕形土器 胴下半欠損。最大幅を口縁部に持ち、ゆるやかに外反。口唇部は上からの押捺が加えられ、波状を呈する。口縁部下では右から左への押捺が施される。胴上半には3条のS字状結節文が施され、その下に3本の深い平行沈線を残し、以下縄文が施文される。器面は煤の付着が顕著。
- 4 甕形土器 肩部はやや張り、口縁部はわずかに外反。複合口縁部下端には押捺による点



第34图 石神・渡戸遺跡出土土器(2) (1/4) (熊野他・1975)

- 列、突起部には絡縄体圧痕による点列が施される。頸部は縦位の櫛描沈線文が2列づつ周回し、それより下位に4条のS字状結節文と燃糸文Rを施文。
- 5 壺形土器 頸部。3本単位の波状櫛描沈線文を施文した下に、6本単位の平行沈線に区画された格子目状沈線文を施文。かつ、3本単位の沈線で縦に区画し、格子目状沈線文、綾杉状沈線文を交互に施文。それより下位では平行沈線文を境として縄文を施文。器面は赤彩。
  - 6 高環形土器 脚部。器面に縄文の施文された痕跡を残すが磨滅している。上部ではヘラ削りが認められ、内面には指頭圧痕を残す。
  - 7 高環形土器 口縁部はおり返しがつき、下端に刺突が加えられる。口縁部から口唇部にかけて燃糸文を残す。
  - 8 甕形土器（広口壺形土器？）底部欠損。器高に比べて口径、胴部径ともほぼ一定した広がりを持ち安定した器形を持つ。やや幅広の複合口縁部を持ち、下端に縄文の押捺が見られる。口唇部には縄文を施文。頸部から胴部に移行する接合部による稜にも同様に縄文による押捺が見られる。それより下位には4条のS字状結節文を施文。器表面は一様に赤彩される。
  - 9 広口壺形土器 球形に近い胴部から著しく内弯しながらすどく外反して口縁部を形づくもので、折り返し口縁となる。頸部に燃糸文を施した突帯を有し、口縁部との間に4段の縄文を施文して羽状縄文を構成する。器面は内外面とも赤彩。
  - 10 壺形土器 球形の胴部と細い頸部から強くくの字に外反する大形の土器で、頸部から胴部に移行する部分に、3条を1単位とするS字状結節文を3段施文して区画し、上位の区画に燃糸文Rを施文。器表面は赤彩。
  - 11 手捏土器 器高4.2cm。口唇部に刻目を持ち、器面はヘラ調整。指頭圧痕も認められる。
  - 12 手捏土器 器高4.7cm。口唇部に刻目を持ち、器面はヘラ調整。

### 江原台遺跡・江原台第1遺跡

遺跡名は異なるが、ともに1つの台地に隣接しているので一括して取り扱う。

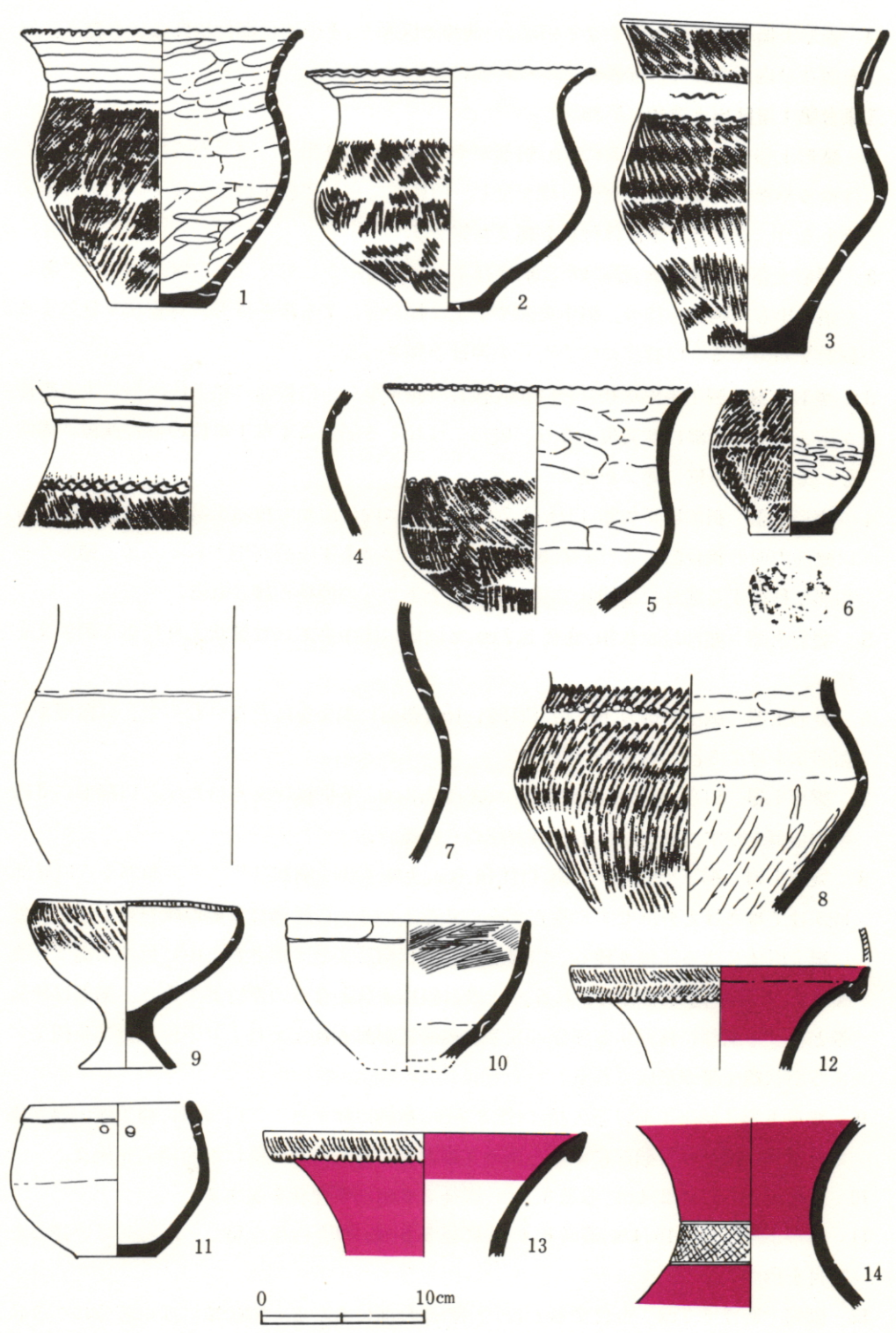
印旛沼南の、鹿島川河口西側の西方より大きく突出した台地の北端に位置し、標高26m前後、水田面との比高差19m前後を測る。飯合作遺跡、石神遺跡、渡戸遺跡、飯重新畑遺跡などの遺跡群に連なる遺跡の中で最も印旛沼に接近した遺跡である。江原台遺跡は昭和48年に確認調査が行われて以来、昭和50年から52年にかけて2次にわたる調査が実施され、縄文時代から歴史時代に至る竪穴住居址、土壌等150基以上が確認され、弥生時代後期に属する竪穴住居址7軒が検出されている。江原台第1遺跡は江原台遺跡の西側から北側の台地先端部に近い隣接した地域であり、昭和50年の確認調査に始まって51年、52年にわたって発掘調査が行われた。縄文時代から歴史時代に至る遺構が200基以上確認され、51年の調査では29軒、52年では30軒前後

の弥生時代後期に属する竪穴住居址が検出されている。この中には大形の住居が10軒前後存在する他に、銅鏃、石剣などの特殊遺物も数点出土しているとのことである。図示した出土土器は、昭和52年の調査で出土したものの一部である。

#### 江原台遺跡出土遺物（第35図）

- 1 甕形土器 最大径を口縁に持ち安定感を持つ。口唇部に内から外への連続した押圧が施され、口縁部から頸部にかけて6段の明瞭な輪積痕を持つ。胴部は縄文を施文。
- 2 甕形土器 口唇部は交互押圧により小波状。口縁部に3段の輪積痕を持ち、それより無文帯をはさんで縄文が施文される。底部は焼成後に貫通された小さい穿孔を持つことが特徴的。
- 3 甕形土器 胴部位と口径がほぼ同じ大きさを持つ。やや幅広の複合口縁部に縄文が施文され、それより下位の無文帯をはさんで1条のS字状結節文とともに縄文を施文。口唇部にも縄文を施文。
- 4 甕形土器 口縁部から頸部にかけて5~6段輪積痕を残すものの一部分で、輪積痕の下位の無文帯をはさんでS字状結節文、縄文が施文される。
- 5 甕形土器 底部欠損。胴部下半で強い屈曲を持って稜をなし、頸部から口縁部に向かってほぼ垂直的に立ち上がりながらやや外反する。口唇部には棒状工具による連続圧痕を持ち、幅広い頸部無文帯をはさんで縄文を施文。
- 6 甕形土器 口縁部欠損。小形の土器で、頸部に6~7条の波状櫛描沈線文が施文され、それより底部に至るまで縄文を施文。底面に木葉痕を持つ。
- 7 甕形土器 口縁部、底部欠損。大形の土器で、胴部から頸部に移行する肩口の部分に接合部による稜を持つ。文様は一切持たず、器表面はヘラミガキ、内面にヘラケズリが認められる。
- 8 甕形土器 口縁部、胴部欠損。胴部が算盤玉状に張り出す特徴的なもので、胴部から頸部に移行する部分に縄文原体を使用した押捺が認められ、それ以外は縄文を施文。
- 9 高環形土器 坏部は塊形を呈し、細く小形な脚部を持つ。上部はヘラケズリ調整後に刷毛目調整。内湾する口唇上と器表面上半には縄文を施文。
- 10 鉢形土器 複合口縁を呈し、やや碗形に近い。器面は内外面ともヘラミガキ後刷毛目調整。
- 11 無頸壺形土器 完形。複合口縁を呈し胴部はさほど丸味を持たない。複合口縁部下端に2個1組の小穴を対称的に持つ。器面はヘラケズリと刷毛目調整。
- 12 壺形土器 折り返し口縁部及び口唇部に方向を変えて施文した縄文、口縁部下端には縄文原体による連続押圧が施されている。内外面とも赤彩される。
- 13 壺形土器 折り返し口縁を呈するが、縄文は羽状を構成せず、口唇上の施文を持たない。口縁部下端に縄文原体による押圧を持つ。内外面とも赤彩。



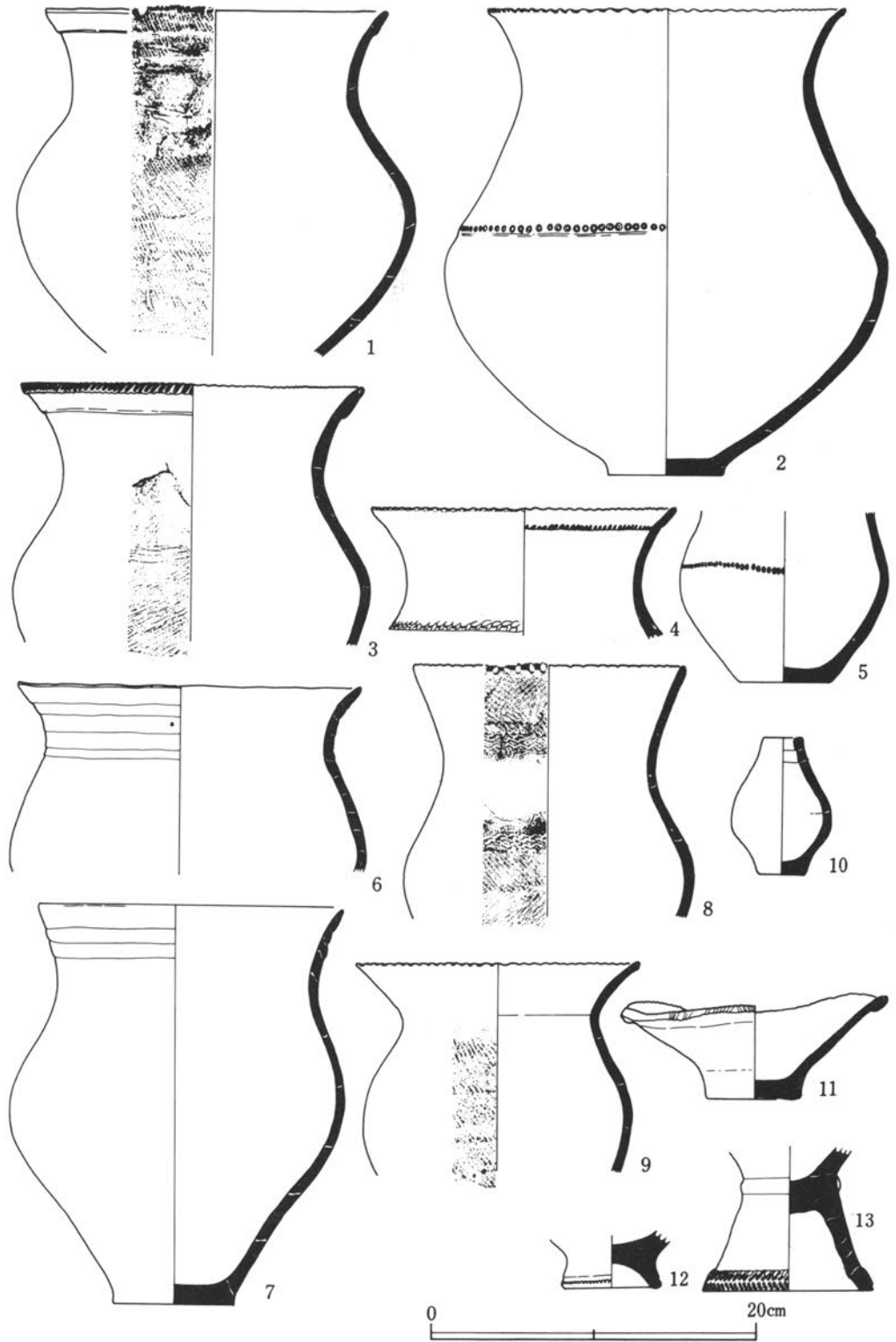


第35図 江原台遺跡出土土器 (1/4) (高田・1977)

- 14 壺形土器 最も径の細くなる頸部に、沈線で区画し、その間に網目状捺糸文を施文。器表面及び内面の一部に赤彩が認められる。

#### 江原台第1遺跡出土遺物（第36図）

- 1 甕形土器 底部欠損。口径21cm。胴部がやや外方に張り出し、頸部から口縁部にかけてはゆるやかに外反する。複合口縁を呈し、口唇部にRL回転圧痕文を施文。頸部は無文帯となり、それより下位は付加条縄文を施文。
- 2 甕形土器 口径22cm、器高28.5cm、底径7cm。ゆるやかに外反した口縁部に比べて著しく張り出した胴部を持つ。胴中央部やや上に接合部による稜を持ち、竹管状工具による刺突文がめぐる。口唇部には上からの押捺が施される。
- 3 甕形土器 胴下半部欠損。口径21cm。複合口縁を呈し、口唇部に絡条体圧痕による押捺が施される。頸部は無文帯となり、胴部に移行する部分に4本1単位の櫛描沈線が周回し、それより下位に縄文が施文される。
- 4 甕形土器 胴部以下欠損。口径18.7cm。口唇部は内外面から棒状工具による押捺を持ち、口縁部内面の接合部によってできた稜の部分には絡条体圧痕が施される。又、頸部から胴部に移行する部分には棒状工具を用いて上下からの押捺が施される。
- 5 甕形土器 頸部以上欠損。底径5.2cm。2同様に胴中央部に竹管状工具による刺突文を持つ。
- 6 甕形土器 胴下半部以下欠損。口径21.1cm。器面に縄文を持たないもので、口縁部から頸部にかけて5段の輪積痕を残す。
- 7 甕形土器 口径18.6cm、器高24.6cm、底径7.3cm。6同様施文を持たず、口縁部に3段の輪積痕を残す。底面には木葉痕が認められる。
- 8 甕形土器 胴下半部以下欠損。口径16.8cm。丸味を持つ胴部に比べて、頸部から口縁部にかけてはさほど外反せずに垂直ぎみに立ち上がる。口縁部は単純口縁を呈し、口唇部に縄文原体による圧痕が残る。口縁部はS字状結節文で区画された中に付加条縄文が施文されて羽状縄文が構成される。上段は斜格子状となるのが特異である。頸部は無文帯となり、胴部に移行する部分にS字状結節文が配され、それより下位に付加条縄文による羽状縄文帯が形成される。
- 9 甕形土器 胴下半部以下欠損。口径8.7cm。単純口縁を呈し、口唇部に絡条体圧痕が施される。口縁部から頸部にかけては無文帯とし、それより下位に単節縄文を施文。
- 10 壺形土器 口径2.4cm 器高8.5cm、底径2.6cm。手捏状を呈する。
- 11 鉢形土器 口径16.4cm、器高6.4cm、底径5.6cm。複合口縁を呈し、口唇部に連続した刻目を持つ。
- 12 脚部 底径6.2cm。台付甕形土器(?)の高台部にあたる。脚縁端に近い部分にヘラ状工具による押捺刻目を持つ。

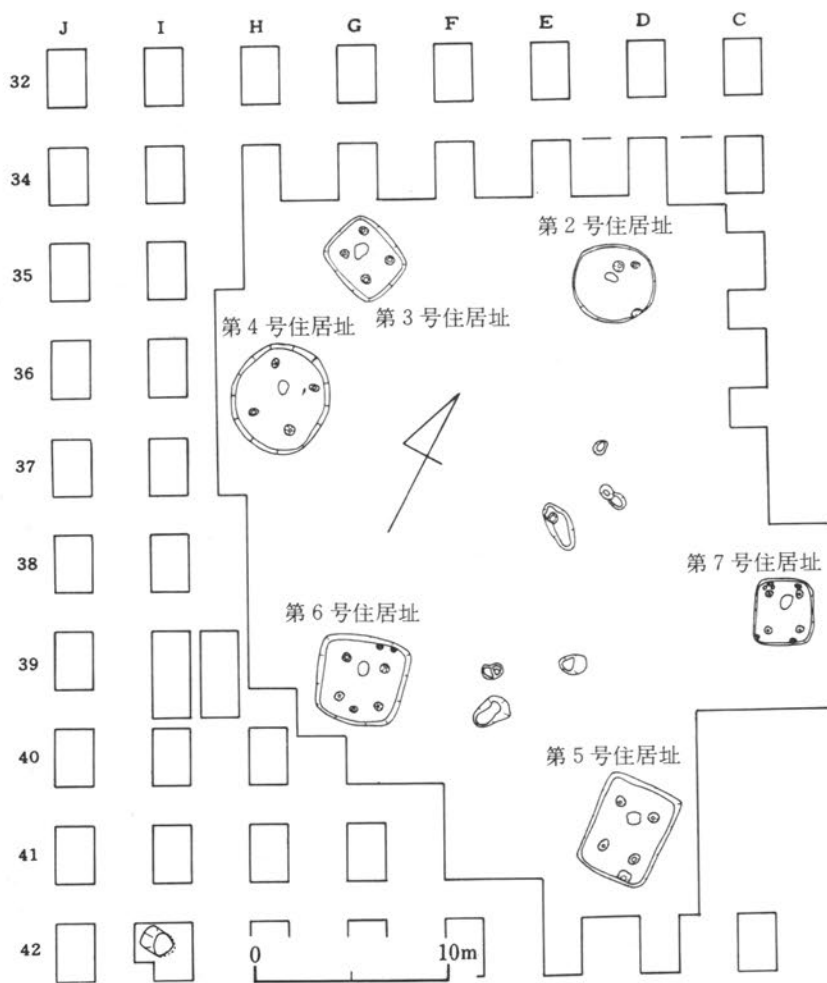


第36図 江原台第I遺跡出土土器 (1/4) (田村他・1977)

13 高坏形土器脚部 底径10.7cm。坏部と脚部が接する部分に隆帯が施される。脚縁端は複合口縁状を呈し、上端には縄文原体による押捺刻目、それより下位には羽状縄文が施文される。

**飯重新畑・生谷境堀遺跡 (第37図)**

鹿島川西岸の北東に伸びる独立丘を呈した台地上(下総上位面)に位置する。標高28m~29m

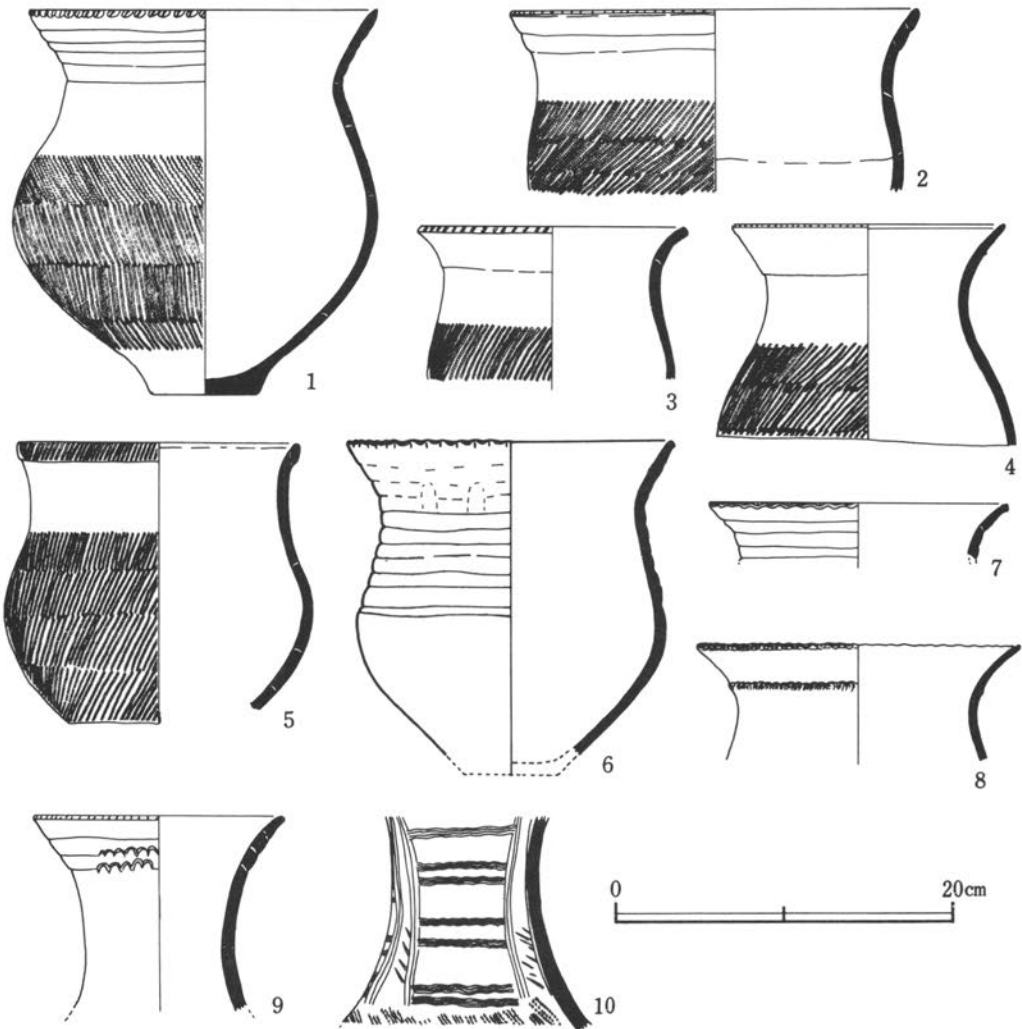


第37図 生谷境堀遺跡弥生時代遺構配置図 (1/100) (桑原他・1974)

を測る。久ヶ原期後半に位置づけられる竪穴住居址6軒が検出された。楕円形を呈する8号住居址を除いては隅丸方形を呈し、長辺5～6m、短辺4～5m前後を測る。生谷堀境遺跡は、飯重新畑遺跡の南西約1kmに位置する。ここでは後期の竪穴住居址6軒が検出され、これらが南側に面した台地先端部に環状に位置した特殊な集落形態を持つ。2号住居址が楕円形を呈する他は隅丸長方形ないし隅丸方形を呈し、長辺5m、短辺4m前後のものがほとんどで、住居形態や規模は飯重新畑遺跡と共通する部分が多い。

**出土遺物 (第38図)**

- 1 甕形土器 口径22.6cm、器高24cm、底径7cm。口縁部に5段の輪積痕を持つ。胴部は4段のLの捺糸文を施文。口縁部内側に靱痕が有る。
- 2 甕形土器 口縁部に2段の輪積痕。胴部はLの捺糸文。



第38図 飯重新畑・生谷堀境遺跡出土土器 (1/4) (桑原他・1974)

- 3 甕形土器 口縁部の輪積部は明瞭でない。胴部はLの捺糸文。
- 4 甕形土器 口径17.8cm、現存高14.5cm。口唇部捺糸文。頸部無文帯より下位に捺糸文を施文。
- 5 甕形土器 口径18.4cm、現存高18.2cm。口唇部細縄文。内外面に煤が付着。
- 6 甕形土器 口径20cm、現存高19.4cm。口唇部は押捺と横からの刺突文。口縁部から胴上半まで輪積痕。輪積痕は部分的に指頭による押捺が認められる。
- 7 甕形土器 口径18.4cm。口唇部は上からの押捺でつぶし、内側に爪形を施文。外面には煤が付着。
- 8 甕形土器 口唇部は上からの押捺。口縁部下は左から右方向へ見て押捺。
- 9 壺形土器 長頸を呈し、口縁部は大きく外反。口唇部に捺糸文が施文され、口縁部に3段の輪積痕を持つ。下端には5～6個の刺突が施される。
- 10 壺形土器 頸部だけの遺存で、3本を1単位とする沈線で縦位に区画し、4～5本を1単位とする波状沈線文が施文される。頸部下端には捺糸文を施文。

#### 阿玉台北遺跡（第39図）

遺跡は下総台地東北端の、北側に利根川、西方に黒部川によって解析された沖積地を望む台地上に位置する。標高50m前後、沖積面との比高差約16mを測る。遺跡南側の対岸の台地には著名な阿玉台遺跡、平良文館などが在る。台地は深い谷により東西に細長く中央部にやや一段底い鞍部を形づくっている。この鞍部を境にして、東側のA地点、南北にやや細長い西側のB地点の2個所にわたって調査が行われ、旧石器時代から古墳時代に至る遺構、遺物が検出された。

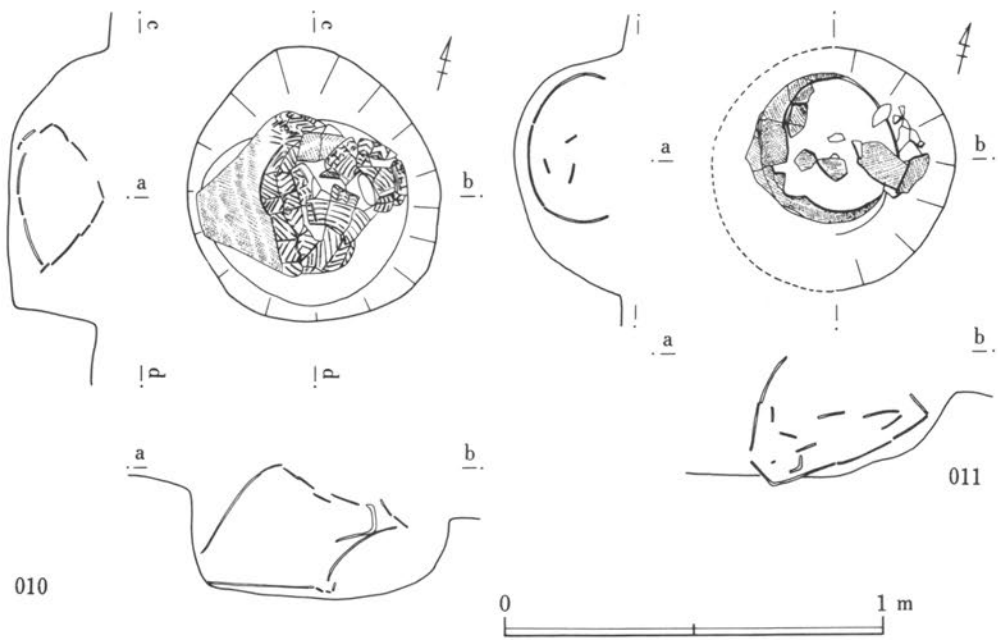
A地点からは弥生時代後期に属する竪穴住居址8軒と合口壺棺墓1基、B地点から竪穴住居址1軒と合口壺棺墓2基が検出されている。このうち竪穴住居址内から出土した土器は、印旛、手賀沼周辺地域と類似してはいるものの、やや様相を異にするものであり、須和田遺跡出土土器の一部分に共通するような土器も見受けられる。又壺棺墓が3基確認されているが、A地点、B地点におけるこれら壺棺墓と集落との関係、壺棺墓に使用された土器様相、印旛、手賀沼周辺地域文化との関連性、などいくつかの大きな問題点を含むものであり、阿玉台北遺跡の後期弥生文化研究に占める位置は、はなはだ大きい。

#### 出土遺物（1）（第42図）

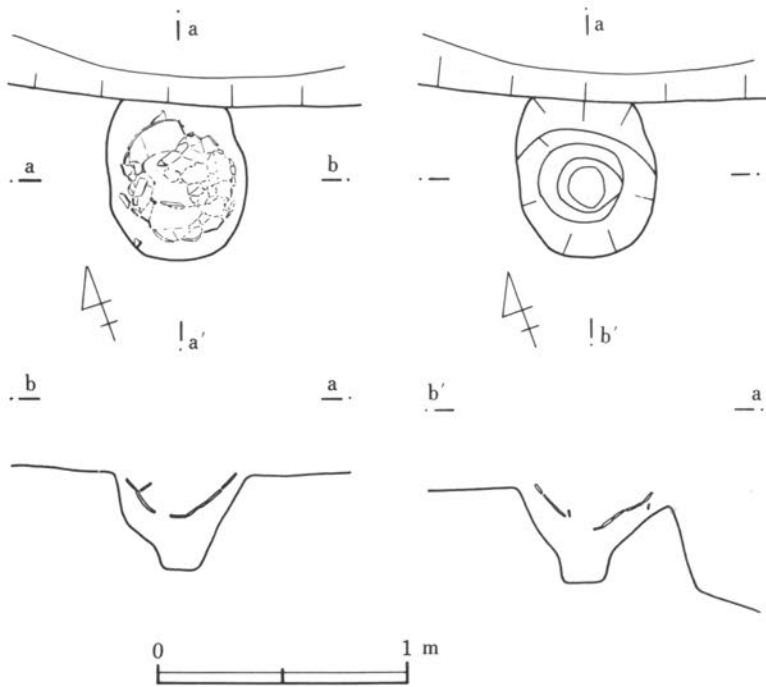
- 1 口径17.0cm、底径5.5cm、器高18cm。口唇部縄文原体の押捺、口縁部付加条縄文、胴部上位に2条のS字状結節文。胴部中位以下に付加条縄文。木葉痕。
- 2 口径20cm。斜行縄文、胴上半から口縁部にかけて煤付着。
- 3 口唇部縄文押捺。口縁部下位に瘤状突起が6ヶ所貼付、頸部上位と胴部に節の粗い単節の斜行縄文。



第39図 阿玉台北遺跡遺構配置図 (1/1,600) (矢戸他・1975)

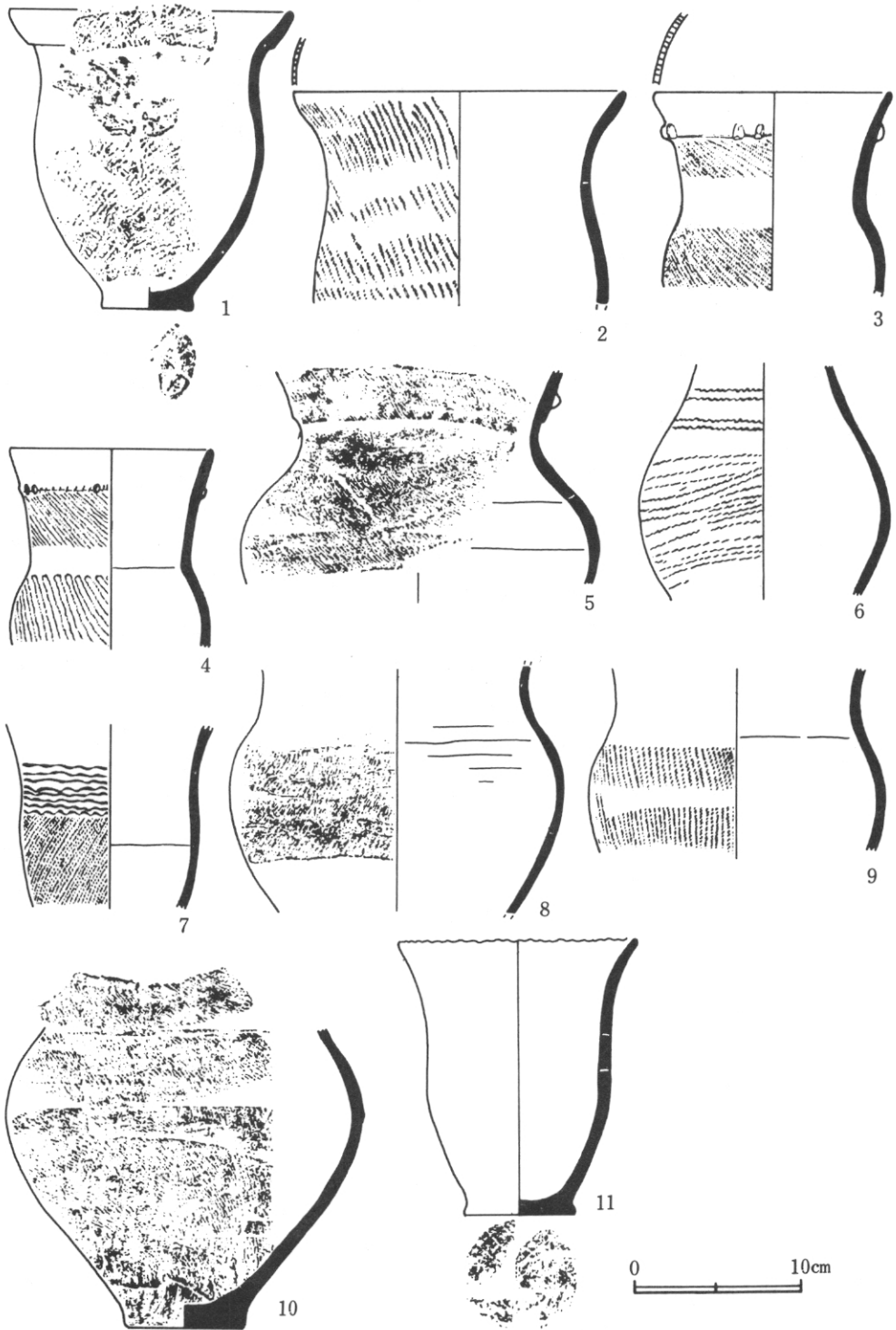


第40图 阿玉台北遺跡、B-010・011号土墳墓 (1/20)



第41图 阿玉台北遺跡A-056号土墳墓 (1/30) (矢戸他・1975)





第42图 阿玉台北遺跡出土土器(1) (1/4) (矢戸他・1975)

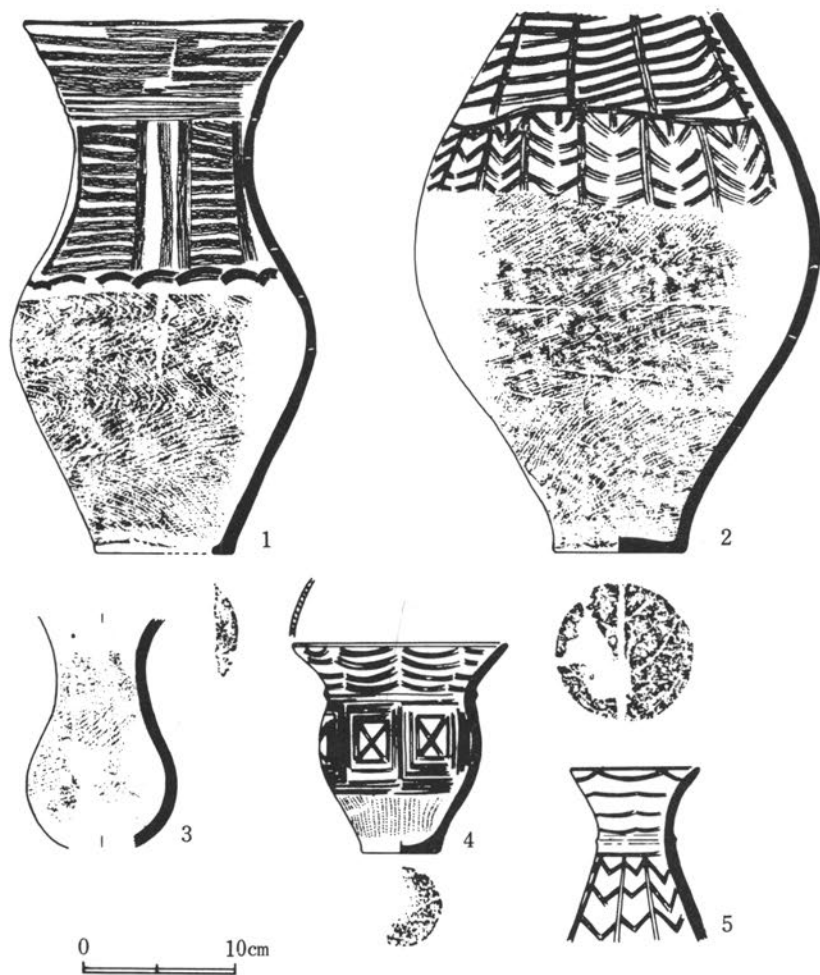
- 4 口径12.2cm。頸部、胴部に単節斜行縄文、口唇部にも同様な縄文。口縁部下端に2ケ1対の瘤状突起が6ヶ所に貼付。
- 5 頸部径14.0cm。複合口縁、無節の結節縄文と8ヶの突起が貼付。
- 6 壺形土器と記載。胴上位に2本単位のS字状結節文、それより下位は撚りのゆるい撚糸文。
- 7 頸部にS字状結節、それより下位は斜行縄文。
- 8 甕形土器 胴部破片。器面は綾絡状の撚糸文。
- 9 甕形土器 胴部破片。器面は単節の斜行縄文。
- 10 胴径21.2cm、底径7.0cm。頸部より無節の付加条縄文。
- 11 口径14.3cm、底部6.7cm、器高15.3cm。口唇部に縄文原体による押捺刻目、底面木葉痕。

#### 出土遺物（2）（第43図）

- 1 口径18.5cm、器高34.8cm、底径9.1cm、壺形土器。底部の大半を欠損。口唇部にヘラ状工具による刻目、口縁部から頸部上半にかけて櫛状工具による波状沈線文、その下にヘラ描沈線文が周回する。頸部中位から胴部上半にかけて縦位の沈線と波状沈線による組み合わせ。残りの部分にはS字状結節文。櫛状工具は6本単位。底面は布目痕が残る。
- 2 壺形土器 胴径26.2cm、底径8.6cm、器高35.5cm。3本単位による櫛歯状沈線が縦、横、あるいは綾杉状にめぐる。上位は3本単位で縦位に8本引き、その間を数本の沈線で結ぶ。下位は同様に縦位に16本引き、縦位の沈線を軸として綾杉状に沈線が引かれる。上位下位の境界に横位の沈線が周回する。それより下位は単節の縄文。
- 3 壺形土器 小形で、頸部を除いて全面に斜行縄文。頸部には沈線によって三角形、梯子様の文様を施文。
- 4 甕形土器 口径14.2cm、底径5.2cm、器高13.9cm。口唇部に縄文。口縁部に半截竹管による連弧文、胴部にも同様な工具で重四角文が6区画、胴部下半には単節の縄文。頸部には断面三角形の隆帯が貼付される。底部には木葉痕が残る。
- 5 壺形土器 頸部に断面三角形の隆帯。口径8.6cm。口縁部に連弧文、隆帯より下位は山形状沈線が周回し、山形状の頂部から縦位の沈線が垂下する。

#### 出土遺物（3）（第44図）

- 1 壺形土器 口径21.4cm、複合口縁部に3本単位の棒状突起を貼付し、その上面にヘラ状工具による刻目が施される。外面はヘラミガキが施されているが、一部に煤が付着。
- 2 中位に3本の撚糸によるS字状結節文、半截竹管による2本の山形文。
- 3 ヘラナデされた器面に、羽状縄文と異状結節縄文を施文。底部は若干上げ底。
- 4 甕形土器 胴下半以下欠損、口径13.6cm。口径部上端に刻目、頸部に円形竹管文を施文。
- 5 甕形土器 口径25.0cm、底径7cm、器高27.2cm。複合口縁部下端と胴部下位の接合部に刻目。煤が付着。



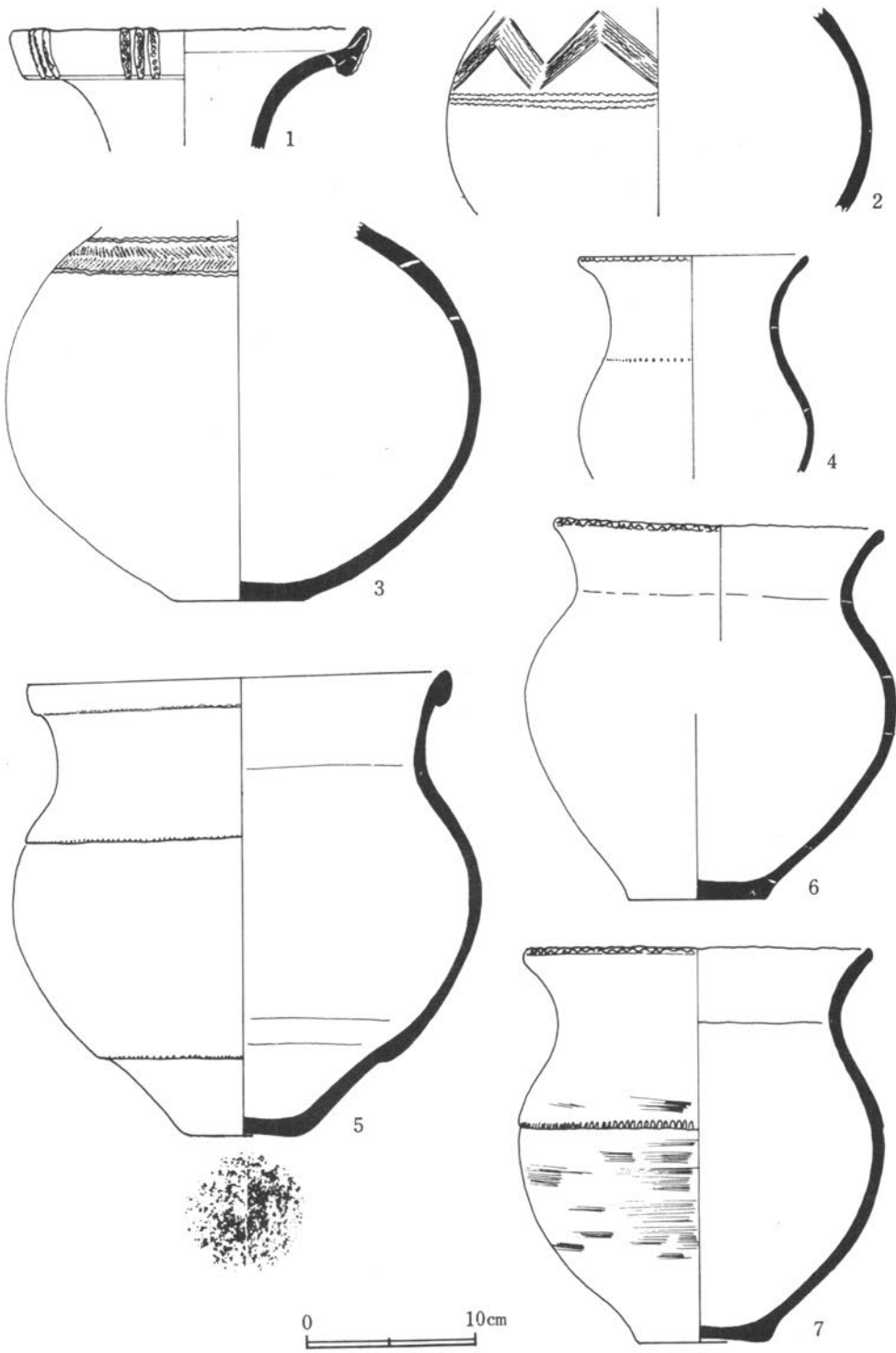
第43図 阿玉台北遺跡出土土器(2) (1/4) (矢戸他・1975)

6 甕形土器 口径19cm、底径8cm、器高22cmで、口唇部は押捺。

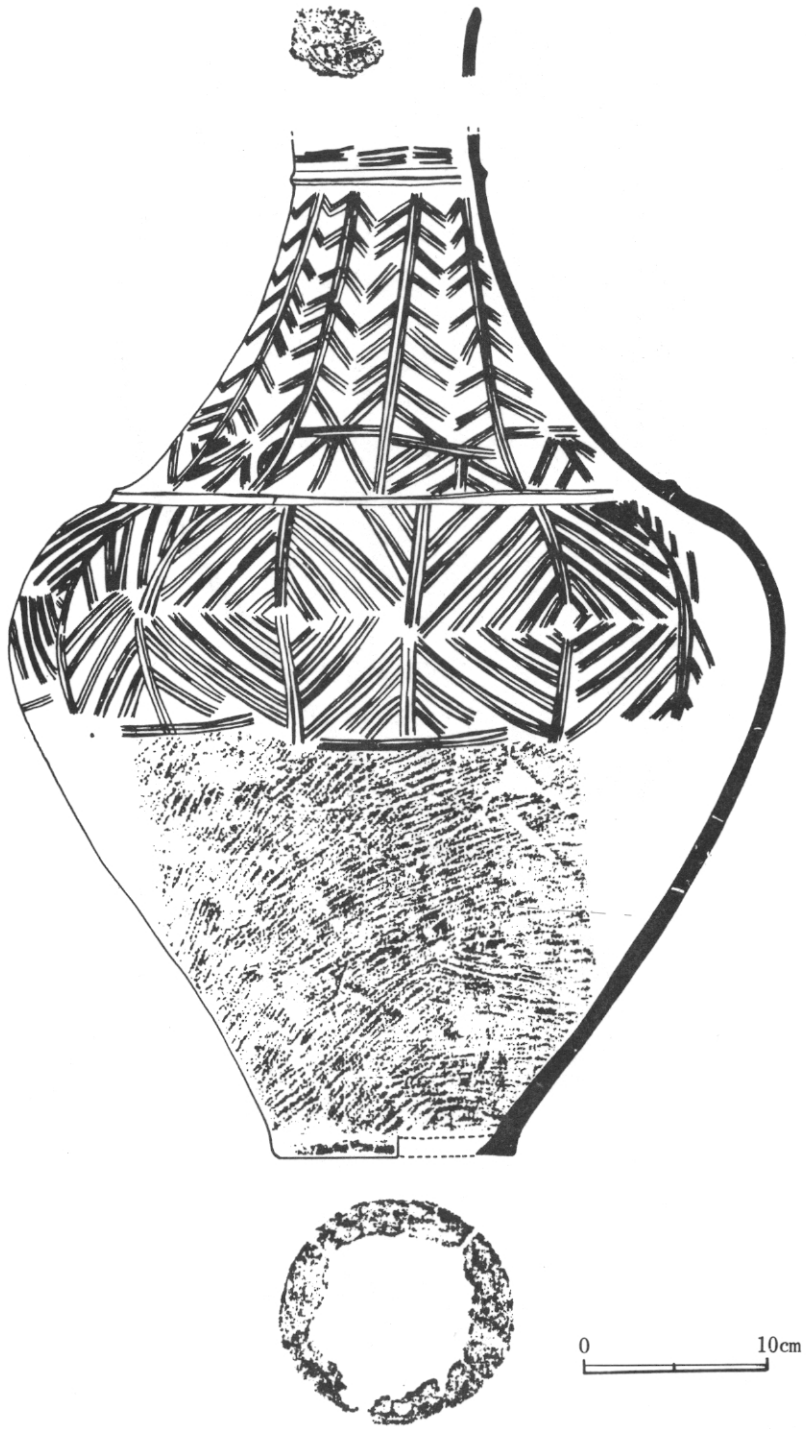
7 甕形土器 口径20.4cm、底径7.6cm、器高23.5cm。口唇部にヘラ状工具による刻目が施され、同様な施文が胴部中央部の接合部にも見られる。

**B-010・011号土壙墓 (第40図)**

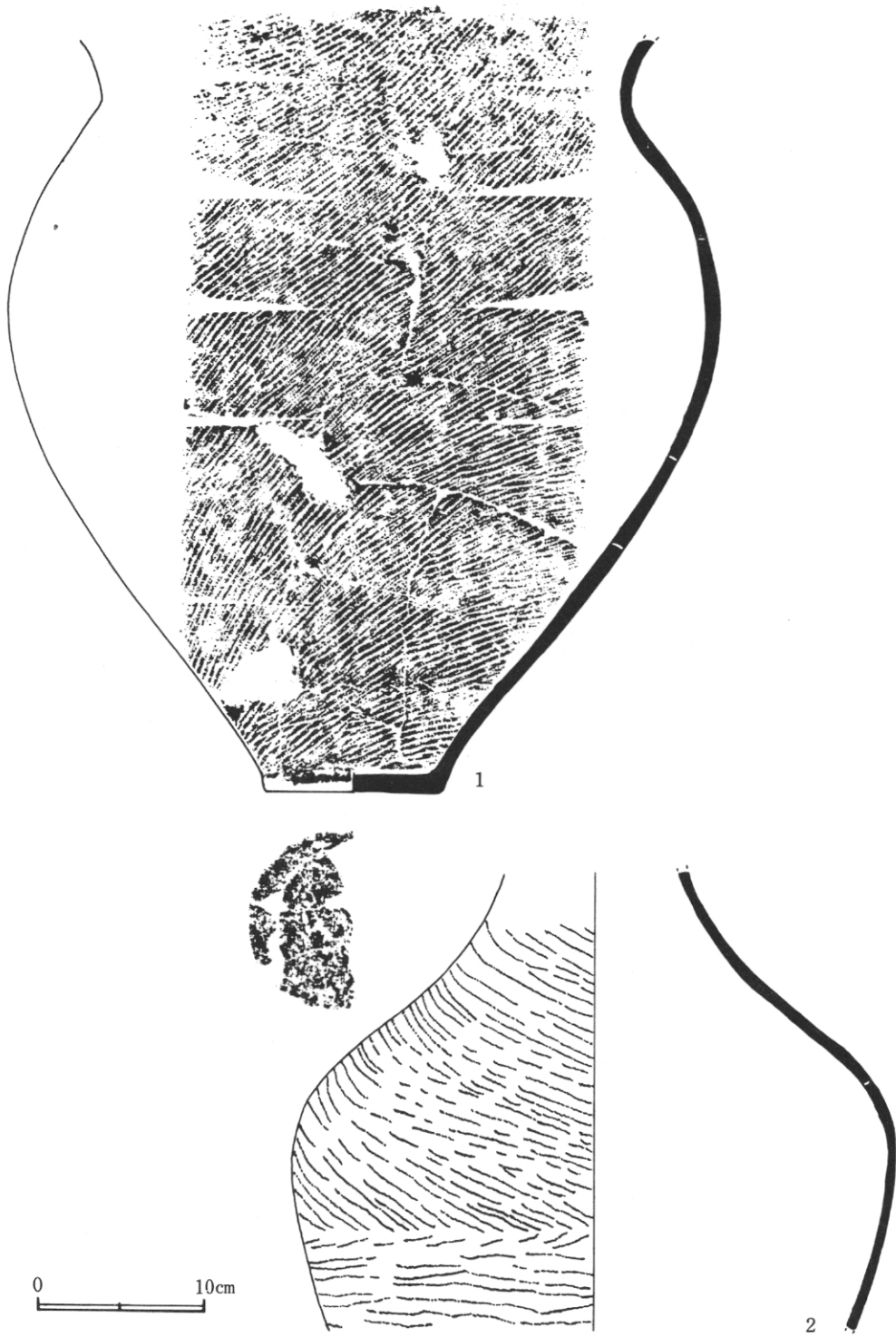
いずれも2号墳封上下に近接して位置する。010は長径72cm、短径67cmの円形を呈し、深さ約25cmを測る。土壙墓内からは2個体の壺形土器(第43図2、第45図)が床面に接するように



第44図 阿玉台北遺跡出土土器(3) (1/4) (矢戸他・1975)



第45図 阿玉台北遺跡出土土器(4) (1/4) (矢戸他・1975)



第46図 阿玉台北遺跡出土土器(5) (1/4) (矢戸他・1975)

横倒しの状態で出土している。頸部以上の部分を欠損した第43図2は第45図の頸部を覆うように出土していることから合口壺棺墓の形態に属するものであろう。

011は010南側1mほどに位置し、西半部は消失している。径65cm前後の円形を呈するものと思われ、遺存する部分で深さ22cmを測る。土壙墓内から口縁部を欠損した甕形土器(第46図1)と底部が壁に接するように出土している。合口甕棺墓の形態をとるものであろう。

#### A-056号土壙墓(第41図)

遺跡東端に位置し、後世の溝状遺構により壁の一部分が破壊されている。楕円形を呈し、長径47cm以上、短径40cm、深さ約30cmを測る。

土壙墓内からは、第46図2に掲載された口縁部と底部を欠損した壺形土器が頸部を下に床面から浮いた状態で出土している。身か蓋となるかは不明である。この土器より8mほど北側に離れた溝状遺構内から第43図1の壺形土器が出土しており、何らかの関連性も考えられるが、あるいはこれとは別に破壊された土壙墓の存在が考えられるかもしれない。

#### 出土遺物(第45図、第46図1・2)

第45図 長頸壺形土器 口縁部欠損。頸径10cm、胴径42cm、底径12cm、現存器高55.6cm。胴部下半に単節の縄文。頸部と胴部上端に断面三角形の隆帯が貼付され、3本単位の櫛状工具で施文。頸部は櫛描沈線を縦位に10本引き、その間に縦位の沈線を軸として沈線を羽状に施文し重四角文を構成している。底部は焼成後打ち抜かれ、布目痕を残す。口縁部と思われる破片には口唇部に縄文の押捺、口縁部に3本単位の櫛状工具による羽状文が認められる。

#### 出土遺物(第46図1・2)

- 1 甕形土器 口縁部欠損。口径34cm(推定)、頸径31.4cm、底径10.5cm、現存器高45cm。全面に単節斜縄文が施される。底部に布目痕。
- 2 壺形土器 口縁部、胴部下半を欠損。胴部最大径36cm。器面は一様に単節縄文を絡条体に巻いて施文された撚糸文。

#### 佐野原遺跡

遺跡は北に向かって開口した馬蹄形を呈した台地上西縁に位置する。遺跡南側は、第三紀層(名洗層)と呼ばれる屏風ヶ浦を経て太平洋に至る。標高は48mで、北側水田面との比高差は28mを測る。遺跡付近には、北西約4.5kmの地点に余山貝塚、北東1kmに粟島台遺跡がある。

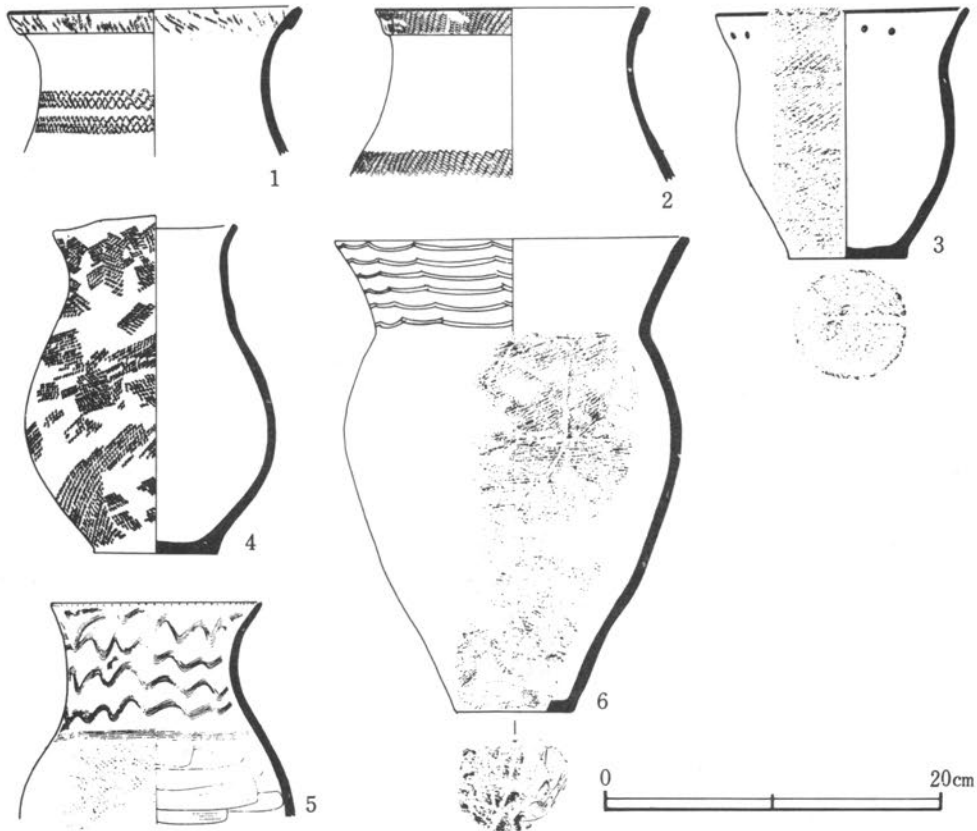
調査によってすべて後期に属する竪穴住居址7軒が検出されたが、出土遺物には印旛、手賀沼周辺地域に見られるものとは若干異質なものが多く、興味深い資料が多い。

竪穴住居址は一辺が5m前後の隅丸方形が半数を占めるが、1辺が4m弱の隅丸方形を呈するもの1軒、長辺が8m、短辺7m弱の大形の隅丸長方形2軒がある。出土土器は甕形土器、壺形土器などであるが、1号住出土の複合口縁を呈して頸部に刺突文を持つ壺形土器を除いて

は印旛・手賀沼系式土器がほとんどであり、なかでも沈線文の施文される土器が多い。これらは半截竹管状工具、櫛歯状工具、ヘラ状工具を用い、第47図5、6のように波状、連弧状に施文される他に鋸歯状、斜格子状と、多岐にわたり、破片ではあるが6号住居址からは頸部に重四角文状に施文されるものもある。その他の遺物としては、土製紡錘車、8号住居址から琥珀製勾玉2個、7号住居址から半磨製石斧、6号住居址から碧玉製管玉などが出土している。

**出土遺物（第47図）**

- 1 甕形土器 胴下半部欠損。複合口縁を呈し、上の部分の内外面にRの捺糸文を施文。頸部には無文帯をはさんで2段のS字状結節文を施文。
- 2 甕形土器 胴下半部欠損。頸部の立ち上がりがゆるく、最大胴部が口径よりも大きい複合口縁部に縄文が施文され、頸部は無文帯となる。それより下位は縄文を施文。
- 3 甕形土器 口径14.8cm、底径7cm、器高14.6cm。単純口縁を呈する。口唇部から底部にいたるまで付加条縄文を施文。口縁部に表面から穿たれた2個一対の補修孔が2箇所認められる。底部には木葉痕が認められる。



第47図 佐野原遺跡出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）（樋口・1974）



- 4 壺型土器 口径11cm、底径7.4cm、器高20.1cm。胴部下半に最大径を持ち、頸部から口縁部にかけてはさほどくびれず、ゆるい立ち上りを示す。口縁部から底部にかけて縄文を施文。
- 5 甕形土器 口径12.5cm、頸部から口縁部にかけて曲線状にゆるく外反し、4のような壺形土器に近い特徴を持つ。口唇部下端に小刺突を持ち、口縁部から頸部にかけて6本1単位の櫛描沈線が波状に数段施文。頸部から胴部に移行する部分には同様は櫛描沈線が横位に施文され、それより下位は縄文を施文。
- 6 甕形土器 口径22cm、底径7cm、器高30cm。単純口縁を呈し、頸部から口縁部にかけて強くくの字に外反する。口唇部には浅い小刺突が残る。口縁部から頸部の屈曲する部分にかけて半截竹管による連弧文が6段施文される。これより底部にかけては付加条縄文を施文。底部には木葉痕。

#### 大庭遺跡

遺跡の立地、概要については第1節と重複するため、ここでは後期に属する遺構、遺物に関関してだけを記載する。

検出される遺構はすべて竪穴住居址で、20軒を数える。これは中期の遺構総数の約半分である。内訳は、久ヶ原期10軒（12軒）、弥生町期2軒、前野町期8軒で、この他に正確な判断はむづかしいが、宮ノ台期か久ヶ原期のいずれかとも決めがたい住居址が7軒ほど挙げられる。あるいは古墳築造の際に消滅した竪穴住居址も考えられるが、いずれにしても30軒前後の存在が考えられる。

これら各時期の竪穴住居址の台地における占地は、非常に興味深い事象がいくつかあげられるとともに、これらの竪穴住居址を考える意味において中期の占地を切り離して考えることは不可能なことである。

久ヶ原期の竪穴住居址（Y-14・15・18・19・20・21・23・33・55）は記述された範囲で理解されるのは9軒で、このうち7軒が東西に伸びた台地の中央部よりやや西側に集中し、他の2軒は東側の中期集落址の中に地点を異にして位置する。Y-15号址のように長辺が10mを測る大形のものもあるが、概ね4～6m前後の楕円形、不整形、隅丸方形を呈し、この中でも不整形、隅丸方形を呈するものは前時代には見られなかったもので、やや新しい形態に属するものであると指摘している。遺構分布図によれば、地点を異にしたY-33・55号址は、はたして他の集中した同時期の住居址と同一視すべきかどうか判断に迷うが、これら2軒を除外視すれば、久ヶ原期の住居址を繞る環濠は存在しないようである。ただ、遺構分布を観察すると、中期宮ノ台期に比定される2軒（あるいは1軒）の可能性も考えられる。周溝（V字溝）は、南側台地縁辺の3号墳付近で不明瞭となり、本来の竪穴住居址を包括する部分の限界までを理解することは不可能である。あるいは西側のE-4・E-5号址のような溝に連なる可能性も

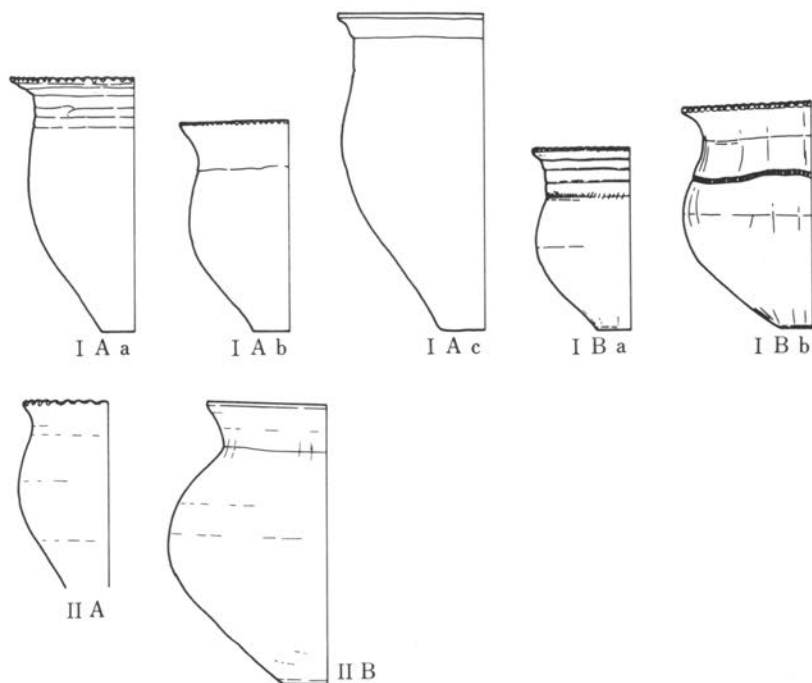
考えられるが、むしろ3号墳付近で消滅してしまうか、2号墳に向かって伸びるかのいずれかと考えるのが妥当であろう。

弥生町期の竪穴住居址（Y-8・10）は、わずかに2軒を数えるだけで、久ヶ原期よりもさらに西側の前野町期の住居址群に囲まれるように占地しているのが特徴的である。形態は隅丸方形を呈し、炉址・貯蔵穴以外には柱穴・壁溝は見あたらない。

前野町期の竪穴住居址（Y-1・2?・4・5・6?・9?・11・12）は9軒を数え、前述した弥生町期の竪穴住居址と同じ占地を示し、やや南北に連なるように位置している。これらは3～4軒を1単位とするグループが弧状に3グループに分かれて配置されていることが指摘されている。平面形態は隅丸方形を呈し、柱穴・炉址・貯蔵穴等を付帯するが、支柱穴を完備するものはY-11号址1軒だけである。

出土遺物は、土器の他に石斧、土製紡錘車、石製・土製勾玉等が出土しているが、土器を除いたものは明確に後期と断定されるものは少なく、挟入石斧、扁平片刃石斧などの豊富さを考慮するとむしろ中期に属するものがほとんどだと考えられる。

土器は、印旛・手賀沼系式土器は全くなく、すべて南関東の編年で捉えられる土器ばかりである。壺形土器、無頸壺形土器、鉢形土器、甕形土器と器種に富むが、壺形土器は比較的少なく、むしろ甕形土器、鉢（浅鉢）形土器が多い。壺形土器の複合口縁を呈する部分は、縄文が施文される他に棒状浮文を伴うもの、竹管状工具による円形浮文の組み合わせに円形赤彩文を



第48図 大厩・菊間・南向原遺跡出土甕形土器分類 (1/6)

第3表 甕形土器一覽表

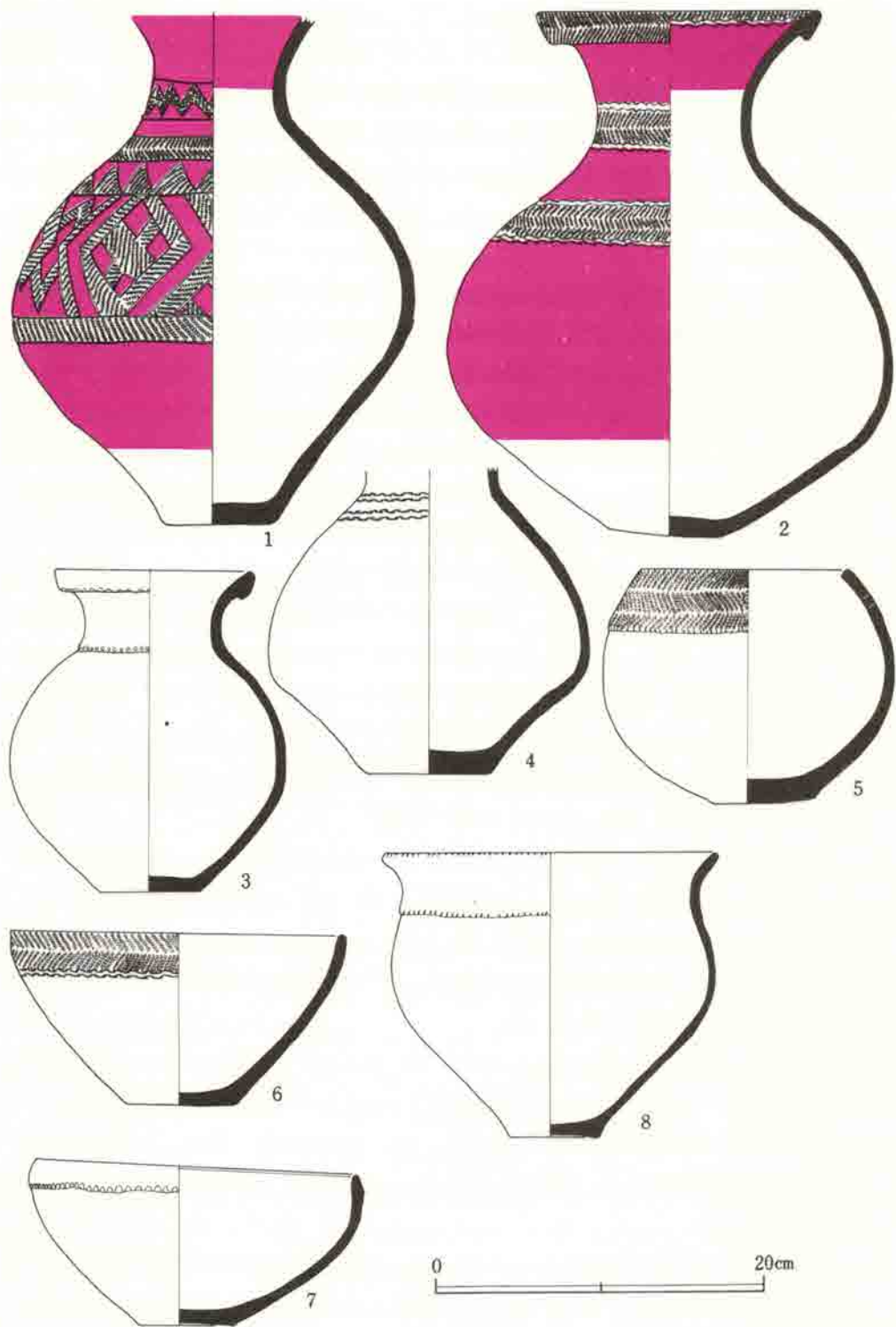
分 類 住居址番号	I A a	I A b	I A c	I B a	I B b	II A	II B
菊間 10 号住			○				
菊間 18 号住	○						
菊間 25 号住		○					
菊間 28 号住	○						
菊間 34 号住		○					
菊間 1 号周溝					△		○○
大厩 Y-4 号住					○	○	
大厩 Y-10 号住					○		
大厩 Y-15 号住	○				○		
大厩 Y-19 号住	○○			○	○		
大厩 Y-20 号住	○○				○△		
大厩 Y-23 号住					○△		
大厩 Y-24 号住				○	○△△	○	
大厩 Y-31 号住						○	
大厩 Y-33 号住	○○○	○○					
大厩 Y-35 号住						○	
大厩 Y-36 号住		○					
大厩 Y-55 号住		○					
大厩 Y-59 号住			○				
大厩 Y-60 号住	○○	○					
大厩 Y-72 号住		○					
大厩 6 号墳				○	○		
大厩 7 号墳		○					
南向原 1 号住			○				
南向原 3 号住			○				

伴うもの（第2図参照）などがある。又文様手法に関しては、Y-14・44号址出土土器のように沈線を持たない羽状縄文の土器や、山形沈線文の土器は、南関東の編年に対比しても明確に後期と断言するのを躊躇するような土器であり、宮ノ台期から久ヶ原期に移行する過渡的な様相を含む土器と受けとれる。鉢形土器は脚部を付帯するものはなく、複合口縁と平口縁を呈するものだけで、前者には羽状縄文と刻目を持つものの他に何ら施文を持たないものがある。平口縁のものは口縁部上部の沈線で区画された部分から口辺部にかけて羽状縄文が施文される。甕形土器は高台部を持たないものがほとんどを占め、高台部を付帯するものはわずか2点にすぎない。報文中ではこれらの甕形土器は形態的にいくつかの種類に分類されるが、大きく分けて、口縁部が波状を呈し、輪積痕の末端に刻目を持つもの、口縁部が波状を呈し、輪積痕を残さずに末端に刻目を持つものの口縁部が波状を呈し、接合部の稜だけを残すもの、の3種に分類されると述べられている。第3表は大厩遺跡とさほど距離を隔てない菊間遺跡、南向原遺跡を含めた3遺跡のほぼ器形の窺える後期の甕形土器を抽出したものである。これらは他の共伴する土器は無視しているため、必ずしも土器形式に順拠していない。従ってIAaからII Bの7形態に分けた根拠は、輪積痕による成形技法が装飾価値を持つという形で土器に反映していることを重視し、このような手法がどのような形で推移して行くかを便宜上形態的に分類したものである（第48図参照）。ここでは25個体を抽出しているが、このうち△印は口縁部を欠損するもので、IBaに類似するが、よりIBbに近いものと推定したものである。この表から、大厩遺跡出土の土器はIAa、IAbのグループとIBb、II Aのグループとに大きく分けられ、IAC、IBaの土器は非常に少ない。菊間遺跡10号住のIAC 1点はIAbとの区別が付きにくい、総体的にIAa、IAbの土器が主体的な位置を占めるようである（IBbが1点あるが、やや刻目の形態が他と異なるのが疑問である）。南向原出土の土器は住居数、遺物とも少なく、消極的であるが、器形的にも大厩、菊間遺跡とはやや異なり、どちらかと言えば両者の中間に位置するようである。

以上のことから総合して、大厩遺跡と菊間、南向原遺跡とはやや様相を異にし、特に前2者とは形態的な差異が大きいと言える。単に時期差によるものと考えられなくもないが、むしろ巨視的に同じ後期に属する文化を持つとするならば、何らかの意味で両遺跡の時間的な差異を無視することはできないのかもしれない。

### 請西遺跡

遺跡は小櫃川の河口に発達した砂洲上に立地する。木更津市街地の東側、西流して東京湾にそそぐ矢那川南側に展開する標高50m前後の丘陵上に位置する。矢那川北部を西流する小櫃川から矢那川流域にかけては多くの遺跡数を誇り、祇園貝塚をはじめとして菅生遺跡などの著名な遺跡が多いが、とりわけ金鈴塚や、手古塚古墳に代表されるように多数の古墳群の存在が指摘される地域でもある。



第49图 請西遺跡出土土器 (1/4) (請西遺跡発掘調査団資料)

請西遺跡は、これらの古墳群をA～H群に分けたうちのF群に該当する。昭和48年から49年にかけての予備調査では、A・B・C地点から竪穴住居址、方形周溝墓、古墳などが確認され、隅丸方形を呈した久ヶ原期に属する竪穴住居址3軒がC地点で確認されている。昭和49年の調査では第Ⅰ～Ⅲ群に分けた古墳群の他に竪穴住居址5軒、方形周溝墓などが確認され、第Ⅱ地点のマウンドを持つ方形周溝墓からは頸部に刺突文を持つ土器の他に、周溝内の2基の土壙からガラス玉6個が検出されている。

#### 出土遺物（第49図）

- 1 壺形土器 口縁部欠損。底径6.9cm、現高30.7cm。大形の土器で最大径を胴中央部に持つものである。頸部から胴部にかけて文様帯を構成するが、頸部文様帯と胴部文様帯とではやや趣を異にする。頸部は沈線で上下を区画し、山形状沈線が施文された中に縄文が施文される。胴部は頸部から胴部に移行する部分と胴中央部やや下位の部分に羽状縄文ないしは単一斜行縄文を伴う平行沈線で区画し、その間に鋸歯状、綾杉状、十字状の平行沈線文が施文される。沈線文間は一様に縄文が施文される。現存する頸部上端から胴下半にかけての施文されない部分と頸部内面に赤彩が施される。
- 2 壺形土器 口径16.8cm、器高31.9cm、底径6.8cm。複合口縁を呈し、胴部は丸味を持つ。複合口縁部は羽状縄文が施文され、口縁部内面にもS字状結節文を伴う縄文が施文される。頸部から胴上半部にかけては、無文帯をはさんでS字状結節文で区画された2ないし3段の羽状縄文帯が形成される。器表面の頸部から胴下半部にかけてと、内面の頸部上半部にかけての施文されない部分は赤彩が施されている。
- 3 壺形土器 口径11.5cm、器高19.4cm、底径6cm。複合口縁を呈し、下端に刻目を持つ。頸部から胴部に移行する部分の肩口に刺突文を施文。
- 4 壺形土器 口縁部欠損。底径7.4cm、現高18.4cm、最大胴部径19.5cm。胴下半部に稜を持ち、安定した形態的特徴を持つ。頸部下端に2段のS字状結節文が施文される。
- 5 無頸壺形土器 口径12.5cm、器高14.2cm、底径6.1cm。球形に近い胴部を持ち、口縁部は著しく内傾する。口縁部は複合口縁状を呈し、下端に連続した刻目を持ち、3段の縄文が施文されて羽状縄文を構成する。
- 6 鉢形土器 口径20cm、器高10.4cm、底径6.7cm。浅鉢形を呈し底部からほぼ直線的に外反して口縁部にいたる。口縁部はS字状結節文で区画され羽状縄文が施文される。
- 7 鉢形土器 口径19.4cm、器高10.2cm、底径5.6cm。胴部はゆるく外反し、口縁部はやや内傾する。複合口縁を呈し、下端にヘラ状工具による連続した刻目を持つ。底部は若干上げ底ぎみとなる。
- 8 甕形土器 口径20cm、器高17.3cm、底径5.4cm。口縁部から頸部にかけてはゆるくくの字状に外反するのに対し、胴下半部はやや直線状となる。頸部から胴部に移行する部分と口唇部に連続した刻目を持つ。

## 田子台遺跡

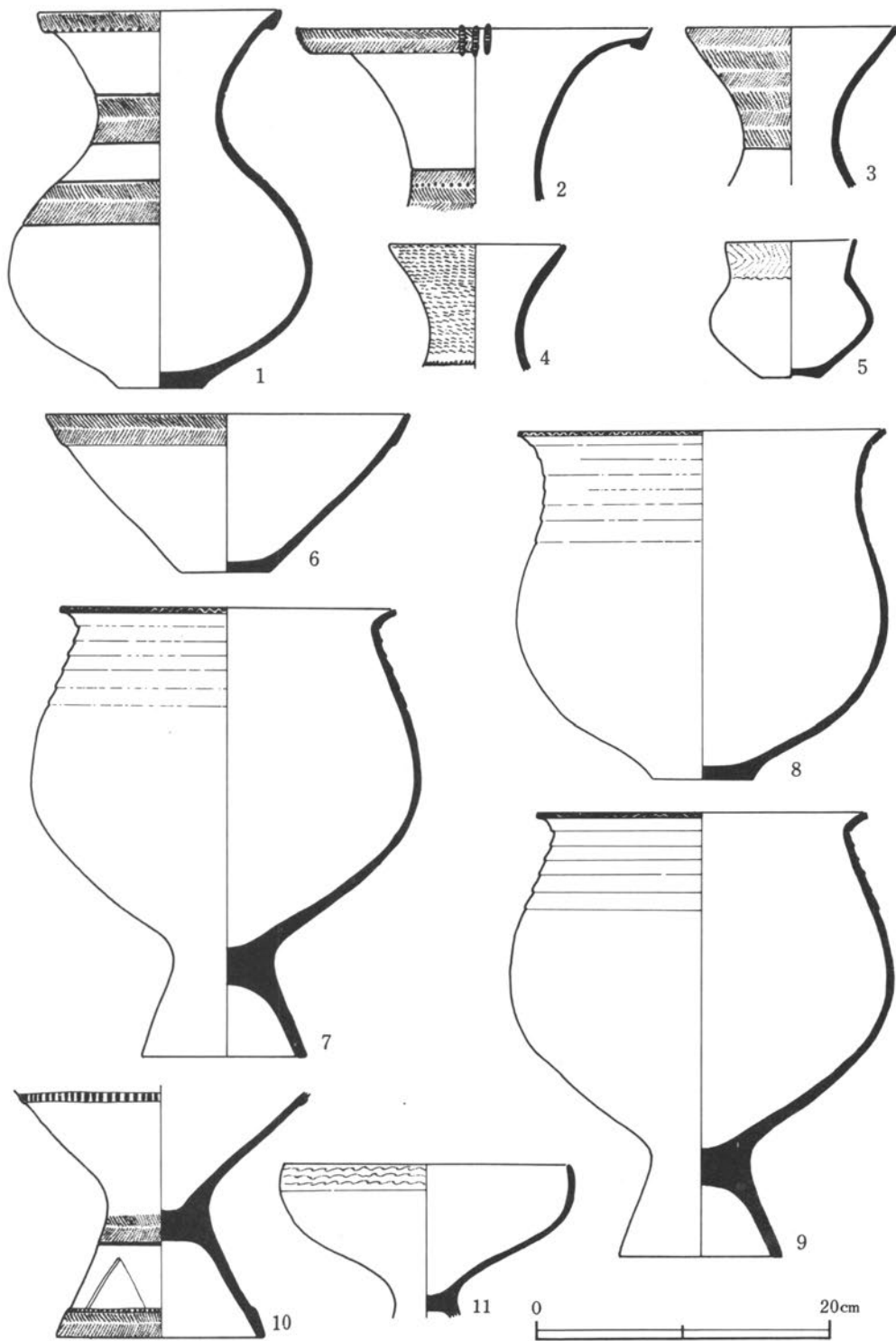
遺跡は、鋸山、清澄山の東西にならぶ嶺岡山系によって上総地方と安房地方とが接する地域の東京湾に面する鋸山の南側に位置する。沖積低地は海岸から東側に約2kmほどのびて台地に移行し、田子台遺跡は、東西にのびる小河川の佐久間川南側の西側に突出した舌状台地上に立地する。ここから東京湾をはさんだ西側の三浦半島までは、直線距離で20kmにも満たない。

田子台遺跡の調査が行われる数年前、酒詰仲男によって試掘が行われ、縄文前期関東山式土器や石器等が検出されたが、昭和27年の早稲田大学による発掘調査では、若干の弥生時代中期土器（小田原期）を含むが、ほぼ久ヶ原期に比定される竪穴住居址2軒が確認されている。第2図に掲載してあるのはこのうちの1軒で、胴張隅丸方形を呈し、支柱穴4ヶを持つ。もう1軒は同様に胴張隅丸方形を呈するが、長径9.6m、短径7.5mと大形の住居であり、南壁の一部分に4.4×4.0mの楕円形をした浅い張り出し部を伴うのが特徴的である。

出土遺物は壺形土器、鉢形土器、甕形土器、高環形土器の他に、紡錘形軽石製品、ガラス製小玉、青銅破片等がある。

### 出土遺物（第2図、第50図）

- 1 壺形土器 2号住出土。口径15cm、器高25.2cm、底径6.2cmの複合口縁を呈し、縄文を施文して後下端に押捺。頸部から上半部にかけて3.5cm前後の沈線文帯を横位2段に区画し、その中を羽状縄文でそれぞれ繞される。赤彩は不明。
- 2 壺形土器 頸部以下欠損。口径24cm。複合口縁を呈する口縁部は大きく漏斗状に外反し、この部分に羽状縄文が施文され、刻目を持つ3個の棒状浮文が4個所にわたって附される。又口縁部上下端にも刻目が施される。頸部は沈線で区画された羽状縄文帯が認められ、さらにこの中に小刺突が施される。口縁内面に赤彩。
- 3 壺形土器 頸部以下欠損。口径14.6cm。大きく漏斗状に外反する単純口縁を呈する。頸部を沈線で区画し、それより口縁部にかけて細縄文を6段施文して羽状縄文帯を形成している。赤彩不明。
- 4 壺形土器 頸部以下欠損。口径12cm。3と同様な器形を持つが、頸部は沈線による区画ではなく押捺による連続したS字状結節文が施文される。赤彩不明。
- 5 小形広口壺形土器 2号住出土。口径9cm、器高9.3cm、底径4cm。頸部から口縁部にかけて直線的にくの字に外反するもので、この部分に条間隔の粗い羽状縄文が施され、下端に原体の押捺らしい圧痕を持つ。赤彩不明。
- 6 鉢形土器 2号住出土。口径24.8cm、器高11cm、底径6cm。底部からほぼ直線的に外反して複合口縁に至る。複合口縁部は羽状縄文を構成。赤彩不明。
- 7 台付甕形土器 口唇部に押捺による連続した刻目を持ち口縁端から頸部にかけて6段の粘土帯の接合による輪積痕を残す。
- 8 甕形土器 明鐘崎洞窟出土。口径24.6cm、器高23.4cm、底径6.8cm。脚台を持たず、口



第50図 田子台遺跡出土土器 (1/4) (菊池・1954)



縁部も7・9に比べてややゆるく外交する。口唇部の刻目は7同様であり、頸部には7段の輪積痕を残す。

- 9 台付甕形土器 2号住出土。口径22.6cm、器高29.8cm、底径11cm。やや胴の張りが強く、口縁端に連続した刻目を持ち、頸部に6段の輪積痕を残す。
- 10 高杯形土器 1号住出土。坏部欠損。底径14.3cm、現高17cm。脚部下部に巾1.8cmの段をつくり、羽状縄文を構成。上端には刻目が施される。坏部と脚部が接する部分では沈線で区画し、同様な羽状縄文を施文。又、脚部中央部には1辺4.2cmに及ぶ三角形の透孔が4個所にわたって繞されているのが特徴的である。更に坏部の口縁に近い位置に刻目を有する隆帯が周回する。赤彩不明。
- 11 高坏形土器 1号住出土。脚部欠損。口径19.6cm、現在高10.7cm。坏部下端からゆるく外反し、口縁部では逆にやや内湾ぎみとなる。口縁部は巾1.8～2cmの幅で沈線に区画され、この間に粗雑なS字状結節が施文される。

その他

第2号住居址床面に接してガラス製小玉117個が出土した他に小青銅破片も出土。

紡錘車型軽石製品(第2図)1号住出土。中央に0.5cmほどの小孔を持つもので、紡錘車に類似するが、用途は不明。

#### 参考資料の土器(第51図)

##### 1 壺形土器(木更津市坊谷出土 木更津市上総博物館蔵)

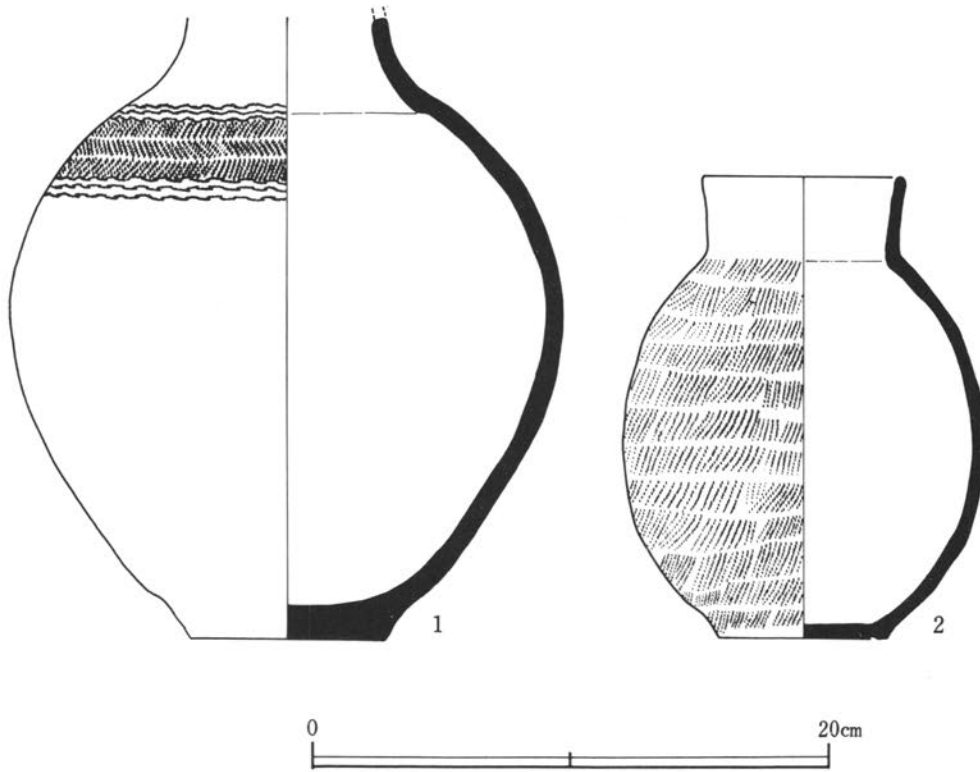
口縁部欠損。頸部の接合部で破砕されて擬口縁状を呈しているが、複合口縁となる壺形土器。底径7.4cm、現高23.9cmで、推定器高は30cm前後であろうか。器壁の厚さは全体的な形状に比べてやや薄い。胴部はやや球形に近く、内面の頸部に移行する部分にわずかに接合部による稜を持つ。器面は頸部から胴部に移行する部分にかけて3条のS字状結節文を上下2段に配し、その間をLR, RLの細縄文で羽状縄文を構成しているが、磨耗が著しく、圧痕は不鮮明。これより底部にいたるまでは内外面ともヘラミガキ調整。色調灰黄褐色。砂粒を多く含むが粒子は比較的密。焼成良好。胎土と焼成、あるいは文様等の技術から千葉県内ではあまり見られない土器である。

##### 2 壺形土器(旧小櫃村出土 君津農林高等学校蔵)

完形品で、口径7.8cm、底径6.5cm、器高17.8cm、胴部最大径14.0cmを測る。顕著な形態的特徴を持つもので、器高に比べてやや長胴で筒形に近く、頸部から口縁部に移行する部分ではほぼ垂直ぎみに立ち上がり、短頸を呈する。器壁の厚さは極めて薄く、接合部の痕跡が比較的明瞭に認められ、内面では数段の稜を形成する。器面は内外ともやや凹凸が目立ち、器表面では頸部から底部にいたるまでLR細縄文が施文されるが、器壁の磨耗が著しく、大部分圧痕は不明瞭。頸部から口唇部にかけてはヘラミガキが施され

るが、縄文と接する部分ではヘラケズリの痕跡が認められる。色調灰白色、砂粒を多く含み、若干雲母、石英粒などの細石を含むが、焼成は良い。

当該土器も焼成、施文等は1に類似し千葉内ではほとんど見られない土器である。



第51図 参考資料の土器 (1/4)

## 第Ⅳ章 東京湾東岸における弥生中期 遺跡の集落構成と出土土器

本章においては、前章で報告した事象をより掘り下げ、考察してみたいと思う。

まず、とらえられる点として、中期後半遺跡の偏在性である。これに関しては、個々の遺跡の立地が、何を起因としているか、その立地の必然的要因を概観してみたい。また、検出された遺構を、一つの集落構成の中で把握し、遺跡間の集落構成の相違が、時代変遷として投影できるかという点、また、近年、諸々の解釈がみられ、混迷の様相を強めている、弥生中期後半土器群について、その編年の意味を再び学史を顧みることによってとらえてみたいと考えるのである。

### 第1節 遺 跡 立 地

資料とする遺跡は、近年になって調査された、星久喜遺跡<sup>1</sup>、大森第2遺跡<sup>2</sup>、菊間遺跡<sup>3</sup>、大厩遺跡<sup>4</sup>、城の腰遺跡<sup>5</sup>などである。

まず、巨視的にみるため、南関東地方の弥生中期遺跡を、地図上に表記してみる(第52図)と、その稠密的分布がみられる。●印は中期後半の遺跡(宮ノ台)であり、○印はそれ以前の遺跡(条痕文系土器出土遺跡を含む)である。それによると相模湾岸では、酒匂川、相模川、片瀬川の流域に分布しており、比較的上流部に位置している。特に酒匂川流域にある条痕文系土器群を出土する遺跡群は、顕著である。

東京湾西岸地域では、鶴見川流域に中期後半の遺跡群がかなり確認されている。この地域は特にその居住に関して、最も適していたと推察される。

東京湾湾奥地域では、荒川流域に散在する。そして、その立地は荒川右岸に多い。

千葉県下では、既にふれたように、千葉、市原周辺に特に分布している。同じ東京湾岸地域でありながら、旧汀線の海蝕崖が直線的に延びている、市川から千葉(真間川～都川)までの約20kmの間に、発見されている遺跡は皆無である。それに比べ、千葉から木更津(都川～小糸川)までは、20数遺跡ある。ここには、都川、村田川、養老川、小櫃川、小糸川が流下しているため、その集落形成には最適な条件を備えていたものと考えられる。河川は文化伝播に際して、その導入路とされるものである。つまり、相互交通の溜まりとして、その有効性が指摘できるのではなかろうか。

個々の遺跡の立地をみると、そのすべてが広大な沖積地に面している。つまり、生産地としての低地を伴っている点が、一つの条件であろうか。標高では、星久喜遺跡の7～12mを示す





緩斜面上の立地と、20mを測る台地平坦面上の立地が指摘される。

第53図は、東京湾における上げ潮流最強時の潮流図である<sup>6</sup>。1950年から20年間の潮流変化を加味している。これによって東京湾を介しての、東岸、西岸地域の交渉の可能性を推察したいと意図したのであるが、海岸陸地部の地形変化、その他、諸々の環境は現在とは差異があったと思われる。しかし、それを含んでも敢えて呈示したいと思うのは、巨視的にみた場合、潮流自体はそれほどの変化をしていないだろうと思ひ、この図がある程度、弥生時代の湾内潮流を示していると考えたからである。

東京湾の潮流の概況をみてみると、まず一般的に上げ潮流は地形の影響を受けて、北西方または北東方へ、いわゆる湾奥に向かって流れている。それに対して下げ潮流は、上げ潮流とほぼ反対に流下するという。また、三浦半島の東京湾寄りの剣崎より、東に引いたラインから南では外流の流れの影響を受け、湾内の潮流とは異なった流況を示すことが多いという。

図は、上げ潮流（満潮）最強時の流下方向であるが、潮流は流れのサイクルをもつ。まず、干満平均時の憩流から、徐々に上げ潮流に移り、転流となる。転流から上げ潮流最強、また、転流になり憩流となる。今度は、下げ潮流（干潮）に転じ、転流から下げ潮流最強、また転流になり憩流となる。

上げ潮流の主流は、東京湾西岸側を北上し、東岸側は、富津崎の陰になり流速は遅い。下げ潮流は、湾内より湾口に向かって流れるので、西岸では上げ潮流は下げ潮流よりも強く、東岸では上げ潮流は下げ潮流よりも弱い。

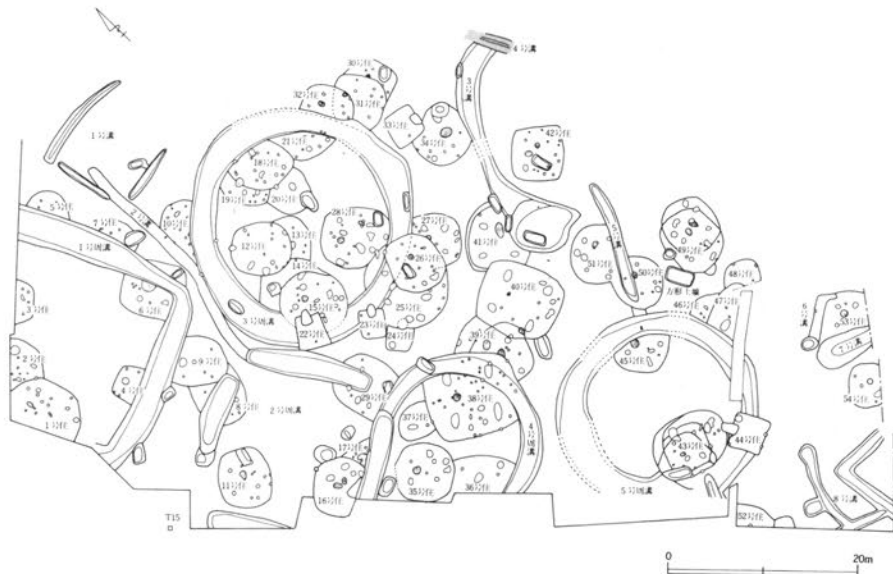
以上の潮流変化から上げ潮流を利用すれば、東京湾西岸より東岸には容易に渡ることができる。しかも、潮流は時計廻りにまわり、その先端は、現在の千葉から市原に至る海岸部に到達する。そこには、都川、村田川、養老川の諸河川が流入していることから、東京湾西岸と千葉・市原地区との海上交通は可能であったと思われる。従って、文化様式などが東漸する場合房総半島への伝播は、まずこの地域をその拠点としていたのではなかろうか<sup>7</sup>。

## 第2節 集 落 構 成

ここでは、主たる遺跡の集落構成を概観してみたい。

星久喜遺跡では、住居址2軒、土壇3基、方形周溝墓1基が確認されている。各々、標高9～10mに構築されており、その位置的関係は、住居址間が20m、住居址と方形周溝墓間が5m、住居址と土壇間が25～30mを測る。

菊間遺跡では、弥生中期後半期の住居址が32軒、方形周溝墓2基、V字溝を確認した。V字溝は第4号溝状遺構がこれに該当する。規模は確認面では、幅2.6m、深さ2mを測る。遺跡群の北東端の台地肩部に位置し、また、報告書では記述はなかったが、遺跡北西約30mのカッテング面で、同規模の落ち込みを確認している。つまり、台地の北東から北にかけて、海蝕崖に沿う状態で設けられていたのではあろう<sup>8</sup>。



第54図 菊間遺跡の遺構関連図 (1/800)

住居址、方形周溝墓は、このV字溝の内側に混在して設けられている (第54図)。

本遺跡は、特に住居址の重複が顕著であることから、住居の構築→廃絶→埋没→構築という居住サイクルがとらえられる。ここで検出された住居址の新旧関係により、その居住変遷をとらえてみたい。対象とするのは、第25、26、27号住居址の群と、4軒の重複をみる第43号住居址である (第57図)。

第25、26、27号住居址は、第25号住居址が、東側を第26号住居址に切られているため、25→26、第27号住居址は、第26号住居址との重複する部分に貼り床しているため、26→27、従って25→26→27の経過が示される。第25号住居址は、第3号周溝、第26号住居址に切られているため、平面的に半分のみで遺存であるが、径8.7mの楕円形状を示すと思われる。柱穴の遺存により、 $P_2-P_3$ が住居址の長軸である。また、第26号住居址は、掘り込みが深かったために全面を確認した。6.1×5.4mの隅丸方形を呈し、形状より $P_1-P_2$ が長軸である。第27号住居址は、第26号住居址覆土中に貼り床しているが、その全体をとらえることはできなかった。形状は隅丸方形に近く、5.3m前後の規模である。炉址が、 $P_1-P_3$ 間にあるところから、 $P_1-P_2$ が長軸と考えられる。

以上の長軸を、方位と対比してみると、その方向が、北西-南東 (25住)、北北東-南南西 (26住)、北西-南東 (27住) という住居の向きの変遷がみられる。

第43号住居址は、周溝が4重にわたって確認され、その切り合い関係よりA住→B住→C住→D住という変遷がとらえられる。



第55図 大厩遺跡の弥生時代遺構関連図 (1/1,000) (三森・1977に加筆)



A住は、もっとも外側の住居址で、長辺8.3m、短辺7m前後を測り、楕円形状を呈する。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、R<sub>6</sub>、R<sub>1</sub>が支柱穴で、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>が長軸方向である。B住は、長辺6.8m、短辺5.3mを測り、隅丸長方形を示す。P<sub>9</sub>近接ピット、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、R<sub>2</sub>が本址に伴う柱穴で、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>方向が長軸方向となる。C住は、長辺5.35m、短辺4.6mを測り、隅丸長方形を示す。P<sub>9</sub>、R<sub>10</sub>、R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>が本址に伴う柱穴で、P<sub>9</sub>-R<sub>1</sub>方向が長軸となる。D住は、長辺5.3m、短辺5.1mを測り、隅丸長方形を示す。R<sub>2</sub>、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>、R<sub>5</sub>が本址に伴う柱穴であり、また、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>間に炉址を設けてあるところからR<sub>3</sub>-R<sub>5</sub>方向が長軸方向となる。

以上の住居拡張を、方位と比較してみると、長軸の方向が北西-南東（A・B住）、北北東-南南西（C住）、北北西-南南東（D住）という変遷をとらえることができる。

ここで、第25・26・27号住居址群と第43号住居址との類似点をあげるとすれば、その長軸方向の流れがまったく同じということである。これは、他の重複する住居址でも指摘することができた。

この現象に対する評価は、十分加えるべきであろうが、この主軸の方向性を、即、集落構成を把握する方法とすることは、躊躇せざるを得ない。なぜならば、主軸の方向性を論ずるならば一時期の集落営為で、同時に存在した住居は、まったく同じ方向のもとに構築されていたという大前提が必要だからである。生産性も向上し、人間意識も前代より多様化した弥生時代に地形的規制、経済的規制を全く加味せずに、住居の方向を統一したかどうか、きわめて不明瞭であるとする。従って、主軸の方向により、その新旧を論ずるのは安易すぎると言わざるを得ない。

大庭遺跡では、弥生中期後半期に比定される遺構は、住居址36軒、土壇3基、特殊遺構3基、V字溝2基である。

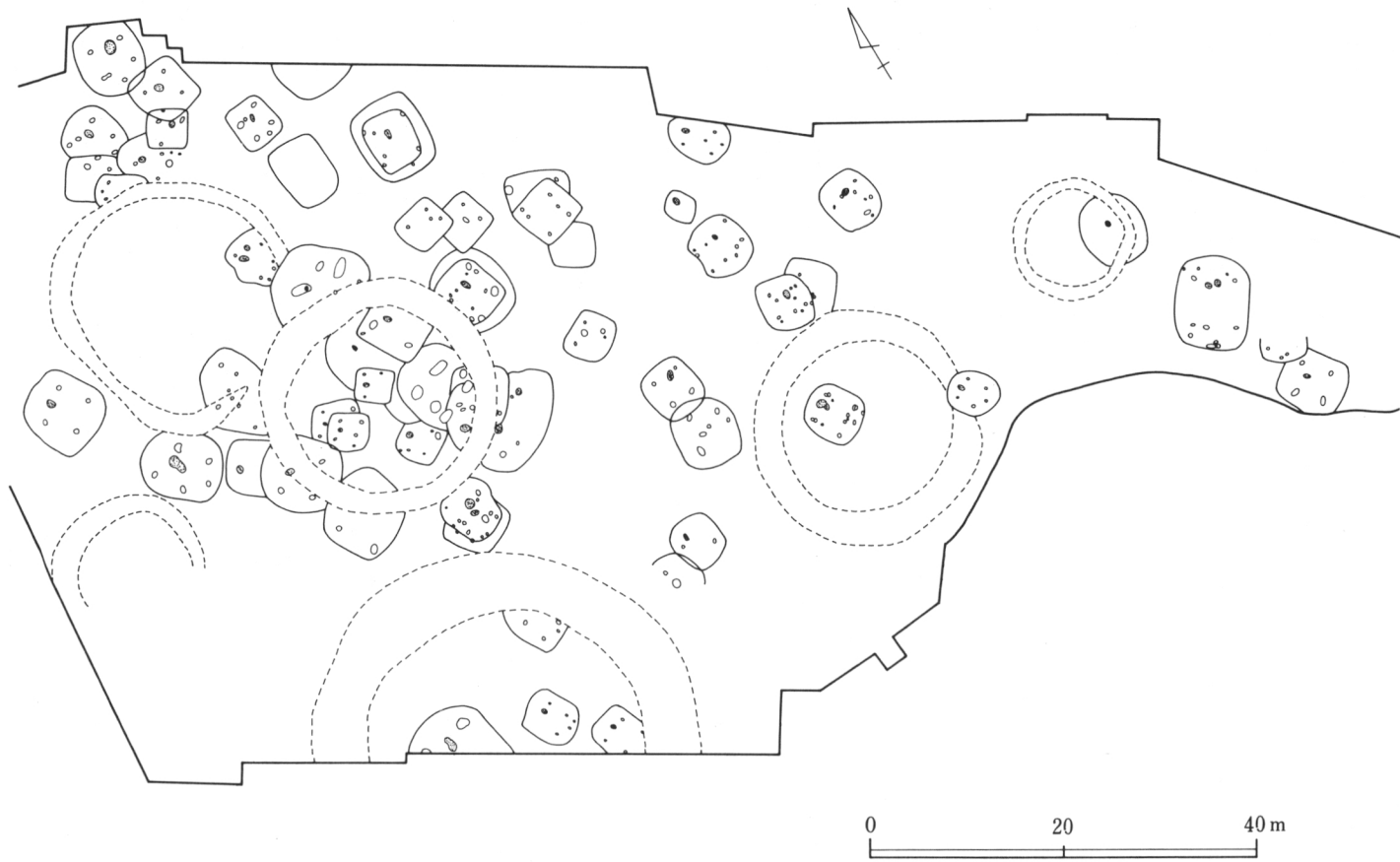
第55図で示すように、V字溝は当初、台地の遷急面に沿う状態で設けられており、つぎには台地に約30m入った地点に構築されている。V字溝上に後期の住居址が設けられている点からその時期が限定される。

調査範囲が限定されているため、全体を窺えないが、中期後半期の遺跡群は稠密的な分布を示す。

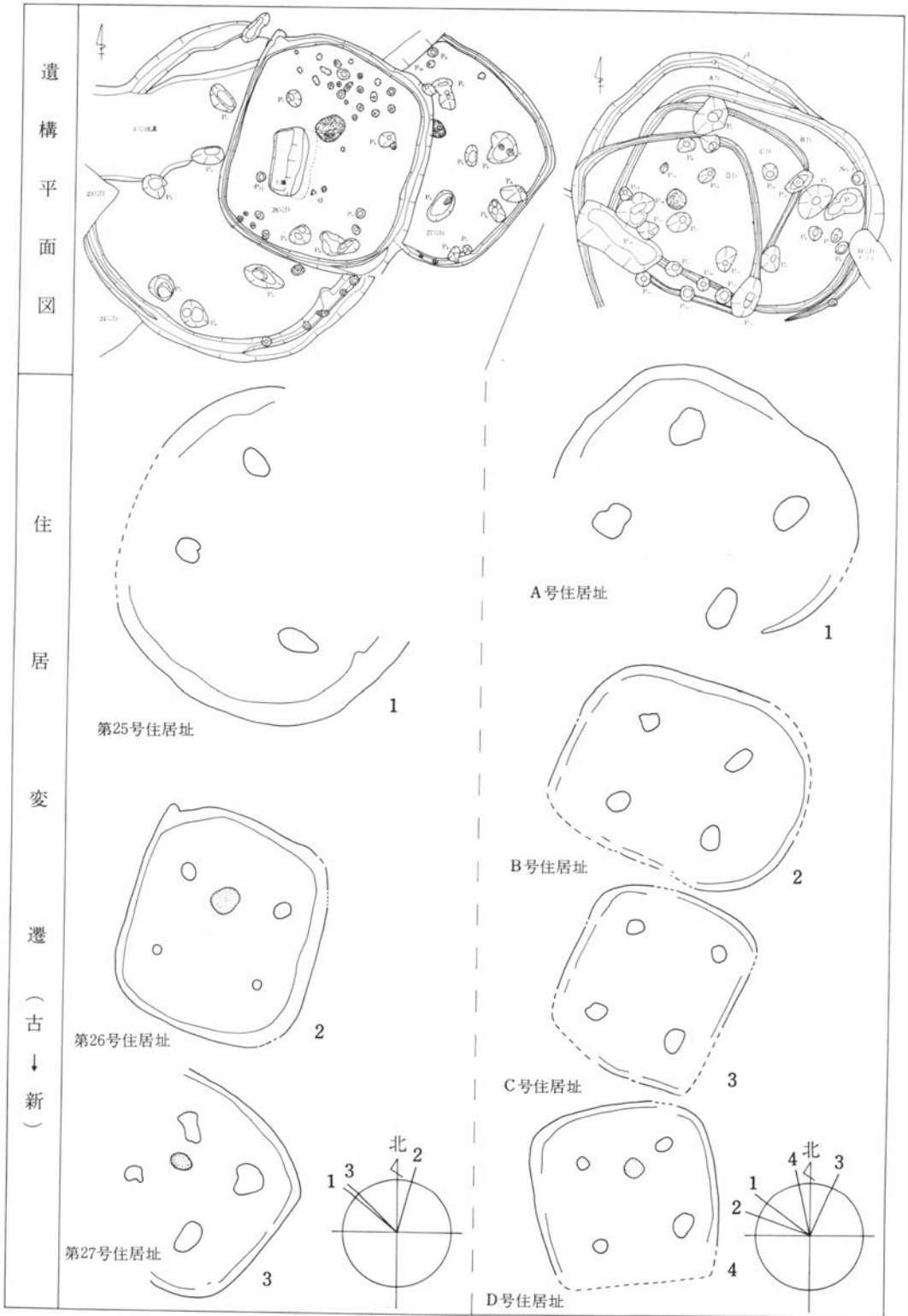
土壇は、形状から推察すると小竪穴に近い。特殊遺構は方形で、深さ2m以上を測る。内部には、焼土、木炭、灰、貝ブロックを混入している。<sup>9</sup>

城の腰遺跡は、千葉市大宮町に在る遺跡で、弥生中期後半の大集落址が確認された。<sup>10</sup>遺跡は都川と都川によって開析された、仁戸名支谷に挟まれた台地上に位置する。標高は20m、南方の都川沖積地との比高は約14mを測る。立地する台地は、南側をかなり急峻な崖面をもつのに対し、都川に面する北側は、緩やかに傾斜する。

第56図に示したのが、弥生時代の遺構配置図である。現在整理中で個々の遺構の時期は明確ではないが、表示された遺構群はほぼ弥生中期後半に該当するものと思う。本遺跡も住居址の



第56図 城の腰遺跡の弥生時代遺構関連図 (1/800)



第57图 菊間遺跡住居變遷 (1/180)

重複が多く、密集分布が著しい。住居址の形状は、隅丸長方形、長楕円形を示すものが多く、炉址も北側に偏在して設けられている。長軸の方向は、略々北北東から北西の範囲に含まれる。台地端部には、V字溝らしき痕跡はなく、住居のみの集落構成である。

南総中遺跡は、市原市牛久江古田に在る<sup>11</sup>。遺跡は養老川中流東岸の養老川本流と内田川にかこまれた、鶴舞江古田丘陵から延びた舌状台地の西端に位置する。標高は46m、北西部の水田面との比高は20mを測る。

弥生中期の遺構では、宮ノ台期の住居址が2軒、方形周溝墓が少なくとも8基確認され、これらの配置は混在している模様である。調査範囲が限定されているため、遺跡の全体をとらえられないが、台地端部にはV字溝の存在も予測される。

以上、東京湾東岸地域の弥生中期遺跡群の集落構成を概観してきたが、これらの資料をもとに、集落営為の変遷をとらえてみたい。

ここで、宮ノ台期を包括した場合、4期に分類される可能性を呈示したい。まず、房総半島に波及した弥生文化が、より高揚した時代は、宮ノ台Ⅰ期である。遺跡は、まだ台地上に至らず、沖積面に近い緩斜面上に営まれる。集落構成は、集落と埋葬施設（方形周溝墓）が共存する模様である。遺跡としては星久喜遺跡<sup>13</sup>をあげることができる。宮ノ台Ⅱ期及び、Ⅲ期は、弥生文化の拡散、馴致期になる。この段階は、前代に伝播した生産様式を、十分とり入れた上に成り立っており、文化様式に追隨して拡大していく。Ⅱ期の遺跡は、台地平坦面上に営まれる。集落構成に関しては、集落と埋葬施設（方形周溝墓）が、いわゆる環濠によって台地遷急点付近で囲まれる。具体的な遺跡としては、菊間遺跡<sup>14</sup>があげられる。Ⅲ期は前代と同じような居住形態を示すが、埋葬地（方形周溝墓群）は、V字溝の環濠外にひとつの群として設けられるようになる。つまり、居住域と墓域の分離が行なわれるということであろうか。遺跡としては、大厩遺跡<sup>15</sup>が該当すると思われる<sup>16</sup>。

次の時期は、具体的には時期編年しないが、いよいよ、後期への萌芽がみえ、地域拡散化する兆候を含んでいる。集落構成としては、V字溝（環濠）構築の必要性がなかった時期である。遺跡としては城の腰遺跡<sup>17</sup>があげられる。

### 第3節 土器の組成

前節、前々節と、東京湾東岸に立地する弥生中期の数遺跡をみてきた。本節では、それらの遺跡より出土した遺物のうち、土器を資料とし、その組成に関して考察してみたい。

まず、この期の土器に関しては、現在、混沌とし、一部混乱を招いているのが事実である。したがって、それらの土器の理解のため、研究史を辿ってみたい。

初めに、宮ノ台遺跡出土土器が分類された<sup>18</sup>。以下、分類を列記すると

#### 第一類土器

三宅島・ツル根岬遺跡の出土土器の分類に於てA類C類に判定したるものに該当。器形

は鉢形或いは甕形に近い鉢形。口辺部に簡単な押捺紋あるものがあり、胴部の内外面に刷毛目痕を有するものがある。

#### 第二類土器

前述同様、B類に分類したもの。器形は壺形、有頸壺形、紋様要素として細縄紋帯、或は紐結の連鎖の如き紋様帯を有する。

第一類土器は、宮ノ台式土器の浅鉢形土器であり、第二類土器は、壺形土器である。このいわゆる煮沸と貯蔵という形態機能に着眼した分類は、森本六爾の1様式における2者という研究による。<sup>19</sup>

翌年、杉原荘介によって『小田原期』とも云うべき時期の存在が提唱された。<sup>20</sup>土器分類は、第十一類にまで及ぶ。

#### 第一類土器

広口壺形、文様は肩部に平行線を描き、なお同じく平行線を似って小形文を描く。

#### 第二類土器

広口壺形、文様は櫛目文であり、波状文・擬流水文。

#### 第三類土器

壺、櫛目文の施文具と思われるものの押刺により構成されたる羽状文が見られる。櫛目平行線文に格子文を配したるもの。

#### 第四類土器

広口壺、櫛目擬流水文・綾杉文・口辺部に縄文を施文、細口壺、櫛目平行線文・刺痕文・山形文を施文。

#### 第五類土器

鉢形、器内外面に刷毛目を有する。口辺部は鋭き押刺、あるいは押捺されて波状を呈する。

#### 第六類土器

細口有頸壺、広口有頸壺、椀形、高坏、縄文の使用隆盛、口辺部隆帯部施文。

#### 第七類土器

細口有頸壺、小弧の連鎖、平行線を有し、縄文は認められぬ。第六類に伴う一型式。

#### 第八類土器

鉢形、口辺に押捺、刷毛目上に篋書。

#### 第九類土器

口辺部に押捺、胴部にコ字を重ねた文様。

#### 第十類土器

広口壺形紐結状をなす縄文の文様帯。

#### 第十一類土器

広口壺、羽状縄文、単なる縄文の幾何学的文様。

以上分類した土器のうち、第二類より第四類まで、その系統を伊勢湾沿岸に求め、いわゆる小田原前期としている。また、第四類の一部、第六類から第九類までは、西方の諸要素を有しながら、この地における縄文土器の影響を確実に有するものとし、一方、第十類、第十一類は本地域における独自の様式へ進むべき傾向に富む資料とし、小田原後期としている。

続いて、小田原出土土器に関して、その補遺が示された。<sup>21</sup>その報告の中で、第十二類とされるものは、鉢形で外反し、口縁部に押捺を加え、器面には、刷毛目と羽状文を施す。これは前述の第五類の鉢形土器の原初形式と理解された。また、第一類から第四類の壺形土器に伴う多分性を有し、いわゆる小田原前期の浅鉢形土器、また、第五類は小田原後期の浅鉢形土器として位置するという指摘がなされた。

こうして小田原期という名称が用いられるようになった。<sup>22</sup>

その後、この分類は江藤千万樹などにより踏襲されている。<sup>23</sup>そのなかでは、小田原前期は、西方文化、尾張を中心とする櫛目文土器の伝播とその系統を基調とする様相の土器とされ、小田原後期は、それらを温床に縄文土器文化との交渉を持ち始めた土器としている。

続いて、宮ノ台遺跡の補遺が発表された。<sup>24</sup>この報文で、宮ノ台式土器という名称を用いている。また、その中で、宮ノ台式土器論を展開している。総体的に、製法は輪積みを主体とし、器面は刷毛にて調整されているのが普通。浅鉢形土器は、器高30m前後で、口辺部は刷毛状篋と指とで挟んで波状に施す。壺形土器は細口壺が大部分を占め、胴部の膨みは小さく、頸部はくの字形を絶対なせず、胴部から口縁部へは滑かに移行し、頸部は長く、木葉痕底も見られるという。また、文様のあるものとなないものがあり、前者は縄文と櫛目文及び綾杉文を単位として施される。縄文は帯状文と紐結文として表現、櫛目によって波状文と擬流水文を描出、また、宮ノ台—久ヶ原—弥生町という土器編年を提示し、宮ノ台式土器は久ヶ原式土器の直前型式としている。

その中で興味ある論考を発表しているので原文のまま記す。

——南関東に関する限り、小田原期前期の土器は須和田遺跡出土の中の或る一類の方を、又小田原期後期の土器は宮ノ台遺跡出土の第一類、第二類中一類の方を中心として考へてゆくことが適当と思はれるようになり——  
と記している。

ただここで留意すべきは、小田原期前期もしくは小田原期後期という名称を付しているだけで、小田原式土器という土器形式は設けられていない。

また、以前より問題にされていた須和田式土器が新田山遺跡出土の資料を通してより明確にされた。<sup>25</sup>そのなかで、須和田式を、いわゆる接触式文化の内のある事象を限定するものとした。杉原荘介は、この接触式なるものを『原史学序論』のなかで、中部日本弥生式文化の縄文式文化地域（東部日本）への東漸は、そこに両者の混合による一種独特の文化を形成せしめたとし

た。これがいわゆる接触式であり、接触式土器である。また、須和田式土器を篋描縄文系列、宮ノ台式土器や、駿河矢崎遺跡出土の一型式土器を、櫛目縄文系列としている。

その後、利島のケッケイ山遺跡が調査され、須和田式土器の鉢形土器を確認している。<sup>27</sup>それは、内外器面とも粗い条痕が施されており、口唇上面には指頭による押捺文、または、ヘラ状工具もしくは貝殻による刻み目、三角形の刺突文を施文している類である。

須和田式土器は、いままで弥生中期後半と編年されていたが、比較資料の増加により、中期前半に遡らせる論考が発表された。<sup>28</sup>それとともに、ここにいわゆる小田原式土器と宮ノ台式土器の土器組成が示されたのである。

小田原式土器の形式に関して次のように規定している。

——南関東地方では、壺の頸が細くなり、優雅さを増す。文様は簡素化し、その上に櫛目縄文系の文様加わる。須和田式土器に伴うと考えられた横位の羽状条痕文をもつ鉢形土器は、この型式の土器（筆者傍点）に伴うものらしい。これが、伊勢湾沿岸地方の西志賀Ⅱb式土器の鉢形土器に原流のあるものであることに間違いない。——

また、宮ノ台式土器については

——壺の頸はますます細く、文様はさらに簡単になり、ついに細かい羽状縄文の帯をめぐらすだけというようになる。しかし、この時期から壺の全面を丹をもって塗彩することが始まり、はなやかさを増す。——この壺に伴う鉢形土器は細かい刷毛目の成形痕を残すだけで、羽状条痕は見られない。——

とした。過去においては、遺跡出土土器の分類をもってして、各形式土器と推論していたがここに至って実に、発表されてから、約30年を経た段階で、土器組成が呈示されたのであった。

その後、発表された弥生式土器編年表には、須和田式土器、小田原式土器、宮ノ台式土器が弥生中期前半、中葉、後半と編年された。<sup>29</sup>

しかし、同年神沢勇一は、南関東及び北関東の編年を試みたのであるが、南関東弥生中期の土器変遷を、三ヶ木、須和田、宮ノ台としたのである。<sup>30</sup>

なお、この頃、宮ノ台式土器の細分が問題化されたという。<sup>31</sup>それは、昭和36年夏に行なわれた三殿台遺跡の調査は、200余にのぼる遺構を確認したが、その遺物整理の過程で、宮ノ台式土器の分類が論議されたということである。

その後、杉原荘介は、再び小田原式土器を小田原前期、宮ノ台式を小田原後期と研究史を遡る記述をした。<sup>32</sup>

1967年（昭和42）、伊豆諸島新島の田原遺跡において、西志賀Ⅰ式土器、丸子式土器が確認された。<sup>33</sup>

1968年（昭和43）、神沢勇一は、再び新しい知見による編年表を発表した。<sup>34</sup>それは、相模湾沿岸地域の編年とされ、比較として、東海（東部）と東京湾沿岸（南関東）を挙げている。それによると、いわゆる南関東では、三ヶ木→須和田→宮の台とし、南関東西部では堂山→中里

→小田原として、宮ノ台式土器と小田原式土器が対峙する編年を掲げているのである。

杉原荘介は、『弥生式土器集成本編』で小田原式土器・宮ノ台式土器に関して、再び新しい表現をとるのである。<sup>35</sup>すなわち、小田原式土器前期の土器を小田原式土器とし、小田原式土器後期の土器を宮ノ台式土器とする。

昭和40年代後半期は、東京湾東岸で弥生中期の遺跡が確認され、次々にその出土資料が報告されていく。

また、三殿台遺跡を中心とした、東京湾西岸地域の弥生時代中期の集落構成を追っていた田中義昭は、その関連として、宮ノ台式土器を3つに細分する考えを示している。<sup>36</sup>しかし、そのなかで、須和田式土器から宮ノ台式土器への発展を可能としているが、この点に関しては、春成秀爾の指摘を受けている。

いままで、須和田式土器は、杉原荘介により大洞A'式土器あるいは荒海式土器使用社会を根拠とするとされていたが、須和田式壺・甕形土器の胴下半部の無文帯における条痕文の施文を東海地方の整形手法の波及とし、須和田式土器を東海地方にその関連をもたせる論考が発表された。<sup>37</sup>

南関東、特に千葉県下の弥生文化に関して熊野正也は積極的に考証を加えている。土器に関しては、宮ノ台式深鉢形土器における刷毛目の存否を時期差と理解している。しかし、その推論を進める際にその根拠とした、大厩遺跡の住居址変遷に関して、重大な誤解があるので指摘しておく。氏は、住居址の新旧関係を、Y-36→Y-35→Y-44→Y-38としているが、Y-35号址は、Y-44号址の1部に床面を踏み固めた痕跡を残しているため、Y-35号址がY-44号址より新しいのは明確なのである。<sup>39</sup>

また、分類形態は示してないが、宮ノ台式壺形土器を8種に、深鉢（甕）形土器を4種に分類可能としている。<sup>40</sup>そして、煮沸形態である深鉢形土器を施文手法から、①櫛描き羽状文だけのもの、②刷毛状施文具による整形のものに篋描き羽状文を施すもの、③刷毛状施文具の整形痕跡だけを残すものに類別し、これを時間的な変遷としている。

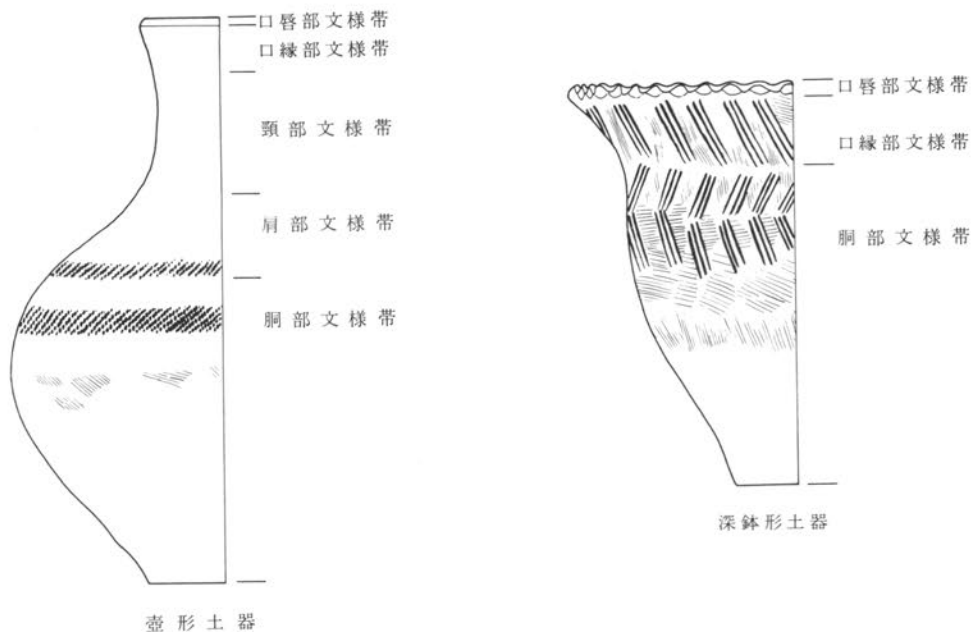
1977年（昭和52）、大厩遺跡の調査者である三森俊彦と古内 茂がそれぞれ論考を加えている。三森は、遺構の重複関係、住居址の主軸方向及び、深鉢形土器の形態により、大厩遺跡をⅢ期にわたって営まれたとしている。<sup>41</sup>そして、篋及び櫛描きの横走羽状文土器に櫛描・刷毛目整形土器を伴出する遺構と櫛描・刷毛目整形土器だけを出土する遺構では、前者のほうが古いとしている。一方、古内は、大厩遺跡、菊間遺跡、大森第2遺跡の遺構出土の一括土器をとらえ、宮ノ台Ⅰ式、Ⅱ式と分類している。<sup>42</sup>注意されるのは、大厩第Ⅲ期の甕形土器で、これを分類した結果、当期を宮ノ台期から久ヶ原期への変遷期としていることである。

以上、長々と述べてきたが、概観しただけでも、その紆余曲折はわかる。参考にも杉原荘介の南関東弥生中期土器の研究過程を表化してみた（第4表）。それによれば、いかに発表ごとに変化しているのがわかる。例えば、「小田原前期」、「小田原前期」、「小田原前期の土



発行年	研 究 内 容												
1936.1	小田原前期=西方の文化を伝えたままの姿 ♪ 後期=本地域に於ける独自の文化への種々なる用意をしたる時代												
♪ .8	小田原前期=広口壺形と擬流水文及び縄文の施文の行なわれている文様 竹管の施文 ♪ 後期=磨消縄文の手法 細口壺の口縁部に縄文帯を回らす施文法												
1939	須和田式土器 ↓												
1942	須和田第Ⅰ式土器(真間式) 小田原前期の土器=須和田遺跡出土の或る一類 ♪ 第Ⅱ ♪ (国分式) ♪ 後期 ♪ =宮ノ台遺跡出土第Ⅰ類 宮ノ台式土器論・製法は輪積みを主体、器面は刷毛にて整調 (鉢形土器) 器高30cm前後に統一、口辺部は刷毛状篋と指とで挟んで 波状に屈曲 (壺形土器) 細口壺が主体。胴部の張らみ小さい。胴部から口縁部への 移行滑らか。長頸。施文は沈線文、時に小円盤を胴部にみ る。												
1943	宮ノ台式土器=櫛目縄文系列												
1957	須和田式土器→中期後半												
1964	♪ →中期前半												
	小田原式土器・宮ノ台式土器の組成呈示												
1966	弥生式土器編年表												
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>駿河湾沿岸</th> <th>南 関 東</th> <th>北関東西部</th> <th>北 関 東 東 部</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>曲金式土器 飯田式土器 登呂式土器</td> <td>前野町式土器 弥生町式土器 久ヶ原式土器</td> <td>樽 式 土 器</td> <td>二軒屋(十王台式土器) 式土器(東中根・長岡式土器)</td> </tr> <tr> <td>有東式土器 原添式土器 丸子式土器</td> <td>宮ノ台式土器 小田原式土器 須和田式土器</td> <td>竜見町式土器 岩櫃山式土器</td> <td>野沢式土器 (野沢Ⅱ式土器) 女方式土器 (野沢Ⅰ式土器)</td> </tr> </tbody> </table>	駿河湾沿岸	南 関 東	北関東西部	北 関 東 東 部	曲金式土器 飯田式土器 登呂式土器	前野町式土器 弥生町式土器 久ヶ原式土器	樽 式 土 器	二軒屋(十王台式土器) 式土器(東中根・長岡式土器)	有東式土器 原添式土器 丸子式土器	宮ノ台式土器 小田原式土器 須和田式土器	竜見町式土器 岩櫃山式土器	野沢式土器 (野沢Ⅱ式土器) 女方式土器 (野沢Ⅰ式土器)
駿河湾沿岸	南 関 東	北関東西部	北 関 東 東 部										
曲金式土器 飯田式土器 登呂式土器	前野町式土器 弥生町式土器 久ヶ原式土器	樽 式 土 器	二軒屋(十王台式土器) 式土器(東中根・長岡式土器)										
有東式土器 原添式土器 丸子式土器	宮ノ台式土器 小田原式土器 須和田式土器	竜見町式土器 岩櫃山式土器	野沢式土器 (野沢Ⅱ式土器) 女方式土器 (野沢Ⅰ式土器)										
1967	須和田式=大洞A'式土器あるいは荒海式土器使用社会 小田原式=小田原前期 宮ノ台式=小田原後期												
1968	第Ⅰ様式=須和田式土器 第Ⅱ様式A=小田原式土器前期の土器→小田原式土器 ♪ B= ♪ 後期 ♪ →宮ノ台式土器												
1974	小田原式土器の文化=東海地方に発生した櫛目手法による文様の系統をもつ土器 の文化。												

第4表 南関東地方弥生中期土器研究史年表



第58図 宮ノ台式土器の文様模式図 (1/4)

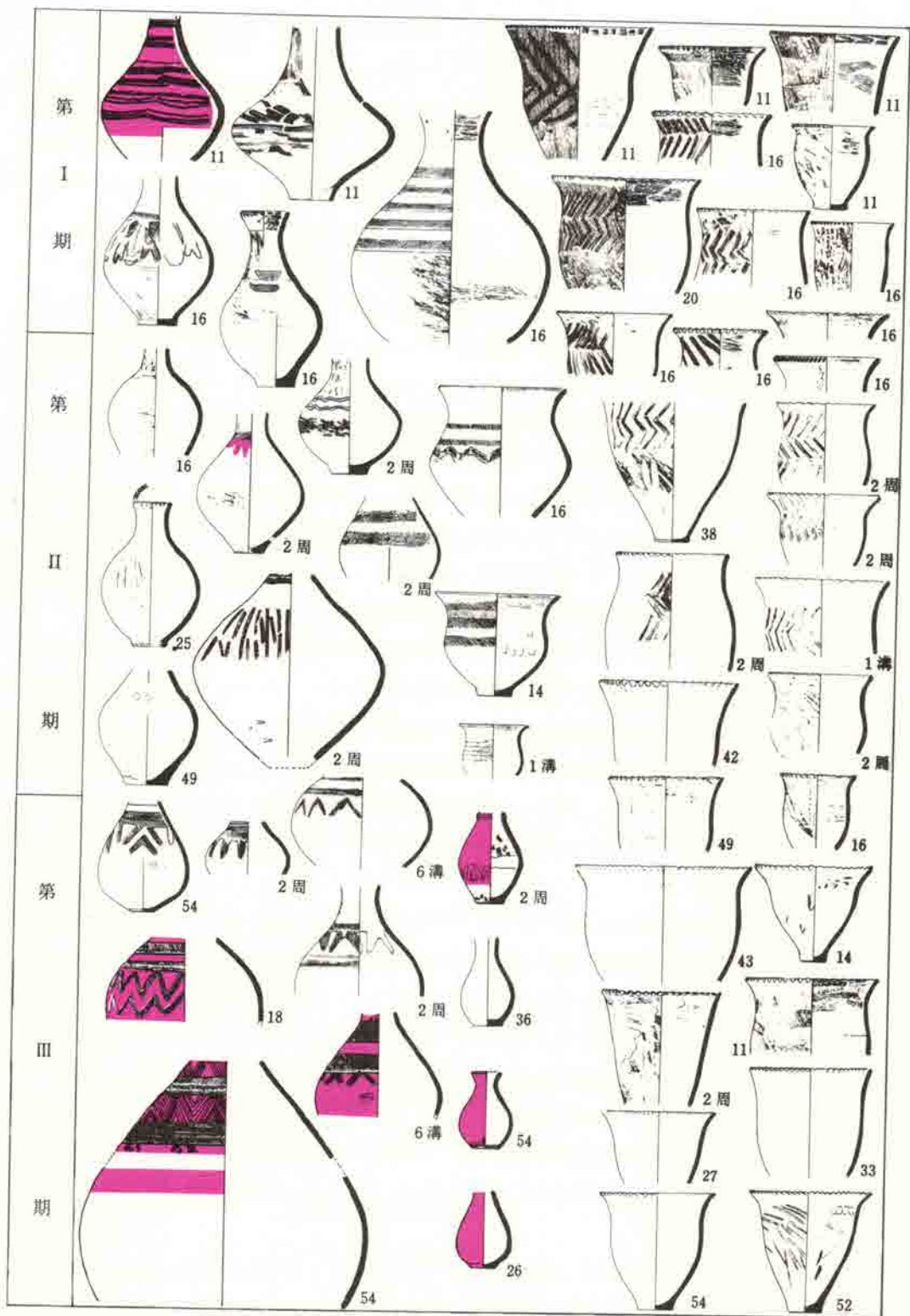
器」、「小田原式土器前期の土器」など、そして、1964年呈示された、小田原式土器の組成は以前に設定されていた土器概念とは異なる結果になる。つまり、当初は、小田原前期と後期に分けられていたのが、包括分類される結果になり、つぎには、須和田式土器の形式設定後、須和田式と宮ノ台式の中間に位置するものとして設定されるようになるのである。したがって、他の研究者が小田原式土器とする場合、どの段階で理解された小田原式土器であるか、その概念規定の表示が必要になってしまうのである。

1964年『日本原始美術3』誌上に呈示された小田原式土器は、横位の羽状条痕文を施文することを鉢形土器の特徴としている。しかし、東京湾東岸地域の遺跡では、いわゆる小田原後期の土器、宮ノ台式土器の深鉢形土器にも羽状条痕文が多用されている。これを、深鉢形土器の施文手法範形の広さととらえることは、容易であるが、むしろ、もっと真摯にとらえた場合、宮ノ台式土器の類形のひとつなのではなかろうか。

ここで、この宮ノ台式土器を理解するために、菊間遺跡・大庭遺跡出土の土器を概観してみたい。

第59図は、菊間遺跡<sup>43</sup>出土の土器組成図である。土器はⅢ期に類別される。

第Ⅰ期は、第11号、第16号住居址出土土器が該当する。壺形土器では、胴部が球状を示すものと、上下から押されたように屈曲するものがある。概して口縁部は小さく、頸部は裾が広がるように肩部へと移行する。地文は刷毛目調整が主体であり、施文部は、肩部文様帯と胴部文様帯である(第58図参照)。文様は、沈線文、縄文が主体で、前代の沈線にて各文様帯を区画



第59図 菊間遺跡土器組成(1/2)

するという手法もわずかにみられる。沈線文は、数条の沈線、あるいは一つの文様構成をもつものがあり、区画するか、区画内を縄文・刺突文で充填している。

深鉢形土器は、口縁部が長いものと短いものがある。口縁は外反し、胴部はわずかに脹らみをもつ。施文は、地文として刷毛目調整を施すものが多い。口唇部文様帯には、櫛状工具による刻み目と指頭による押捺圧痕が施される。口縁部文様帯及び胴部文様帯上部には、櫛状工具による羽状条痕が施文される。

第Ⅱ期になると、壺形土器では、頸部が短く、直立に近い器形も確認される。胴部は、最大径が胴上部にあるもの、中央部にあるもの、下部にあるものと多様化する。地文としては、刷毛目調整が主体であり、文様は、頸部文様帯下半部、もしくは、肩部文様帯に縄文帯や、羽状沈線を施文する。また、広口壺も見受けられる。

深鉢形土器では、口唇部文様帯上に指頭による押捺圧痕を施すのが主流となる。器面には刷毛目調整を施す。また、櫛状工具による羽状条痕も施文されている。

第Ⅲ期の壺形土器は、器形の大型化する一群がある。最大径を胴下半部にもち、下脹れの器形が多い。また、小形無文土器の出土もみる。地文としての刷毛目調整は少なくなり、縄文帯を用いた文様構成が多くなる。文様構成では、羽状縄文、「ハ」の字形の縄文帯がみられる。また、平滑にヘラ磨きを施された部分に赤彩がみられる。

深鉢形土器では、依然として、口唇部文様帯に指頭による押捺圧痕文を施す。器面には刷毛目調整を施した類もあるが、平滑な器面をもつものがある。

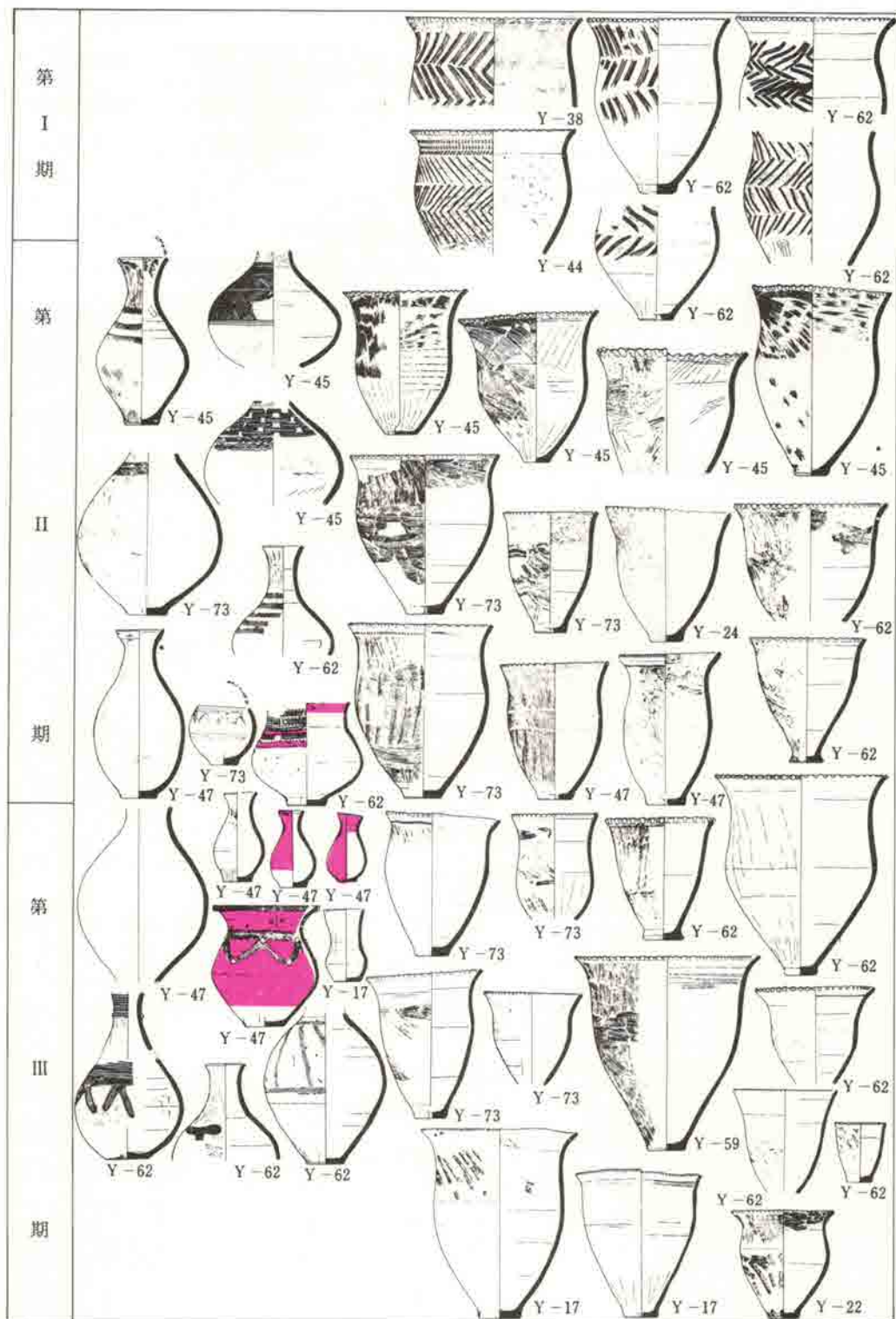
第60図は、大塚遺跡出土の土器組成図である。Ⅲ期に分類できる。

第Ⅰ期は、壺形土器は不明である。深鉢形土器は、大型化しており、口縁部は短く、外反する。頸部で若干すぼまってから、胴部へと移行するが、胴部最大径を上部にもち、弓状に脹らむ形態である。器面には、刷毛目調整を施してのち、櫛状工具により規則的な羽状条痕を施している。

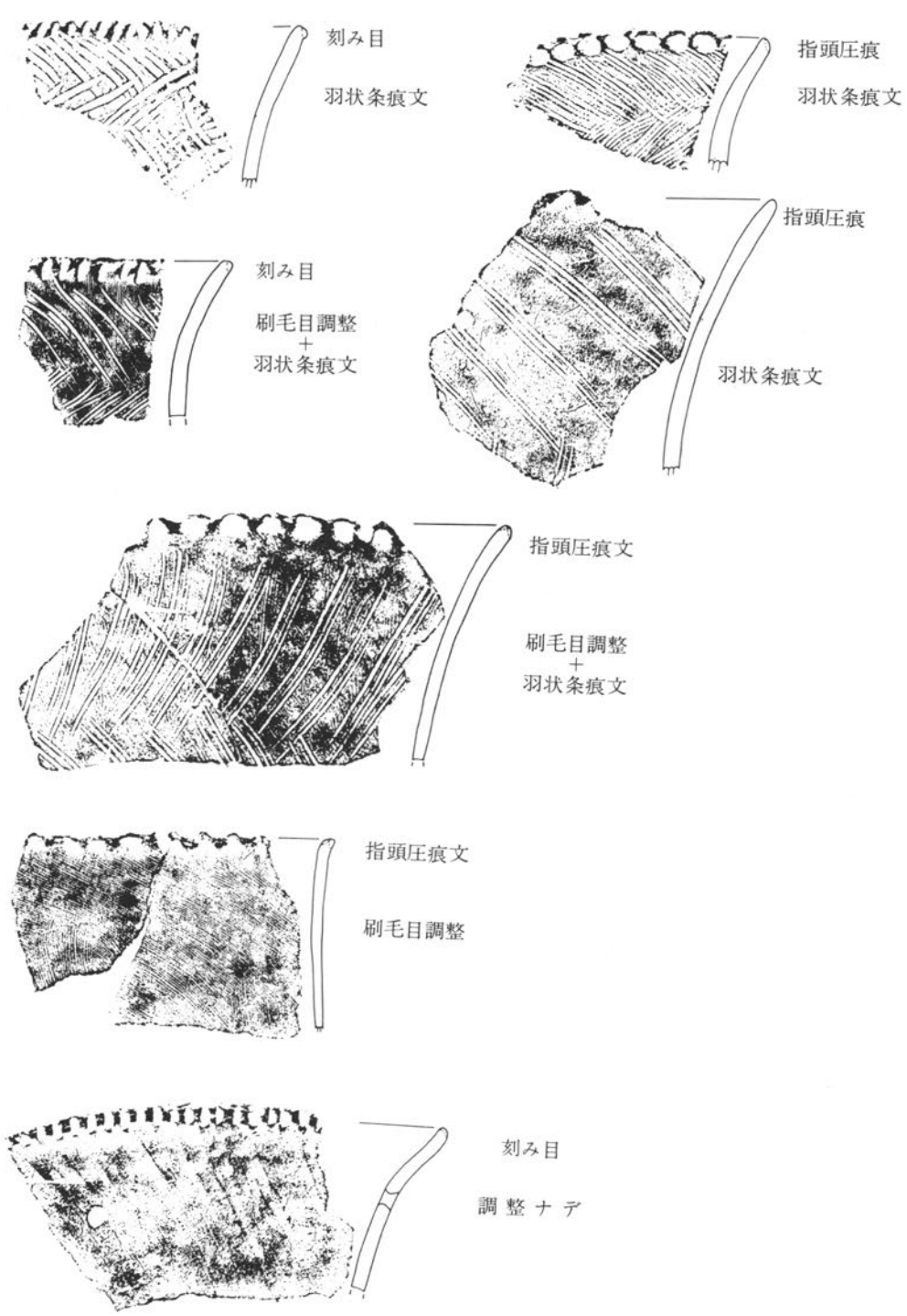
第Ⅱ期になると、壺形土器は、細口で頸部ですぼまり、胴部が球状を呈するものがみられる。土器では、Y-45号址出土土器が該当するが、肩部文様帯に、2・3本単位の櫛描き平行沈線によって区画された、ヘラ描きの並列沈線による鋸歯文が4段施されるものや、擬流水文を施したものは、若干、時期的に先行するとも考えられる。施文は、刷毛目調整が多用されており、肩部文様帯に、数段の斜行縄文帯や羽状縄文を施す。また、広口壺や無頸壺がみられる。

深鉢形土器は、ほぼ前期の器形を踏襲しているが、一様に小形化の兆候をみることができ。口唇部文様帯には、指頭による押捺圧痕を認め、口縁部文様帯、胴部文様帯には、刷毛目調整を施す。一部、複合口縁状に、口縁部が肥厚する類もある。また、底部に穿孔を施し、甑への転用も目立つ。

第Ⅲ期になると、壺形土器では、最大径が胴下半部に移行する傾向である。また、小形化する一群がある。文様は、器面一様にナデられ、無文のものと、肩部文様帯に沈線区画による、



第60図 大甌遺跡土器組成 (1/2) (三森他・1974に加筆)



第61図 宮ノ台式深鉢形土器の文様構成 (1/3)

「ハ」の字縄文帯を施文するものが確認される。小形壺形土器は赤彩されるものが多い。

深鉢形土器は、前代より口縁部が外反し、最大径を胴部上半部に移行する傾向がある。胴部から底部にかけては、直線的に移行する。器面は、刷毛目調整を施したものもあるが、平滑にナデが施され、無文のものが多くなる。口唇部文様帯には、依然として指頭による押捺圧痕を施している。

以上、菊間、大厩遺跡の土器を通して、弥生中期後半の土器様相を概観してきた。両遺跡とも、第Ⅰ期→期Ⅱ期→第Ⅲ期という変遷は必然である。しかし、それが土器形式分類の基準とはとらえられない。明確な土器分類として規定するより、一つの土器変遷としてとらえるべきであろう。

#### 第4節 ま と め

3節にわたって、東京湾東岸地域の弥生中期遺跡群の諸様相をみてきた。ここでまとめてみたいと思う。

- 1) 弥生中期遺跡群が、東京湾東岸地域の千葉から市原にかけて集中して立地形成されたのは、ひとつには河川の発達と、東京湾の潮流による影響が、起因していると思われる。
- 2) 弥生中期後半は、集落構成により時期編年することが可能である。すなわち、第Ⅰ期は、立地が沖積地に臨む低地で、住居と方形周溝墓という構成をもつ。第Ⅱ期は、立地が台地上に移り、居住域と墓域が環濠に囲まれるという集落構成をもつ。第Ⅲ期も第Ⅱ期と同様の立地状態を示し、居住域を環濠が囲み、併存して墓域という集落構成をもつ。第Ⅳ期は明確には確認されていないが、V字溝は構築されなくなり、住居と墓域？という集落構成をもつ。
- 3) 2)で呈示されたように、弥生中期後半(宮ノ台期)は、集落構成より4期に編年される。
- 4) 小田原式土器という土器形式は存在せず、現在、理解されている小田原式は、宮ノ台式土器の類形に包括される。
- 5) 宮ノ台式土器は、菊間遺跡、大厩遺跡の資料からみみると、3様相を具えている。

昭和48年の夏に行われた、菊間遺跡の調査は、その後、筆者らが担当して半年間にわたり遺物整理を実施した。当時としても勉強不足で、多々訂正を要すべき点があった。今回、改めてこれらの遺跡を包括して検討を試みた。ここに呈示した紀要がその1篇である。

宮ノ台式土器の分類には、理解されない点が多く、躊躇した。しかし、時期編年は、出土遺物ではなく、遺跡の集落構成から可能ではないかと考えるようになり、そのような観点に則して編年を行ったつもりである。文中、飛躍した論理を展開していると思われるので、それらの点に関しては、研究諸氏の御教示、御指摘を願えれば幸いである。

註

- 1 柿沼修平「星久喜遺跡」『京葉』千葉県都市公社 1973
- 2 栗本佳弘他「大森第2遺跡」『京葉』千葉県都市公社 1973
- 3 斎木 勝・種田齊吾他『市原市菊間遺跡』千葉県都市公社 1974
- 4 三森俊彦・阪田正一他『市原市大庭遺跡』千葉県都市公社 1974
- 5 千葉県文化財センター 昭和51・52年調査 現在整理中
- 6 海上保安庁『東京湾潮流図』海図第6216号 1972
- 7 この東京湾における潮流を挙げたものとして、本村豪章の「上総・市原市菊間小学校遺跡についての一試考」(MUSEUM、東京国立博物館美術誌No.288 1975)がある。氏はその中で『——多摩川川口から出発すれば富津周辺に、三浦半島基部から船出すれば潮ののって市原周辺に到着する可能性は十分ありえる』と推察している。
- 8 V字溝の機能は、一般的にものを遮断する施設と考えられる。従って、このV字溝という環濠を伴う集落は、ものに備えた防禦的な集落ということが指摘できる。また、西日本の高地性の環濠集落との対比において、その類似をあげ、いわゆる高地性集落に類する遺跡とされている。(石野博信「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要』第2冊 1973)
- 9 状況的に菊間遺跡の第2号周溝(方形周溝墓)の溝内混入物と似ている。埋没物は遺棄されたものと思われる。
- 10 註5に同じ
- 11 齊藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」先史第8号 1972
- 12 房総半島における弥生文化の受容・摂取は、須和田期であるが、この期の文化様相は、弥生文化としては、異質のものであった。それは、多分にも縄文晩期終末期より系譜をひく、在地の縄文文化を基本としていたと思われるのである。したがって、房総半島への弥生文化の波及は、2波あったと考える。ひとつは前述の須和田期であり、他方は宮ノ台期であったろう。宮ノ台文化は、対岸の弥生中期前半の条痕文系文化を基本としていると考える。文化系譜として須和田から宮ノ台へは移行せず、時代を前後して、それぞれの変遷過程をとったと思われる。
- 13 註1に同じ
- 14 註3に同じ
- 15 大庭遺跡では、墓域としての方形周溝墓群が確認されていない。しかし、遺跡の構成上、付近にこの種の遺構が存在すると思われる。
- 16 東京湾西岸地域では、朝光寺原遺跡(岡木 勇編「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報」横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書昭和42年度 1968)、大塚遺跡と歳勝土遺跡(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V 1975)などがあげられる。
- 17 註5に同じ
- 18 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学第6巻第7号 1935
- 19 森本六爾「弥生式土器に於ける二者」考古学第5巻第1号 1934
- 20 杉原荘介「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」人類学雑誌第51巻第1号 1936
- 21 杉原荘介「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」人類学雑誌第51巻第4号 1936
- 22 杉原荘介「下野・野澤遺跡及び陸前・柵形貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」考古学第7巻第8号 1936
- 23 江藤千万樹「駿河矢崎の弥生式遺跡調査略報」考古学第8巻第6号 1937
- 24 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報一補遺一」古代文化第13巻第7号 1942
- 25 杉原荘介「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌第58巻7号 1943
- 26 1943年初版発行
- 27 大塚初重「利島ケッケイ山遺跡の調査」伊豆諸島文化財総合調査報告(第2分冊) 1959



- 28 杉原荘介『日本原始美術3 弥生式土器』 1964
- 29 杉原荘介「日本農耕文化生成の研究」『改訂増補 原史学序論』 1966
- 30 神沢勇一「関東-弥生文化の発展と地域性」『日本の考古学』Ⅲ 1966
- 31 神沢勇一氏の御指摘による。
- 32 杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号 1967
- 33 杉原荘介・大塚初重・小林三郎「東京都(新島)田原における縄文・弥生時代の遺跡」考古学集刊第3巻第3号 1967
- 34 神沢勇一「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」神奈川県立博物館研究報告第1巻第1号 1968
- 35 小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成本編』 1968
- 36 田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題の討議」考古学研究第22巻第1号 1975
- 37 星田享二「東日本弥生時代初頭の土器と墓制-再葬墓の研究」史館第7号 1976
- 38 熊野正也「宮ノ台式土器に関する覚え書き」房総の郷土史第4号 1976
- 39 三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』千葉県都市公社 1974
- 40 熊野正也「入門講座、弥生土器-南関東2-」考古学ジャーナルNo.138 1977
- 41 三森俊彦「市原市大厩遺跡の弥生文化」MUSEUMちば第8号 1977
- 42 古内 茂「宮ノ台式土器の変遷について」船橋考古第7号 1977
- 43 註3に同じ
- 44 この櫛状工具による羽状条痕文を比較的古い様相ととらえる人が多い。しかし、煮沸形態である深鉢形土器は、実生活に伴なうことが多いため、時期の幅があるように思える。また、この羽状条痕は、次期の第Ⅱ期でも確認されていることから、施文手法の可逆性を指摘することができる。
- 45 註4に同じ。

## 第V章 房総地方弥生後期文化の一様相

### —印旛・手賀沼系式土器文化の

#### 発生と展開について—

第Ⅲ章第2節の中で、北関東系土器を共伴する遺跡、あるいは久ヶ原式土器とはやや異なる様相を持つ特殊な土器を共伴する遺跡が印旛・手賀沼を中心とする地域に集中し、1つの地域文化圏を形成していることから、便宜上あえて印旛・手賀沼系期という文化期を設定した。

従って、ここではまず最初にはたしてこのような時期区分が成立するの否かについて、特に各遺跡出土の土器を再検討するとともに、次にこのような印旛・手賀沼系式土器文化が房総地方弥生時代の文化の流れの中で、どのような文化を母体として展開していったかについて、関東地方各地域の文化と対比しながら述べてみたい。

### 第1節 研究史からみた印旛・手賀沼系式土器文化の編年的位置づけ

印旛・手賀沼系式土器文化が、汎東京湾的な文化の中に包括され、南関東の編年に対比させるような形で進められる中で、南関東の編年には含められない特殊な土器に対して北関東系土器という名称が与えられたことは、すでに研究史や第Ⅲ章第2節で何度も述べてきた。そもそも、このような端緒が生み出された要因は、関東地方弥生文化の基礎を築いた戦前にまで遡って考えなければならないだろうが、実際的には、関東地方を4つの地域に分けてそれぞれの地域で型式細分がなされるようになって以後であろう。

房総地方弥生文化研究の流れの中では、このような問題に最初に触れて1つの見解と方向性が論じられたのは、滝口宏・菊池義次等による『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査<sup>1</sup>』においてであり、研究の出発点は遅い。この中で、久ヶ原式土器文化圏に対比される北関東系土器と呼称される一群の土器の存在に注目し、これら一群の土器が南関東系土器文化圏において、主体的、もしくは客体的な位置を示すものであると指摘していることと、合口壺（甕）棺等に見られる土器様相から、北関東弥生文化編年の足がかりが南関東の編年でとらえられる可能性のあることを示唆していることは評価されてよい。従って、この時点においては、印旛・手賀沼系式土器を南関東の土器型式<sup>2</sup>にあてはめようとする視点に立っていた。昭和43年に発表された弥生式土器集成<sup>2</sup>においても、第62図掲載の桜株遺跡、石神台遺跡、北須賀大台遺跡などの土器に対して、南関東第Ⅲ様式（久ヶ原式）、あるいは第Ⅳ様式（弥生町式）に伴う特殊な土器という言い方がなされていたことから窺われる。一方、この時期と前後して、茨城県地方の弥生文化研究の進展とともに、後期文化の型式細分が論議されるようになり、昭和32年に型式

設定された長岡式土器<sup>3</sup>の再検討が叫ばれるようになった。茨城県地方における後期弥生文化は長岡式土器を含めて型式細分が行われているが、異論もあり、現在に至っても確固たる編年は築かれていないようである<sup>4</sup>。しかしながら、逆にこの時期においては当該地域文化の研究が進展を見せなかったことは大きな意味を持つものであり、茨城県地方の弥生文化研究の進展に歩調を合わせなかった当該地域文化の研究の立ち遅れが、その後の印旛・手賀沼系式土器文化研究に誤解を招いたものと考えられる<sup>5</sup>。こうした研究の立ち遅れが重要視されるようになったのは、昭和40年代後半になってから、飯重新畑・生谷境堀（飯重）遺跡<sup>6</sup>、石神・渡戸（臼井南）遺跡<sup>7</sup>などの調査を契機としてからである。しかしながら、当該地域文化の研究は、現在に至ってもはなはだ曖昧な位置づけがなされており、文化の内容も不明な部分が多いことも指摘される<sup>8</sup>。

## 第2節 印旛・手賀沼系期の提示

このような研究の流れを踏まえて、印旛・手賀沼系式土器文化から北関東系土器を分離することの意義と編年的位置づけについて、大きくは久ヶ原式土器文化との対比と、遺跡相互の有機的結合—とりわけ土器を中心として—に関して考えてみたい。

久ヶ原式土器を伴う印旛・手賀沼系式土器文化が、分布の中心を印旛・手賀沼に置くのに対し、久ヶ原式土器文化が上総国分寺台周辺地域に中心を持つことはすでに述べた。両者は、独自の文化様相を固執しながらもきわめて共通した様相を持つものであり、印旛・手賀沼系式土器文化が、久ヶ原式土器文化を受容しながら形成されていったことはほぼ誤りのないものと考えてよいであろう。それは、第Ⅲ章第2節でも述べているが、弥生中期宮ノ台期とは異なる集落構成をとるとともに、住居形態も隅丸長方形ないしは隅丸方形を呈するという<sup>9</sup>、多くの共通性が見い出されるからである。しかしながら、とりわけ重要なことは、印旛・手賀沼周辺地域から出土する土器の多くは、久ヶ原式土器の中でも煮沸形態の機能を有する甕形土器の製作技法を受け容れたものと考えざるを得ない土器であるからである。又、これらの土器が印旛・手賀沼周辺地域にかけて集中しているのに対して、上総国分寺台周辺地域ではこれらの土器が全く見あたらないという事実は、とりもなおさず、中期宮ノ台期から発展した久ヶ原式土器文化が印旛・手賀沼周辺地域に波及していった姿を反映しているのに他ならないからである。従って、印旛・手賀沼系式土器文化は、言い換えれば、久ヶ原式文化の発展段階において久ヶ原式土器の製作技法を受け容れた甕形土器を主体とする文化であり、口縁部に輪積痕を持つ甕形土器は北関東系土器の範疇からは分離すべきであると考えるものである<sup>10</sup>。このような観点からも印旛・手賀沼系期と称した時期は、久ヶ原期でもやや後半に属する時期に位置づけられるのはほぼまちがいないと思われ、遺跡の多さはこの文化期の最も飛躍した姿を反映しているであろう。しかしながら、竪穴住居址や墓制に表われた土器の中には、必ずしも久ヶ原期後半に比定

され得ないようなものも存在することも事実であり、いくつかの問題点が含まれているが、これについては次節で関連して述べる。

### 第3節 印旛・手賀沼系期の土器様相

これまでに印旛・手賀沼周辺地域の各遺跡から出土した印旛・手賀沼系式土器がどのような組成を持ち、竪穴住居址内でどのような土器と共伴するかについて若干検討し、あわせて相対的な位置づけについて触れたい。

第62図は、印旛・手賀沼系式土器を器種と文様形態から分類したものである。大まかには、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器に種別され、圧倒的に甕形土器が多い。しかしながら、甕形土器の中には広口壺形土器に近い形態を持つものもあり、壺形土器との区別が困難である。従って、ここでは鉢・高坏形土器を除いて、口径に比べて頸部の直径が著しくせまいもの（口径の $\frac{1}{2}$ 、もしくはそれに近い数値を持つもの）と、最小頸径が口径より少ないもので頸部から胴部にかけて長頸・長胴を示すものを壺形土器とし、これ以外はすべて甕形土器とした。<sup>11</sup>

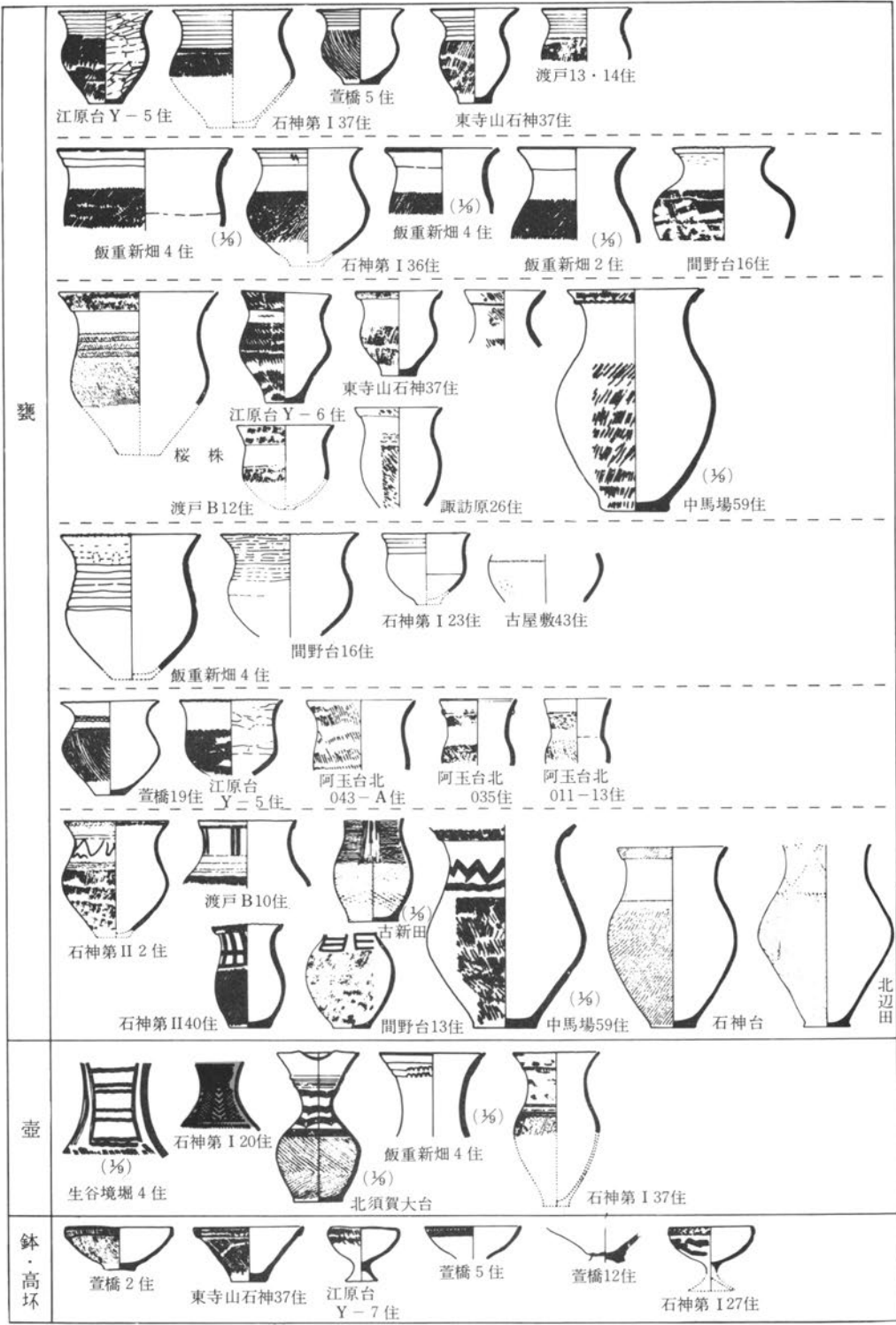
甕形土器は、複合口縁を呈し、胴部に縄文（単節縄文の他に特殊な付加条縄文がある）が施文され、頸部が無文帯もしくは櫛描沈線文が施文されるのを最大の特徴としている。しかしながら、この他に口縁部から頸部にかけて数段にわたって輪積痕を持つことも顕著な特徴である。甕形土器は、第62図に掲載したように、口縁部から頸部にかけての形態と文様構成から a～f の6種に分類した。このうち a～d は、口縁部から頸部にかけて輪積痕を持つ土器で、櫛描沈線文を有しないことに共通性がある。a～d の分類基準は以下のようである。

- a 口縁部から頸部にかけて数段の輪積痕を持ち、それより下位に縄文が施文されるもの
- b 口縁部から頸部にかけて1～2段の輪積痕を持ち、それより下位が無文帯となるもの
- c 1～2段の複合口縁部を持ち、口縁部に縄文が施文されるもの。
- d 輪積痕だけで縄文が施文されないもの。

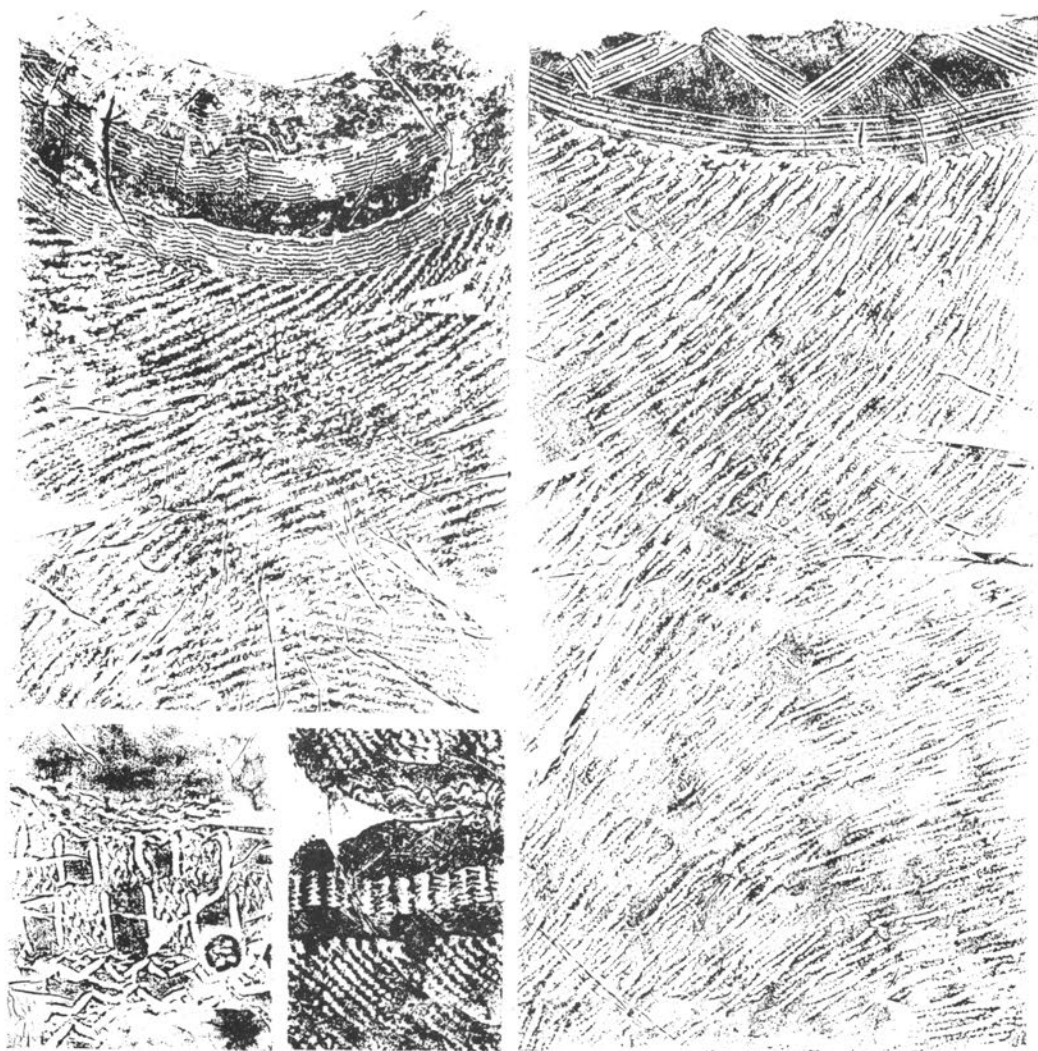
a は久ヶ原式土器の甕形土器の影響を最も強く顕わしている土器で、口縁部から頸部にかけて6～7段の輪積痕を持つ。口唇部は、刻目により小波状になるものと縄文が施文されるものがある。このうち江原台Y-5号住土器はeと共伴し、石神第I-37住土器は長頸壺形土器（櫛描沈線文の有無は不明）が共伴している。又、東寺山石神遺跡ではcと浅鉢形土器がセットで出土している。<sup>12</sup>

b は、a よりも輪積痕は少なくなり、接合部を器面調整することにより、稜がわずかしか認められないような土器である。飯重新畑4住土器に代表され、縄文の全く施文されない輪積痕だけの土器（d）が共伴している。

c は1段の複合口縁を持つ土器しか掲図されていないが、東寺山石神遺跡では口縁部が2～



第62図 印旛・手賀沼系式土器形態分類 (1/2)

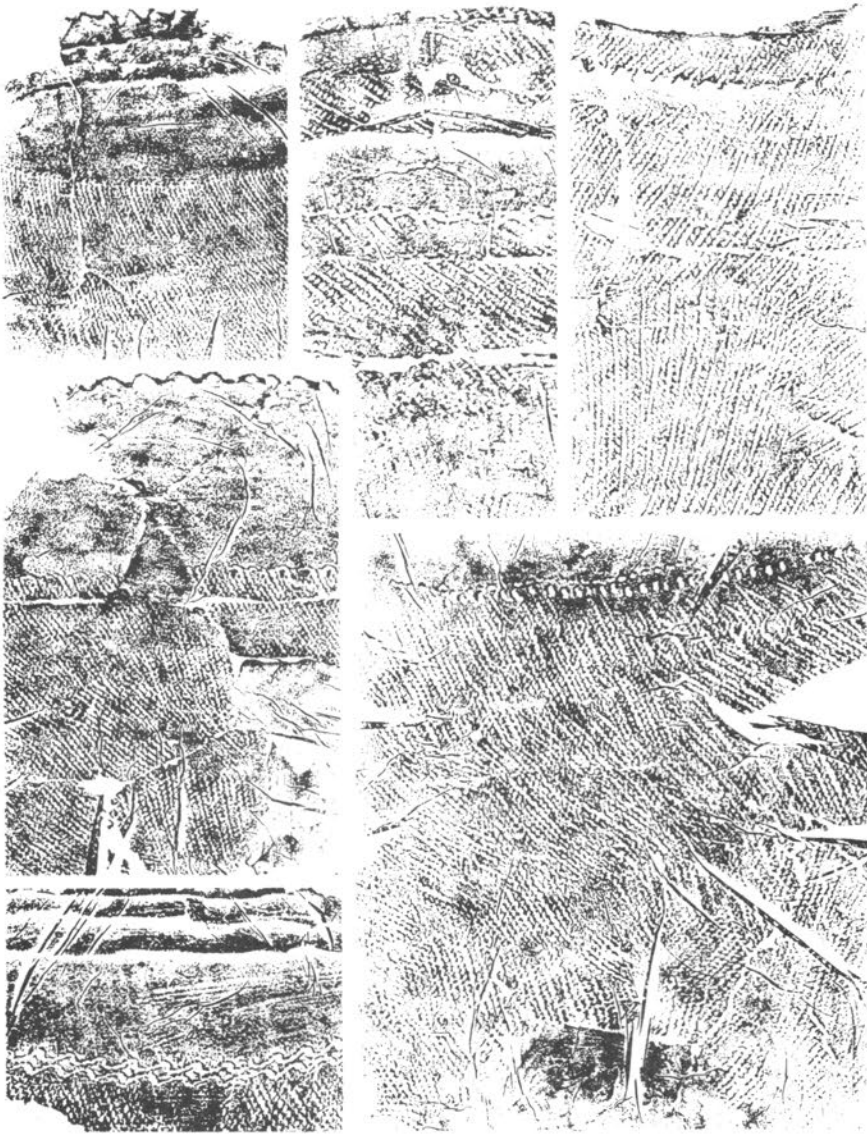


第63図 印旛・手賀沼系式土器文様(1) (1/2)

4段の輪積痕からなるものも出土している。いずれも口縁部に縄文が施文されるもので、諏訪原29住土器を除いては頸部は無文帯となるのが特徴的である。桜株遺跡出土土器は、前述したように南関東第Ⅲ様式(久ヶ原式)に伴う特殊な土器と言われた土器である。共伴関係が明瞭なのは東寺山石神37住土器だけであるが、渡戸B12住土器はeの江原台Y-5住土器と著しく類似した器形である。この中で注目されるのは、中馬場59住土器で、複合口縁部下端に押捺による刻目を持つほかに、頸部に櫛描沈線文を持つfの土器が共伴していることである。

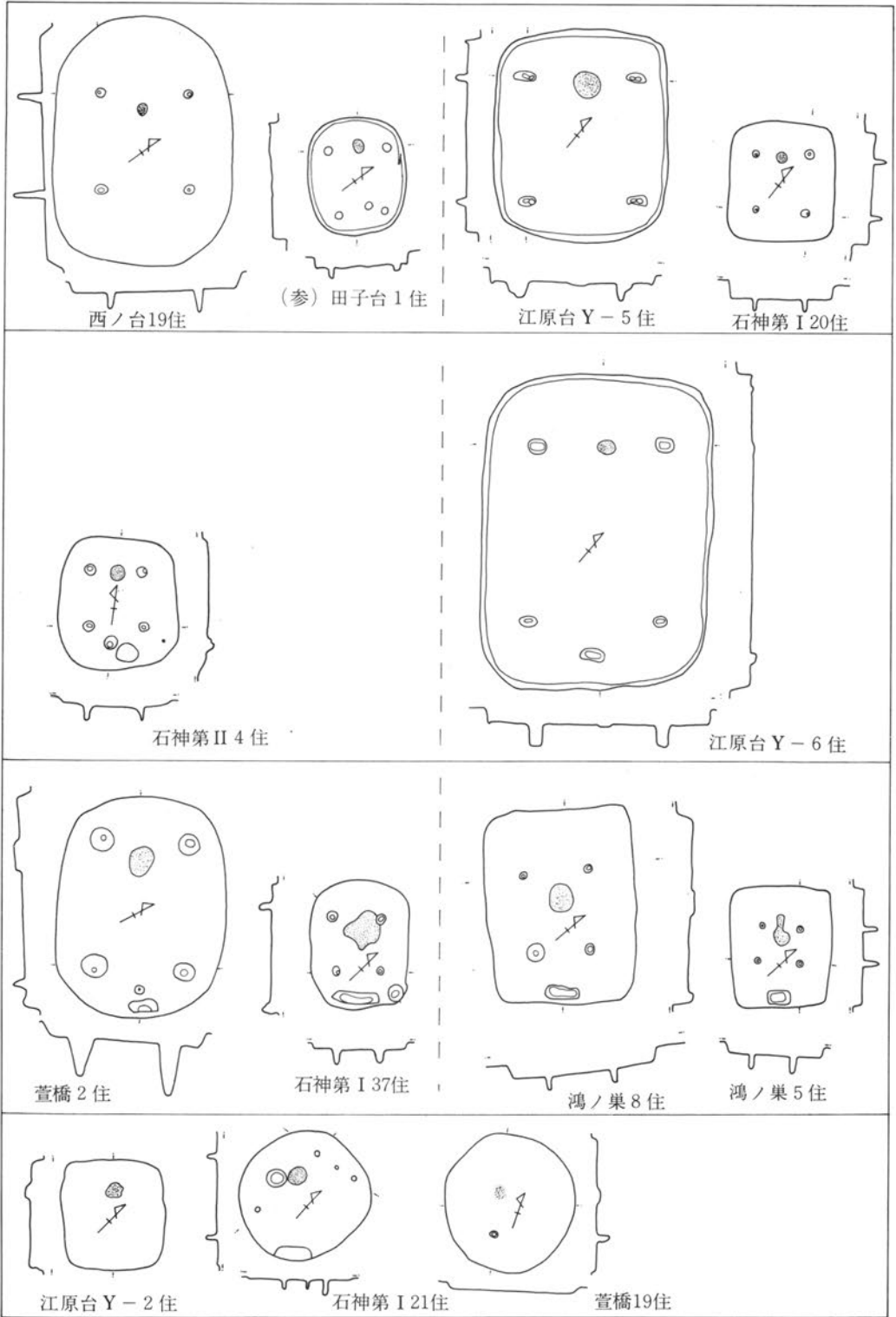
dの輪積痕だけを持つ土器は、輪積痕が頸部から胴中央部に近い位置まで続くものもあり、又、古屋敷43住土器、江原台第1遺跡出土土器(第36図2・5)などのように、胴上半部に刺突文が施されたものもある。<sup>13</sup>

以上a～dの土器は、当該期土器の中でも最も主体的な位置を占める一群の土器である。し



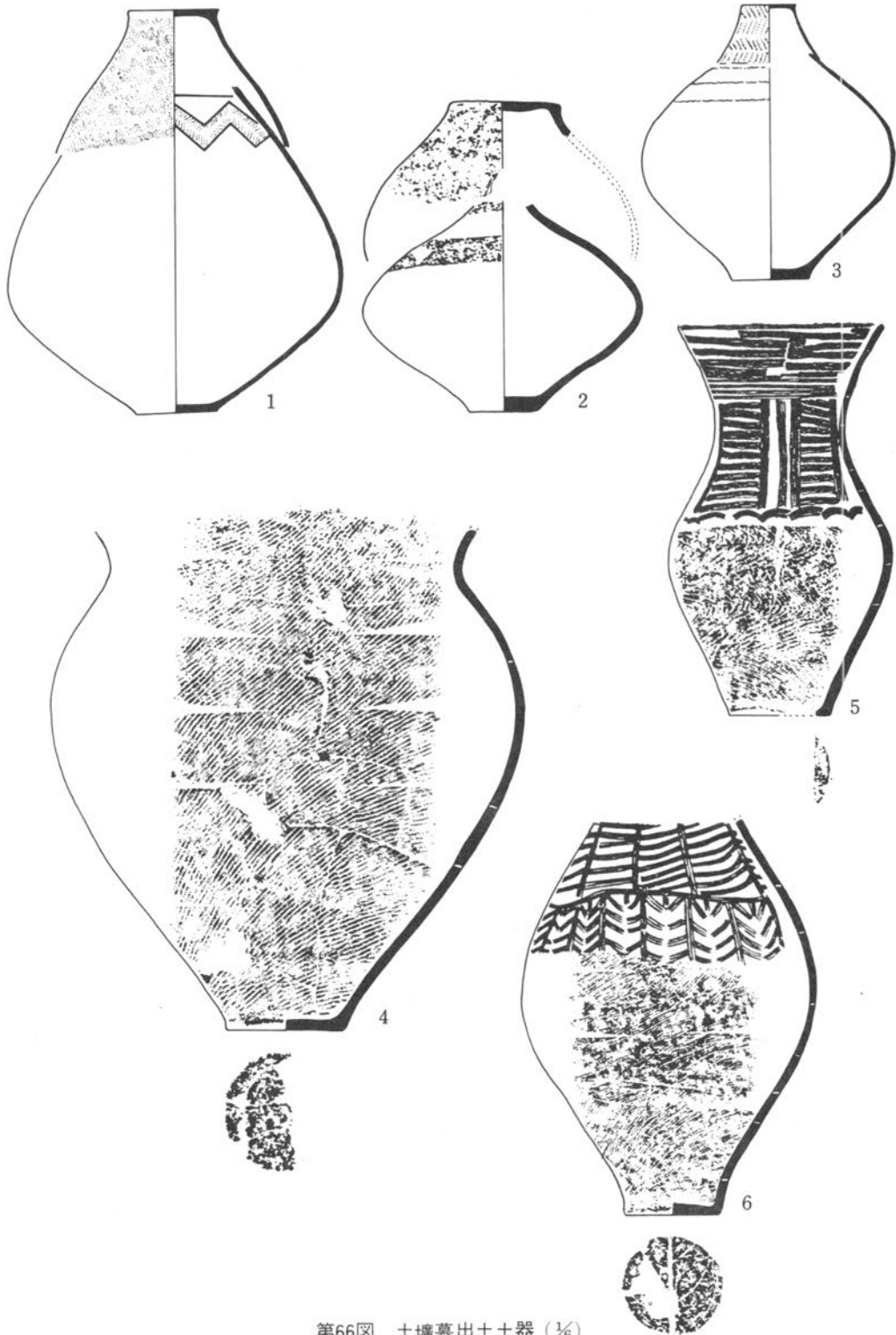
第64図 印旛・手賀沼系式土器文様(2) (1/2)

かしながら、cとしたものは単一の複合口縁をとるものが多く、厳密には輪積痕は多用されない。又、櫛描沈線文の施文された土器を共伴する中馬場59住土器の存在も重視されなければならない。櫛描沈線文を持つ土器とcが共伴している例は鴻ノ巣遺跡<sup>14</sup>などでも見られるが、これ



第65図 印旛・手賀沼周辺遺跡住居形態 (1/240)

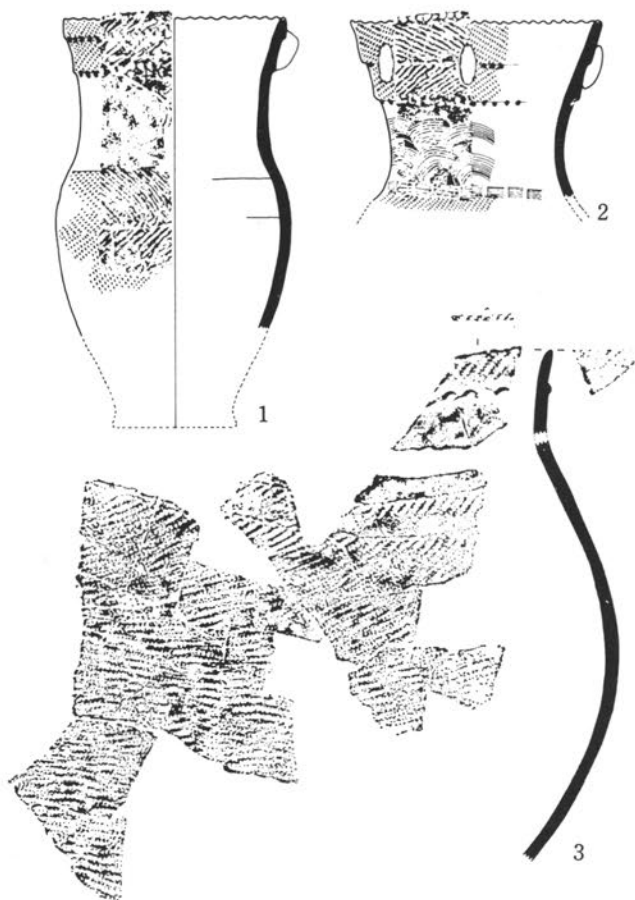




第66图 土壤墓出土土器 (1/6)

らの地域の遺跡は住居形態、出土土器とも印旛沼周辺地域とはやや異なる様相が感じられるものである。従って、cとしたものの中では、中馬場59住土器、鴻ノ巣遺跡出土土器などが時期差とともに時差を含んでいるものかもしれない。

eは、はっきりした複合口縁をとらないもので、a～d同様櫛描沈線文は施文されない。萱橋19住・江原台Y-5住土器によれば、口唇部が小波状を呈し、頸部を無文帯とするものと、S字状結節文が施文されるものとに分かれる。しかしながら、Y-5住出土土器はaと共伴していることと、cの渡戸B12住土器と形態的に類似していることを考えると、これらの土器はa～dに含まれる可能性もあり、口縁部から頸部にかけての輪積痕が、器面調整によって消去されたと判断すればなおさら可能性は高い。むしろ、問題となるのは阿玉台北遺跡出土器の一群であろう。この種の土器は、他に須和田遺跡(第29図1～3)、宮久保遺跡(同図4)、江原台第1遺跡(第36図7)、佐野原遺跡(第47図3)などから出土している。大きくは、口縁部から一様に縄文が施文されるものと、口縁部から頸部にかけて無文帯を残すものとに分かれるようである。阿玉台北043-A住土器(第42図2)、佐野原7住土器(第47図3)などが前者の例として挙げられる。043-A住土器については共伴遺物が不確かであり、前野町期から五領期の土器に混じって出土している。佐野原7住土器は、第47図からもわかるようにcとした土器の他に櫛描沈線文の土器、壺形土器が共伴している。一方、口縁部から頸部にかけて無文帯を残すものとした中では、口縁部に縄文ないしは刺突文が施文されるもの(第29図1・2)とやや頸部に近い位置に縄文帯が構成されるもの(阿玉台北035・011-B住出土土器、第29図3、第36図7)とに分けられるが、とりわけ後者については注目される。特に阿玉台北遺跡と須和田遺跡から出土したこれらの土器は、器形的にも文様構成においても共通する部分が多い。阿玉台北035住土器からは第42図8の他に第44図4が共伴している。第44図4の土器との共伴関係は認められるようであるが、この土器をどこに置くかは問題であり、この住居址からは五領期に属する甕形土器も出土しているので、即断はできない。011-B住土器については、共伴する土器は認められない。これらの土器は、印旛・手賀沼周辺地域ではほとんど類例が見あたらず、井頭遺跡<sup>15</sup>から発見された土器(第67図参照)に強い類似性が認められる。第67図1は推定器高24cm前後の土器(広口壺形土器と呼称)で、上下2段の複合口縁部に撚糸文と刺突文を持ち、この部分に瘤状突起が施文される。頸部の無文帯から下は撚糸文が羽状に施文されている。2も同様な特徴を持つ土器であるが、複合口縁部に施文された縄文は羽状を構成し、頸部に9本1単位の櫛描沈線文が連弧状に施文される。頸部から胴部に移行する部分にかけては簾状文が施文されている。報文中では、第67図に示した3個の土器に関して、1・3は今市市上山遺跡出土土器<sup>16</sup>に類似性が認められるが、口縁部の連続押圧痕を伴う隆帯と複合口縁は茨城<sup>17</sup>県地方後期初頭の磐舟山式土器との共通性を持つものであると論じ、これらの土器を二軒屋期<sup>18</sup>よりやや先行する時期に置き、2については羽状縄文と櫛描沈線の文様構成から二軒屋期に位置づけている。又、『栃木県史』(註15参照)に所収された井頭遺跡では、3の頸部無文帯の



第67図 井頭遺跡出土土器 (1/4) (大金宣亮他・1974)

中間に縄文帯を持つ土器は吉ヶ谷式土器<sup>19</sup>に共通する要素を持ち、1は器形、頸部の施文方法から長岡式土器との対比を考慮している。又、2については、信濃地方中期末葉の土器に多出する簾状文との関連性が指摘されるが、むしろ櫛目手法の発達した二軒屋式土器あるいは十王台式土器の特徴を備えたものであろうと結論づけている。

いずれにしても、これらの土器は概ね久ヶ原期から弥生町期の中に位置づけられそうである。従って再び房総地方に目を転じれば、eとした土器の中でも、阿玉台北遺跡や須和田遺跡から出土した頸部に瘤状突起を持つ甕形土器は、印旛・手賀沼系式土器文化には普遍的には現われない土器であるということが言えるとともに、むしろ、逆にこ

の種の土器が北関東系土器文化に属する所産に他ならないものと言える。

fは、a～eとは異なって頸部にへらもしくは櫛歯状工具による沈線文が施文されるものである。当該期では、量的には非常に少なく、完形に近い形で検出されるものはほとんどない。原形の窺える土器によれば、折り返し口縁となる石神第Ⅱ-2住土器を除いてはa～d同様複合口縁を呈するものが多く、この部分に縄文ないしは刻目が施される。頸部の幅広い部分にへら描、もしくは櫛描沈線が縦横に施文される他、波状、鋸歯状に施文されるのを基本とするが、石神台遺跡出土土器の頸部は無文帯とし、頸部と縄文が施文される境目に櫛描沈線を持つものや、北辺田出土土器のように刺突文が施文される特殊な土器もある。fについては壺形土器に関してでも述べるが、竪穴住居址内から出土する例は少なく、又、共伴する土器もあまりない。この中では、佐野原遺跡出土土器の存在が重視される。第47図5・6がそうであるが、第62図に掲載した土器とは器形の異なるものであり、沈線文も半截竹管状工具を用いて連弧状を表わしているなど施文方法も異なる。竪穴住居址内出土の他の土器を比較すると、5ではc・eの

土器が相伴している。c・eについては、前述したように当該期土器の主体的な位置を占める土器とはやや異なる様相を持つ土器にあたり、従って、佐野原遺跡出土の土器は当該期とはやや時期をずらせて考えた方がよいかもしい。石神第Ⅱ-2住土器は頸部の沈線文が他とは異なる構成をとり、口縁部内面には縄文が施文される特殊なものである。口縁部内面に縄文が施文される土器は、中期宮ノ台期壺形土器に見られる特徴であることも事実であり、<sup>20</sup>非常に興味深い。住居址内からは五領期に属する土器が多い。石神第Ⅱ-4住土器は、器形的には古新田遺跡出土土器と類似し、長岡式土器の形態特徴と関連づけられている土器である。中馬場59住土器は、前述したようにcに含まれる土器が相伴している。石神台遺跡出土土器は、弥生式土器集成の中で南関東第Ⅲ様式（久ヶ原式）に伴う特殊な土器と称された土器である。その他特異な土器として、第43図4が挙げられる。沈線文は口縁部から頸部にかけては連弧状に施文されるが、頸部から胴部にかけては重四角文状に連続して施文されるものである。類例はほとんどない。

以上のようなことから、fについては次のことが言える。印旛・手賀沼系式土器文化圏の及ぶ範囲には概ね<sup>21</sup>出土するが、明瞭な形で出土する例は少なく、久ヶ原式土器の影響を受けた要素を持つ土器は見あたらない。従って、大まかには印旛・手賀沼系期に含まれるものと考えられるものの、中には茨城県や栃木県地方などから出土する土器との類似性が認められる土器が存在することを考慮すると、印旛・手賀沼周辺地域に見られるこの種の土器は、当該期文化の中では融合した姿を持つものではなくて、在地の土器がそのまま当該地域にもたらされた姿を表わしている。概ねその時期は久ヶ原期のある時期（印旛・手賀沼系期文化が発展期を迎える頃）から弥生町期にかけての幅の中に位置づけられるようである。

壺形土器は、第62図以外に佐野原遺跡（第47図4）、阿玉台北遺跡（第43図1・2・3・5第45図、第46図2）などから出土している。甕形土器f同様に非常に少ない。頸部に櫛描沈線文が施文されるのを最も大きな特徴とするが、飯重新畑4住・石神第Ⅰ-37住土器では口縁部に刻目を持つのが特徴である。両遺跡出土の土器に相伴するのは、甕形土器a・dであり、どちらかと言えば印旛・手賀沼系式土器に主体的な位置を占める輪積痕を持つ土器と相伴するようである。生谷境堀4住・石神第Ⅰ-20住土器については、相伴する土器が不明瞭であるが、石神第Ⅰ-20住土器では器面に赤彩を施しているのが注目される。又、頸部に施文される櫛描沈線文も、縦・横に区画される他に、斜格子状・綾杉状に施文されるのも特徴的で、このような文様手法を持つものは茨城県地方に多く見られる。<sup>22</sup>北須賀北大台遺跡出土土器は独特な器形を呈する。片口のついた土器で、胴部施文は羽状を構成するのが特徴的である。器形的にも文様的にも茨城県紅葉遺跡から出土した土器に<sup>23</sup>類似している。明らかに当地域に移入されたものであろう。しかしながら、壺形土器を理解するうえで、これらの土器以上に注目されるのは阿玉台北遺跡と佐野原遺跡における壺形土器の様相であろう。阿玉台北遺跡では、竪穴住居址（第42図6第43図3）と土壌墓（第43図1・2、第45図、第46図2）から出土しているが、土器の形態的

特徴と共伴遺物とに著しい差異を持っている。第43図3は、甕形土器fの中の石神台・北辺田遺跡出土土器と同様な位置に櫛描沈線文が施文されるもので、第42図1、11が共伴する他、第44図2が共伴している。ここで問題とされるのは、櫛描沈線文の壺形土器に第44図2のような南関東系の壺形土器が共伴している事実である。第44図2の壺形土器をどの位置に置くかはむずかしいが、久ヶ原式土器に特徴的な山形状沈線に区画されてはいるが、沈線文間に施文されるのは縄文ではなくてS字状結節文であることを考えると、久ヶ原式土器から弥生町式土器に移行する過渡期の文様形態を持った土器と言える。しかしながら、沈線が根強く残っていることから久ヶ原期終末期に置いてよいであろう。一方、土壙墓から出土する土器は、非常に大形の土器ばかりで、頸部に施文される櫛描沈線文や胴部に羽状に施文された縄文などの文様形態は、印旛・手賀沼周辺地域ではほとんど類例がないものばかりである。特に第43図1や第45図などは、器形的にも文様のにも茨城県から福島県地方の一部に分布する十王台式土器そのものの土器であると言える。従って、阿玉台北遺跡出土の壺形土器に関しては、印旛・手賀沼系期の展開期においては竪穴住居址から認められるが、弥生町期には、茨城県地方から直接移入された土器が墓制に利用されているという事実が認められる。佐野原遺跡から出土した壺形土器に関しても、他の土器の特徴から、同様に茨城県地方から海岸沿いに搬入されたものであろう。

鉢形土器・高坏形土器についても、壺形土器と同様に数は少ない。東寺山石神37住出土の浅鉢形土器には、甕形土器a・cがセットで共伴している。萱橋5住出土の高坏形土器でも甕形土器aが共伴している。顕著な輪積痕を持つ甕形土器が共伴していることと、浅鉢形土器の中には久ヶ原式土器に特徴的な複合口縁を持つものがあること、などを考えると、これらはほぼ当該期に属するものと考えてもよいであろう。

以上、印旛・手賀沼系式土器文化について、土器を形態的に分類して個々の遺跡の中で土器の共伴関係について再検討したうえで、印旛・手賀沼系期の編年的位置づけを行なった。ここで改めて整理しなおせば、以下ようになる。

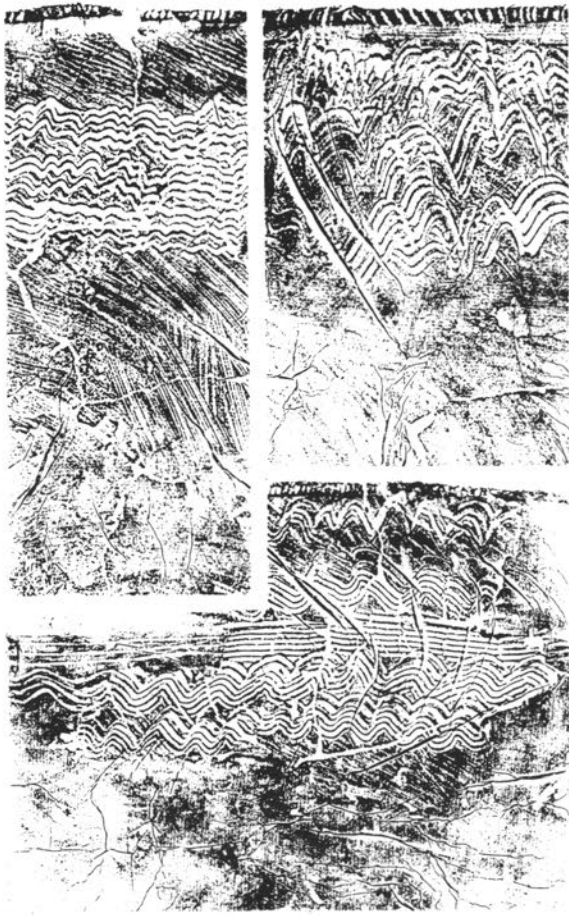
印旛・手賀沼系期を設定したのは、必ずしも従来言われてきた北関東系土器文化圏に属する文化期が後期全般にわたるものではないということを再認識するためと、少なくとも久ヶ原期後半の印旛・手賀沼周辺地域においては、久ヶ原式土器文化の影響を強く受けた1つの文化期が存在していたことを示すためにであった。この時期の最も主体的な位置を示す土器は、口縁部から頸部にかけて輪積痕を持つ甕形土器で、中でもa・b・dとしたものに代表される。Cとしたものの中では、中馬場遺跡、鴻ノ巣遺跡出土土器が、住居形態とともにやや様相の異なる土器であり、地域差以上に時間差を持つ可能性が考えられる土器である。甕形土器e・fと壺形土器については、当地域にはあまり類例のない土器が含まれ、茨城県や福島県地方との関連性を示す土器がある。これらの土器がどのような位置に置かれるかは問題であるが、他の文化圏から搬入されたこれらの土器が当地域においては主体的な位置を持つには至らず、印旛・

手賀沼系期の後に位置づけられる時期の遺跡に出土例が認められることが多い。とりわけ、阿玉台北遺跡、佐野原遺跡、北須賀大台遺跡などでは器形、文様手法からも十王台式土器と呼ばれる土器が存在し、これらは竪穴住居址内から認められる他に、土壙墓から出土していることに大きな意味がある。いわば、当地域の墓制の変遷の流れで言うならば、印旛・手賀沼系式土器と久ヶ原式土器が混在する合口壺（甕）棺墓の伝統が弥生町期にも受け継がれていく中で、同じ頃印旛沼東側の地域には櫛描沈線文を主体とする十王台式土器文化が南下し、伝統的な当地域の墓制に十王台式土器が使用の対象とされたという変遷がたどれる。<sup>24</sup>

#### 第4節 発生と展開に関する試論

第3節では、印旛・手賀沼系期という1つの文化期が、久ヶ原期の影響を強く受けて発展したものであり、南関東の編年に対比するならば、久ヶ原期の後半期に1つの頂点ともいえるべき展開期が認められるということを示した。ここでは、当該文化期がこの展開期を境にして、どのような母体から発生して古墳時代に移行していったかについて、若干の試論を述べて問題提起としたい。

すでに前節で述べている通り、印旛・手賀沼系式土器文化は久ヶ原期後半期に位置づけられるものであり、これより下った弥生町期では、集落としての発展性は認められず、わずかに合口壺（甕）棺墓に認められるだけである。しかしながら、このような墓制も弥生町期が前野町式土器文化の台頭してくるとともに、消滅してしまう。房総地方の弥生町式土器文化は、前に述べている通り、集落の規模は久ヶ原期に比べて小規模であり、遺跡数の少なさからも、前野町期に移行するまでの期間の短さが推し測れるようであり、従って、ある意味においては、この時間の短さが、弥生町期における当該地域の合口壺（甕）棺墓がその伝統を推持することが不可能になってしまった要因を作り出しているのかもしれない。いわば、弥生町期から前野町期を迎える時点においては、すでに印旛・手賀沼系式土器文化は終焉を迎えていたのであろう。あたかも、それは、はるか縄文時代から弥生時代にわたって受け継いできた伝統が完全に払拭されたかのごとく感を抱くものである。しかしながら、このような展開とは逆に、印旛・手賀沼系式土器文化の発生については、全く研究がなされていないのが現状である。久ヶ原期の文化の影響を受容して成立した印旛・手賀沼系式土器文化は、房総地方の弥生時代後期文化の流れの中では、これを成立させて斉一性のある地域文化圏を発展させた一大画期と言えるものであり、個々の内容は異なるであろうが、村田川流域に見られるような環濠を伴う大集落が発生するかの如き大きな転期と言える。いわば、この時期が、印旛・手賀沼周辺地域にとっては、本格的な農耕文化が開始されるのであろう。久ヶ原期の前段階である宮ノ台期は、房総地方の弥生文化の中では農耕文化をいち早く受け容れた先進地域の文化である。房総地方でも研究が進んだ今では、宮ノ台期についていくつかの問題点が指摘され、細分化の動きが高まりつつあ

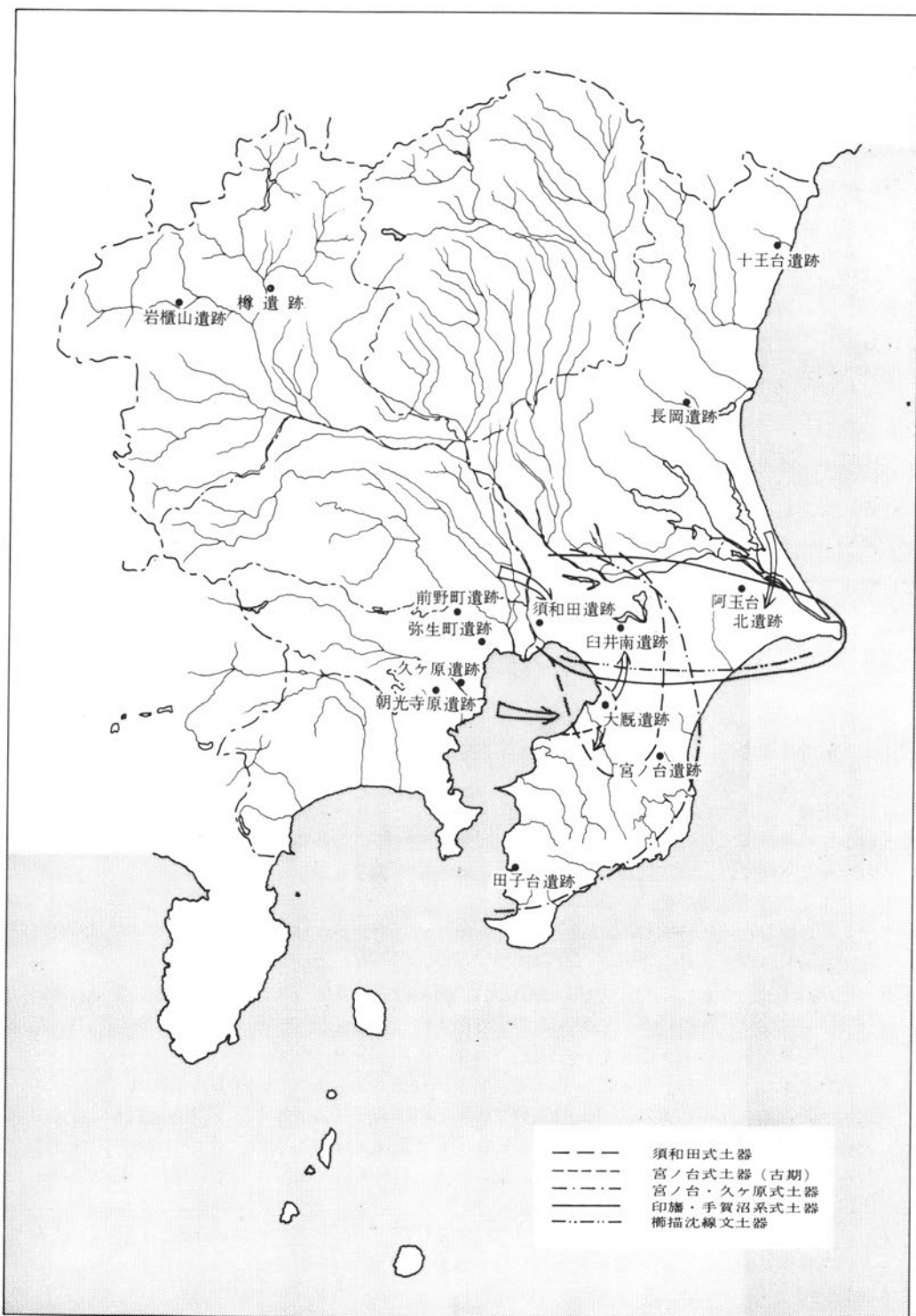


第68図 朝光寺式土器文様 (1/2) (三殿台資料館蔵)

<sup>25</sup>。このような動きは、宮ノ台期から久ケ原期に移行する文化の流れの中で問題視されるようになってきたのであり、このことは、とりもおさず宮ノ台期から久ケ原期にかけての文化の連続性の証左となろう。しかしながら、宮ノ台期から久ケ原期の前半にかけて、あるいは宮ノ台期以前にかけての印旛・手賀沼系式土器文化は不明瞭であり、むしろ空白に近い。印旛・手賀沼系式土器文化は、久ケ原式土器文化の影響を受けて発展したとはいえ、何らかの母体となるべきものが存在してしかるべきである。にもかかわらず久ケ原期の初期の段階に印旛・手賀沼系式土器文化が存在していた、という立証も不可能である。又、宮ノ台式土器から印旛・手賀沼系式土器につながるような土器も現状では発見されていない。従って、印旛・手賀沼系式土器文化の母体となるものは、宮ノ台式土器文化から久ケ原式土器文化に移行する文化の経路とは別な経路と考えざるを得ない。飛躍

した推論になるが、すでに弥生時代中期前葉の段階で半精製の甕形土器を持つ地域と粗製の鉢形土器を持つ地域とが存在すると指摘されており<sup>26</sup>、このような形で中期が形成されていったとするならば、須和田式土器の中の、やや肩が張って頸部が研磨され、胴下半に条痕文が施文された甕形土器に、印旛・手賀沼系式土器の祖源的な特徴が見出されるようである。いわば、印旛・手賀沼系式土器文化は、房総地方弥生時代文代の中でも、東日本の縄文時代の伝統を残した唯一の在地性に富んだ文化であり、この意味では、須和田式から東海系の条痕文土器を母体として形づくられてきた宮ノ台式に移行するのは疑問と言わざるを得ない。むしろ須和田式から印旛・手賀沼系式へと系譜がたどれるのではないのだろうか。

	100 B・C		100 A・D		
杉原編年	須和田	— 宮ノ台	— 久ケ原	— 弥生町	— 前野町
房総地方	?	— 宮ノ台	— 久ケ原	— 弥生町	— 前野町
	須和田	— +	— +	印・手	.....



第69図 房総地方後期弥生式土器の波及経路 (1/2,000,000)



又、これとは別に印旛・手賀沼系期の展開期を頂点とする前後の文化様相についても、不明な点が多い。後期中葉においては、吉ヶ谷式土器<sup>27</sup>文化圏、朝光寺原式土器<sup>28</sup>文化圏などの地域文化圏が関東地方各地で形成される時期であり、房総地方でも、印旛・手賀沼系期文化が成立する前後に何らかの複雑な時代的情勢の変化があったのであろう。当地域に認められる櫛描沈線文の土器も、このような要因から導き出せるかもしれない。いずれにしても、印旛・手賀沼系式土器文化は、今だ研究の及ばない点の多いことが指摘される。

本章では、房総地方後期弥生文化の中でも近年調査例の著しい印旛・手賀沼周辺地域の遺跡を対象とし、南関東の土器型式には認められない土器を出土する遺跡を抽出して文化期を設定し、これを便宜上印旛・手賀沼系期と呼んだ。しかしながら、果たしてこのような用語が適切であったかどうかは疑問であり、型式設定が客観的に認められるならば、はっきりした名称として統一すべきであろう。そうすれば、北関東系土器という言葉の本質も理解されるものと思われる。なお、当該期文化の理解や編年の位置づけについてもはなはだ曖昧であり、本筋からはずれている面も多々ある。これらに関しては、諸氏の御批判を仰ぎたい。最後に、御協力頂いた関係諸機関、諸氏に対し、文末ながら記して感謝する次第である。

#### 註

- 1 文献番号52参照
- 2 文献番号77参照
- 3 井上義安が昭和32年9月発行の京都学芸大学紫郊史学会機関誌「史想」第7号に発表した時は、十王台式直前に位置づけた。茨城県東茨城郡茨城町長岡遺跡から発見された土器で、複合口縁をした縄文と、櫛描沈線の施文された壺形土器と甕形土器からなる。
- 4 第Ⅲ章第2節註22参照
- 5 器面に縄文(あるいは付加条縄文など)と櫛描沈線文の施文される一群の土器に対して、長岡式土器や長岡式土器類似土器という解釈に立つ報告書の多いことを指す。
- 6 柿沼修平は「なわ」第13号 1974の中で、印旛沼周辺の北関東系と称される後期弥生式土器(ここでは印旛・手賀沼系式土器)をA~Dの4群に形態分類し、A・Dを久ヶ原期、B・Cを称生町期、B・Cの一部を前野町期と、大きく3期に分けている。
- 7 熊野正也は、『史館』第4号、「南関東地方における弥生文化の研究(1)」 1974の中で、印旛・手賀沼系式土器に対して、一部北関東地方との交流は認めながらも、北関東地方の土器であるという前提に対して否定的であり、杉原莊介が南関東地方第Ⅲ様式(久ヶ原式)に伴う特殊な土器、というとらえ方に賛同し、久ヶ原式土器の範疇に含められる特殊な土器であると論じている。
- 8 このような中では、古内 茂が『ふさ』第5・6合併号で遺跡の分布の集成や、南関東系土器との共伴関係をもとに編年論を展開していることなどは評価される。
- 9 第65図参照。
- 10 久ヶ原式土器の壺形土器が客体的にわずかに破片としてしか認められないということも、甕形土器を主体とする文化の妥当性を裏づけているのかもしれない。

- 11 これ以外にも、煤の付着、赤彩の有無等、機能的にも区別されるだろうが、個々の資料をあまねく実現してはいないので、ここでは捨取した。
- 12 第2図参照
- 13 前記飯合作遺跡でも口縁部から頸部にかけて輪積痕を持ち、胴上部に縄文原体による刻目を持つ甕形土器が2～3点出土している。
- 14 第2図参照
- 15 『井頭』 栃木県教育委員会 1974 『栃木県史 資料編 考古一』 1976
- 16 報文は実見していないが、中期末葉の土器が出土しているとのことである。
- 17 井上 義他「茨城県における弥生文化の編年的研究」『古代学研究』42・43 1966 井上義安「勝田市東中根堂山遺跡」『那珂川の先史遺跡1』 1967 磯崎正彦「天王山式土器の編年的位置について」『上代文化』26 1956
- 18 寺内武夫・篠崎善之助「下野中原遺跡調査概報—第一回—」『考古学』第10巻第10号 1939 杉原莊介「北關東に於ける後期彌生式文化に就いて」『考古学』第10巻第10号 1939
- 19 谷井 彪他「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』I 埼玉県教育委員会 1974 栗原文蔵他「駒堀」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』II 埼玉県教育委員会 1974
- 20 菊間遺跡14・16号住居址などから、広口壺形土器が出土している。器形的には印旛・手賀沼系式土器に共通したもので、胴部に施文された文様構成からは、宮ノ台式土器の中でも久ヶ原式土器の文様に近いようである。
- 21 久ヶ原式土器文化圏との境に接する東寺山石神遺跡でも数点出土していることから窺える。
- 22 弥生式土器集成 北關東地方IIに掲載された紅葉遺跡、小祝遺跡などの出土土器が挙げられる。
- 23 神沢勇一「北關東地方」『弥生式土器集成 本編』 1968
- 24 逆に言えば、十王台式土器が日常の什器として主体的な位置を占めるには至らなかったということであり、それだけ南下する文化を阻止する要因が当地域には大きな意味を持って存在していたのであろう。
- 25 古内 茂が文献番号201の中で、宮ノ台式土器について言及している。
- 26 神沢勇一『日本の考古学 III 5 關東』 1966
- 27 註19参照
- 28 「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報」 横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書 昭和42年度 1968 「横浜市域北部埋蔵文化財分布調査概報」 横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書 昭和42年度 1968 「朝光寺原遺跡C地区調査概報」 横浜市埋蔵文化財調査報告書 昭和43年度 1969 小宮恒雄・坂本 彰他『歳勝土遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 1975 中央大学考古学研究会『小黑谷』 1973

## あ と が き

前章までで、房総における弥生文化の摂取とその波及について述べたが、ここで、研究紀要を含めて研究部活動の経過等について、若干触れておきたい。

財団法人千葉県文化財センターは、千葉県の出資により、昭和49年11月1日に設立された。その主たる目的は、県内の埋蔵文化財の調査研究と、文化財保護思想の涵養・普及を図ることにある。

このうち、埋蔵文化財の調査は、公共事業等の土木工事に先行して実施する発掘調査が中心で、調査部が業務を担当している。

研究部の業務は、埋蔵文化財研究の企画、遺跡の調査方法及び出土遺物の保存処理方法等の研究、埋蔵文化財に関する情報資料の収集整理・提供、文化財保護思想の涵養普及等である。

ただ、現実には、研究部職員は、調査部職員が兼務の形をとるため、調査日程とのかね合いから、人数、研究時間等も制約されざるを得ない状況にある。

しかし、財団設立当初から研究部を設置したのは、着実な研究に支えられた学問的認識こそが、調査内容の充実に連なるものであり、すぐれた調査成果の普及が文化財保護の基盤をなすという観点からであった。そうして、上述のごとき事情の中で、遅々としたものではあるにせよ、前進の歩を進めてきたのは、困難を克服し、学問的展望に立とうとする職員の努力と情熱によるものであった。

昭和50年度は、発足早々ではあったが、3人の研究部員が任命され、研究部活動の方向づけが行われ、その中で、研究部の成果の一つとして研究紀要を刊行することが決定された。

現在、発掘調査報告書は、種々の事情から事実記載が中心となり、幾多の問題について論考を加え、問題を整理することは不可能に近い。研究紀要を刊行することにより、報告書中で言及し得なかったことについて取上げ、研究を加えて発表し、各方面の批判を戴くことにより、職員資質の向上、調査内容の充実に図ることがその主旨であった。

さらに、県内の最新の調査資料を加えて、既存の資料を再編成し、房総の歴史の一端を解明することにより、より広い方々の理解を得ることをも意図したものであった。

そこで、まず5年間に、「考古学から見た房総文化」という共通主題で、時代順に研究成果を発表することとした。

初年度の先土器時代については、2名が執筆にあたり、房総における先土器文化の概括、ポイント形石器の問題、遺跡構造の問題と、3課題について研究を行った。

昭和51年度は、5名の研究部員により、紀要刊行のほか、研修会の実施、鉄器保存処理の検討等が行われた。

研究紀要は、3名が執筆にあたり、縄文時代中期を、集落、土器、石器の3領域から解明す

ることを試みた。

本県には、縄文時代の資料はきわめて多く、それだけに多様な課題をいかに整理するかは苦心があったと思われる。時期別なり、分野別なり、なんらかにまとめて重点を置く方向が自づと求められた結果であった。

本号は、編集の段階で、前部長の急死という予期せぬ事態があったため、房総における縄文時代について概括を欠いているが、機会を得て補足することを期している。

昭和52年度は、研究部員を8名とし、研究紀要刊行のほか、調査方法・計画の討議・検討、資料整理法の検討、鉄器保存処理の実施等、活動領域の拡充を図ることとした。

研究紀要は、弥生時代について、齋木、深沢の2名が担当した。

房総における弥生時代の研究は、従来その資料が不足していることから、やや停滞気味であった。しかし、近年調査例が増加し、資料の集積は著しいものがある。また、その中で、幾つかの問題も提起されてきている。こうした段階の中で、本稿においては、房総の弥生時代について、その変遷の概括を試みることにした。そのため、「房総における弥生文化の摂取と波及について」を表題として、全体を5章に分け、2名が分担して執筆することとした。この点は、従前の紀要とは、やや異なる点である。

結果的には、資料の概要を紹介するに止まり、十分な考察に至らない点が多いが、既存の資料を整理し、諸覧の御批判のもとに、今後の研究を方向づける出発点とした。

研究紀要第1号発刊以来、ここに3年目を経るに至った。この間、林 謙作氏による評価をはじめ、多くの方々から温い御批判、御支援をいただいていた。行政に関連する組織の中で、「県」という行政区域を主たる領域とした研究紀要の刊行は、やはり特色のあるものであり、今後共各方面からの期待に応える努力を続けたいと願っている。

なお、執筆の分担は、つぎに示すとおりである。

齋木 勝 第I章、第II章、第III章第1節、第IV章

深沢克友 第III章第2節、第V章

最後になったが、資料調査、執筆にあたり、多くの方々から御指導、御協力を賜った。文末ながら御芳名を記し、感謝の意を表したい。

(資料提供・協力)

市原市国分寺台遺跡調査会 茨城県歴史館 神奈川県立博物館 川崎市教育委員会  
木更津市教育委員会 佐倉市教育委員会 下総史料館 常総台地研究会 菅生遺跡調  
査団 逗子市教育委員会 袖ヶ浦町立根形中学校 袖ヶ浦町民会館 千葉県教育庁  
文化課 千葉県立天羽高等学校 千葉県立大多喜女子高等学校 千葉県立上総博物館  
千葉県立総南博物館 千葉県立房総風土記の丘 奈良県立橿原考古学研究所 沼津考  
古学研究所 常陸考古学研究所 平塚市立博物館 船橋市郷土資料館 三浦市教育委  
員会 武蔵野郷土館 横須賀市教育委員会 横浜市三殿台考古館

明石 新 秋本真澄 天野 努 荒木 誠 伊藤重敏 内田儀久 大塚真弘  
小野真一 柿沼修平 鴨志田篤二 川口徳治朗 神沢勇一 小島弘義 齊藤弘道  
佐藤武雄 須田 勉 須山幸雄 関根孝夫 高木博彦 高崎繁雄 田村言行  
寺沢 薫 中山吉秀 野中 徹 藤川 昶 古内 茂 村田文夫 山田常雄  
山田友治 山口清次 湯浅喜代治 吉田 格 吉村光敏 米田耕之助 渡辺包夫  
渡辺正吾

(資料整理・製図)

石井とし子 小島一江 須藤美智子 藤田靖子

ISSN 0386-2577

(国際標準逐次刊行物番号)

研 究 紀 要 3

——考古学から見た房総文化——

3 弥 生 時 代

印 刷 昭 和 53 年 3 月 20 日

発 行 昭 和 53 年 3 月 31 日

編集・発行 財団法人 千葉県文化財センター

〒280 千葉市亥鼻1-3-13

電話(0472)27-2293

印 刷 所 株 式 会 社 太 陽 堂 印 刷 所